西蒲池池淵遺跡Ⅱ

福岡県文化財調査報告書　第二四三集

二〇一四

九州歴史資料館

国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第 4 集

西蒲池池淵遺跡Ⅱ

－福岡県柳川市大字西蒲池所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書　第 243 集

2014

九州歴史資料館

国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第 4 集

西蒲池池淵遺跡 Ⅱ

－福岡県柳川市大字西蒲池所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書　第 243 集

1　7 号土坑出土土器

2　14 号土坑出土土器

1　15 号土坑出土土器

2　17 号土坑出土土器

1　19 号土坑出土土器

2　30 号土坑出土土器

1　35 号土坑出土土器

2　43 号土坑出土土器

黒塗り土器・鐸形土製品・磁州窯三彩・剣形木製品・柱状片刃石斧・鹿角製鏃・一筆書きの土器調整

卜骨

序

福岡県では、平成16年度から平成23年度にわたり、国道385号三橋大川バイパス道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は、平成23年度に行った柳川市西蒲池に所在する西蒲池池淵遺跡Ⅱ地点の調査の記録であり、西蒲池池淵遺跡の報告の最終巻にあたります。

遺跡は有明海沿岸に形成された粘土質地盤の低地に立地しており、近隣には弥生時代から近世までの遺跡が点在しています。特に近年、この地域では道路や新幹線などに関わる発掘調査が多数行われ、更なる歴史の解明が進んでおります。

今回の調査では、平成24年度に報告を行った西蒲池池淵遺跡Ⅰ地点からさらに南へ広がる、弥生時代中期から中世後期にいたる生活の痕跡を確認することができました。特に弥生時代終末から古墳時代初頭においては完形品の土器を含む多くの資料が出土し、県内で初めて卜骨が出土しました。また中世においては、Ⅰ地点で確認した方形区画の続きを確認し、地元の有力氏族であった「蒲池氏」に関わると考えられる区画の規模を把握することができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成26年3月31日

九州歴史資料館長
館長　荒巻　俊彦

例　言

1．本書は、国道 385 号三橋大川バイパス道路改良事業に伴って発掘調査を実施した、柳川市西蒲池に所在する西蒲池池淵遺跡Ⅱ地点の記録である。一般国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第 4 集にあたる。

2．発掘調査・整理報告は福岡県県土整備部道路建設課の執行委任を受けて、九州歴史資料館が実施した。

3．本書に掲載した遺構写真の撮影は、齋部麻矢と佐々木隆彦が行い、遺物写真は北岡伸一が行った。空中写真の撮影はそれぞれ有限会社空中写真企画・東亜航空技研株式会社に委託し、バルーンおよびラジコンヘリによる撮影を行った。

4．本書に掲載した遺構図の作成は齋部が行い、それぞれ発掘作業員が補助した。

5．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池史哲・城門義廣の指導の下に実施した。また、石製品・木製品・土製品・金属製品の実測は城門義廣が行った。

6．陶磁器の報告については『大宰府条坊跡Ⅳ』（太宰府市教育委員会 2000）の型式分類に準じる。また、土器の調整については、挿図でハケメの表現が明確である場合は文章には明記していない。

7．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

8．本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の 1/50,000 地形図「佐賀」「大牟田」を改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。

9．平成 23 年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。

10．自然科学分析のⅣ−3 ～ 6 については株式会社パレオ・ラボに、Ⅳ−7 についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に分析を委託し、原稿を掲載した。

11．本書の執筆については、石製品・木製品・土製品・金属製品とⅤの鐸形土製品の文章については城門が行い、Ⅳ−1 の分析・執筆については加藤和歳が行い、Ⅳ−2 の分析・執筆については小林啓・山崎悠郁子が行い、その他の執筆と編集は齋部が行った。

目　次

序
例言
目次
図版目次
挿図目次
表目次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の経過 …… 2
　3　調査・整理の関係者 …… 3
Ⅱ　位置と環境 …… 5
　1　地理的環境 …… 5
　2　歴史的環境 …… 5
Ⅲ　調査の内容 …… 8
　1　遺跡の概要 …… 8
　2　基本層序 …… 9
　3　検出遺構と遺物 …… 10
　　(1)　掘立柱建物跡 …… 10
　　(2)　土坑 …… 17
　　(3)　溝 …… 123
　　(4)　包含層 …… 132
　　(5)　その他の遺構出土遺物 …… 139
　　(6)　遺跡内出土の特殊遺物 …… 158
Ⅳ　自然科学的分析 …… 162
　1　高坏の表面に付着する白色物質の推定 …… 162
　2　掘立柱建物跡出土礎盤（横木）の樹種同定 …… 164
　3　花粉分析とプラント・オパール分析 …… 170
　4　堆積物中の珪藻化石群集 …… 176
　5　出土した大型植物遺体 …… 180
　6　貝類の同定 …… 184
　7　動物遺存体 …… 187
Ⅴ　おわりに …… 210
　1　西蒲池池淵遺跡における各時代の様相 …… 210
　2　特徴的な遺構 …… 215
　3　特徴的な出土遺物 …… 219
　4　まとめ …… 222

図版目次

巻頭図版 1　1　7 号土坑出土土器　2　14 号土坑出土土器
巻頭図版 2　1　15 号土坑出土土器　2　17 号土坑出土土器
巻頭図版 3　1　19 号土坑出土土器　2　30 号土坑出土土器
巻頭図版 4　1　35 号土坑出土土器　2　43 号土坑出土土器
巻頭図版 5　黒塗り土器・鐸形土製品・磁州窯三彩・剣形木製品・柱状片刃石斧・鹿角製鏃・一筆書きの土器調整
巻頭図版 6　ト骨
図版 1　1　調査区上層全景（航空写真）　2　調査区下層全景（航空写真）
図版 2　1　調査区から南をのぞむ（航空写真）　2　調査区中央土坑集中部（航空写真）
図版 3　1　1 号掘立柱建物跡（北から）　2　1 号掘立柱建物跡柱穴①（南から）
3　1 号掘立柱建物跡柱穴②（北から）
図版 4　1　1 号掘立柱建物跡柱穴③（西から）
2　1 号掘立柱建物跡柱穴土層堆積状況（南から）
3　その他の礎盤式柱穴（東から）
図版 5　1　2 号掘立柱建物跡柱穴（南から）　2　3 号掘立柱建物跡柱穴①（南から）
3　3 号掘立柱建物跡柱穴②（北から）
図版 6　1　1 号土坑木質出土状況（西から）　2　1 号土坑完掘状況（南西から）
3　3 号土坑木製品出土状況（西から）
図版 7　1　4 号土坑土器出土状況（北西から）　2　5 号土坑完掘状況（北西から）
3　6 号土坑土層堆積状況（北西から）
図版 8　1　7 号土坑土器出土状況（西から）　2　8 号土坑完掘状況（南から）
3　9 号土坑完掘状況（北から）
図版 9　1　10 号土坑木質等出土状況（北から）　2　11 号土坑完掘状況（西から）
3　12 号土坑土器出土状況（南西から）
図版 10　1　13 号土坑土器出土状況（西から）　2　14 号土坑上層土器出土状況（西から）
3　14 号土坑下層土器出土状況（東から）
図版 11　1　15 号土坑中層土器出土状況（北東から）　2　15 号土坑下層土器出土状況（北東から）
3　16 号土坑土器出土状況（東から）
図版 12　1　17 号土坑土器出土状況（北から）　2　18 号土坑上層木質等出土状況（北東から）
3　18 号土坑中層土器出土状況（北西から）
図版 13　1　18 号土坑下層土器出土状況（北から）　2　19 号土坑中層土器出土状況（南東から）
3　19 号土坑下層土器出土状況（北西から）
図版 14　1　20 号土坑完掘状況（南西から）　2　21 号土坑完掘状況（東から）
3　22 号土坑土器出土状況（北から）
図版 15　1　23 号土坑土器出土状況（南西から）　2　23 号土坑土器出土状況（北から）

	3	25 号土坑土層堆積状況（南東から）		
図版 16	1	25 号土坑土器出土状況（南東から）	2	26 号土坑完掘状況（北西から）
	3	27 号土坑土層堆積状況（南から）		
図版 17	1	27 号土坑完掘状況（北東から）	2	28 号土坑土器出土状況（東から）
	3	29 号土坑中層土器出土状況（南から）		
図版 18	1	29 号土坑下層土器出土状況（南から）	2	29 号土坑最下層土器出土状況（南から）
	3	30 号土坑上層木製品等出土状況（南から）		
図版 19	1	30 号土坑中層土器出土状況（南から）	2	30 号土坑最下層土器出土状況（西から）
	3	31 号土坑中層土器出土状況（北東から）		
図版 20	1	31 号土坑下層土器出土状況（北東から）	2	32 号土坑土器出土状況（東から）
	3	33 号土坑完掘状況（東から）		
図版 21	1	34 号土坑中層土器等出土状況（北西から）	2	35 号土坑中層土器出土状況（南西から）
	3	35 号土坑下層土器出土状況（北から）		
図版 22	1	35 号土坑最下層土器出土状況（東から）	2	36 号土坑土器出土状況（南から）
	3	37 号土坑土器出土状況（西から）		
図版 23	1	38 号土坑亀甲羅出土状況（東から）	2	39 号土坑土器出土状況（南西から）
	3	39 号土坑土器出土状況（南東から）		
図版 24	1	40 号土坑土層堆積状況（北東から）	2	40 号土坑土器出土状況（北から）
	3	41 号土坑完掘状況（東から）		
図版 25	1	42 号土坑完掘状況（北から）	2	43 号土坑土器出土状況（西から）
	3	44 号土坑土層堆積状況（西から）		
図版 26	1	44 号土坑土器出土状況（東から）	2	45 号土坑完掘状況（西から ）
	3	47 号土坑完掘状況（南から）		
図版 27	1	48 号土坑土器出土状況（北から）	2	49 号土坑臼出土状況（南から）
	3	50 号土坑土層堆積状況（北西から）		
図版 28	1	50 号土坑完掘状況（北から）	2	51 号土坑完掘状況（北から）
	3	52 号土坑中層土器出土状況（西から）		
図版 29	1	52 号土坑下層土器出土状況（西から）	2	53 号土坑土器出土状況（北東から）
	3	53 号土坑完掘状況（北東から）		
図版 30	1	54 号土坑完掘状況（北から）	2	55 号土坑土層堆積状況（東から）
	3	55 号土坑完掘状況（南東から）		
図版 31	1	56 号土坑完掘状況（南東から）	2	57 号土坑土層堆積状況（東から）
	3	59 号土坑完掘状況（西から）		
図版 32	1	60 号土坑完掘状況（西から）	2	61 号土坑完掘状況（南から）
	3	62 号土坑完掘状況（南から）		
図版 33	1	63 号土坑完掘状況（北から）	2	64 号土坑完掘状況（西から）
	3	65 号土坑土層堆積状況（東から）		
図版 34	1	65 号土坑石出土状況（南から）	2	67 号土坑土層堆積状況（南西から）

3　68 号土坑土層堆積状況（南から）
図版 35　1　68 号土坑完掘状況（南から）　2　69 号土坑土層堆積状況（南西から）
3　71 号土坑完掘状況（南東から）
図版 36　1　73 号土坑完掘状況（西から）　2　75 号土坑完掘状況（東から）
3　76 号土坑土層堆積状況（北西から）
図版 37　1　76 号土坑剣形木製品出土状況（西から）　2　77 号土坑木質出土状況（南東から）
3　77 号土坑完掘状況（南東から）
図版 38　1　79・84・87 号土坑土層堆積状況（北から）　2　80 号土坑土器出土状況（南から）
3　82 号土坑土器出土状況（東から）
図版 39　1　85 号土坑土層堆積状況（南東から）　2　86 号土坑完掘状況（北から）
3　88 号土坑木質出土状況（南東から）
図版 40　1　90 号土坑土層堆積状況（北から）　2　91 号土坑完掘状況（南から）
3　93 号土坑土層堆積状況（南から）
図版 41　1　99 号土坑土層堆積状況（北東から）　2　99 号土坑石・土器出土状況（東から）
3　99 号土坑下層土器出土状況（南東から）
図版 42　1　105 号土坑土層堆積状況（西から）　2　106 号土坑土層堆積状況（南から）
3　107 号土坑完掘状況（北西から）
図版 43　1　108 号土坑土器出土状況（南から）　2　109 号土坑土器・木質出土状況（北から）
3　109 号土坑完掘状況（西から）
図版 44　1　110 号土坑土器出土状況（北から）　2　115 号土坑完掘状況（北から）
3　116 号土坑土層堆積状況（南東から）
図版 45　1　119 号土坑完掘状況（南東から）　2　1 号溝土器出土状況（南から）
3　1 号溝土層堆積状況（南から）
図版 46　1　2 号溝土層堆積状況（南から）　2　3 号溝土層堆積状況（南西から）
3　4 号溝全景（南から）
図版 47　1　5 号溝全景（東から）　2　6 号溝木質出土状況（南東から）
3　8 号溝土層堆積状況（南西から）
図版 48　4・5・7・11 号土坑出土土器
図版 49　11・13・14 号土坑出土土器
図版 50　14 ～ 16 号土坑出土土器
図版 51　16 ～ 18 号土坑出土土器
図版 52　18 ～ 20 号土坑出土土器
図版 53　20 ～ 23 号土坑出土土器
図版 54　23・25・26・28・29 号土坑出土土器
図版 55　29・30 号土坑出土土器
図版 56　31 ～ 33 号土坑出土土器
図版 57　34・35 号土坑出土土器
図版 58　35・36 号土坑出土土器

図版 59　37・39・40・42・43 号土坑出土土器
図版 60　43・44・47・50 号土坑出土土器
図版 61　52・55 ～ 58・60・65 号土坑出土土器
図版 62　69・73・80・81・83・99 号土坑出土土器
図版 63　104・109・110・113 号土坑、1 号溝出土土器
図版 64　1 ～ 3・6・8 号溝、包含層出土土器
図版 65　包含層出土土器
図版 66　包含層、その他の出土土器①
図版 67　その他の出土土器②
図版 68　その他の出土土器③
図版 69　出土石製品
図版 70　出土石製品・金属製品
図版 71　出土土製品
図版 72　出土木製品
図版 73　鹿角製鏃・鉄 CT 画像及び顕微鏡写真
図版 74　出土ト骨

挿図目次

第 1 図　柳川市の位置 ……1
第 2 図　周辺遺跡分布図（1/50,000）……6
第 3 図　西蒲池池淵遺跡周辺地形および各調査区位置図（1/2,500）……8
第 4 図　基本層序概念図……9
第 5 図　西蒲池池淵遺跡遺構配置図（1/200）……11 ～ 12
第 6 図　1 号掘立柱建物跡実測図（1/60）……13
第 7 図　1・2・4 号掘立柱建物跡出土土器実測図（1 ～ 4・6・12 ～ 14 は 1/4、他は 1/3）‥14
第 8 図　2 ～ 4 号掘立柱建物跡実測図（1/60）……15
第 9 図　5 号掘立柱建物跡実測図（1/60）……16
第 10 図　その他の礎盤式柱穴出土土器実測図（1/3）……17
第 11 図　1 ～ 7 号土坑実測図（1/30）……18
第 12 図　1・2 号土坑出土土器実測図（1/4）……19
第 13 図　4 ～ 6 号土坑出土土器実測図（1/3）……20
第 14 図　7 号土坑出土土器実測図（1/3）……22
第 15 図　8 ～ 13 号土坑実測図（1/30）……23
第 16 図　8 ～ 11 号土坑出土土器実測図（1/3）……24
第 17 図　12 号土坑出土土器実測図（1/3）……26
第 18 図　13 号土坑出土土器実測図（1/3）……27
第 19 図　14 ～ 17 号土坑実測図（1/30）……28

第 20 図　14 号土坑出土土器実測図①（1/3）……30
第 21 図　14 号土坑出土土器実測図②（10 は 1/4、他は 1/3）……31
第 22 図　15 号土坑出土土器実測図①（1/3）……32
第 23 図　15・16 号土坑出土土器実測図②（1/3）……33
第 24 図　17 号土坑出土土器実測図（1/3）……34
第 25 図　18 号土坑実測図（1/30）……36
第 26 図　18 号土坑上層・中層出土土器実測図（1/3）……37
第 27 図　18 号土坑中層出土土器実測図（1/3）……38
第 28 図　18 号土坑下層・最下層出土土器実測図（1/3）……39
第 29 図　19・20 号土坑実測図（1/30）……40
第 30 図　19 号土坑出土土器実測図①（1/3）……41
第 31 図　19 号土坑出土土器実測図②（1/3）……42
第 32 図　20 号土坑出土土器実測図（1/3）……43
第 33 図　21 ～ 26 号土坑実測図（21 は 1/40、他は 1/30）……44
第 34 図　21 号土坑出土土器実測図①（1/3）……45
第 35 図　21 号土坑出土土器実測図②（1/3）……46
第 36 図　22 号土坑出土土器実測図（1/3）……47
第 37 図　23 号土坑出土土器実測図（1/3）……49
第 38 図　24・25・27 号土坑出土土器実測図（1/3）……50
第 39 図　27 ～ 30 号土坑実測図（27 は 1/40、他は 1/30）……51
第 40 図　28 号土坑出土土器実測図（1/3）……52
第 41 図　29 号土坑出土土器実測図（1/3）……53
第 42 図　30 号土坑出土土器実測図①（1/3）……55
第 43 図　30 号土坑出土土器実測図②（1/3）……56
第 44 図　31 ～ 35 号土坑実測図（1/30）……57
第 45 図　31 号土坑出土土器実測図（1/3）……59
第 46 図　32・33 号土坑出土土器実測図（1/3）……60
第 47 図　34 号土坑出土土器実測図（1/3）……61
第 48 図　35 号土坑上層出土土器実測図（1/3）……62
第 49 図　35 号土坑中層・下層出土土器実測図（1/3）……63
第 50 図　36 ～ 41 号土坑実測図（1/30）……65
第 51 図　36 号土坑出土土器実測図（1/3）……66
第 52 図　37・38 号土坑出土土器実測図（1/3）……68
第 53 図　39 ～ 41 号土坑出土土器実測図（1/3）……69
第 54 図　42 ～ 46 号土坑実測図（1/30）……71
第 55 図　42・43 号土坑出土土器実測図（1/3）……72
第 56 図　44 ～ 46 号土坑出土土器実測図（1/3）……73
第 57 図　47 ～ 51 号土坑実測図（1/30）……75

第 58 図　47 号土坑出土土器実測図 (1/3) ……76
第 59 図　48 ～ 51 号土坑出土土器実測図 (1/3) ……78
第 60 図　52 ～ 54 号土坑実測図 (1/30) ……79
第 61 図　52 号土坑出土土器実測図 (1/3) ……81
第 62 図　53 ～ 56 号土坑出土土器実測図 (1/3) ……82
第 63 図　55 ～ 59 号土坑実測図 (55・58 は 1/40、他は 1/30) ……83
第 64 図　57 ～ 60 号土坑出土土器実測図 (1/3) ……85
第 65 図　60 ～ 65 号土坑実測図 (1/30) ……87
第 66 図　61・64 ～ 66・68 号土坑出土土器実測図 (24 ～ 26 は 1/4、他は 1/3) ……89
第 67 図　66・67 号土坑実測図 (1/40) ……90
第 68 図　68・69 号土坑実測図 (1/30) ……91
第 69 図　69 号土坑出土土器実測図 (1/3) ……93
第 70 図　70 ～ 74 号土坑実測図 (1/30) ……94
第 71 図　70・71 号土坑出土土器実測図 (1/4) ……95
第 72 図　72 ～ 74 号土坑出土土器実測図 (1・4 は 1/6、他は 1/4) ……97
第 73 図　75・76 号土坑実測図 (1/40) ……98
第 74 図　75 ～ 77 号土坑出土土器実測図 (1/4) ……99
第 75 図　77・78 号土坑実測図 (1/30) ……101
第 76 図　78・79・82 号土坑出土土器実測図 (2 は 1/6、他は 1/4) ……103
第 77 図　79 ～ 84・87 号土坑実測図 (1/30) ……104
第 78 図　80 号土坑出土土器実測図 (6 は 1/6、他は 1/4) ……105
第 79 図　83・84・87・88・90・91 号土坑出土土器実測図 (1/3) ……106
第 80 図　85・86・88・89 号土坑実測図 (89 は 1/40、他は 1/30) ……107
第 81 図　90 号土坑実測図 (1/40) ……109
第 82 図　91・92 号土坑実測図 (1/30) ……110
第 83 図　93 ～ 103 号土坑実測図 (1/30) ……111
第 84 図　93 ～ 98 号土坑出土土器実測図 (1 は 1/6、他は 1/4) ……113
第 85 図　99・101 ～ 104 号土坑出土土器実測図 (1/3) ……114
第 86 図　104 ～ 111 号土坑実測図 (1/30) ……115
第 87 図　105 ～ 107 号土坑出土土器実測図 (1/3) ……117
第 88 図　108 ～ 111 号土坑出土土器実測図 (1/3) ……119
第 89 図　112 ～ 122 号土坑実測図 (1/30) ……120
第 90 図　112・113・120・122 号土坑出土土器実測図 (1/3) ……121
第 91 図　1・3 ～ 6 号溝実測図、2 号溝土層断面図 (1/60) ……124
第 92 図　1 号溝出土土器実測図① (1/3) ……125
第 93 図　1 号溝出土土器実測図② (1/3) ……126
第 94 図　1 号溝出土瓦器・陶磁器実測図 (1/3) ……127
第 95 図　2 号溝出土土器実測図 (1/3) ……128

第 96 図　3 ～ 6 号溝出土土器実測図（14 ～ 18 は 1/4、他は 1/3）……129
第 97 図　7 号溝出土土器実測図（6 は 1/6、他は 1/4）……130
第 98 図　8 号溝出土土器実測図（14 は 1/4、他は 1/3）……131
第 99 図　包含層出土土器実測図①（1/4）……133
第 100 図　包含層出土土器実測図②（1/3）……135
第 101 図　包含層出土土器実測図③（1/3）……136
第 102 図　包含層出土土器実測図④（1/3）……137
第 103 図　包含層出土土器実測図⑤（1/3）……138
第 104 図　その他の遺構出土土器実測図①（1/4）……140
第 105 図　その他の遺構出土土器実測図②（16 ～ 18 は 1/4、19・20 は 1/6、他は 1/3）……141
第 106 図　その他の遺構出土土器実測図③（47・48 は 1/4、他は 1/3）……142
第 107 図　その他の遺構出土土器実測図④（1/3）……143
第 108 図　その他の遺構出土土器実測図⑤（1/3）……144
第 109 図　特殊遺物実測図①（1/2）……146
第 110 図　特殊遺物実測図②（1/2）……147
第 111 図　特殊遺物実測図③（34 ～ 47 は 1/2、48・49 は 1/1、50 ～ 55 は 1/3）……148
第 112 図　特殊遺物実測図④（56 ～ 61 は 1/2、62 ～ 67 は 1/3）……149
第 113 図　特殊遺物実測図⑤（1/3）……150
第 114 図　特殊遺物実測図⑥（1/3）……151
第 115 図　特殊遺物実測図⑦（1/3）……152
第 116 図　特殊遺物実測図⑧（1/3）……153
第 117 図　特殊遺物実測図⑨（120 は 1/4、他は 1/3）……154
第 118 図　特殊遺物実測図⑩（127・128 は 2/3、129 は 1/2、他は 1/3）……155
第 119 図　特殊遺物実測図⑪（142 ～ 144 は 1/3、145 ～ 151 は 1/4）……156
第 120 図　特殊遺物実測図⑫（152 ～ 154 は 1/4、155・156 は 1/5、157 は 1/6）……157
第 121 図　特殊遺物実測図⑬（1/4）……158
第 122 図　特殊遺物実測図⑭（162 は 2/3、他は 1/2）……159
第 123 図　卜骨実測図（1/3）……162
第 124 図　西蒲池池淵遺跡時期別遺構配置図……211
第 125 図　西蒲池池淵遺跡遺構変遷図……213
第 126 図　周辺の地形および検出溝略配置図……218
第 127 図　鐔形土製品形態分類模式図……221

表目次

第 1 表　国道 385 号三橋大川バイパス関係発掘調査地点一覧・遺跡名相対表……1
第 2 表　西蒲池池淵遺跡Ⅱ地点遺構番号対照表……223
第 3 表　西蒲池池淵遺跡Ⅱ地点及び包含層等出土特殊遺物一覧表……224

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

西蒲池池淵遺跡は、一般国道385号三橋大川バイパス道路改良事業に伴い発掘調査を実施した遺跡である。

一般国道385号は、福岡県柳川市を起点として佐賀県神埼郡吉野ヶ里町を通り福岡県福岡市を終点とする延長67.7㎞の幹線道路で、1975年に路線指定された。地方生活圏相互を連結するとともに、地域住民の通勤・通学等の日常生活をはじめ、農林業や商工業及び観光業等の経済活動に貢献する重要路線と言える。三橋大川バイパスは、この路線のうち柳川市三橋町柳河から大川市大字下木佐木までの延長3.86㎞の区間について、交通混雑の解消及び歩行者の安全確保を目的とし計画された。この区間は、近隣の幹線道路である国道442号及び有明海沿岸道路を相互に連結する重要な位置にあたるが、元来道幅が狭く、近年の交通量増加・車両大型化による渋滞で幹線道路としての機能が損なわれていた。また歩道整備の遅れにより歩行者、自転車の安全な通行に支障があり、これらの理由が事業計画の背景にあった。

第1図　柳川市の位置

平成13年度より事業実施され、施工対象用地の解決とともに順次試掘・確認調査を経て、文化財の確認された地点では本調査を実施した。本調査地点については、隣接する西蒲池池淵遺跡Ⅰ地点の調査結果から遺跡が展開することを確認したため、平成23年 3月15日に範囲確認調査を実

第1表　国道385号三橋大川バイパス関係発掘調査地点一覧・遺跡名相対表

報告時遺跡名称		調査時遺跡名称	市町村名	試掘確認調査日	発掘調査期間	調査面積（㎡）
下木佐木安堂遺跡	既報告県報第263集	下木佐木安堂遺跡	大川市下木佐木	H20.11.26	H20.12.8～H21.1.9	620
下木佐木安堂遺跡		蓬池遺跡	柳川市東蒲池	H16.7.8	H16.8.6 ～H16.8.31	160
西蒲池池田遺跡		西蒲池池田遺跡	柳川市西蒲池	H19.11.13・14	H21.6.8 ～H21.7.17	800
西蒲池池淵遺跡	Ⅰ地点	池淵遺跡Ⅰ地点	柳川市西蒲池	H19.11.13・14	H21.11.4～H22.3.29 H22.10.12～H23.3.15	970
	Ⅱ地点	**池淵遺跡Ⅱ地点**		**H23.3.15**	**H23.4.22～H23.10.24**	**1,200**
東蒲池門前遺跡	A区	門前遺跡		H19.11.13・14	H18.9.11～H18.10.13	400
	B区	西門前遺跡		H19.11.13・14	H21.1.9 ～H21.3.27	1,300
	C区	池淵遺跡Ⅲ地点		H22.1.14	H22.7.23～H22.9.28	760
	D区	池淵遺跡Ⅳ地点		H22.1.14	H22.7.23～H22.9.28	

施し、敷地内全面の発掘調査を行うこととなった。また、建設工事に伴い小学生の通学路確保のため、調査区東西に迂回路を建設することが決まり、当該部分についても併せて調査することになった。なお、平成23年度から発掘調査業務は九州歴史資料館の所管となったため、本調査は九州歴史資料館が行った。

なお、「西蒲池池淵遺跡Ⅰ」でも記述したように、本路線の調査においては、調査時の遺跡名や調査区名、遺跡の範囲について、柳川市教育委員会と協議の上、後日市が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲と名称を調整している。このため調査時と報告時の名称・区分けが異なり、その対照は表2のとおりである。なお、報告以前における発見届等の各種文書や年報等、出土遺物の注記では旧名称での記載である。

現在、事業区間のうち、本調査不要もしくは本調査終了の地点での施工の結果、起点から東蒲池交差点までの780 m（蒲池遺跡群蓮池地区調査地点含む）が平成20年に供用され、大川市鬼古賀から終点の大川市下木佐木までの1,540 m（下木佐木安堂遺跡調査地点含む）が平成22年に供用されている。

2　調査の経過

西蒲池池淵遺跡Ⅱ地点の調査については、平成23年4月22日から平成23年10月24日に実施した。確認調査時に確認できなかった調査区最南部の区画については、表土剥ぎ段階で南に地形が落ちることを確認し、遺構が無いことを再確認した後に危険回避のため即埋め戻しを行った。また、Ⅰ地点の調査においては最上層に茶灰色土が調査区全面を覆っており、さらに上層と下層の間に厚い包含層が存在したが、Ⅰ地点調査時から南に向かって標高が高くなって包含層が薄くなる傾向があり、Ⅱ地点においてはさらに包含層が薄く遺物の包含も少量であり、調査区南側では表土直下から約10 cmで遺構面を確認した。

4月22日にバックホーを搬入して表土除去を行った。部分的に堆積していた茶灰色土は細片の遺物を少量含むのみであったことから重機で除去をしたが、軟質土壌であるため遺構上面には茶灰色土が残り、これについては遺構掘削時に「包含層」として別途遺物を取り上げた。

24日から作業員を投入し、遺構の検出を行った。この段階で遺構の切り合いが激しく、密集していること、またⅠ地点の調査結果から土坑と認識できるものの多数が深さ150 cmを超えることが予想できた。Ⅰ地点の調査時にこれらの土坑の掘削に危険が伴い、また土層断面図を測量することでより掘削が困難になったが、本調査地では切り合いの密度がさらに増していることから、掘削による遺構壁面の崩落の危険が伴うことが考えられ、今回の調査では土坑の土層図を測ることは断念した。また切り合いの多さから全ての遺構を一気に掘削すると、作業の足場や通路が確保できなくなり、さらなる遺構崩落の危険性があったため、ある程度遺構を掘削した段階で調査を終了した遺構を埋め戻し、その後、再度その他の遺構を掘削するという形で、調査を2回に分けて行うこととした。

最初の遺構検出段階で、Ⅰ地点で確認していた区画溝（Ⅰ－1号溝）に関連すると思われる南北溝及び東西溝を確認し、現場の水切りも含めてまずこれらの溝の掘削を先行した。併せて井戸状の深い土坑についても検出、掘削を行った。これらの土坑は、Ⅰ地点で一部確認していたものと同様、

埋土中に複数の完形の土器を含むものが多くを占め、これらの写真撮影と図化も順次行った。土器の集中が数層に及ぶこともあり、湧水に悩まされながら出土する土器の量に苦労する調査となった。5月末まではほぼ土坑の調査のみであったが、5月31日に本地点で初めて礎盤式柱穴を確認し、礎盤式の掘立柱建物がこの地点まで広がることがわかった。しかしⅠ地点ほどの切り合いはないことから、標高の高低によって礎盤式掘立柱建物のあり方が異なるようであった。礎盤式柱穴の調査については後半に回すこととし、溝と土坑を掘削することに専念した。

切り合いが激しく掘削できない部分を残して、井戸状の土坑の調査がほぼ終了したことから、調査を一旦区切るため8月18日には航空写真撮影を行った。その後、灰色粘土他の包含層を掘削しながら危険回避のために調査を終了した深い遺構を埋め戻し、足場を確保した後に礎盤式柱穴や土坑などの掘削を再開した。Ⅰ地点の調査でも地山と掘方埋土の判別が困難であったことから、怪しい部分は徹底的に検出を行ったが、前述のように本地点は北側のⅠ地点より礎盤式柱穴は少量であった。また、地山に近似する包含層に弥生時代中期の土器が包含されていたことから、これらの遺物を取り上げること、またさらに下層の淡白黄色粘土層に植物などの包含が認められたことから、トレンチによるだめ押しを行い、人工的な資料の包含が無いこと、自然堆積や流れ込みによる基盤土の一部であることを確認した。

調査がほぼ終了した10月12日に最後の航空写真撮影を行い、10月23日には、「出土資料展示会」として出土した多数の完形品土器や特殊遺物をユニットハウスにて公開し、東蒲池・西蒲池地区を中心に近隣の住民を対象とした説明会を開催した。現場については足場の確保が困難であったため見学できない状態であったが、参加者は約70名に及び、調査が終了すれば地元を離れ間近で見ることができなくなる珍しい資料を見て、多くの方々に喜んでいただいた。

その後危険が無いように遺構部分を中心に埋め戻しを行い、10月24日に南筑後県土整備事務所立ち会いの下、引き渡しを行って調査を終了した。

今回の調査は多時期にわたる遺構の切り合いと足の踏み場もない程の出土遺物、深い遺構の多さからまともに歩く場所も少なく、滑りやすく凹凸の多い遺構面、基盤土に近似するわかりにくい埋土の掘削、さらには日々の多量の湧水に悩まされ、調査は困難を極めた。このような悪条件の中で、調査に参加していただいた作業員の皆さんは日々全身泥だらけになりながらも、本当に熱心に作業をしてくださった。また、東蒲池・西蒲池区長をはじめとする地域住民の方々から、日々惜しみないご協力と励ましをいただき、現地説明会にも多数参加をいただいた。困難な調査を完遂できたのは、ひとえに地元の方々のお陰である。ご協力いただいたすべての方々に、ここに改めて謝意を表します。

3　調査・整理の関係者

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
福岡県教育庁総務部文化財保護課				
総括				
教育長	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠
教育次長	荒巻　俊彦	荒巻　俊彦	荒巻　俊彦	城戸　秀明

総務部長	今田　義雄	今田　義雄	西牟田龍治	西牟田龍治
文化財保護課長	平川　昌弘	伊崎　俊秋	伊崎　俊秋	伊崎　俊秋
副課長	伊崎　俊秋			
参事兼課長補佐	日高　公徳			
参事兼課長技術補佐	小池　史哲			
庶務				
管理係長	富永　育夫			
庶務担当	近藤　一崇			
調査・整理報告				
調査第一係長	吉村　靖徳			
調査・整理報告担当	齋部　麻矢			

九州歴史資料館

総括				
館長		西谷　正	西谷　正	荒巻　俊彦
副館長		南里　正美	篠田　隆行	篠田　隆行
企画主幹（総務室長）		圓城寺紀子	圓城寺紀子	圓城寺紀子
企画主幹（文化財調査室長）		飛野　博文	飛野　博文	
参事　（　〃　）				飛野　博文
企画主幹（文化財調査室長補佐）			吉村　靖徳	吉村　靖徳
技術主査（文化財調査班長）		小川　泰樹	小川　泰樹	小川　泰樹
庶務				
企画主査		塩塚　孝憲	長野　良博	長野　良博
事務主査			青木　三保	青木　三保
				南里　成子
主任主事		熊谷　泰容		
		近藤　一崇	近藤　一崇	
主事		谷川　賢治	谷川　賢治	三好　洸一
調査				
技術主査		齋部　麻矢		
整理報告				
技術主査（保存管理班長）		加藤　和歳	加藤　和歳	加藤　和歳
参事補佐		小池　史哲	小池　史哲	池邉　元明
技術主査		齋部　麻矢	齋部　麻矢	
技術主査（学芸調査室広報普及班長）				齋部　麻矢
主任技師			城門　義廣	城門　義廣
				小林　啓
技師			小林　啓	

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

西蒲池池淵遺跡が所在する柳川市は福岡県の南部に位置する。

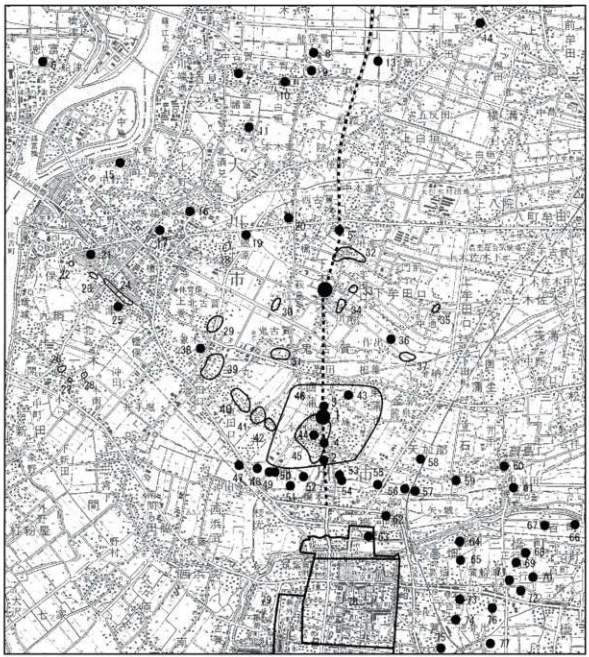
柳川市が所在する筑紫平野は有明海の湾奥に面し、南東を耳納山地・筑肥山地、北西部を背振山地、北東を古処山、馬見山などに囲まれている。九州最大の河川である筑後川及び矢部川、嘉瀬川、六角川などの河川により形成された九州最大の平野である。柳川市が所在するのはこのうちの筑後平野または南筑平野と呼ばれる沖積平野で、有明海沿岸地域に含まれ、その形成は、縄文海進に伴う海面上昇のために東シナ海に浅い大陸棚が出現したことに関係しているとされる。海成粘土層の有明粘土層と、非海成粘土層の蓮池粘土層で構成されており、表層部に5～10 m堆積する有明粘土層は、粘土やシルトを主体とする極めて軟弱な海成粘土層である。その形成については、筑後川と矢部川やその支流による大量の土砂の堆積と河口に発達する干潟によるものとされている。また近年では、海成層と非海成層の分布から有明粘土層が、世界最大と言われる有明海の大きな潮位差により、海底から巻き上げられた浮泥が河口から遡って堆積して形成されたという研究結果も発表されている。

2　歴史的環境

柳川市域で現在調査及び表採において確認されるのは、弥生時代前期以降の資料である。近年、有明海沿岸道路や九州新幹線建設に伴う発掘調査において多数の遺跡が調査されており、弥生時代前期を遡る遺構は確認されていないものの、以降の各時代の資料が増加している。

歴史的環境については、「西蒲池池淵遺跡Ⅰ」において述べているため、ここでは概略のみを記載する。弥生時代前期では、大川市域の酒見貝塚・下林西田遺跡で遺構・遺物が確認されており、柳川市域では旧大和町域の徳益八枝遺跡において弥生時代前期～中期初頭の遺跡が調査されている。また蒲船津地区・蒲池地区は弥生時代前期以降の土器の散布地として周知されており、蒲船津江頭遺跡においては遺物包含層が確認されている。中期になると遺跡の数は増加し、前出の下林西田遺跡、徳益八枝遺跡・酒見貝塚において引き続き遺構・遺物が確認される。特に下林西田遺跡では黒色磨研土器や牛角式の取っ手などの朝鮮半島との交流を窺わせる遺物が出土していることが注目される。柳川市域西部の磯鳥フケ遺跡では、中期後半の集落を形成する遺構がまとまって調査されており、扇ノ上遺跡では支石墓の上石と甕棺墓群が検出されている。後期になると集落分布域はさらに拡大し、特に柳川市域では一本松遺跡・正行西の頭遺跡・松の木遺跡・日渡遺跡など多数の遺跡が認められる。蒲船津江頭遺跡では後期から集落が出現し、終末～古墳時代初頭にいたって爆発的に生活痕跡が増大して最盛期を迎え、古墳時代前期まで継続する。同様の遺跡は佐賀平野の標高4 m以下の集落遺跡でも調査されている。

古墳時代では、柳川市のヘータカサシ遺跡や地蔵堂遺跡で集落遺跡が、大川市平原遺跡においては5世紀代の遺構も確認されている。また蒲船津地区や蒲池地区の遺跡でも5～6世紀代の遺構・遺物が確認されている。



1	下木佐木安堂遺跡	17	西水町遺跡	33	天神林遺跡	49	西蒲池得監坊遺跡	65	蒲船津水町遺跡
2	東蒲池蓬池遺跡	18	郷原遺跡	34	下木佐木遺跡Ⅱ	50	西蒲池古溝遺跡	66	中村遺跡
3	西蒲池池田遺跡	19	郷田北原遺跡	35	馬場遺跡	51	扇ノ上遺跡	67	松の木三十六遺跡
4	西蒲池池淵遺跡	20	内平原遺跡	36	西田口村城跡	52	西蒲池下里遺跡	68	将軍塚遺跡
5	東蒲池門前遺跡	21	榎津遺跡	37	鬼古賀遺跡Ⅰ	53	東蒲池大内曲り遺跡	69	正行遺跡
6	徳富権現堂遺跡	22	栗木町遺跡	38	西田口村城跡	54	東蒲池榎町遺跡	70	日渡遺跡
7	中古賀遺跡	23	小保遺跡	39	三丸中小路遺跡	55	矢加部町屋敷遺跡	71	ヘータカサン遺跡
8	能保里遺跡	24	津村貝塚	40	三丸東田口遺跡	56	矢加部五反田遺跡	72	地蔵堂遺跡
9	下林西田遺跡	25	津村城跡	41	宮ノ前遺跡	57	矢加部南屋敷遺跡	73	蒲船津城跡
10	北堤遺跡	26	浦田遺跡	42	園田遺跡	58	玉垂命神社遺跡	77	浮島天神遺跡
11	諸富遺跡	27	北島ノ一遺跡	43	中村遺跡	59	阿弥陀屋舗遺跡	72	逆井出遺跡
12	中八院遺跡	28	宮ノ後貝塚	44	三島神社・三島神社貝塚	60	東小路遺跡	73	蒲船津西ノ内遺跡
13	下林遺跡	29	北古賀遺跡群	45	蒲池弥生遺跡	61	磯島フケ遺跡	74	今古賀城跡
14	北ノ屋敷遺跡	30	前田遺跡	46	蒲池遺跡群	62	南矢ヶ部遺跡Ⅰ	78	柳川城郭
15	北新開遺跡	31	鬼古賀遺跡Ⅱ	47	坂井長永遺跡	63	南矢ヶ部遺跡Ⅱ	79	柳川城郭関連遺跡
16	酒見貝塚	32	下木佐木遺跡Ⅰ	48	西蒲池古塚遺跡	64	蒲船津江頭遺跡		……385バイパス路線

第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

古代において居住域と考えられる明確な遺跡は確認されていないが、西蒲池下里遺跡・西蒲池将監坊遺跡・池淵遺跡など蒲池地区の各遺跡で奈良時代の遺物が、西蒲池古塚遺跡・西蒲池将監坊遺跡・西蒲池古溝遺跡・西蒲池下里遺跡では平安時代の条里に関連する溝が多数確認されている。

中世においては西蒲池池田遺跡をはじめとして、柳川市域で多数の遺跡が確認されている。中世の柳川市域は蒲池氏と田尻氏によって統治されており、蒲池地区には蒲池氏が居城した「蒲池城」の存在が推定されている。蒲池氏は 10 世紀に三潴郡の地頭として筑後に土着した氏族で、蒲池地区を拠点とした。戦国時代には蒲池城を築城、第 2 の城として柳川城を築城して当地域を統治してきた。戦国末期には龍造寺氏によって滅亡するがその勢力は大きく、市域で確認される遺構や遺物にも当時の蒲池氏統治の一端と見ることができるものがある。『西蒲池池淵遺跡Ⅰ』で報告した数条の溝や出土資料からも、中世前期の土地利用や関連する施設の存在が窺える。今回の調査ではその続きも確認しており、「蒲池城」そのものは未だ確認できていないものの、これらの遺構や遺物は蒲池城周辺の執政域や集落の整備に関わる遺構と考えられよう。本遺跡の南東に位置する「崇久寺」は中世後期の蒲池氏の菩提寺であるが、平成 25 年度に刊行した『東蒲池門前遺跡』においては、崇久寺の寺域に関連すると考えられる区画溝が報告されている。この他東蒲池大内曲遺跡・矢加部南屋敷遺跡では中世後期の掘立柱建物や輸入陶磁器が多数出土しており、蒲池氏の支城のひとつである蒲船津城が所在した蒲船津地域では、蒲船津西ノ内遺跡において中世の集落辺縁部の水路や井戸が検出されている。

近世においては、江戸時代初頭に柳河城を居城とする田中吉政の領地となり、その指示により柳河城の修築をはじめ、周辺の掘割整備や矢部川の治水、久留米・柳川往還の整備、有明海の干拓堤防の築堤など様々な整備を行い城下町の基盤と財政的な基盤を固めていく。柳川市大和町鷹尾から大川市酒見に及ぶ堤防は「慶長本土居」としてその姿をとどめており、当時の大工事の様子を偲ばせる。田中吉正没後は、立花宗茂が柳河城主となり江戸時代を通して立花家が統治することとなるが、柳川狀木丸跡を中心とする周知の遺跡「柳川城郭跡」には現在も古い地名が残り、発掘調査では当時の地割りや建造物に関連する遺構や遺物が検出される。また柳川市矢加部地区を中心に近世の集落が確認され、多量の遺物も出土している。当時の貴重な記録である重要文化財の立花家文書や、国指定名勝戸島氏庭園など城下に現存する史跡や名勝、美術工芸品なども、当時の柳川城下の様相を詳らかにする資料として貴重なものである。

参考文献

柳川市 1999『地図のなかの柳川―柳川市史　地図編―』

大川市教育委員会 1994『酒見貝塚』大川氏文化財調査報告書第 2 集

柳川市教育委員会 2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第 1 集

福岡県教育委員会 1998『下林西田遺跡』福岡県文化財調査報告書第 132 集

福岡県教育委員会 2007『西蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 2 集

福岡県教育委員会 2011『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 10 集

九州歴史資料館 2013『東蒲池門前遺跡』国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 3 集

九州歴史資料館 2013『西蒲池池淵遺跡Ⅰ』国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 2 集

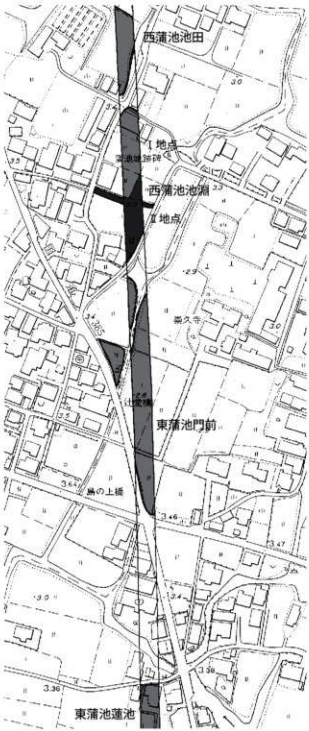
Ⅲ　調査の内容

1　遺跡の概要

調査区は、国道385号バイパスと有明沿岸道路が交わる柳川西IC交差点から北側へ500m程度の地点である。平成21・22年度に調査を行ったⅠ地点の南に続く場所で、Ⅰ地点同様、調査当時の名称は「池淵遺跡」であり、調査後に再検討され整理された遺跡名が「西蒲池池淵遺跡」である。筑後川の堆積作用と有明海の潮汐により形成された粘土質地盤の低平地上に位置し、調査前の田畑の地表高は標高2.7m程度、隣接する道路の標高は3.2m程度である。標高のやや高い西南側の住宅密集地と東側及び北側の水田畑作地の境に位置し、周辺には大小のクリークが縦横無尽に走る。調査区内の堆積層は基本的に軟弱な粘質土が主体で、Ⅰ地点ほどの量はないが客土または西側から流れ込んだと思われる包含層が堆積している。

調査区は住宅地と水田が混在する場所に位置し、調査以前はその大半が水田として耕作されていた。周辺の住宅地は昭和50年に米軍が行った航空写真撮影の頃から建っており、土地利用はさほど変わっていない。

Ⅰ地点では遺構面が大きく2面確認できたが、南端部では包含層が薄くなり、Ⅱ地点においてはさらに薄くなって、調査区南側では表土直下10cmが遺構面であった。しかし遺構はⅠ地点より密度が高く、弥生時代中期・後期、弥生時代終末～古墳時代初頭・古墳時代中期・後期、古代、中世前期・後期、近世の遺構がほぼすべて同一遺構面で確認された。遺構の種類は掘立柱建物跡・土坑・溝・ピットで、その他包含層に大量の遺物が包含される。竪穴式住居跡は皆無である。弥生時代中期はⅠ地点同様包含層が主体であるが、若干土坑が認められる。た



第3図　西蒲池池淵遺跡周辺地形および各調査区位置図（1/2,500）

だし、全ての遺構が包含層を切るため遺物の混入が多く、若干の誤認があるかもしれない。弥生時代後期後葉からは井戸状の深い土坑が点在するようになる。また、礎盤工法の掘立柱建物跡や柱穴も認められるが、Ⅰ地点ほどの切り合いはなく、建物として確認できるものも少ない。遺跡のピークは弥生時代終末～古墳時代初頭で、井戸状の深い土坑が繰り返し掘削され、その他各種規模の土坑も掘削される。それらとはやや場所を違えた場所に少数の掘立柱建物跡が認められる。掘立柱建物は礎盤工法を使用したもので、本調査地内では４棟を確認した。出土遺物も豊富であり、土坑内からは完形品の土器や各種木製品、植物遺体、動物骨やト骨など多種多様な資料が出土した。古墳時代後期には遺構数が激減し、井戸状の深い土坑とその他の土坑が点在するのみである。古代においてはさらに遺構は減少し、土坑がわずかに認められる程度である。これが中世前期では大きく変化し、Ⅰ地点で検出した区画溝と同一と考えられる溝を確認し、少なくとも「コ」の字に配されることがわかった。その内部には井戸状の深い土坑と掘立柱建物跡、ピット群が点在する。その後、Ⅰ地点同様区画溝を埋めたてる大規模な整地が行われる。ただし本調査区では整地層と考えられる茶灰色土の包含層は遺構の上面に残るのみであり、標高の関係で整地が薄かったのか、削平されたのかはわからない。中世後期の遺構は溝・土坑で、溝はⅠ地点で確認した２・３号溝との関連が考えられる。近世は溝と土坑を確認した。

２　基本層序

遺跡内の基本的な層序はⅠ地点３区とほぼ同様であるが、全体に各包含層は薄く、包含層が全く認められない場所も多々あった。基本層序は第４図に概念図で示すように、複数層の包含層の間に遺構が存在する状況である。包含層は大きく中世前期の茶灰色粘土包含層と、弥生時代終末～古墳時代初頭の包含層群、弥生時代中期の包含層群に分けられる。茶灰色土包含層はⅠ地点の調査結果や堆積状況、包含する遺物の状況から整地と考えられるが、その他は西から東に流れた様に堆積し、分層したものの包含される遺物に時期差は認められないものであった。Ⅰ地点同様、調査区より標高の高い西南側の地区からの流れ込みによる堆積と考えられる。このうち灰色粘土はその他の包含層に比して粘性が弱く、調査区の至る所に堆積し、Ⅰ地点においてはかなり厚く堆積する部分もあったことから、一定の期間人の手が入らない時期に何度も流れ込んだとも考えられる。基盤土は軟質の白黄色粘土層で、さらに下はグライ化した青灰色粘土になる。調査区中央で掘削した深い土坑の壁面には、白黄色粘土に近似した自然木をわずかに含む粘土層が基盤土壌に認められ、東に向かって大きく落ち込んでいたが、遺物は含まれず、弥生時代中期の遺構が営まれる以前に流れ込んだ層と考えられる。

第４図　基本層序概念図

3　検出遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

今回の調査でも、Ⅰ地点と同様に礎盤を利用した掘立柱建物跡や柱穴を検出した。柱穴の規模や横木の規模・形状・深さも様々であり、また後世の遺構に大きく削平されるため建物跡として確認できるのは4棟のみである。そのうち現場で確認できたのは1号掘立柱建物跡のみである。

1号掘立柱建物跡（図版3・4、第6図）

調査区南部西寄りに位置する1間×2間の南北棟建物で、121・122号土坑に切られる。東側柱列中央の柱穴は横木が残存しないが、その他は近似した形状の横木を有し、いずれも東西方向に据えられることから、この組み合わせは確実と考えられる。柱間寸法は現存する横木抉り部で測ると桁行1.85m等間、梁行3.1m等間で、床面積は11.4㎡程度となる。柱掘方の規模は一辺120～130㎝の隅丸方形もしくは長方形を呈し、深さも60㎝前後と残りが良い。一部は断面で柱痕跡を確認でき、柱の直径は15㎝前後である。出土遺物が少なく、弥生中期の包含層も流れ込んでいるため時期の確定は困難である。一部の柱掘方では、木の皮層が2層確認できた。

出土遺物（第7図1～5）

1～4は弥生土器の甕で、2・3は外面の口縁下に沈線が1条廻る。4は甕底部小片でやや上げ底になる。5は高坏の口縁部の小片で、内外面に暗文を施す。この他に石庖丁が出土している。

2号掘立柱建物跡（図版5、第8図）

調査区北端に位置する2基の柱穴と、Ⅰ地点で18号掘立柱建物跡とした2基の柱穴が組み合った。85号土坑に切られる。1間×2間の建物であると想定するが、南柱列の柱穴2基を欠き、残りの1基も位置がずれるためやや不確定である。ただし、柱掘方の規模、横木の方向と形状、礎盤の深さが近似しており、極めて可能性は高いと思われる。柱間寸法は桁行2.0・1.85m、梁行3.2mで、床面積は12.1㎡前後になろうか。柱掘方は一辺100～120㎝の隅丸方形もしくは長方形を呈し、深さは10～50㎝と南西側の残存状況が悪い。

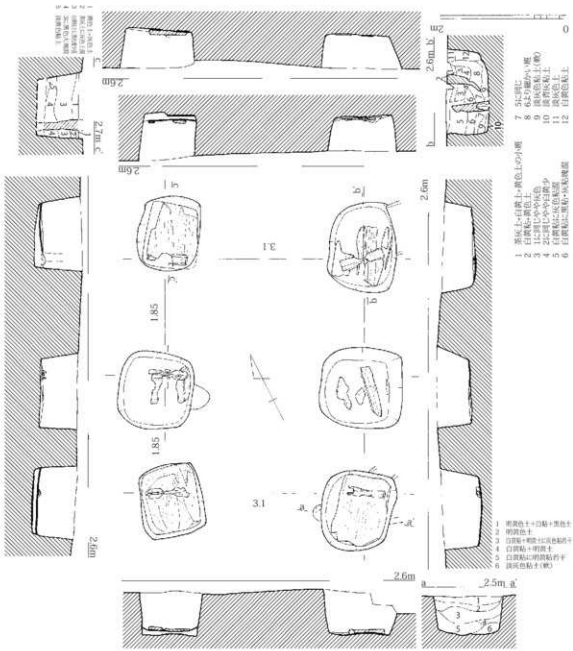
出土遺物（第7図6～11）

6～8は弥生土器。6は甕口縁部小片で、7は無頸壺小片である。8は器台裾部で、外面に疎らにススが付着する。9～11は土師器。9は鉢で外面下位に僅かにハケメが認められる。10は甕で外面はヘラ状工具によるナデ付け、内面は指によるナデ付けである。11は器台の裾部か。外面をハケメで調整するが、裾付近は一部未調整である。

3号掘立柱建物跡（図版5、第8図）

調査区北部北寄りに位置する1間×1間の建物で、52・60号土坑に切られる。南北の柱穴以外は横木が残存し、その形状や設置方向、設置レベルも近似することから、この組み合わせの可能性は高いと思われる。柱間寸法は東西2.65m、南北3.3mを測り、床面積は8.7㎡程度になる。柱掘方は一辺100㎝前後の隅丸方形を呈し、深さは40㎝前後残存する。

第 5 図　西蒲池池溜遺跡遺構配置図（1/200）



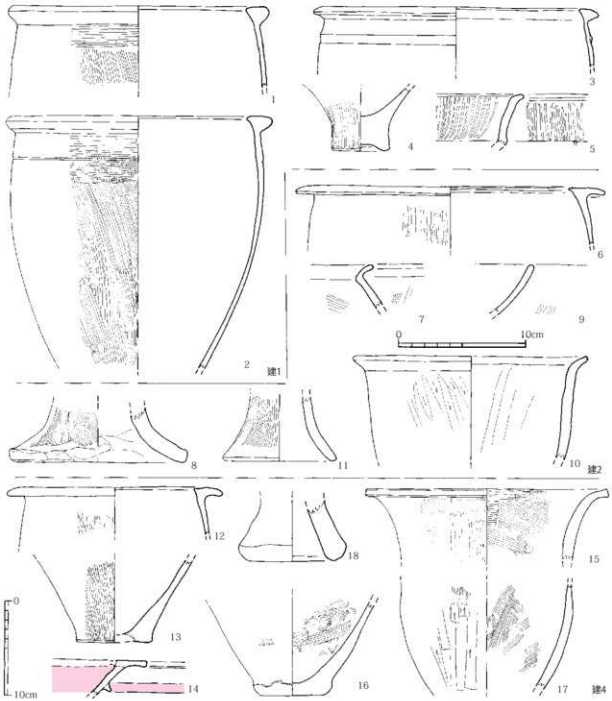
第 6 図　1 号掘立柱建物跡実測図（1/60）

4 号掘立柱建物跡（第 8 図）

調査区中央北端に位置し、配水管掘方と 11 号土坑に切られて残存状態が悪い。また、横木や礎盤の痕跡も無く、木質の痕跡である茶色粘土が残存していた程度であり、柱穴ではない可能性もある。ただ、埋土の状況や他の礎盤との近似性から礎盤式柱掘方とした。柱間寸法は掘方中央で 2.3m、いずれも横木下の敷き板状に粘土が残存する。

出土遺物（第 7 図 12 ～ 18）

12 ～ 14 は弥生土器。12・13 は甕。12 は口縁部小片、13 は平底の底部片、14 は高坏で、内外に丹塗りを施す。15 ～ 18 は土師器。15 は壺口縁部で端部が大きく外反する。16・17 は壺で、16 は平底で底部が肥厚する。全体的に手捏ね風で、外面はハケメをナデ消すが底部付近は調整を行わ

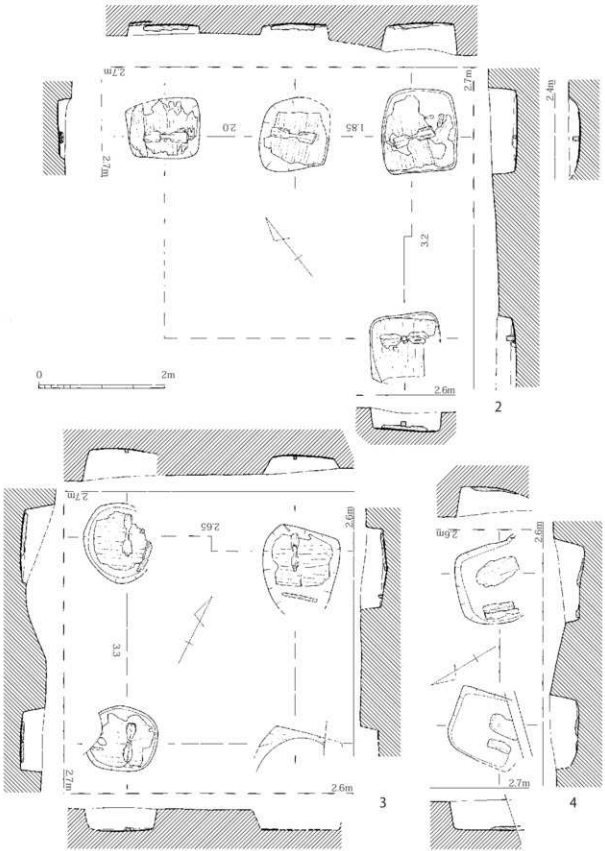


第７図　1・2・4 号掘立柱建物跡出土土器実測図（1 ～ 4・6・12 ～ 14 は 1/4、他は 1/3）

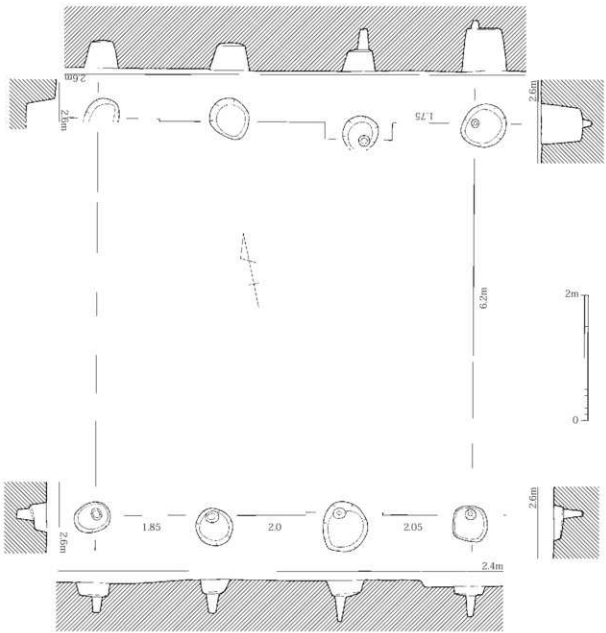
ない。内底部には工具痕が認められる。17 は胴部片で、外面はケズリ、内面はハケメをナデ消す。18 は器台裾部と思われ、器壁が極めて厚い。

5 号掘立柱建物跡（第 9 図）

1 棟のみ確認できた円形の柱掘方の掘立柱建物跡で、調査区中央東寄りに位置する。3 間×3 間の側柱建物に復元でき、排水管堀方に切られて東・西側柱列跡中央の各 2 つの柱穴を欠く。柱間



第8図　2～4号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第9図　5号掘立柱建物跡実測図（1/60）

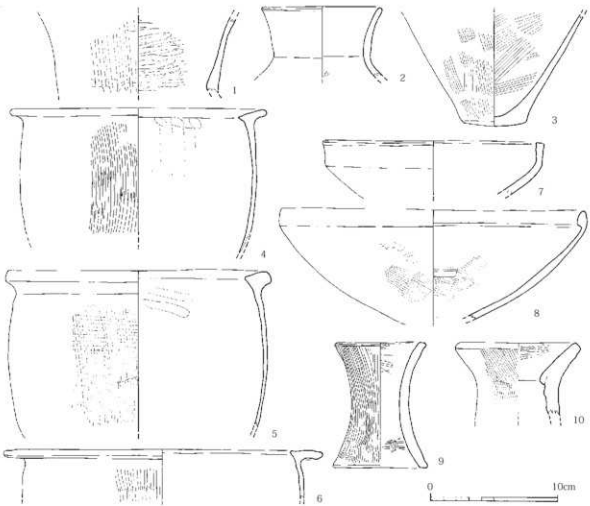
寸法は南側柱列で1.85・2.0・2.05m、北側柱列は2.0・2.1・1.75mを測る。南北は東側隅柱間で6.2mを測り、床面積は36.4㎡程度となる。柱掘方は直径50～80cmの円形、または隅丸方形を呈し、柱痕跡は15～20cmを測る。いずれも埋土は茶灰色土の単一層で、柱痕跡のみが黒色土である。糸切り底の土師器が出土している。

その他の礎盤式柱穴

礎盤式柱穴は総数41基を検出した。これらの出土資料の中で図化できるものを掲載する。

出土遺物（第10図）

1～3は壺。1は広口壺頸部で外面はタテの、内面は横位のミガキを施す。2は小型の広口壺で、内面が被熱赤変する。3は体部下半でレンズ底になり、マメツが激しいが内外面ハケ調整である。



第 10 図　その他の礎盤式柱穴出土土器実測図（1/3）

4 ～ 6 は甕。4 は頸部内面に指圧痕が顕著である。5・6 は内面はナデ調整で 6 は器壁が薄い。7・8 は高杯。口縁が屈曲して坏部が内傾する。7 は内外面ナデ調整、8 はハケ調整で口縁の肥厚部に粘土の継ぎ目が認められる。9・10 は器台で、9 は中位に、10 は上位にくびれがある。この他にスクレイパーが出土しており、また横木に井戸枠部材が転用されていた。

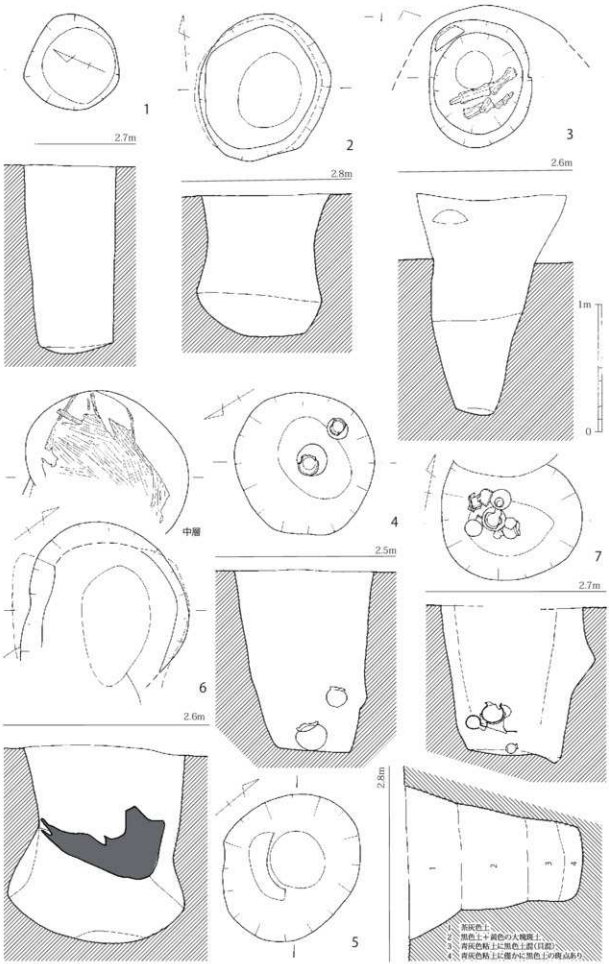
(2) 土坑

土坑は弥生中期～中世後期まで多数出土したが、各時代に共通して形態に特徴のあるものが多いことから、大きく分類して時代順に示す。種類としては井戸状の深い土坑、木質や炭が筋状に堆積するやや大型で深さ 100cm 前後の土坑、大型で 10 ～ 40 cmの浅い土坑・その他の土坑の順で記載する。

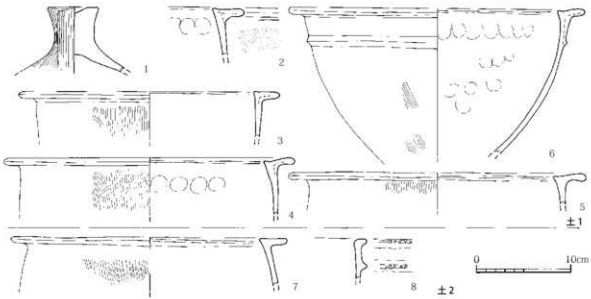
1 号土坑（図版 6、第 11 図）

調査区南部中央に位置し、51 号土坑に切られる。直径 70 cm前後の円形を呈し、深さは最深で 150 cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は上層に茶灰色土が入り、中位に植物や種子が 5 cm前後の厚さで斜めに堆積する層があり、その下には自然木の丸太が廃棄されていた。下層は黒色粘土と青灰色粘土の混合土で、下位にいくにつれ青灰色粘土が増加した。

出土遺物（第 12 図 1 ～ 6）



第11図　1～7号土坑実測図 (1/30)



第 12 図　1・2 号土坑出土土器実測図 (1/4)

1は蓋の天井部で、器壁が厚く上面が窪む。2～5は甕の口縁部片で、4は内面に指圧痕が残る。6は鉢で、口縁部下に断面三角の凸帯を廻らせ、内面の指圧痕が顕著である。

2 号土坑（第 11 図）

調査区中央北東寄りに位置し、直径 105 ～ 115 cmの円形を呈する。深さは最深で 110 cmを測り、上位がやや開き気味で、下位がフラスコ状に膨らむ。壁面崩落によるものと考えられる。

出土遺物（第 12 図 7･8）

7は甕口縁小片、8はキザミ目凸帯を有する小片である。

3 号土坑（図版 6、第 11 図）

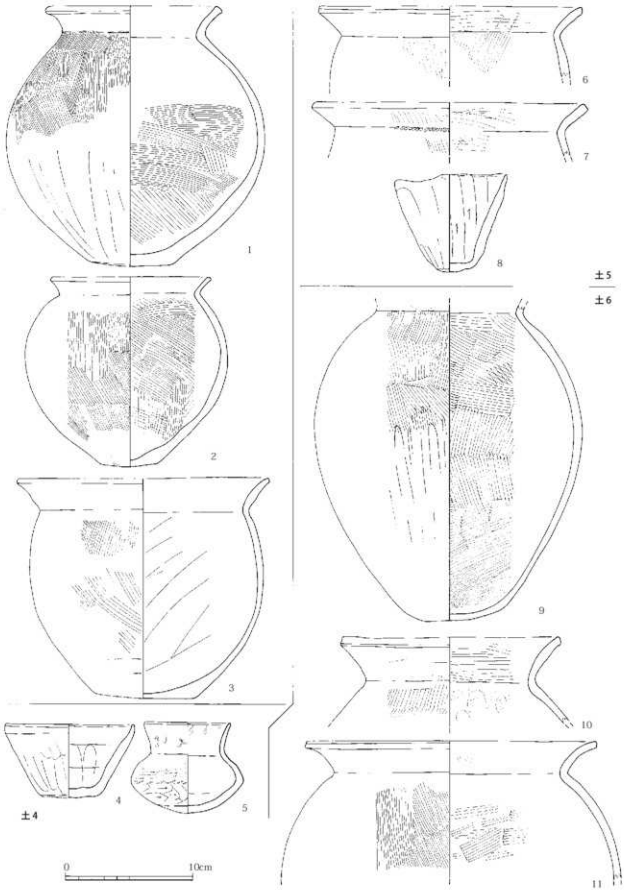
調査区北部に位置し、69 号土坑に切られる。上位は大きく削平されるが直径 120 cm以上に復元できる。壁は直線的に立ち上がって上方が大きく広がり、下位に行くほど狭くなる。深さは最深で 175 cm、底面は 30 cm前後の円形を呈する。66 号土坑に大きく削平されるため土器などの出土資料は少なく、底部付近で木製の砧が 3 点出土したが、取り上げできなかった。

4 号土坑（図版 7、第 11 図）

調査区南部中央に位置し、直径 110 cm前後の円形を呈する。深さは最深で 145 cmを測り、壁は直線的に緩やかに立ち上がり、底面は平坦になる。埋土は上層 40 cmが茶灰色土、中層 50 cmが黒色土と黄色土の斑土、下層は黒色土に青灰色粘土が混じり、最下層は青灰色粘土に黒色土が若干混じる。中層に甕が、また底部中央に接地して完形に近い壺が出土している。

出土遺物（図版 48、第 13 図 1 ～ 5）

1は最下層出土の壺で、底部はレンズ状で頸部内面の稜は明瞭である。外面下半は工具を使用したナデで、内面は粗と細のハケメがつく。2・3は甕で、双方共にレンズ底。2は外底部付近がケズ



第 13 図　4 ～ 6 号土坑出土土器実測図 (1/3)

リ後にハケ調整、3は下半が工具によるナデで、内面も工具を使用する。4は小型の鉢で、外面は工具ナデ、内面は指ナデを施す。5はミニチュアの壷で、外面の胴部中位と頸部の一部に工具痕があり、下半はケズリ後にナデ調整。内底に黒色の付着物がある。この他に木製の柄杓が出土している。

5号土坑（図版7、第11図）

調査区北部に位置し、21号土坑に切られる。長軸約120㎝、短軸約100㎝の楕円形を呈し、南西側上位に段を有する。壁は斜めに立ち上がって上方が開き気味になる。土層はほぼ水平堆積で大きく分層でき、上層は茶灰色土で混入と思われる。中層は黒色土と黄色の斑土で一括で埋められたと考えられ、下層は青灰色粘土に黒色土が混入し、貝殻を若干含む。

出土遺物（図版48、第13図6～8）

6・7は甕口縁部小片で、7は頸部にハケメ原体先端部のあたりがある。8は手捏ねの鉢で、内外面とも指ナデだが、外底部付近には工具痕が認められる。

6号土坑（図版7、第11図）

調査区中央に位置し、23・53号土坑に切られる。直径140㎝以上の円形または楕円形に復元できる。壁は上位がほぼ直立するが、下位はフラスコ状に広がり、壁面の崩落と考えられる。埋土は最上層が茶灰色土で、上層が黒色の軟質粘土層、中層に木の皮の様な繊維や小枝を廃棄した層が、壁面に張り付くように厚さ5㎝以上で堆積していた。この層以下がフラスコ状に広がり、貝を含む軟質の黒色粘土、青灰色粘土の順で堆積していた。

出土遺物（第13図9～11）

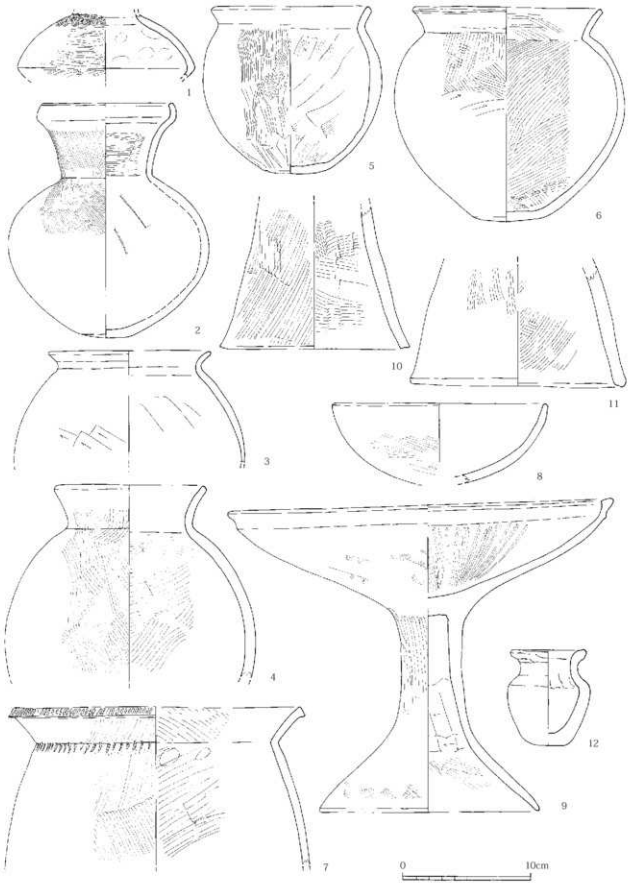
9・10は壷。9は口縁を欠損し、底部はレンズ状を呈する。外面下位は折り返す縦位のハケメ後に工具によるナデ調整。10は内面に指圧痕が残る。11は甕で胴部上位が大きく張る。この他に石庖丁が出土している。

7号土坑（図版8、第11図）

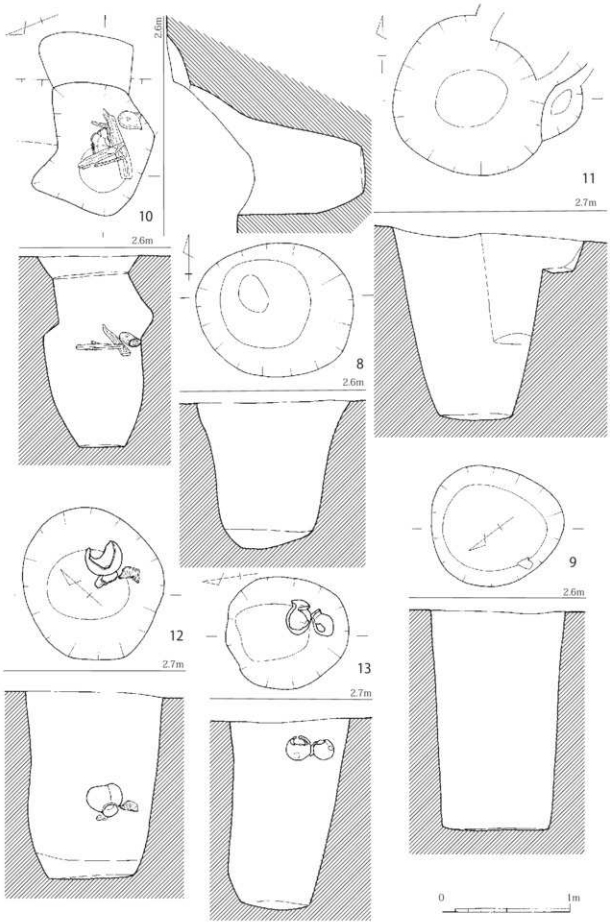
調査区中央西寄りに位置し、106号土坑に切られる。直径約100㎝前後の円形に復元でき、深さは最深で120㎝を測る。壁は若干開きながら直線的に立ち上がるが、上位の一部が広がる。埋土は上層が茶灰色土、中層が軟質の黒色粘土、下層は青灰色粘土に黒色土が混入する。埋土中位には植物質の堆積層があり、下層の底部やや上位から完形品を含む土器がまとまって出土し、底部からは甕が接地して出土した。

出土遺物（巻頭図版1-1　図版46、第14図）

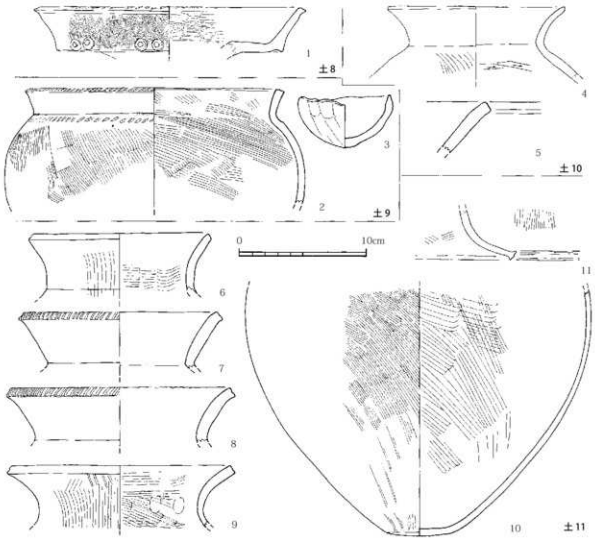
1～4は壷。1は免田式系の胴部片で、胴部中位に明瞭な稜がつく。頸部には細かい波状文を施し、外面は丁寧なミガキを施す。内面に指圧痕があり、やや黒色化する。2は口縁が小さな袋状になり、底部はレンズ状になる。外面は細かいハケ調整後下位をナデ消す。内面は工具によるナデ後横位のナデ。外底部付近にススが付着し、全面に火襷状の痕跡が認められる。3は短頸壷で内外面とも工具ナデ、外面の一部にススが付着する。4は口縁径が小さく頸部が長い。5～7は甕。5は小振りで底部は外面下位と内面の一部が工具によるナデ調整。6は外面下位はケズリ後ヨコ・ナナメのナデ。7はやや大型で、口縁端部にキザミを施し、下位部にもキザミを施す。外面にススが多



第14図　7号土坑出土土器実測図 (1/3)



第 15 図　8 ～ 13 号土坑実測図 (1/30)



第16図　8～11号土坑出土土器実測図（1/3）

量に付着する。8は単純口縁の鉢で、内面は工具ナデ、外面はハケ後部分ナデ。9は高坏で、口縁端部が屈曲して肥厚する。坏部内面には折り返す放射状の暗文があり、脚部外面上位はミガキを施す。10・11は器台の裾部であるが、被熱の痕跡は認められない。12はミニチュアの精巧な壷で、器壁が非常に厚い。外面全体にススが付着する。1・2・6は下層、5は最下層からの出土である。

8号土坑（図版8、第15図）

調査区南部中央に位置し、長軸125 cm、短軸約100 cmを測る円形を呈する。壁は上方に緩やかに開きながら立ち上がり、深さは最深で115 cmで底面は中央がやや深くなる。埋土は上層に黒色土と茶色土が堆積し、中層には木の皮等の植物層が堆積していた。下層には自然木等の木質が投棄された状態で出土し、最下層は青灰色粘土に黒色土が若干混入する。

出土遺物（第16図1）

1は畿内系の二重口縁壺口縁部で、2個対の円形浮文が6カ所に復元できる。端部にはキザミを施し、屈曲部の垂下はなく、内面はミガキを施す。肌色を呈し、若干土質が他資料と異なる。

9 号土坑（図版 8、第 15 図）

調査区南部中央に位置し、113 号土坑に切られる。直径 100 ㎝前後の不整楕円形を呈し、深さは約 180 ㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ちあがり、底面は平坦になる。埋土は上層に茶灰色土が入り、下層は黒色土と水分のない青灰色粘土が入る。

出土遺物（第 16 図 2・3）

2 は扁平な広口壷で、頸部が非常に太く屈曲が緩い。口縁端部が肥厚して刺突状のキザミを廻らせ、頸部にも同じ原体のキザミを廻らせる。3 は単純口縁の手捏ねの鉢で、ナデツケの痕跡が顕著である。この他に木製の椀が出土している。

10 号土坑（図版 9、第 15 図）

調査区南部の中央に位置し、1 号溝に大きく切られるため上端の規模は不明であるが、直径 110 ～ 120 ㎝に復元できる。深さは 150 ㎝前後で底部は平坦になる。壁は垂直に近く直線的に立ち上がるが、中位が一部膨らむ。最上位の膨らみは崩れと思われる。埋土は上層が黒茶色土で中層に自然木や貝が堆積する層があり、下層は青灰色粘土と黒色土の混合土である。

出土遺物（第 16 図 4・5）

いずれも甕の口縁部。4 は内面に工具によるナデが見られる。5 は端部が肥厚し、頸部は強く屈曲すると思われる。この他に不明木製品が出土している。

11 号土坑（図版 9、第 15 図）

調査区中央西寄りに位置し、93 号土坑を切り、108 号土坑に切られる。直径約 130 ㎝の円形を呈し、深さは最深で 150 ㎝を測る。壁は上方に開きながら直線的に立ち上がり、底面は平坦になる。中層に木質のような植物堆積層があった。

出土遺物（図版 48・49、第 16 図 6 ～ 11）

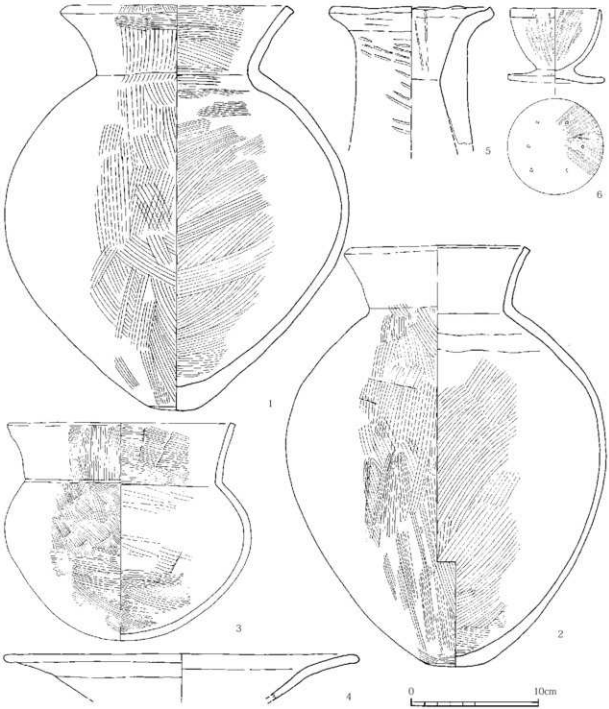
6 ～ 9 は壷口縁部。6 はやや直口し、頸部の締まりは緩い。7・8 は頸部内面に稜を有し、端部にキザミを施す。9 は口端部付近に縦位の工具痕が、頸部内面には指圧痕が残る。10 はレンズ底で、外底部を工具によるナデでハケメを消す。11 は高坏脚部小片で、端部上下に凸線が廻る。

12 号土坑（図版 9、第 15 図）

調査区のほぼ中央に位置し、56 号土坑に切られる。直径 110 ～ 120 ㎝の円形を呈し、深さは約 150 ㎝を測る。壁はほぼ垂直に直線的に立ち上がり、底面は平坦になる。埋土は黒色土と白黄色土と黄色土の斑層が中心で、下層は軟質の黒色粘土となる。下層上位から土器がまとまって出土している。

出土遺物（第 17 図）

1 ～ 3 は壷。1 は欠損が少なく、頸部は器壁が厚く、底部は厚く小さなレンズ状になる。2 は口縁がやや直立し、胴部は器壁が薄い。胴部外面下位は折り返しのハケメを施す。3 は直口壷で、外底部付近と内面は板状のナデ調整で、口縁部にはススが付着し、内外面は共に被熱により赤変する。4 は高坏で、器壁が厚く緩やかに外反する。5 の器台は端部を若干摘み上げ、外面には横位のタタキを施す。6 は脚付きの小型坏で脚部に直径 2 ㎜前後の穿孔が 2 カ所残り、6 カ所に復元できる。

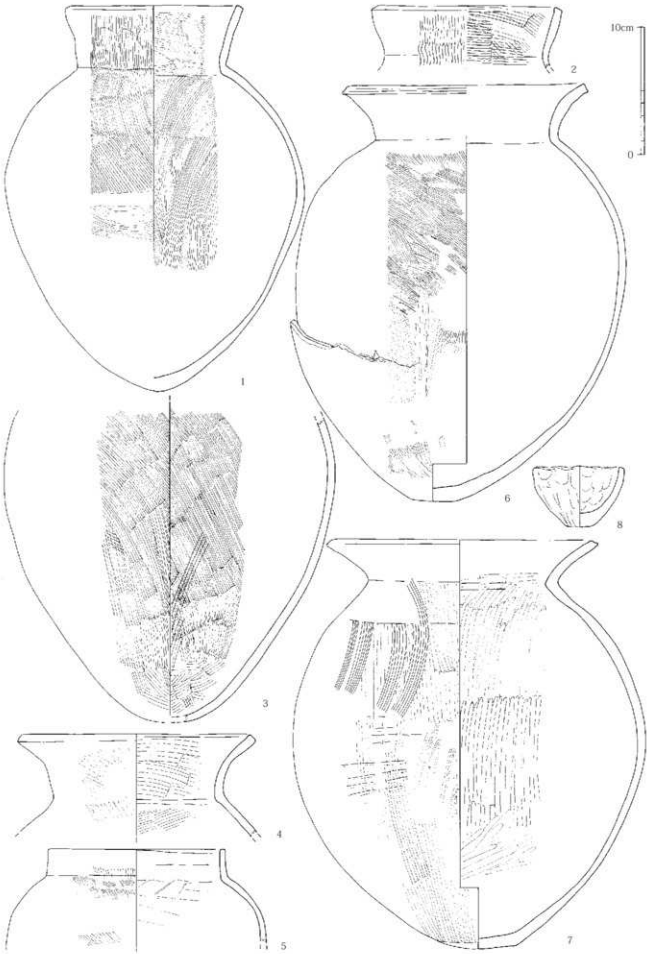


第 17 図　12 号土坑出土土器実測図 (1/3)

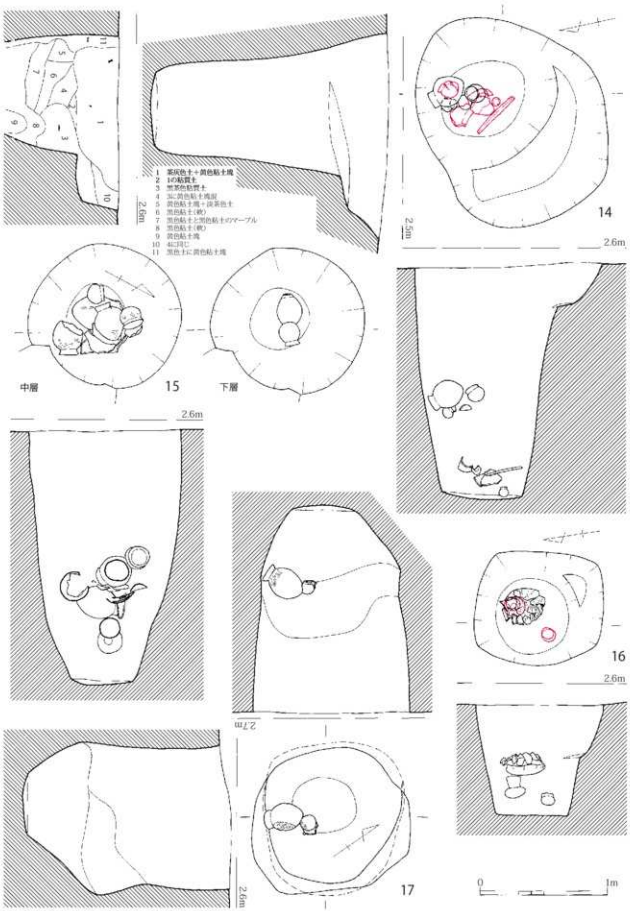
全体に丁寧なミガキを施す。

13 号土坑（図版 10、第 15 図）

調査区中央西寄りに位置し、42 号土坑に切られる。直径長軸約 100 cm、短軸約 90 cmの楕円形を呈し、深さは最深で約 140 cmを測る。壁はほぼ垂直に直線的に立ち上がり、底部が若干小さくなる。埋土は上層が黒色土で、中層以下は青灰色粘土と黒色土の混合土である。上層からは焼き歪んだ壺



第 18 図　13 号土坑出土土器実測図 (1/3)



第 19 図　14 ～ 17 号土坑実測図 (1/30)

が2個並んで出土した。

出土遺物（図版49、第18図）

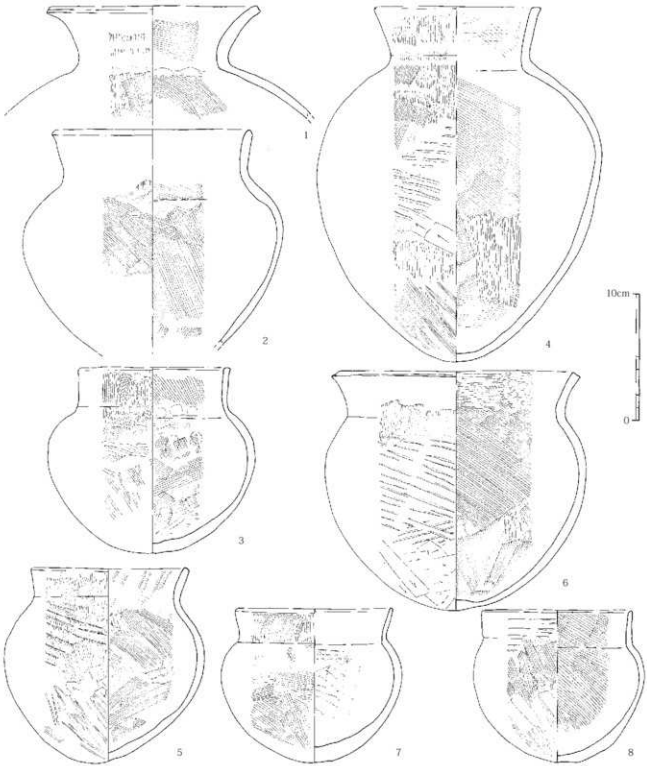
1～6は壷。1・2は口縁がやや直口し、1は底部が尖る。口縁部外面に指圧痕があり、胴部外面下位に弾けたような剥離面がある。3も1と似た器形と思われ、底部は小さな平坦面をもつ。内外面とも、粗と細の2種類のハケメが認められる。4は頸部が長く端部が肥厚する。5は短頸壷で、内面を頸部まで工具ナデで調整する。6は口縁が外湾し胴部中位が土圧により割れるが、粘土継ぎ目で割れた可能性もある。器壁が薄く、外面はタタキ後ハケ調整、底部は小さな平坦面となる。7は甕で、外面はタタキ後ハケメで消し、下位は折り返すハケメ、内面は粗い縦方向のハケメを施す。胴部上位に6条1単位のカキメ状線刻が4ヶ所認められる。8は手捏ねの鉢で、底部は厚く、内外面に指圧痕が顕著である。外底部は工具痕がある。

14号土坑（図版10、第19図）

調査区中央に位置し、92号土坑が上面にあった。長軸175㎝、短軸125～155㎝を測る不整楕円形を呈する。上位にテラスを有し、不整形に広がることから後世の崩れかカクランの可能性もある。深さは最深で約180㎝を測り、壁はやや開きながら直線的に立ち上がり、底面はレンズ状を呈する。埋土は上層が黒色土と白黄色粘土の斑土で、中層は軟質の黒色粘土、下層は青灰色粘土に黒色土が混入する。中層から完形品を含む土器がまとまって出土し、下層からも土器や貝がまとまって出土している。

出土遺物（巻頭図版1-2　図版49・50、第20・21図）

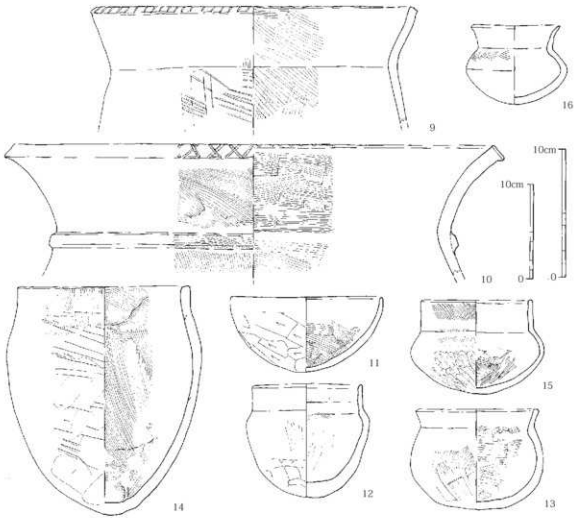
1～5は壷。1は広口壷で頸部内面に指圧痕が廻る。2～5は直口壷で、2は頸部の締まりが極めて緩く、胴部中位の器壁が薄い。3はやや小型で、丸底を呈する。外底部付近は工具によるナデが見え、胴部中位の器壁は薄い。4は外面はタタキをハケメで消し、底部付近はケズリ後にミガキ状条痕が認められる。5は外面口縁部に右下がりのタタキが残り、ハケメで消す。外面下半に工具によるナデか面取りの痕跡とミガキ状条痕が認められる。6～10は甕、6は外面中位まではやや右下がりのタタキで、下位はケズリを施す。口縁部から底部が一部被熱赤変する。7はやや小型で底部が極めて厚い。内面は板ナデ状の工具痕が残り、口縁は一部黒変する。8は直口口縁で口縁部まで横位のタタキ、胴部上位はハケメで消し、下位はケズリを施す。9・10は口縁径が大きく、9は外面に右下がりのタタキが残り、端部にキザミを施す。10は頸部に断面台形の凸帯が廻り、口縁端部はハケメの工具に似た原体で「×」のキザミを連続させる。11は単純口縁のボウル形の鉢で、外面下半は丁寧なケズリを施す。12～16は屈曲口縁の鉢。12は器壁が厚く、ケズリによって広いレンズ底を作る。13は手捏ね風で内外面とも工具痕が顕著で、外面の一部はヒビが多く入る。14は口縁が強く屈曲し、外面は右下りのタタキをハケメとケズリで消す。内面は粘土の継ぎ目が顕著で、内底部にはコゲが付着する。15は直口口縁で、外底部はケズリ後ミガキで器壁を極めて滑らかに作る。内面に工具痕が認められる。16は小型品で、口縁が強く外湾して薄くなり、頸部は締まって胴部中位が張る。色調が明橙色と他の資料と異なり、胎土も焼成も極めて良い精製品で、肩部に重弧のハケ状の文様が6単位のみ施される。この他に石剣と木製の鋤柄が出土している。5・7・12は中層から、1・3・4・6・9・11・14・15は下層からの出土である。



第 20 図　14 号土坑出土土器実測図①（1/3）

15 号土坑（図版 11、第 19 図）

調査区中央北西寄りに位置し、42・119 号土坑に切られる。直径約 120 cmの円形を呈し、深さは最深で 200 cmを測る。壁は上位がほぼ垂直に立ち上がるが、下位は底部に向かって狭くなり、底部の直径は 50 cm前後である。埋土は上層が黒色土と白黄色粘土の斑土、中層は軟質の黒色粘土が中

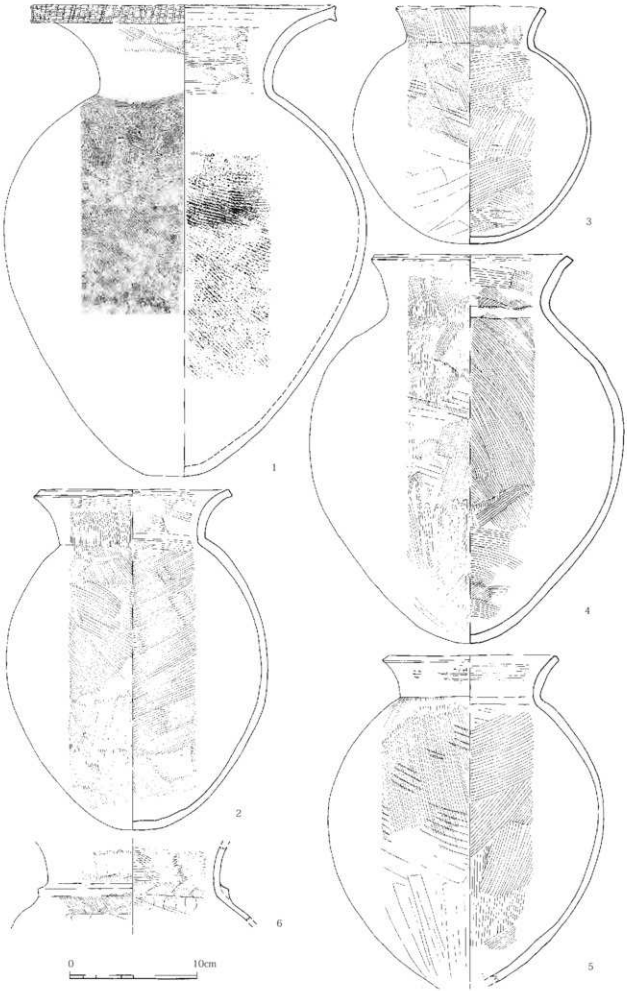


第 21 図　14 号土坑出土土器実測図②（10 は 1/4、他は 1/3）

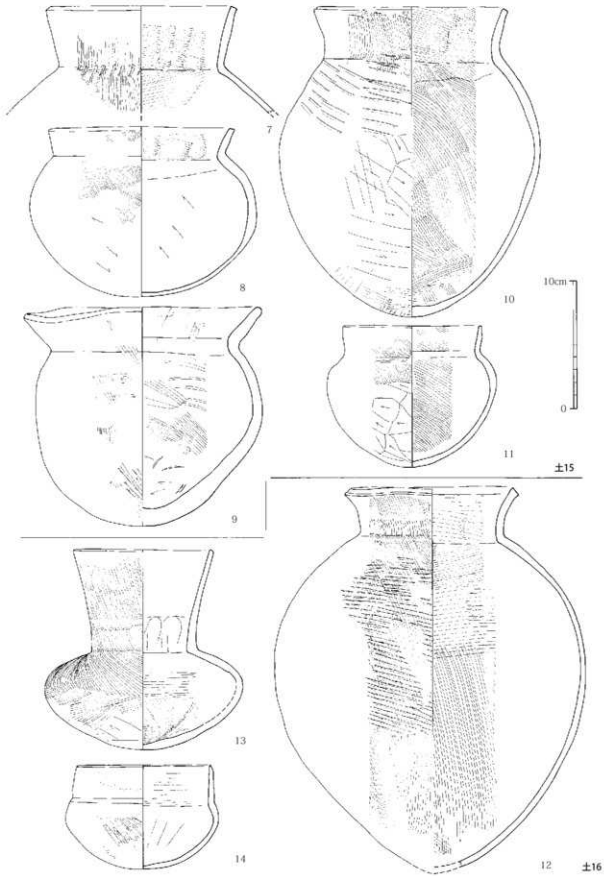
心で、木製品や実が混入していた。下層は青灰色粘土にわずかに黒色土が混じる基盤土に近い粘土である。下層から完形品を含む土器が一括で出土した。

出土遺物（巻頭図版 2-1・6　図版 50、第 22・23 図 1 ～ 11）

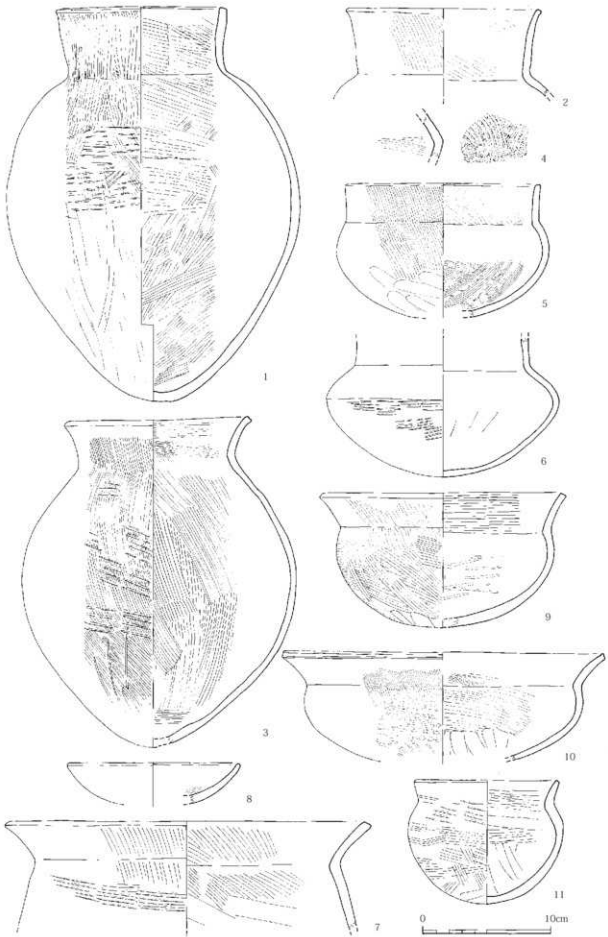
1 ～ 8 は壷。1 は広口壷で端部にキザミを施し、外面は頸部から肩部にかけて下に向かって横位のカキ目→細かい波状文→大きい波状文と 3 段に異なる文様を施す。これらは全て一筆書きで描かれ、同じ位置で文様を変換している。器壁が薄く、焼成も堅緻である。2 は器壁が厚く、外面下半はミガキ状条痕を施した後板状工具でタテナデを施す。3 は外面はタタキをハケメで消し、底部付近は工具によるナデ。肩部が一部被熱赤変する。4 はやや右下がりのタタキをハケメで消し、下半はミガキ状条痕を施す。5 は右下がりのタタキをハケメで消し、下半は工具によるケズリ状のナデで整形するが器壁は厚い。6 は頸部に断面三角の凸帯を有し、内面に指圧痕が廻る。一部被熱赤変する。7 は直口壷で頸部にキザミを施す。8 は扁平な器形で、内外面とも粗いナデアゲで、特に下半の器壁が薄く、胎土・焼成とも良好の精製品である。9・10 は甕。9 は口縁の歪みが多くやや粗悪品。器壁が厚く凸凹で、外面は弾けて割れている。下位に一部タタキが残り、その他はハケメを板ナデで消す。内面はハケ状工具による強い掻き取りで、底部は工具ナデを施す。10 は直口口縁で外面は右下がりのタタキ後口縁をハケメ、胴部下半をケズリで消す。内面には一部粘土紐の継ぎ



第 22 図　15 号土坑出土土器実測図① (1/3)



第 23 図　15・16 号土坑出土土器実測図②（1/3）



第 24 図　17 号土坑出土土器実測図 (1/3)

目が認められる。11は屈曲口縁の鉢で、胴部外面の下半2/3をケズリで調整する。1・4・5・7・8・9は下層から、3・4は最下層からの出土である。

16号土坑（図版11、第19図）

調査区ほぼ中央に位置し、長辺約100㎝、短辺約90㎝を測る隅丸方形を呈する。深さは最深で約90㎝と浅く、9号土坑と同様、井戸状の分類に入るかはやや疑問である。壁は開きながら直線的に立ち上がるが、南東部にテラスを有する。底面は直径約60㎝の円形を呈し平坦になる。埋土は黒色土と白黄色粘土の斑土のほぼ一括で、中位から完形の甕が横位に潰れた状態で出土し、その下から完形の長頸壷と鉢が正位で出土した。

出土遺物（図版50・51、第23図12～14）

12は口径の小さい壷。外面タタキ後ハケ調整し、器壁が薄く口縁は歪みが激しい。13は長頸壷で、外面は規則的なハケメで丁寧に調整し、底部はヘラケズリで平滑に整える。内面も体部下半は規則的なハケ調整し、頸部付近には指ナデと工具痕も僅かに残る。体部内面上位に粘土の接合痕が顕著である。器壁が薄く胎土は精良で、丁寧に制作された精製品である。14は直口の鉢で、胴部下半にミガキ状条痕を施す。外面の一部に僅かに赤色顔料が残る。この他に砥石が出土している。

17号土坑（図版12、第19図）

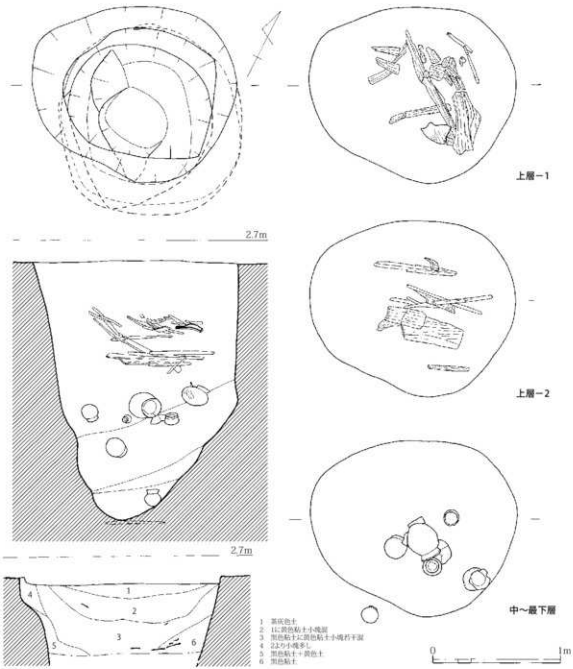
調査区中央東端に位置し、81号土坑を切る。長軸約130㎝、短軸約110㎝の不整楕円形を呈し、深さは最深で約160㎝を測る。壁は上位は垂直に立ち上がるが下位はフラスコ状に広がり、底面は直径50㎝前後と狭くなる。下層の広がった付近から完形品の壷などがまとまって出土した。

出土遺物（巻頭図版2-2　図版51、第24図）

1～6は壷。1は直口壷で、胴部中位で調整が変わり、上位は横位のタタキ後ハケ調整、下位は工具によるタテナデを施す。内面には粘土紐の継ぎ目が残る。2も直口壷で、端部がやや外反する。3は頸部の屈曲が緩やかで胴部中位が張る。外面は横位のタタキをハケメで消し、下位はミガキ状条痕を施す。4は免田式系の壷胴部で、外面に重弧文が認められる。5・6は直口の短頸壷で、5は外底部をナデ、内底部を細かい不定方向のハケ調整する。6は胴部が強く張り、外面は横位のタタキをナデ消し、内面には工具痕がある。7は甕口縁部で、外面は横位のタタキが顕著である。8～11は鉢。8は単純口縁の浅いボウル状。9～11は屈曲口縁で、9・10は口縁が強く外反する。9は内面の横位のナデの稜をミガキで消し、10は外面胴部中位は横位、下位は縦位の折り返すハケ調整、内面は底部に工具ナデを施す。11は外面はやや左上がりのタタキを下半をハケメで消し、内底部は工具によるナデで、内面全体が真っ黒である。この他に砥石が出土している。1・2・6・9・11が下層からの出土。

18号土坑（図版12・13、第25図）

調査区北部中央に位置し、長軸約160㎝、短軸140㎝前後の不整楕円形を呈する。深さは最深で約200㎝を測り、壁は上位が垂直に立ち上がるが、中位以下は崩落を繰り返したのか凹凸が多く底面は50㎝前後と狭くなり、レンズ状を呈する。埋土は最上層が茶灰色土中心で、以下は軟質の黒色粘土が中心となり、下層は地山に似た白黄色粘土と青灰色粘土に黒色土が混入する。埋土からは

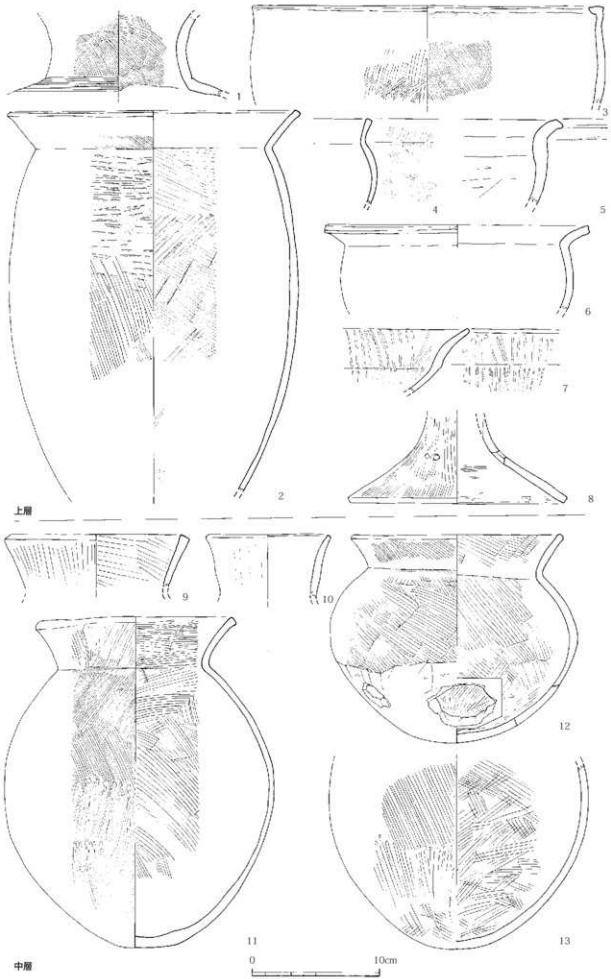


第 25 図　18 号土坑実測図 (1/30)

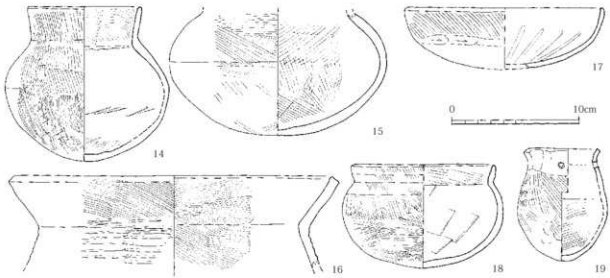
多種多量の遺物が 3 層程度に分かれて出土している。上層では自然木や不明木製品・センダンの実などの木質がまとまって出土し、中層の黒色粘土には貝殻が多量に含まれ、その中に完形品を含む土器や卜骨などが含まれていた。卜骨は土器群の上から出土し、取り上げた後、念のために水洗したところ卜骨と判明した。置かれたような状態ではなく、その他の動物骨や土器や貝殻と混合していたことから、使用後に廃棄されたと考えられる。下層からも土器がまとまって出土している。最下層からは小型の壷が正位に接地した状態で出土しており、祭祀の可能性が高い。

出土遺物（巻頭図版 2-2　図版 51・52、第 26 ～ 28 図）

1 ～ 8 は上層出土。1 は広口壷の頸部で、肩部に 3 条セットの沈線が 2 単位廻る。2 は長胴の甕



第26図　18号土坑上層・中層出土土器実測図 (1/3)

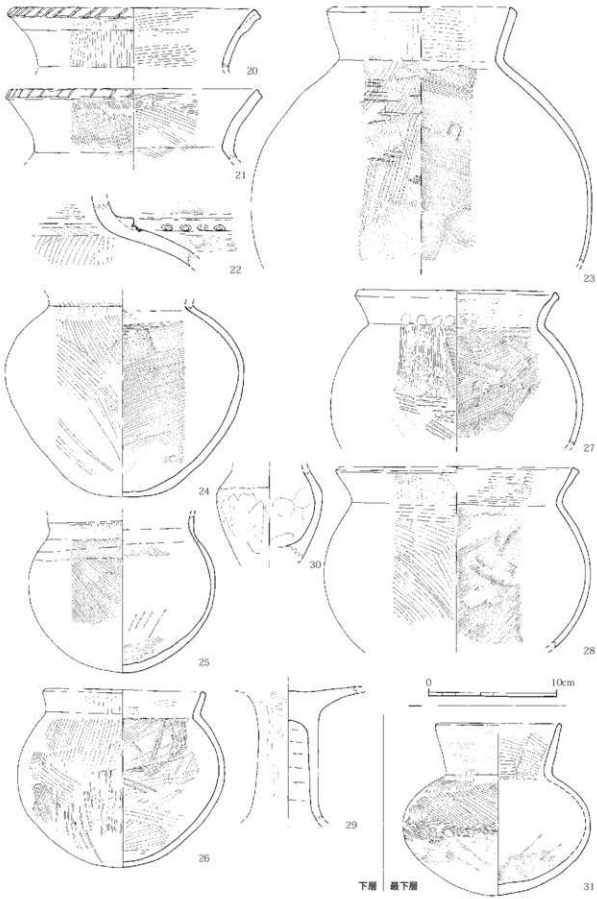


第27図　18号土坑中層出土土器実測図（1/3）

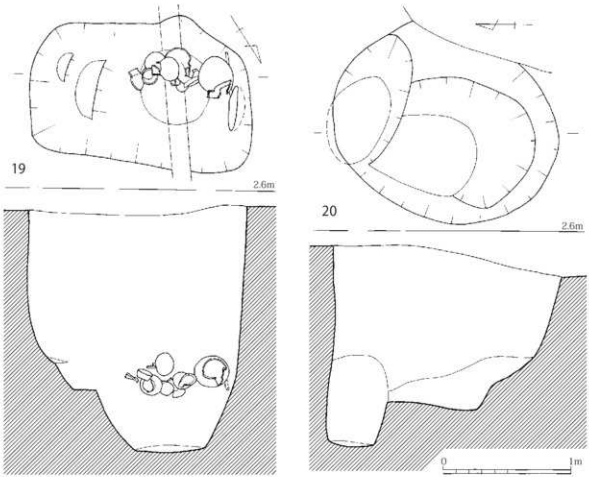
で、外面は横位のタタキ後中位をハケ調整、下位をナデ消す。内面も下位のハケメを丁寧にナデ消し、ススコゲが付着している。3～6は屈曲口縁の鉢。3は口縁端部が内屈し、頂部が平坦になる。5は器壁が厚く、4・5の内面はケズリ。6は屈曲が明瞭でやや粗製である。7・8は高坏。7は屈曲口縁で内外面に放射状の暗文が2段廻る。8は脚部で3カ所に穿孔を有し、1カ所の横には開け損じたと思われる円形の工具痕がある。この他に板が出土している。

9～19は中層出土。9～16は壷。9・10はやや直口する口縁で、11・12は口縁が外反する。11の外面上位は綾杉状にハケメを施し、下位はミガキ状条痕を施す。12は胴部中位に強い稜があり、上下で調整が大きく変わる。特に下位はケズリで、焼成後の大きな穿孔が2カ所に認められる。内底部は黒変して黒褐色の炭化物が付着する。13は胴部下位で、底部付近をミガキ状条痕で調整する。14は口縁が長い広口壷で、外面のタタキをハケメで消すが、中位を境に上下でハケメの原体が異なる。内面の調整も工具を使うが、上位は滑らかに整え、下位は工具痕が残り底部は掻き取るように調整する。粘土紐の痕跡も認められる。15は外面中位以下はハケメを工具でナデ消し、一部その前のタタキとケズリの痕跡がある。16は長胴の甕で、外面は横位のタタキが顕著である。17・18は鉢。17は単純口縁の坏形で器壁が薄く、外面中位以下をケズリ、内面には放射状の暗文を施す。18は短い屈曲口縁で外面の調整は中位で変わり、下位は横位のミガキ状条痕で調整する。内面は工具痕が残るが、平滑に整えられる。胎土・焼成とも良好な精製品である。19は蛸壷状土器。器壁が薄く頸部に径4㎜ほどの孔を対称に配し、外面下位は指圧痕が顕著で、胎土・焼成とも良好の精製品である。

20～30は下層出土。20～28は壷。20・21は広口壷口縁部で、端部にキザミを施し、やや黒変する。22は頸部に断面三角の凸帯を有し、その下に竹管文、さらに下にカキメを廻らせる。23は外面は横位のタタキをハケメで消す。24は口縁部を欠き、底部はレンズ状で胴部上位に最大径がある。25・26は胴部が球形を呈する。25は外底部をハケ調整後丁寧にナデ消して整える。内面は頸部に粘土紐の継ぎ目があり、底部は工具ナデの当たりが認められる。器壁は薄く、底部がやや肥厚する。26の外面は中位から上下でハケメの原体が異なり、底部はナデにより丁寧に整える。内面は最大径部に指圧痕があるが丁寧にナデ消し、これより上は工具で掻き取るように器壁を調整、



第 28 図　18 号土坑下層・最下層出土土器実測図 (1/3)



第 29 図　19・20 号土坑実測図 (1/30)

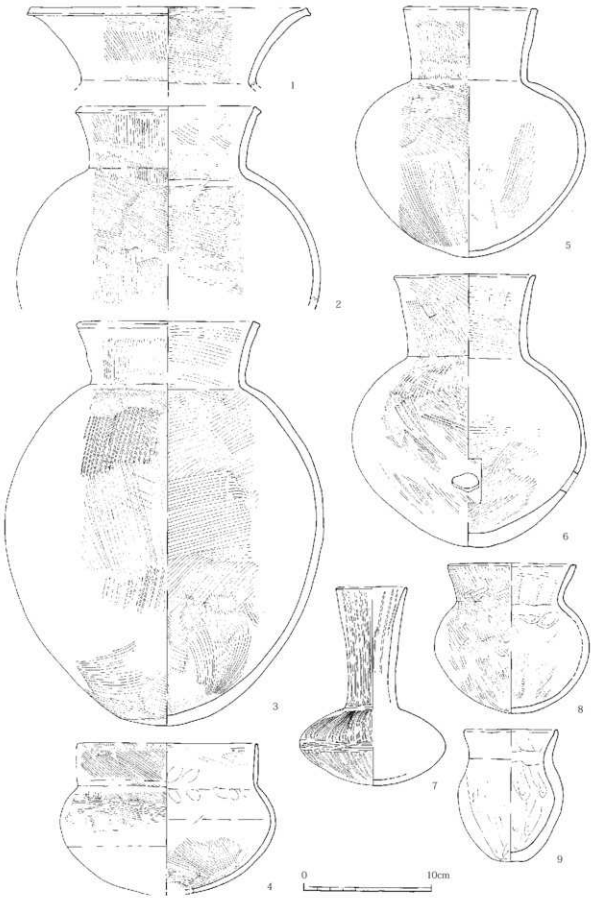
底部付近は粗いハケ調整する。27 は端部を摘み上げる。外面頸部には指圧痕が廻り、中位以下はタタキか粗いハケメ状の痕跡が残るが調整は不明。器壁はさほど薄くないが非常に軽い。28 は口縁径が胴部形を上回り、外面は底部付近のハケをナデ消す。内面も部分的に工具によるナデ消し。29 は高坏脚部で、外面はミガキを施す。30 は小型品で、外面をケズリ調整し、内面は指圧痕が顕著である。この他に不明木製品が出土している。

31 は最下層出土の壷で、粘土紐の継ぎ目が顕著で、外面は中位から上下で調整が異なる。上位はハケ調整、中位は折り返す横位のハケで、下位はハケメをナデ消して特に底部はミガキのように丁寧にナデ消す。内面中位は丁寧な工具ナデで工具痕が残る。この他に石庖丁が出土している。

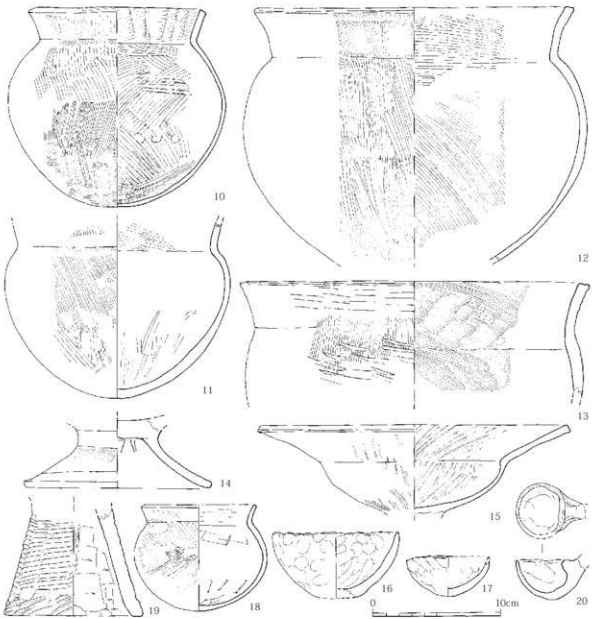
19 号土坑（図版 13、第 29 図）

調査区北部南西寄りに位置し、21 号土坑に切られる。長軸約 170 cm、短軸約 110 cmの隅丸長方形を呈し、東側にテラス 2 段有する。深さはテラス部が約 120・140 cm、最深が約 200 cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦となる。埋土は上層が黒色土・白黄色粘土・黄色土の斑土で、中位以下は多量の貝殻やセンダンの実などの有機物を含む軟質の黒色粘土となる。下層では下のテラスと同レベルで、貝殻と共に土器がまとまって出土している。

出土遺物（巻頭図版 3-1　図版 52、第 30・31 図）

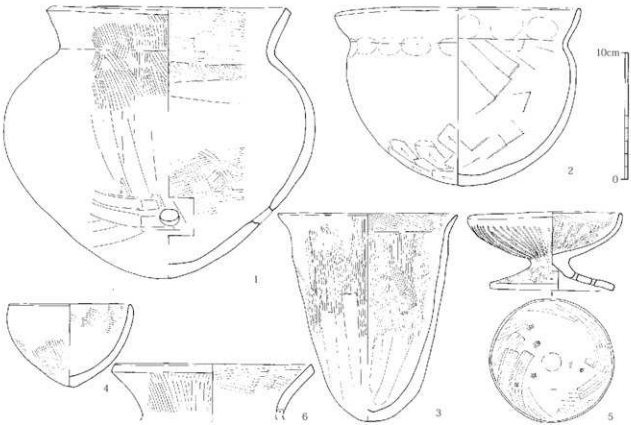


第 30 図　19 号土坑出土土器実測図① (1/3)



第 31 図　19 号土坑出土土器実測図② (1/3)

1 ～ 12 は壷。1 は広口壷で口縁端部が肥厚し、2・3 は口縁がやや直立する。3 は胴部外面の調整が複雑で、やや右下がりのタタキ後にハケ調整し、上位は縦位のハケ状の工具痕、中位下は工具によるナデ、底部は倒立させて 6 分割でハケ調整する。内面はハケ調整だが胴部と底部で原体が異なり、器壁の厚さは 3 ～ 8 ㎜とばらつきがある。4 は直口壷で、外底部を丁寧なナデで調整する。内面頸部から胴部中位には押し出しの指圧痕が残り、全体に器壁が薄い。5 ～ 7 は長頸壷。5・6 は口縁が短く直立し、6 は外面のハケ調整が繰り返され、胴部の器壁が薄く底部は厚い。下位はヨコナデ、1 カ所に焼成後穿孔がある。7 は小型で細頸の精製品である。外面は一部ハケメが残るが丁寧な縦位のミガキで、外面は頸部と胴部中位に横位のミガキが施され、外底部は暗文状に施す。内面も暗文状のミガキがあるが全周しない。胎土・焼成・調整とも良好で精製品であるが、上部が被熱している。8 は外面の頸部に工具痕があり、底部は条痕状のハケで調整する。内面は頸部に強いヨコナ

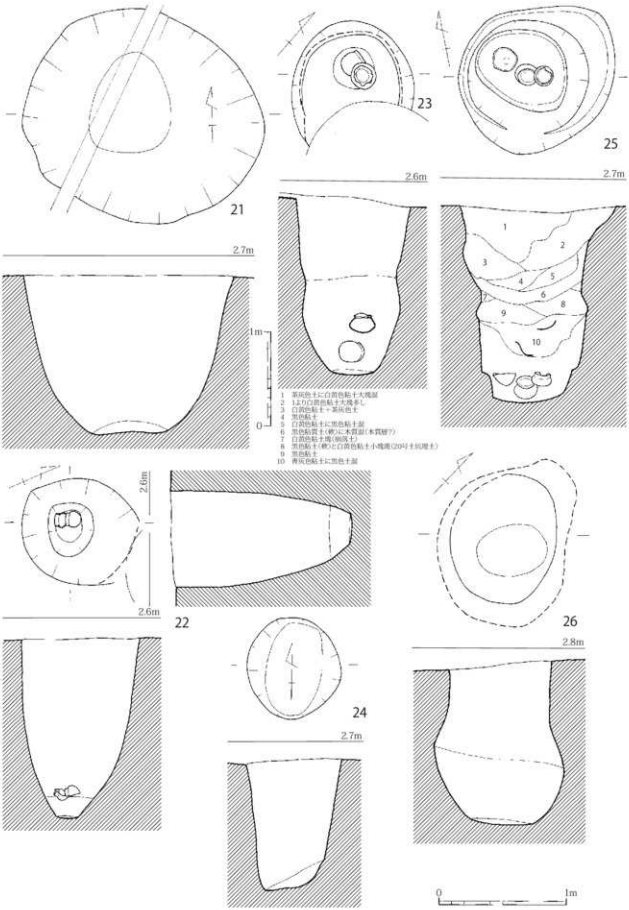


第 32 図　20 号土坑出土土器実測図 (1/3)

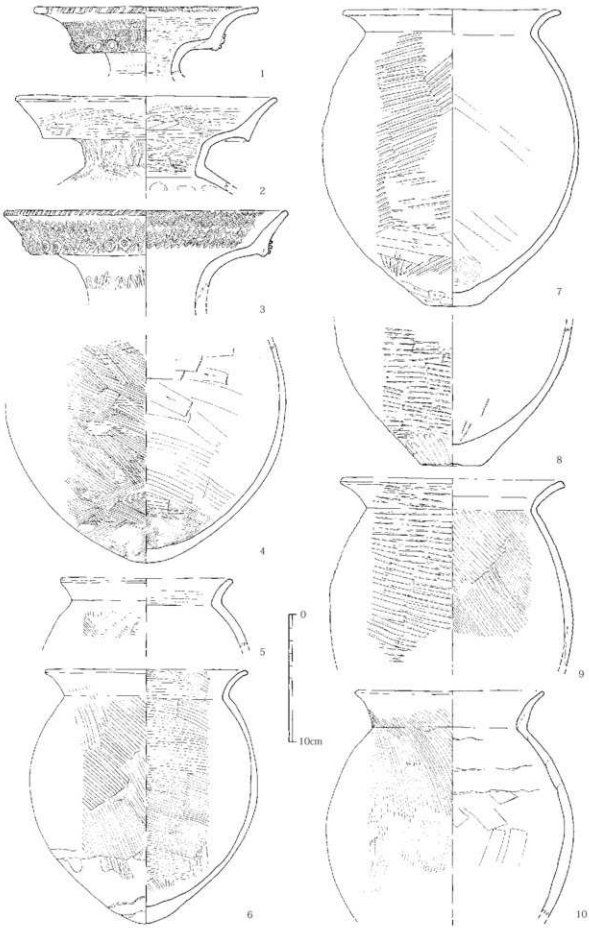
デが見られる。9 は手捏ね風の小型品で、器壁が厚い。外面下位はケズリ、内面は強いナデで調整する。10 ～ 12 は頸部の太い広口壷。10 は外面が中位で上下のハケメの原体が異なり、底部は倒立して折り返すハケ調整する。内面は押し出しの指圧痕が残り、その部分は器壁が薄い。11 は外面にはわずかにタタキが残り、下半は条痕状のミガキでその後にナデ調整する。内面もミガキ状の工具痕で調整する。12 はやや大型で、胴部外面は工具によるナデと思われる。13・14 は甕。13 は外面は全面にタタキが残り、口縁部内面に 2 カ所丸い工具痕がある。14 は台付き甕の台部で、外面はハケ調整後ナデ消し、内面は工具痕が残り、やや粗いナデ調整。15 は高坏で、外面はハケ調整後ミガキ、内面は放射状暗文状のミガキを施す。胎土が白色で他資料と異なる。16 ～ 18 は鉢。16・17 は単純口縁の手捏ねで、全体に指圧痕と粗いナデが認められる。18 は屈曲口縁で器壁が薄く、外底部にミガキ状条痕が、内面に工具痕が認められる。19 は器台。外面は横位のタタキで、内面はケズリ、裾部に指圧痕が残る。20 は柄杓状土製品で手捏ねであるが、柄部分に指圧痕とミガキが認められる。6 ～ 9・11・12・17・18・20 は下層・貝層からの出土である。

20 号土坑（図版 14、第 29 図）

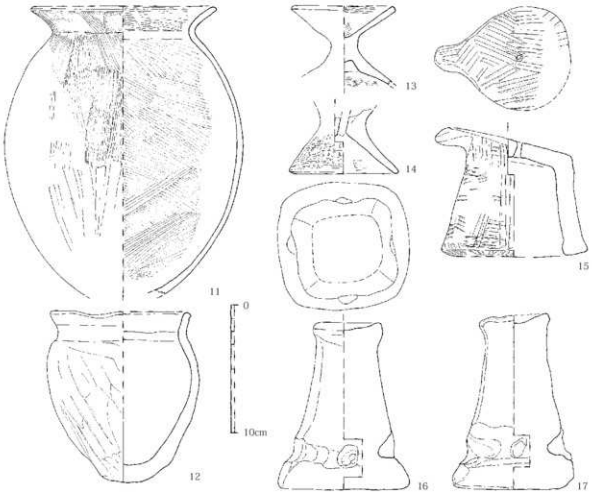
調査区中央西寄りに位置し、84・90 号土坑に切られる。長軸約 180 cm、短軸 150 cm以上の楕円形を呈し、南にテラスを有して北が深くなる。北の深い部分は壁が垂直に立ち上がるが、テラス部分は緩やかに開きながら立ち上がる。埋土は上層が白黄色粘土と茶色土と黄色土の斑土で、中層は軟質の黒茶色粘土が入り、ヨシか稲わらのような植物の堆積層があった。深い方の下層は青灰色粘



第 33 図　21 ～ 26 号土坑実測図（21 は 1/40、他は 1/30）



第 34 図　21 号土坑出土土器実測図① (1/3)



第35図　21号土坑出土土器実測図②（1/3）

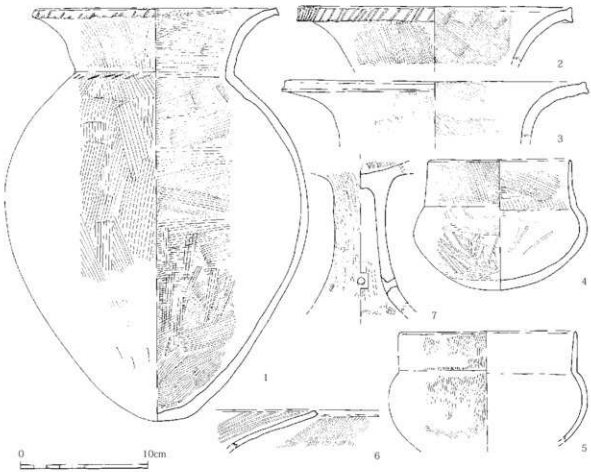
土に黒色土が若干混入する。深い部分は別の土坑の可能性もあるが、埋土の状況からは判断できなかった。39号土坑と断面形状が近似することもあり、別の土坑の可能性と、テラス部分が階段か作業スペースとしての平坦場である可能性の2通りが考えられる。

出土遺物（図版52・53、第32図）

1は頸部が太い広口壷。外面は上位を残して下はハケメを工具ナデで消し、内面はほとんどをナデ消す。下位に焼成後穿孔が1カ所ある。2・3は甕。2は頸部外面と口縁部内面に指圧痕が廻り、外底部がケズリ、内面は工具によるナデで調整する。器壁に凹凸が多く、全体に作りが粗い。3は長胴で無頸の甕で、内外面とも下位は工具ナデでハケメを消す。4・5は鉢。4は単純口縁で内外面ともハケメをナデ消す。5は脚付き鉢で、外面は口縁を除いて放射状暗文を施し、内面はハケメの上から暗文を施す。脚部に2個セットの穿孔が3カ所あり、うち3個は未貫通である。6は器台端部片。

21号土坑（図版14、第33図）

調査区北部西端に位置し、直径160～190㎝の円形を呈する。井戸状土坑の中では最大の規模で、19・39・85号土坑を切る。深さは最深で125㎝を測り、壁は大きく開きながら緩やかに立ち上がり、



第36図　22号土坑出土土器実測図 (1/3)

底面は80㎝前後の楕円形を呈する。埋土は上層が黒色土と白黄色粘土と茶色土の斑土で、中層が植物や種を含む軟質の黒色粘土、下層が貝殻を含む青灰色粘土に黒色土が混入する。また下層は壁面に凹凸が見られ、埋土に基盤土の固まりがあることから、何度か壁が崩落したと考えられる。出土資料は多いが、若干19号土坑の資料と混在している可能性もある。

出土遺物（図版53、第34・35図）

1～4は壷。1～3は畿内系の二重口縁壷口縁部で、口縁端の垂下が僅かに見られる。1・3は外面に波状文と2個対の円形浮文を配する。1は内面口縁部端部にも波状文を廻らせ、以下は横位のミガキで丁寧に調整する。外面頸部にもわずかにミガキが残る。2は内外面ともハケ調整後ミガキで、内面頸部に指圧痕が残る。3は口縁部内面にも波状文を廻らせ、頸部はミガキで長く直立すると思われる。4は胴部中位以下で、外面はタタキ後ハケ調整、内面中位を工具ナデ、下位を原体の異なる粗いハケメで調整する。また、内底部器壁が茶色に変色して液体状の内容物の痕跡が残り、外面は同じ位置より上にススが付着する。5～12は甕。5は器壁が厚く口縁は短く屈曲する。6～9は畿内第Ⅴ様式の影響を受け、口縁は外湾し、底部がケズリで窄まる。6は全面ハケ調整で炭素及びススが付着して真っ黒になり、特に外底部付近に厚く付着して段をなす。7は外面右上がりのタタキで、底部付近を工具ナデ、底部を細かいケズリで調整する。内面は工具ナデで、中位以下にススコゲが付着する。8も同様の形状・調整で、底部が厚い。9は長胴のもので、外面全面に横位

のタタキが認められる。口縁部付近にススが付着し、胴部中位は被熱赤変する。10 はタタキは認められない。内面に粘土紐の接合痕が顕著で、中位以下は工具ナデで調整する。外面にはススが付着し、器壁が荒れる。11 は外面中位以下は工具によるナデ調整を施す。12 は手捏ね風で、口縁は波打ち、器面に凹凸が多く器壁が厚い。外面は工具によるナデ上げで工具痕が顕著に残り、内面は強いヨコナデを施す。13・14 は小型の器台。13 は口縁端部にススが付着する。14 は底部に穿孔があり、脚部はミガキ調整する。15 ～ 17 は支脚で、15 は受け部が傾斜して大きな嘴状突起が付く。外面は全面タタキ後部分ナデで、内面はナデ調整。受け部にはススが付着する。16 は受け部が向けて窄まり、若干の段を有して底面は 25 cm前後になりレンズ状を呈する。埋土は上層が黒色土で、中層以下が黒色土と黄色土と茶色土の斑土、下層は貝を含む青灰色粘土になる。下層から綺麗に半分に割れた直口壺が出土している。

出土遺物（図版 51、第 36 図）

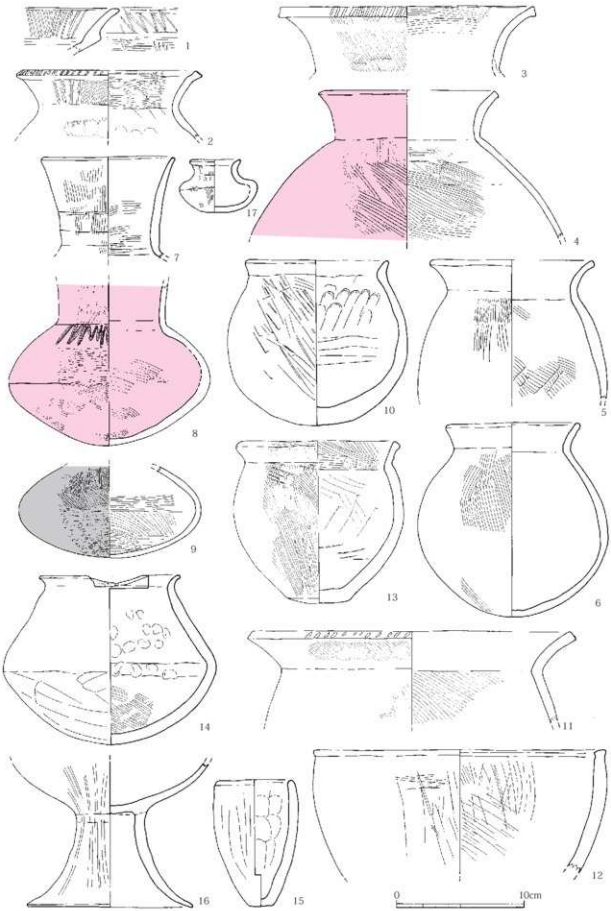
1 ～ 5 は壺。1 ～ 3 は広口壺で、1・2 は端部が肥厚してキザミを施す。1 は頸部にも粗いキザミを施し、外面下位は工具ナデ、内面下位はハケメの上にミガキ状工具痕が残る。3 は外面を水引き状ナデで平滑に仕上げる。4・5 は直口壺。4 は下層出土で、外底部はケズリ後に粗いミガキを施す。内面は工具ナデ。5 は器壁が薄い。6・7 は高坏。6 は口縁部片で内面に放射状暗文を施す。7 は脚部片で穿孔があり、坏部内底と脚部外面、内面下位がミガキ、内面裾部に指圧痕が認められる。

23 号土坑（図版 15、第 33 図）

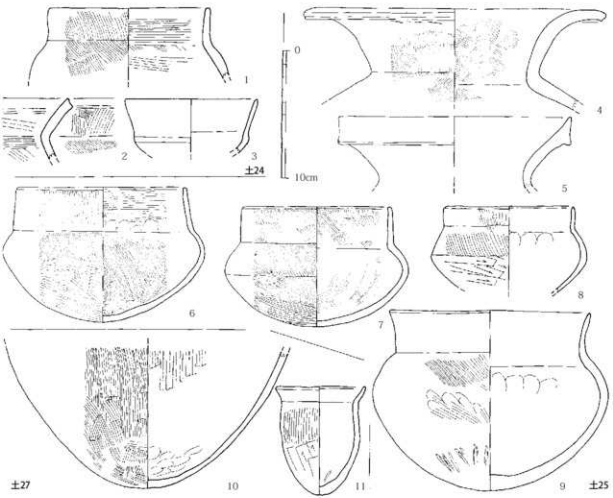
調査区中央北寄りに位置し、6 号土坑を切るが掘り違えたため東側のプランがない。長軸 100 cm以上、短軸 100 cm弱の楕円形に復元でき、深さは最深で 140 cmを測る。壁は緩やかに開きながら立ち上がるが中位に段をもって下位が若干膨らむ。壁面の崩落とも考えられる。埋土は上層が茶灰色土で、中層が黒色土と黄色土と青灰色粘土の斑土、下層は貝を含む黒色粘土、最下層は青灰色粘土に黒色土が若干混じる。下層からは完形に近い壺や甕が出土している。

出土遺物（図版 53・54、第 37 図）

1 ～ 10 は壺。1 は畿内系の二重口縁壺口縁部片で、内外に波状の暗文を施し、下位は丁寧なナデ。2 ～ 6 は広口壺で、2・3 は端部が肥厚してにキザミを施す。3 の内面は工具ナデ。4 の内面は粘土の継ぎ目が顕著である。5 は内面上位のハケメをナデ消す。6 は内面全体を丁寧なナデで調整する。7 ～ 9 は長頸壺。7・8 は頸部が太く、8 は頸部と胴部上半に丁寧なミガキを施し、下半はハケメをナデ消し、肩部には波状文を施す。9 は頸部が細く長いもので、外面にススが多量に付着する。器壁が薄く、内面は上位をタテ、下位を横位のミガキで丁寧に調整し、胎土は良好で精良品である。10 は器壁が非常に厚く、外面はケズリ、内面はナデ付けで調整し、全体に作りが粗い。11 は甕で、



第 37 図　23 号土坑出土土器実測図 (1/3)



第38図　24・25・27号土坑出土土器実測図（1/3）

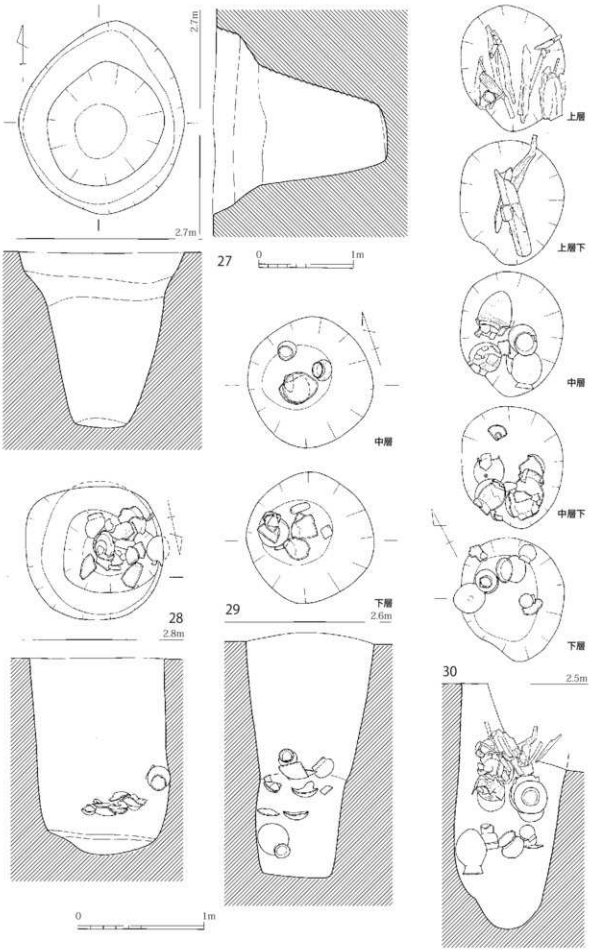
口縁端部にキザミを施す。12～15は鉢、12は単純口縁の大型品で、内外面とも工具ナデと思われる。13は外面は右下がりのタタキをハケメで消し、内面は工具によるナデ。14は胴部中位に稜をなす。胴部下半は丸く、内外面とも中位から上下で調整が異なり、指圧痕もあることから粘土の継ぎ目と思われる。外面上位は水引きナデによる丁寧なナデ、下半はケズリ、内面は押し出しの指圧痕が多数認められる。15は長胴の小型品で、外面は工具ナデ、内面はナデで仕上げる。16は高坏。外面は丁寧なナデ後にミガキ、内面は丁寧なナデ、内底部は水引きによる丁寧なナデを施す。17はミニチュア品。壷を精巧に模したもので、ハケメとナデで端部まで丁寧に作り、器壁も薄い。7・10は下層からの出土である。

24号土坑（第33図）

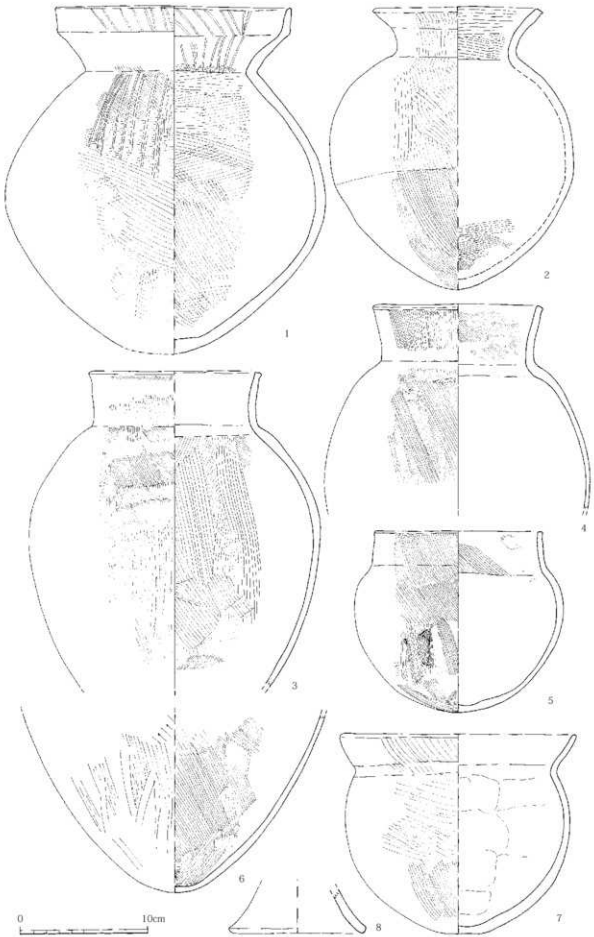
調査区西側拡張部東寄りに位置し、26号土坑を切る。当初1遺構としていたため出土資料が若干混在する。直径80㎝前後の円形を呈し、深さは最深で100㎝強とやや浅い。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は窄まって平坦となる。埋土は軟質の黒色粘土中心で、25号土坑とほぼ同じである。

出土遺物（第38図1～3）

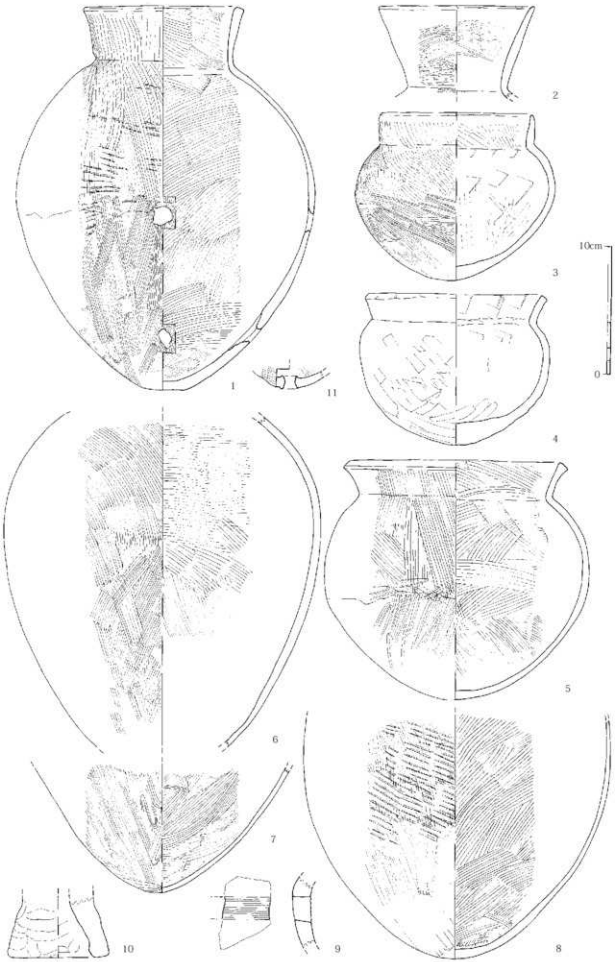
1は短頸の直口壷で、頸部の屈曲が弱い。2はくの字に折れる甕の口縁。3は口縁の長い鉢。



第 39 図　27 ～ 30 号土坑実測図（27 は 1/40、他は 1/30）



第 40 図　28 号土坑出土土器実測図 (1/3)



第 41 図　29 号土坑出土土器実測図 (1/3)

25 号土坑（図版 15・16、第 33 図）

調査区中央北東寄りに位置し、2 号土坑を切る。直径 110 ㎝前後の円形を呈するが、北東部がやや広がる。深さは最深で約 150 ㎝で、底面はレンズ状を呈する。壁は下位は垂直に立ち上がるが、上位は凹凸があり、使用時および後世の崩落と考えられる。底面付近は段を有して径が縮小する。埋土は最上層が茶灰色土に黄白色粘土塊が少量混入し、上層は黒色粘土と白黄色粘土が入る。中層には木質を含む軟質の黒色粘土が 10 ㎝前後堆積し、下層は軟質の黒色粘土中心で白黄色粘土が混じる。最下層は青灰色粘土に黒色土が若干混入し、完形品を含む土器が一括で出土した。

出土遺物（図版 54、第 38 図 4 ～ 9）

4 ・ 5 は口縁が大きく開く広口壷で、4 は端部が強く外湾し、5 は肥厚する。6 ～ 9 は短頸の直口壷。6 は胴部下位のハケメの原体が異なり、頸部内面には指圧痕が残る。7・8 は胴部外面が中位から上下で調整が異なり、下位は 7 がミガキ状条痕、8 はケズリを施す。9 は器壁が厚く、外面下位にミガキ状条痕、内面肩部付近に押し出しの指圧痕が認められる。6・8・9 は下層～最下層からの出土である。

26 号土坑（図版 16、第 33 図）

調査区西側拡張区東寄りに位置し、24 号土坑に切られる。長軸約 100 ㎝、短軸約 80 ㎝の楕円形を呈し、深さは最深で約 130 ㎝を測る。壁は上位がほぼ垂直に立ち上がるが、下位はフラスコ状に広がる。底面は窄まって平坦になる。埋土は 23 号土坑と似て、軟質の黒色粘土が中心である。

27 号土坑（図版 16・17、第 39 図）

調査区中央東寄りに位置し、75・80 号土坑を切る。長軸約 150 ㎝、短軸約 130 ㎝のやや大型で、深さは最深で約 140 ㎝を測る。壁は上位に向かって直線的に広がり、底面は窄まって直径約 40 ㎝の円形を呈する。上位は段を有し緩い稜線が廻る。埋土は上層約 80 ㎝が茶灰色土に白黄色粘土小塊が混入し、中層は黒色粘質土に青灰色粘土が混入、下層は青灰色粘土に黒色土が若干混じる。

出土遺物（第 38 図 10・11）

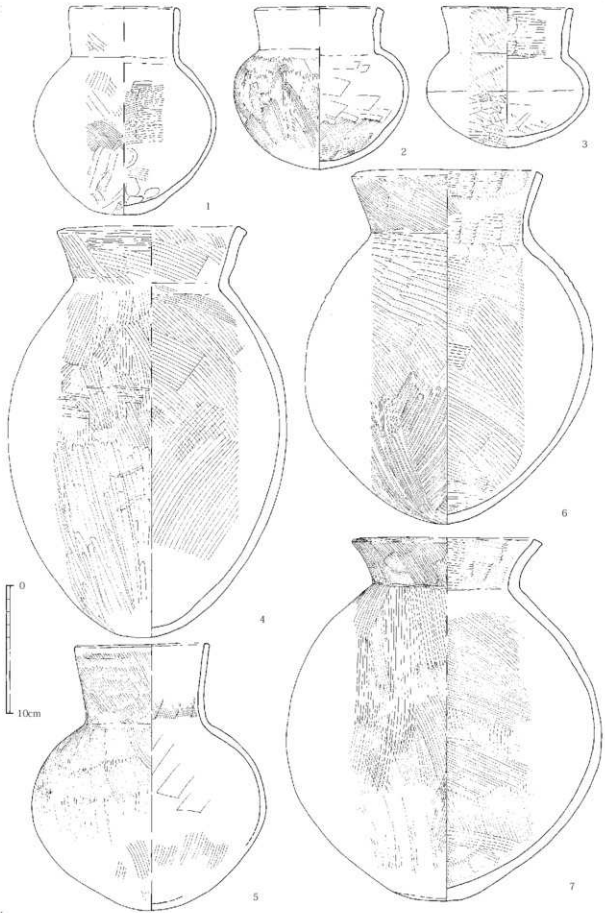
いずれも甕。10 は丸底で外底部は部分的にハケメをナデ消す。内面は底部に指圧痕が残る。11 はミニチュアで、外面下位をケズリ、内面はナデ調整する。

28 号土坑（図版 17、第 39 図）

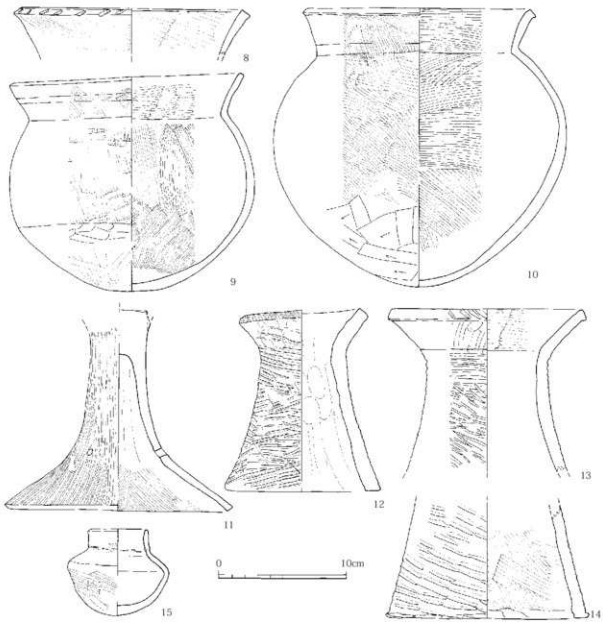
調査区中央西寄りに位置し、96 号土坑を切る。直径 100 ㎝強の円形を呈し、深さは最深で約 150 ㎝を測る。壁は垂直に立ち上がり、底部が窄まってレンズ状を呈する。埋土は最上層が茶灰色土で上層が黒色土と茶色土と黄色土の斑土、中～下層は軟質の黒色粘土中心で、最下層は貝殻を含む青灰色粘土に黒色土が混入する。下層には蓆のような木質が広がっており、その下から完形に近い甕や土器片が、木質や瓢箪・瓜の種などと共にまとまって出土している。

出土遺物（図版 54、第 40 図）

1 ～ 7 は壷。1 は畿内系二重口縁壷で、口縁が屈曲して立ち上がる。口縁部は内外面とも暗文を施し、体部外面上位にも縦位の暗文を施す。2 は広口壷で、胴部上位と下位で調整やハケメの原体が異なり、明瞭な稜をもつ。3 ～ 5 は長胴の直口壷。3 の外面下位のハケメは部分的に折り返す。5 は短頸で、



第42図　30号土坑出土土器実測図①（1/3）



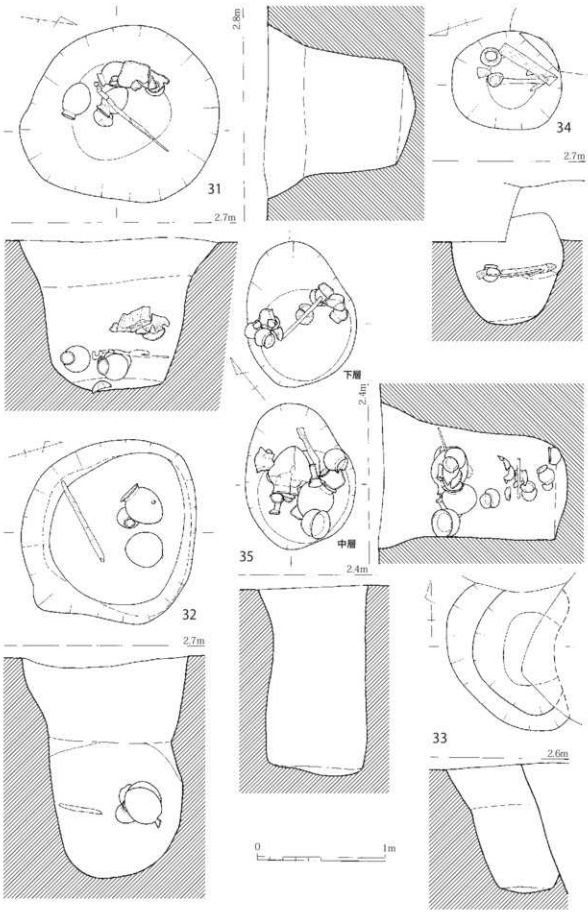
第 43 図　30 号土坑出土土器実測図②（1/3）

内面はナデで底部にススコゲが残る。6 は外面は工具ナデ。7 は小さな底部を有し、外面は上位と下位でハケメの原体が異なり、内面に当て具の様な押さえ痕が認められる。8 は脚部片で、被熱による歪みが激しい。4・5 以外は最下層からの一括出土。この他に木製の杭が出土している。

29 号土坑（図版 17・18、第 39 図）

調査区中央北寄りに位置し、直径 100 ㎝前後の円形を呈する。深さは最深で 200 ㎝弱を測り、底面は平坦になる。埋土は稲や種子を含む軟質の黒色粘土が主体で、下層は青灰色粘土に黒色土が混入する。壁は下位は垂直に立ち上がり、稜を境に上位は緩やかに広がる。上層・中層・下層で完形を含む土器がまとまって土器が出土しているが、埋土の状況から時間差と考えられる。

出土遺物（図版 54・55、第 41 図）



第 44 図　31 ～ 35 号土坑実測図 (1/30)

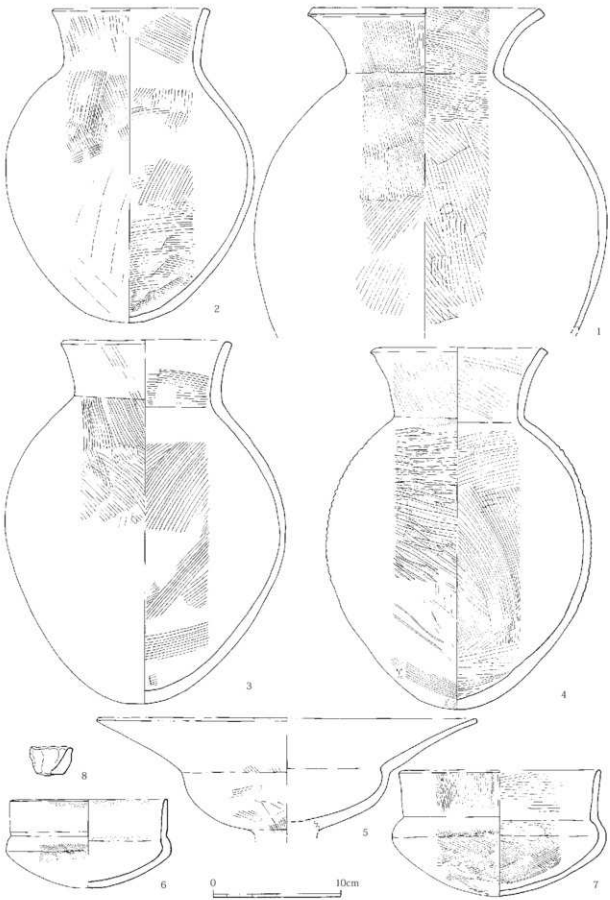
1～6は壷。1～3は直口壷。1は小さなレンズ底を有し、外面はタタキ後上位は粗いハケメでタタキを消し、下位は細かい折り返しのハケメで消し、境に稜がつく。胴部下位は被熱により赤・黒・黄色に変色し、中位と下位に焼成後穿孔がある。2は口縁の長い広口壷で、内外面ともミガキ。3は短頸壷で外面の調整が上下で異なり、上位は粗いハケメ、下位は細かい折り返しのハケメ、底部はケズリまたはタタキの痕跡のみ残る。4・5は口縁が開く。4は作りが粗く器壁に凹凸があり、底部が極めて厚い。外面は工具ナデ、外底部はケズリ、内面は工具ナデで底部を指ナデ付けで調整する。5は胴部外面の調整が上下で異なり、境に稜を有する。下位はハケメ後にミガキ状条痕でハケメを消す。6は長胴の胴部で、一部折り返しのハケメが認められる。胴部内面に不整形な螺旋状の擦過痕があり、破損後に再利用されたものかもしれない。7も同様のハケメがある。8は外面右下がりのタタキを粗いハケメで消し、底部はナデで仕上げる。内底部のハケメは弧を描く。9は筑後に特有の支脚で、図右に透かしの痕跡が残り、その横にカキメを施す。10は支脚裾部で、指圧痕が顕著で被熱赤変する。11は小型の壷底部片で、焼成前穿孔が内面から行われている。3・4・6は下層、7・8は最下層からの出土である。

30号土坑（図版18・19、第39図）

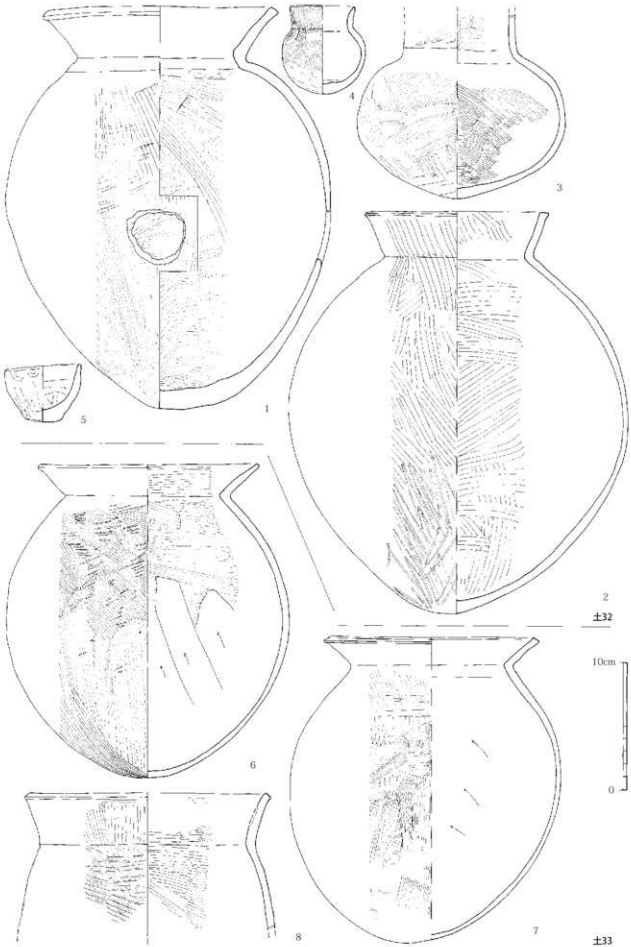
調査区北部西端に位置し、21・85号土坑に切られる。長軸約100㎝、短軸約60㎝の楕円形を呈し、深さは最深で約200㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、下位は段を有して底部が窄まり、レンズ状を呈する。埋土は上層が黒色土と白黄色粘土の斑土、中層～下層は貝殻を多量に含む軟質の黒色粘土主体で、最下層は青灰色粘土に若干黒色土が混入する。また埋土中から数層に分かれて遺物が出土した。上層では18号土坑と同様に木製品や自然木などの木質がレンズ状に堆積し、中層からは完形品を含む土器が貝殻などと共にまとまって出土した。下層からも完形品を含む土器がまとまって出土している。2つの土器群は、間に埋土が入ることから若干の時間差があると考えられるが、埋土の状況から時期差とは捉えられない。

出土遺物（巻頭図版3-2　図版55、第42・43図）

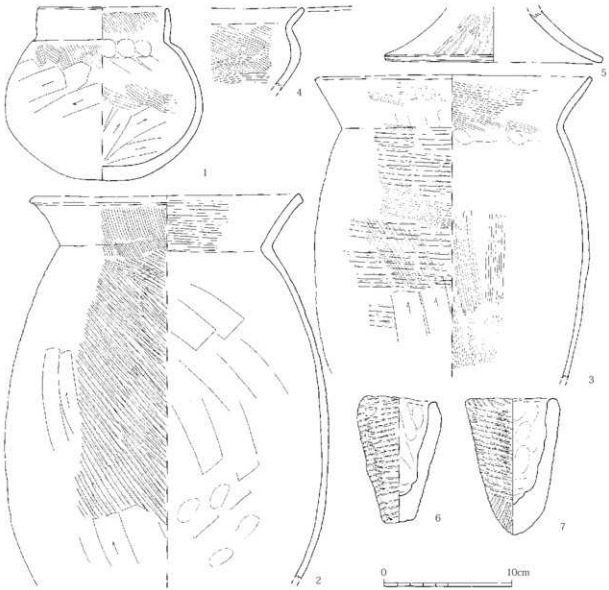
1～8は壷。1～4は直口壷で、1は僅かに底部を有し、頸部内面に粘土の継ぎ目が顕著である。胴部外面下位は工具ナデ、内面は底部に指圧痕が顕著である。2・3はやや短頸で、2が外面を折り返しのハケで底部のみナデ消し、内面上位を工具ナデ、底部はハケメを残す。3は外底部を細かく丁寧にケズリ、内面もケズリを施すが、器壁は厚い。4は長胴で、胴部外面上位はハケメでタタキを消し、下位は工具ナデで細かく調整する。内底部もナデ調整。5は長頸壷で、器壁が薄い。胴部外面下位は工具ナデでハケメを消し、内面は工具ナデでより丁寧に消す。6～8は広口壷で外底部をナデで調整する。6は体部外面は右下がりのタタキを施し、下半はミガキ状条痕でジグザグにタタキを消す。7は6と器形が似るが僅かに底を有する。外面下位はハケメをナデ消し、内面は凸凹が激しく、当て具痕の可能性がある。8は端部にキザミを施す。9・10は甕。9は外面は上下で調整が異なり、底部のみ工具ナデでハケメを消す。10は器高の低い甕で底部がわずかにあり、外底部をケズリで調整する。11は高坏で、3カ所に穿孔を有する。外面は丁寧なミガキ、内面はケズリを施す。12～14は器台で、上位にくびれを有する。外面は横位かやや右下がりのタタキで、12・13はくびれ部に指圧痕が残り、端部にキザミを施す。15は直口壷のミニチュアで、頸部外面に工具痕が残り、内面には粘土紐の継ぎ目が顕著である。3・8・11・14は中層から、1・2・5・8・9・



第 45 図　31 号土坑出土土器実測図 (1/3)



第46図　32・33号土坑出土土器実測図 (1/3)



第 47 図　34 号土坑出土土器実測図 (1/3)

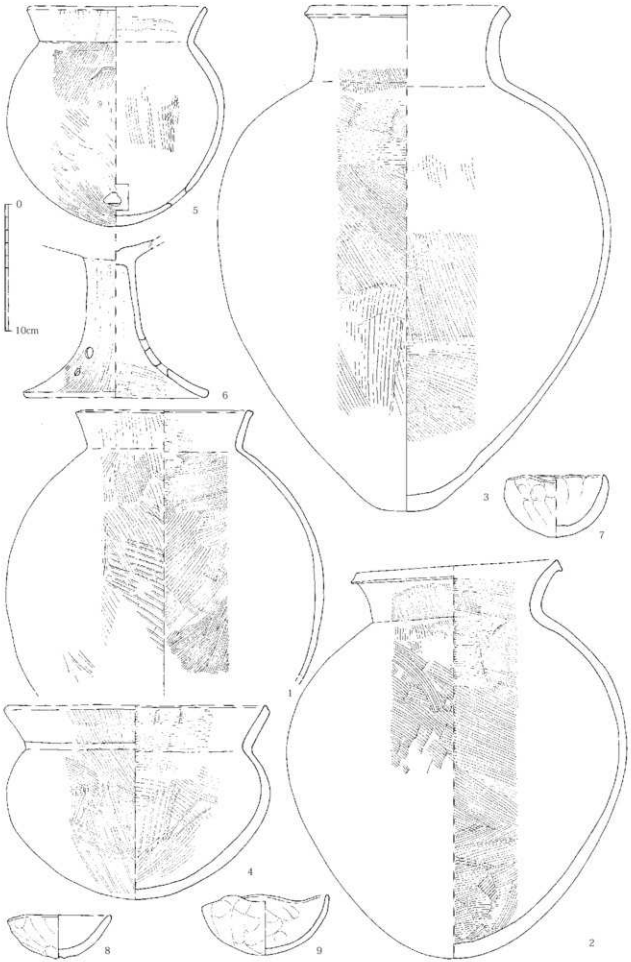
15 は下層からの出土である。この他に下層から木製の槽が出土している。

31 号土坑（図版 19・20、第 44 図）

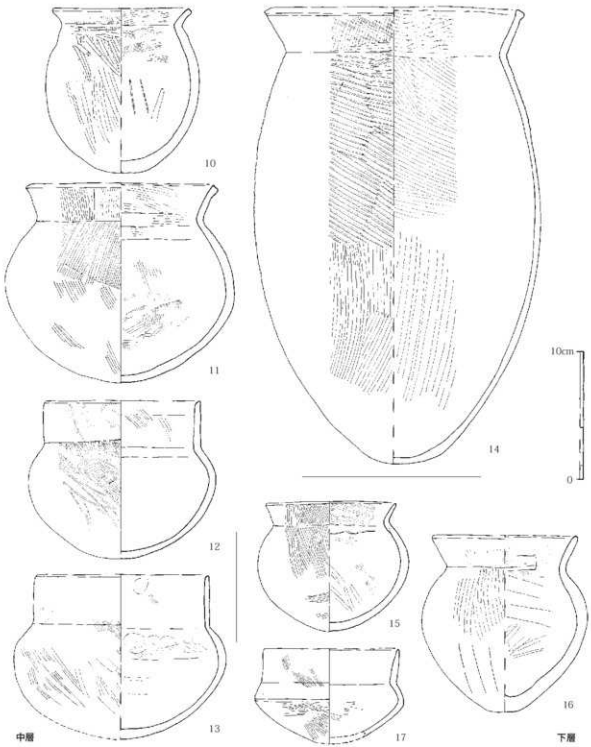
調査区中央に位置し、59 号土坑に切られる。長軸約 160 ㎝、短軸約 140 ㎝の楕円形を呈し、深さは最深で約 120 ㎝とやや浅く、底面はレンズ状を呈する。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、上位で稜を有して強く広がる。埋土は上層が茶灰色土、中層は軟質の黒色粘土に白黄色粘土塊が混入し、下層は青灰色粘土に黒色土が混入する。中層に自然木と土器片が廃棄され、間層をおいて下層からは完形の直口壷 3 個が並べたように出土した。最下層からは鉢の破片が出土している。

出土遺物（図版 56、第 45 図）

1 ～ 4 は壷。1 は広口壷で、体部外面は上下でハケメの原体が異なり境に緩い稜が認められる。内面には工具痕の様な丸い痕跡がある。2 ～ 4 は直口壷で、2・3 は胴部外面下位のハケメを工具ナ



第 48 図　35 号土坑上層出土土器実測図 (1/3)



第 49 図　35 号土坑中層・下層出土土器実測図 (1/3)

デで消す。4 の外面はハケメ後に横位のタタキを施したように見え、下位はケズリ状の工具ナデで調整する。5 は口縁が大きく開く高坏で、マメツが激しいがハケメが僅かに残る。6･7 は直口の鉢。6 は内外面ともナデでハケメを消す。7 は胴部最大径部を境に上下で調整が異なり、上位はナデで器壁を平滑に仕上げる。8 は手捏ねのミニチュア土器で、内外面をナデで仕上げる。2 ～ 4 は下層から、7 は最下層からの出土で、1 は上層と下層の破片が接合した。

32 号土坑（図版 20、第 44 図）

調査区中央西寄りに位置し、83 号土坑を切る。一辺 150 ㎝前後の不整隅丸方形を呈し、深さは最深で約 180 ㎝を測る。壁は下位がやや広がり、中位に段を有して上位が緩やかに広がり、底面はレンズ状を呈する。埋土は最上層に黄色土がレンズ状に薄く入り、中～下層は黒色粘土が中心になるが、壁付近には黒色土と白黄色土の斑土が入る。最下層は青灰色粘土に黒色土がわずかに入る。

出土遺物（図版 56、第 46 図 1 ～ 5）

1 ～ 3 は壷。1・2 は広口壷で、1 は胴部外面は右上がりのタタキをハケメで消し、中位に大きな焼成後穿孔を持つ。2 はハケメの原体が粗く、胴部外面下位はミガキ状条痕を施す。3 は頸の長い壷で、外底部は棒状工具によるケズリの痕跡がある。4 は壺型のミニチュア土器で、丸底を呈する。内面はナデ調整である。この他に砥石、すり石、凹石、杭が出土している。5 は鉢型のミニチュア土器で、手捏ねで調整する。

33 号土坑（図版 20、第 44 図）

調査区南部西寄りに位置し、54・58 号土坑に切られる。長軸 70 ㎝以上、短軸 60 ㎝以上の楕円形に復元できる。深さは最深で 100 ㎝前後とやや浅く、底面はレンズ状を呈する。壁は緩やかに広がりながら立ち上がり、上位は稜を有して大きく広がる。埋土は黒色粘土が中心で、黄色粘土小塊が混入する。

出土遺物（図版 56、第 46 図 6 ～ 8）

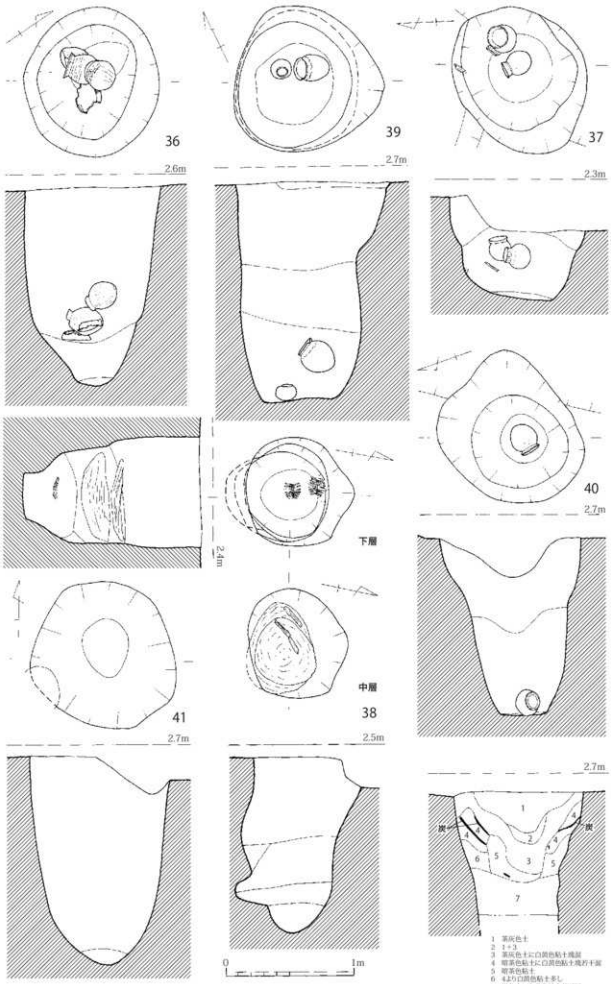
全て甕。6・7 は甕で、口縁が強く屈曲して端部を僅かに引き上げる。6 は外面は右上がりのタタキをハケメで消し、内面下位はケズリでハケメを消す。7 は胴部外面の調整が上・中・下で異なり、上は粗いハケメ、中位は細かいハケメ、下位はナデでハケメを消す。内面は全面ケズリ調整。8 は長胴のもので、外面の右下がりのタタキをハケメで粗く消す。6 は最下層出土。

34 号土坑（図版 21、第 44 図）

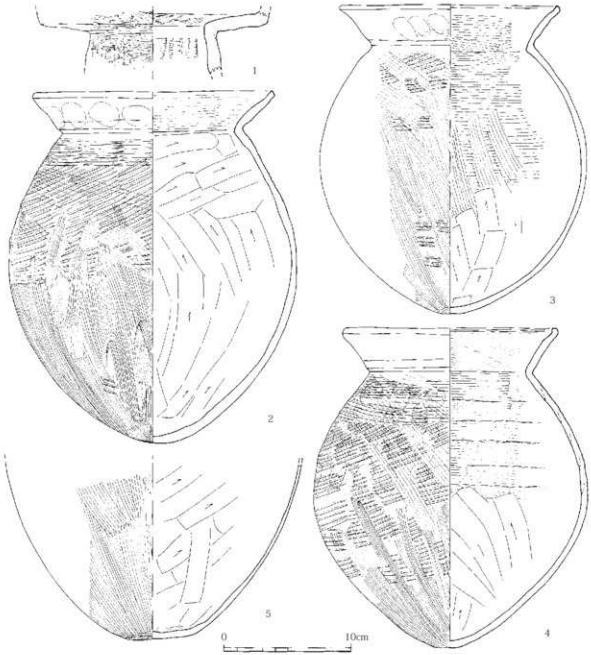
調査区南部中央に位置し、1 号溝に大半を切られ、72 号土坑を切る。遺構面から 50 ㎝下の検出面で直径 50 ㎝前後の円形を呈し、深さは最深で約 60 ㎝、遺構面からは約 110 ㎝を測る。埋土は上層が黒茶色土と黄色土と白色粘土の斑層で、下層は黒色粘土、最下層は青灰色粘土に黒色土が混入する。中層下位から完形に近い甕や異形土器などの土器と杭・板・ヒョウタン・モモの種などがまとまって出土している。

出土遺物（図版 57、第 47 図）

1 は短頸の壷。外面はほぼケズリ、内面も下位がケズリで、頸部に指圧痕が顕著である。2・3 は長胴の甕。2 は外面は右下がりのタタキ、内面は工具ナデで下位に指圧痕が残る。3 は頸部の締まりが緩く、外面は横位のタタキ、内面の上位はナデでハケメを消す、4 は屈曲口縁の鉢で、歪みが激しい。5 は高坏の脚部で、外面に波状の暗文を施す。6・7 は砲弾型の土器で、形状が後世の製塩土器に似るが、器壁が厚く被熱の痕跡はない。外面はヨコまたは右下がりのタタキで、内面は指圧や指ナデによって粗い整形を施し、底部付近に段を有する。底部は 6 が平底、7 が尖底である。7 は下層からの出土。この他に木製の紡錘車と槽が出土している。



第 50 図　36 ～ 41 号土坑実測図 (1/30)



第51図　36号土坑出土土器実測図 (1/3)

35号土坑（図版21・22、第44図）

調査区北部南寄りに位置し、上面のプランは長軸約110 cm、短軸約90 cmを測るが、上位の広がりは後世のものかも知れず、本来直径90 cm前後と考えられる。深さは最深で約150 cmを測り、底面はレンズ状になる。埋土は上層が茶灰色土がレンズ状に溜まり、中層が黒色粘土に黄色土の大塊が混入、下層は黒色粘土中心である。中層から完形品を含む土器がまとまって出土し、下層からも完形品の土器や自然木・イノシシの牙・貝などが出土した。

出土遺物（巻頭図版4-1、図版57・58、第48・49図）

1～9は上層出土。1～4は広口壺で、1は左上がりのタタキをハケメで粗く消す。2は口縁が大きく開いて端部が肥厚し、胴部上位が張って僅かに底がある。外面下位はハケメをナデ消し、底部

は器壁が厚い。3は内外面ともハケメをナデ消す。4は低平で内外面とも下位にミガキ状条痕が認められる。5は甕で、底部は器壁が厚く、下位に焼成後穿孔を有する。6は高坏の脚部で、外面と坏内底部はミガキ、内面はケズリ、2個対の穿孔を3カ所に有する。7～9は手捏ねの単純口縁鉢。いずれも器壁や口縁に凹凸が多く、指圧痕と強いナデの痕跡が顕著である。

10～14は中層出土。10～13は壷。10･11は短頸の広口壷で、10は僅かに底があり、器壁が厚い。外面はハケメとケズリ後に粗いミガキを施し、内面は工具ナデ。11は外面下位と内面を工具ナデでハケメを消す。12･13は直口壷。12は外面下位は工具ナデでハケメを消し、ミガキ状条痕を施す。13も同様であるが、内面肩部に押し出しの指圧痕が並び、下位は工具痕が残る。14は長胴の甕で、外面は右下がりのタタキ後に下位をハケ調整する。内面は下位のハケメを工具ナデで消し、二次被熱により変色する。

15～17は下層出土。15・16は甕で、15は胴部外面下位のハケメをナデ消し、内面は工具ナデで頸部に粘土の継ぎ目が顕著である。16は器壁が厚く、外面下半は工具ナデ、内面は上位が丁寧なナデ、下位が工具ナデで調整する。17は屈曲口縁の鉢で、内外面ともハケメを粗くナデ消す。この他に皿状木製品が出土している。

36号土坑（図版22、第50図）

調査区中央東寄りに位置し、長軸約70㎝、短軸約60㎝の楕円形を呈する。深さは最深で約160㎝で底面はレンズ状になる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが下位では稜を有して窄まる。埋土は最上層が茶灰色土、上層が黒色土と黄色土と茶色土の斑土で、下層は軟質の黒色粘土、最下層は青灰色粘土に黒色土が若干混入する。下層で完形の甕を含む土器がまとまって出土している。

出土遺物（図版58、第51図）

1は畿内系の二重口縁壷頸部。外面は細かいミガキで丁寧に調整するがタタキの様な痕跡が僅かに残る。内面は上位が細かいミガキ、下位　はハケメのままである。2～5は甕。2～4は口縁がやや内湾し端部を摘み上げる。外面は右上がりのタタキ後、折り返しのハケメで部分的にタタキを消す。2と4は胴部の上下でハケメの原体が異なる。内面は2が全面、3・4が下半を削ってハケメを消す。5は胴部片で、内面は全てケズリでススコゲが多量に付着する。

37号土坑（図版22、第50図）

調査区東側拡張部に位置し、3号溝に切られる。検出面で長軸約120㎝、短軸約100㎝の楕円形を呈し、深さは最深で約65㎝であるが、本来120㎝前後はあったと考えられる。埋土は黒色粘土主体で、最下層は青灰色粘土に黒色土が混入する。中位から完形品の壷や自然木が出土した。

出土遺物（図版59、第52図1・2）

いずれも広口壷。1は口縁がやや開き、頸部の屈強が弱い。外面は右下がりのタタキをハケメで消し、下半はケズリで調整する。内底部付近はナデ。胴部下位に焼成後穿孔を有し、器壁が厚く極端に重い。2は外面はタタキ後ハケ調整、底部はナデ調整、内面も底部付近は工具ナデを施す。

38号土坑（図版23、第50図）

調査区中央東寄りに位置し、7号溝を切る。直径85㎝前後の不整円形を呈し、深さは最深で約

140 cmを測り、底面はレンズ状になる。壁は凹凸が多く稜が入り、下位は一部抉れたように広がる。最下位は掘りすぎの可能性がある。埋土は上層が茶灰色土、中層以下は軟質の黒色粘土中心で、最下層は青灰色粘土に黒色土が混入する。中層に木の皮を敷いたような植物相が2層あり、いずれも一部壁に張り付くようにあった。また、下層ではスッポン類の甲羅が2点、裏面を上にして並んだ状態で出土し、最下層では壷が出土した。

出土遺物（第52図3）

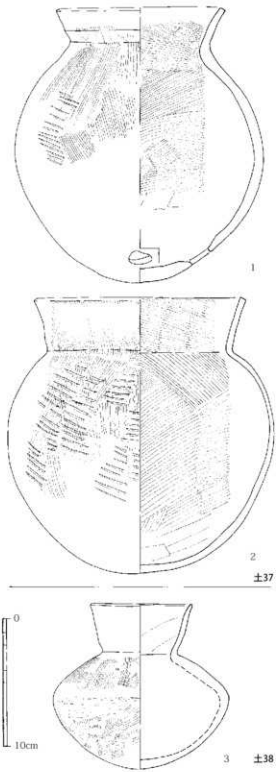
3は小型の広口壷で、胴部最大径部に緩い稜をもつ。外面は稜の付近を横位のハケメで整形し、内面は強いヨコナデにより凹凸が多い。最下層出土。

39号土坑（図版23、第50図）

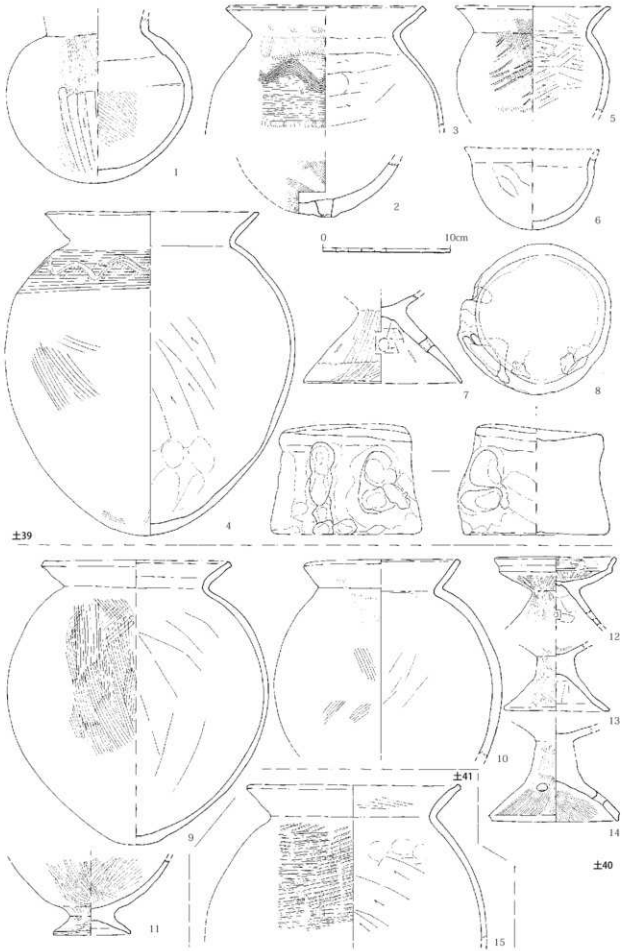
調査区中央南寄りに位置し、直径120 cm前後の隅丸三角形を呈する。深さは最深で約170cmを測り、底面は平坦になる。壁は凹凸が激しく、下位はフラスコ状に広がり、中位に稜線が廻る。埋土は上層が茶灰色土で、中層は黒色土と茶色土と白黄色土の斑土、下層は黒色粘土と青灰色粘土の混じりである。下層から完形の甕が出土し、最下層には木質を敷いたような状況があり、その上に接地して壷が出土している。

出土遺物（図版59、第53図1～8）

1・2は壷。1は外面下位を工具により掻き取るようなナデで整形する。内面はハケメをナデで消し、粘土紐の接合痕が顕著である。2は底部に焼成前穿孔を有し、内底部はナデ調整。3～5は甕。3・4は布留系の在地甕で、肩部に波状の複線文を配する。口縁は直線的に外傾して器壁が薄い。3は外面のハケメが顕著で、内面はケズリを施す。4は外面にススや炭素が多量に吸着し、ハケメが僅かに見えるのみである。内面はヘラケズリで、上位はナデ上げる。底部付近はナデ付けで、二次被熱により変色する。5はやや小型で、外面は右上がりのタタキをハケメで消し、内面は削らず工具によるヨコナデ整形。6は屈曲口縁の鉢で、内外面共に丁寧なナデ調整。7は小型器台の脚部で、中位に穿孔を有する。外面はミガキで、裾部は特に丁寧に施す。内面はケズリで工具痕が認められる。8は低い支



第52図 37・38号土坑出土土器実測図（1/3）



第 53 図　39 ～ 41 号土坑出土土器実測図 (1/3)

脚で、全体をナデで調整し、3カ所に指圧による深い窪みがある。上面は被熱により器壁が荒れる。4は下層、1は最下層からの出土である。この他に杭が出土している。

40号土坑（図版24、第50図）

調査区中央南寄りに位置し、1号溝に切られる。直径100～120㎝の不整円形で、上端の東部が少し広がる。深さは約140㎝を測り、底面は平坦になる。壁はやや広がりながら立ち上がり、中位に段を持って上位は広がる。段より上と下で埋土の様相が異なることから、時間差が考えられる。埋土は上層中央に茶灰色土中心の層があるが、その周囲には薄い炭層と暗茶色粘土の互層が堆積する。段以下は軟質の黒色粘土中心となり、最下層は青灰色粘土に黒色土が若干混入する。最下層から底部に接地して完形の甕が出土した。

出土遺物（図版59、第53図9～14）

9・10は甕。9は器壁が薄く口縁端部を摘み上げる。外面は上位を綾杉状のハケメ、下位をタテハケで調整し、内面はケズリを施すが頸部の稜はない。外面にはススが多量に付着し、内面にも付着物が残る。10は器壁が厚く、外面は多量のススが付着してハケメ以外の調整は不明、内面も同じく付着物のため部分的なケズリしか確認できない。11は脚付きの鉢で、内外面ともミガキを施す。12～14は小型精製器台。12の口縁は短く立ち上がり、内外面ともミガキ調整、脚部に穿孔を有する。13も外面と受け部はミガキで、穿孔は認められない。14は脚部をハケ調整、中位をミガキ、受け部をハケメで調整する。脚部には穿孔がある。9・10・12は最下層からの出土である。この他に木の燃えさしと不明木製品が出土している。

41号土坑（図版24、第50図）

調査区中央西端に位置し、90号土坑に切られる。直径110㎝前後の円形を呈し、底部は窄まって直径20㎝程度になり、深さは約170㎝を測る。埋土は黒色土と黄色土と茶色土の斑土が中心で、下層は黒色粘土である。

出土遺物（第53図16）

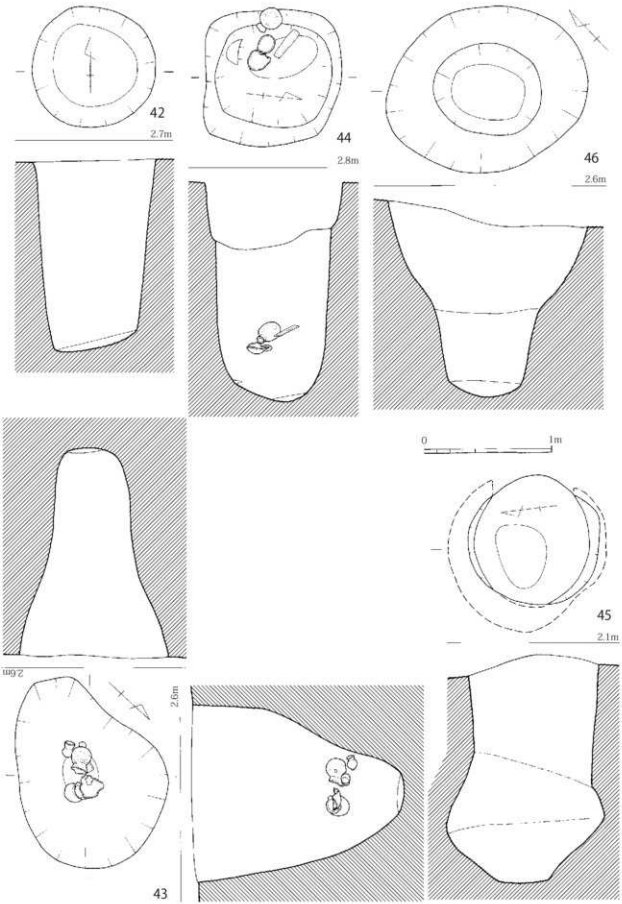
15は甕で、口縁端部を僅かに摘み上げる。外面はタタキ、内面はケズリで指圧痕が残る。

42号土坑（図版25、第54図）

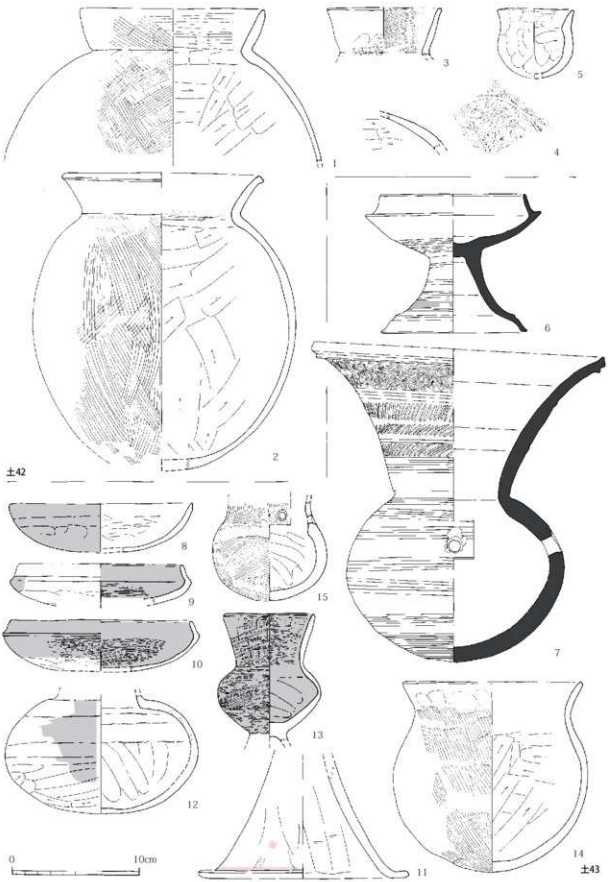
調査区中央北寄りに位置し、直径約100㎝の円形を呈する。深さは最深で約150㎝で、底面は平坦でやや傾く。壁は若干開きながら直線的に立ち上がり、崩落や段は認められない。埋土は上層が茶灰色土で、中層に黄色土と黒色土の斑土が入り、下層は軟質の黒色粘土中心である。

出土遺物（図版59、第55図1～5）

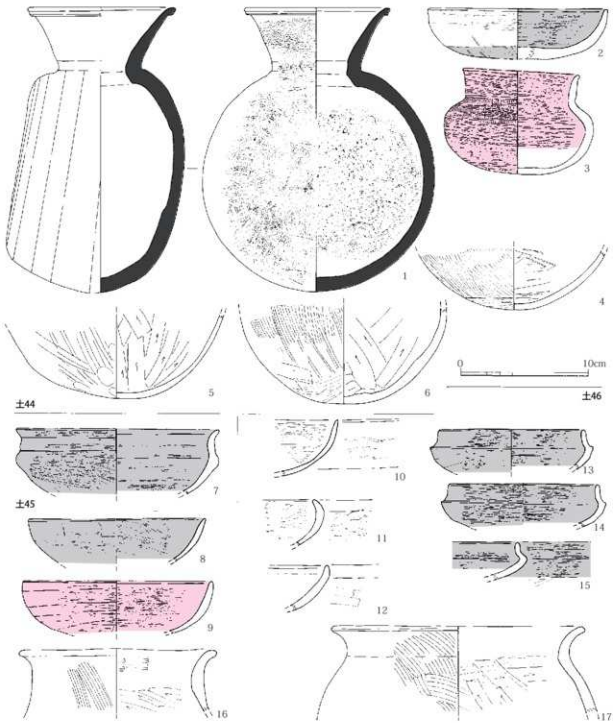
1～4は壺。1～3は広口壺。1は口縁は器壁が厚いが胴部は薄く、外面は綾杉状にハケ調整する。内面はケズリで外面にススが多量に付着する。2は内面は頸部までケズリで、頸部に粘土継ぎ目が認められる。外面は全体に被熱してススが付着するため凹凸が激しく、特に頸部の付着が激しい。内底部にもススコゲが残る。3は頸部外面に指圧痕が残る。4は外面に線刻があり、内面はケズリ。5は手捏ねのミニチュアの甕で、内外面ともナデの痕跡が顕著で、外底部は工具ナデ。この他に砥石が出土している。



第 54 図　42 ～ 46 号土坑実測図 (1/30)



第 55 図　42・43 号土坑出土土器実測図 (1/3)



第 56 図　44 ～ 46 号土坑出土土器実測図 (1/3)

43 号土坑（図版 25、第 54 図）

調査区中央北寄りに位置し、長軸約 150 cm、短軸約 120 cmの楕円形を呈する。深さは最深で約 170 cmを測り、底面はレンズ状を呈する。壁は下位は垂直に立ち上がるが上位が開き、特に長軸方向は大きく広がる。埋土は軟質の黒色粘土が中心で、木質を多く含む。また、本遺跡では珍しく、砂層が下層に堆積していた。また下層で黒塗りの壷等の土器がまとまって出土した。

出土遺物（巻頭図版 4-2・6　図版 59・60、第 55 図 6 ～ 15）

6・7は須恵器。6は高坏で、外面はカキメが顕著である。7は大型の甕で、口縁が大きく開き端部下に凸線が廻る。頸部外面に波状文を1段、刺突文を3段施す。胴部中位には穿孔があり、外面はカキメが顕著で自然釉が被る。内面には青海波が残る。

8～15は土師器。8～10は坏で、8は外面のみを、9・10は内外面を黒塗りする。8は条痕状のミガキで9・10は細かいミガキ、底部はケズリで整える。11は高坏脚部で、外面はケズリ後にナデ調整、内面はケズリで整える。脚部の一部にわずかに丹塗りが認められる。12・13は壷。12は外面は横位のケズリで底部は不定方向のケズリ、内面はナデの痕跡が顕著で、粘土の継ぎ目が残る。外面は黒色を呈し、黒塗りの可能性がある。13は黒塗りの小型長頸壷で、脚部を欠損する。外面は口縁部をタテナデ後全面を細かいミガキで丁寧に調整する。内面の口縁部は同様のミガキで、体部は工具によるナデを施す。外面と口縁部内面は全面光沢のある黒色塗料が塗布される優品である。14は甕で、頸部外面上に指圧痕が認められる。内面はケズリで、頸部付近はナデ付け。15は壷形で、頸部に四ヶ所の穿孔を有する。内面は強いナデ調整。7・13・14は下層からの出土である。この他に凹み石が出土している。

44号土坑（図版25・26、第54図）

調査区中央西寄りに位置し、一辺90～110㎝の隅丸方形を呈する。深さは最深で約170㎝を測り、底部はレンズ状になる。壁は垂直に立ち上がり上位はやや広がる。埋土は上層に灰のような黒茶色土と白黄色粘土の細かい互層がレンズ状に堆積し、中層は軟質の黒色粘土と薄い木質層の互層になる。下層は厚い木質層を挟んで黒色粘土中心となり、最下層は青灰色粘土に黒色土が混入する。下層では土器や木質がまとまって出土した。

出土遺物（図版60、第56図1～6）

1は須恵器の提瓶。口縁部は大きく開き、端部下に凸帯が廻る。平坦部はケズリで、被蓋部は大きく膨らんでナデ調整され、櫛目文が放射状に廻らされる。上部は自然釉がかかる。

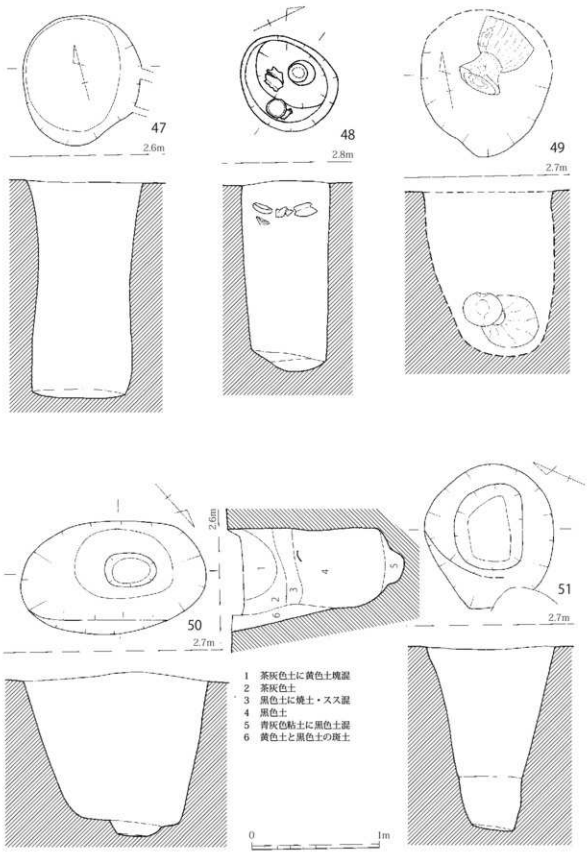
2～6は土師器。2は坏で内外面とも細かいミガキを施し、外底部はケズリ後ミガキ、全面にススが付着する。3は小型の壷で内外面とも細かいミガキを施すが、肩部はハケメが、外底部はケズリが認められ、内底部はナデのみ。外面には丹塗りを施す。4～6は丸底の底部片で、4は外面のハケメが底部のみ粗い。内面はケズリで、外面に多量のススコゲが付着する。5は外面に工具ナデと指圧痕が認められる。内面はケズリ、外面にススコゲが付着する。6は外底部にケズリで、部分的に工具ナデを施す。内面はケズリ。1・3～5は下層出土。この他に板状木製品が出土している。

45号土坑（図版26、第54図）

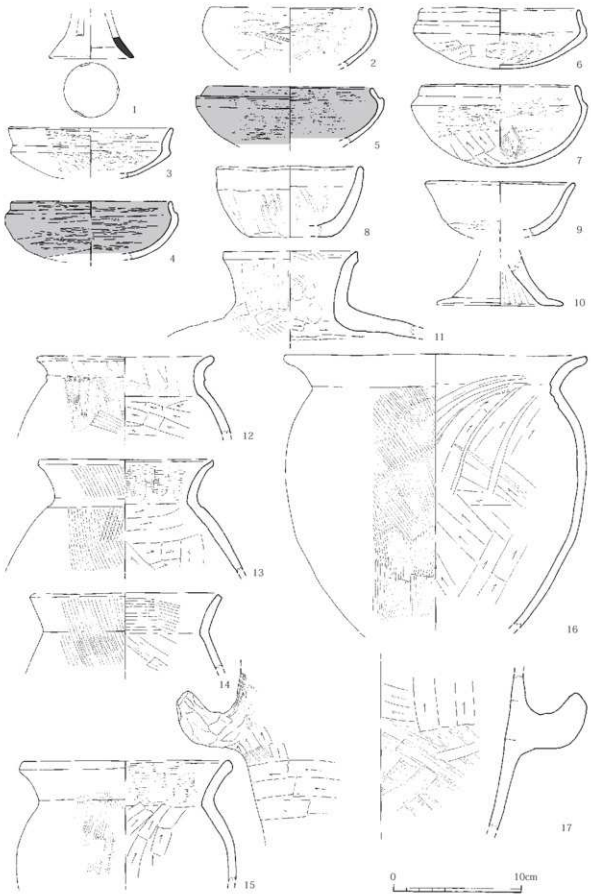
調査区中央東端に位置し、1号溝に切られる。直径100㎝前後の円形を呈し、深さは最深で約180㎝を測る。壁は上位は垂直に立ち上がるが、下位はフラスコ状に広がってオーバーハングし、壁面の崩れと考えられる。埋土は最上層が茶灰色土、上層が黒色土に白黄色粘土塊が混入し、下層は黒色粘土中心となる。

出土遺物（第56図7）

7は土師器の模倣坏。内外面とも細いミガキで、外面中位は条痕状に施す。内外面とも黒塗りする。



第 57 図　47 ～ 51 号土坑実測図 (1/30)



第 58 図　47 号土坑出土土器実測図 (1/3)

46 号土坑（第 54 図）

調査区南部東寄りに位置し、3 号溝に切られる。長軸約 160 cm、短軸約 130 cmの楕円形を呈し、深さは最深で約 150 cmを測り、底面はレンズ状になる。壁は下位はほぼ垂直に立ち上がるが、中位に稜を有し、それより上位は大きく開く。埋土は軟質の黒色粘土中心で、ヒョウタンの種子や木質を多く含む。

出土遺物（第 56 図 8 ～ 17）

全て土師器。8 ～ 15 は坏。8 ～ 12 は埦形坏で、8 は内面を、9 は内外面を細いミガキで調整し、8 は黒塗りを、9 は丹塗りを施す。10・11 は内外面を細かいミガキで調整し、12 は外面をケズリで調整する。13 ～ 15 は模倣坏。口縁は垂直に立ち上がり、内外面とも細かいミガキで調整して黒塗りする。16・17 は甕。いずれも内面はケズリ調整で、外面にはススが付着する。

47 号土坑（図版 26、第 57 図）

調査区中央北寄りに位置する。直径 90 ～ 100 cmの円形を呈し、深さは最深で約 170 cmを測る。壁は若干湾曲しながら垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦になる。埋土は黒色土粘中心で、上層に一部炭層が入り、下層には貝や動物骨が含まれていた。

出土遺物（図版 60、第 58 図）

1 は須恵器の脚部片。器壁が薄く 3 カ所に透かしを有する。

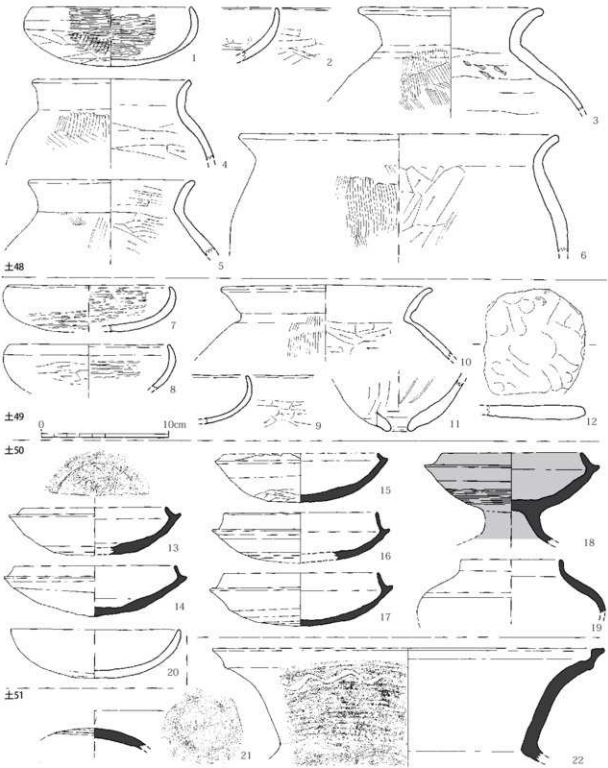
2 ～ 17 は土師器。2 ～ 8 は坏。2 は埦形坏で口縁が内湾し、内外面とも細かいミガキで外底部はケズリ。3 は屈曲口縁で内外面とも細かいミガキで、外底部がケズリで調整する。4 ～ 7 は模倣杯。4・5 は内外面とも細かいミガキで、黒塗りする。6 は内面を、7 は内外面を細かいミガキで調整し、外底部はケズリ。8 は手捏ね状の平底の坏で、器壁が極めて厚く、外面はナデ後に粗いハケ調整、内面はナデ後部分的にミガキが残る。9・10 は高坏。9 は坏部で器壁が厚く、外底部にミガキが見える。10 は内面は工具ナデ。11 は壷。器壁が厚く全体に作りが非常に粗い。外面はハケメ後に頸部付近を粗雑なナデで調整し、内面は口縁が工具ナデと指圧で、体部は粗いケズリで調整する。外面は被熱赤変する。12 ～ 16 は甕。12 は外面のハケメが不定方向で、内面はケズリ。13 も内面がケズリで、外面にはススが付着する。14 は内面を工具ナデで調整する。15 の内面はケズリ。16 は外面が粗いケズリのため凹凸が激しい。17 は甑で、内外面ともケズリ調整だが、内面中位以下は工具ナデと思われる。この他にすり石が出土している。

48 号土坑（図版 27、第 57 図）

調査区西側拡張部に位置し、長軸約 80 cm、短軸約 70 cmの楕円形を呈する。深さは最深で約 150 cmを測り、底面はレンズ状になる。壁は垂直に立ち上がり、凹凸は認められない。埋土は上層が黒色土と黄色土と白黄色粘土の斑土で、中層以下は軟質の黒色粘土が中心となり、下層は青灰色粘土に黒色土が若干混入する。上層で土器片がまとまって出土した。

出土遺物（第 59 図 1 ～ 6）

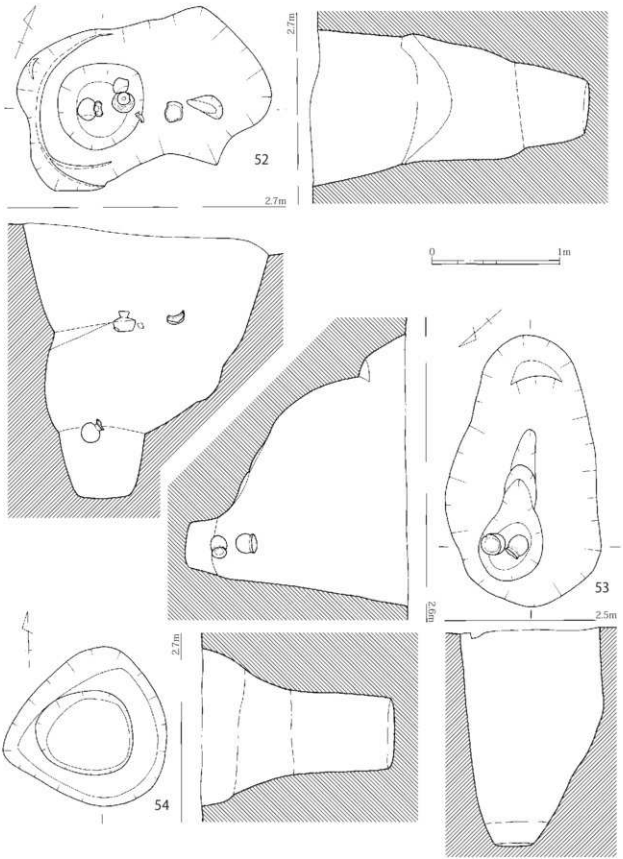
全て土師器。1・2 は埦形坏で、1 は内外面とも細かいミガキで調整し、外底部はケズリで一部粗いハケメが付く。2 は内外面とも底部がケズリ。3 は壷で、内面はケズリで工具の当たりが残る。全体に被熱しており、破損後に二次利用された可能性がある。4 ～ 6 は甕で、内面はケズリ調整。



第 59 図　48 ～ 51 号土坑出土土器実測図 (1/3)

49 号土坑（図版 27、第 57 図）

調査区中央北西寄りに位置し、長軸約 130 cm、短軸約 100 cmを測る楕円形を呈する。深さは最深で約 130cm で、埋土は軟質の黒色粘土主体で、中位から下位に木質の堆積層があり、その中から木製臼がほぼ完形のまま倒立して出土した。臼の取り上げに際しては、水分を含んで重量があったた



第 60 図　52 ～ 54 号土坑実測図 (1/30)

め人力には依れず、重機で取り上げることとしたが、目測ミスによって破砕されてしまった。また、これにより土坑の実測も不可となり、底部の深さと形状は押さえたものの、その他は推定である。

出土遺物（第 59 図 7 ～ 12）

全て土師器。7 ～ 9 は埴形坏で、7 は外底部と内面を、8 は内面を細かいミガキで調整する。8・9 は外底部をケズリ、9 の内面はマメツで不明だが、全体が被熱して赤・黒変する。10 は頸部の締まる甕で、内面はケズリ。11 は小型の壷底部で焼成前穿孔を有する。12 は扁平で不整円形を呈する粘土板で、図の上と右が残存する。全面ナデ調整されるが使用法は不明である。この他に木製の臼、不明木製品が出土している。

50 号土坑（図版 27・28、第 57 図）

調査区北部南寄りに位置し、22 号土坑を切る。長軸約 150 ㎝、短軸約 90 ㎝の長楕円形を呈し、底面は段を有して 30 × 40 ㎝の楕円形に窪む。壁は開きながら直線的に立ち上がり、北側は緩い稜を有する。埋土は上層は茶灰色土中心で黄色土塊が若干混入し、中層以下は黒色粘土中心で、一部焼土や炭が混入する。最下層は青灰色粘土に黒色土が混入する。壁際に縦方向に黒色土と黄色土の斑土が入り、枠などを抜いた痕跡の可能性も考えられる。

出土遺物（図版 60、第 59 図 13 ～ 20）

13 ～ 19 は須恵器。13 ～ 17 は坏身で、13 ～ 15 は受け部が短く、13 は内面に「×」のヘラ記号がある。14 は口縁部が被熱しており、ススが付着したように黒変する。15 は生焼けで、口縁端部を打ち欠いて粗く平坦にする。再利用か。外底部は手持ちヘラケズリ、ススの付着が多い。17 は外面の一部が赤褐色に変色し、部分的にススが付着する。18 は高坏で、坏部外面にカキメが廻る。内面にススコゲが多量に付着し、外面や破面にもススの付着がある。これらのススが付着する須恵器は、再利用の可能性を考えたい。19 は短頸壷で生焼けである。

20 は土師器の坏で底部はケズリ。

51 号土坑（図版 28、第 57 図）

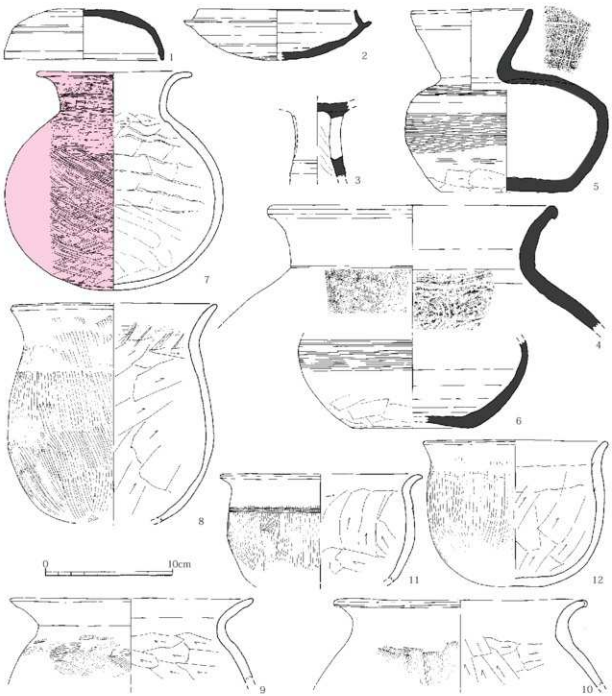
調査区南部中央に位置し、1 号土坑を切るが、掘る順序を間違えたため西側を欠く。長軸約 110 ㎝、短軸約 100 ㎝の楕円形を呈し、下層に稜を有して底面は不整楕円形になる。壁は開きながら直線的に立ち上がり、下層はやや垂直に立ちあがる。埋土は最上層が茶灰色土、上層が黒色土と黄色土と白色粘土の斑土、中層以下は黒色土中心で、下層は軟質の黒色粘土である。

出土遺物（第 59 図 21・22）

いずれも須恵器。21 は坏蓋の天井部片で、外面頂部に「⋀」のヘラ記号がある。22 は壷で、口縁屈曲部下に波状文を廻らせる。外面には格子タタキが、内面には当て具痕が残る。

52 号土坑（図版 28・29、第 60 図）

調査区北部に位置し、4 号溝・67 号土坑に切られる。長軸約 200 ㎝、短軸 110 ～ 120 ㎝の不整楕円形を呈し、深さは最深で 220 ㎝を測る。下位に段を有して段掘り状になり、中位にも稜を有する。直径 100 ㎝前後の円形土坑の段部が広がったようにも見えるが、埋土に変化はなかったため、掘削時の段掘りか、もしくは廃棄時の枠等の抜き取り穴とも考えられる。埋土は上層が黒色土、中央は

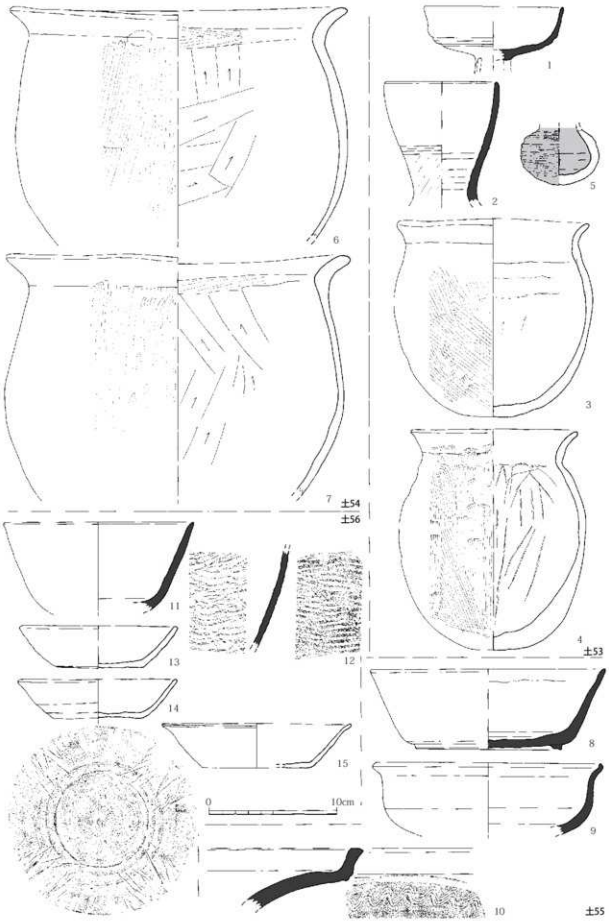


第 61 図　52 号土坑出土土器実測図 (1/3)

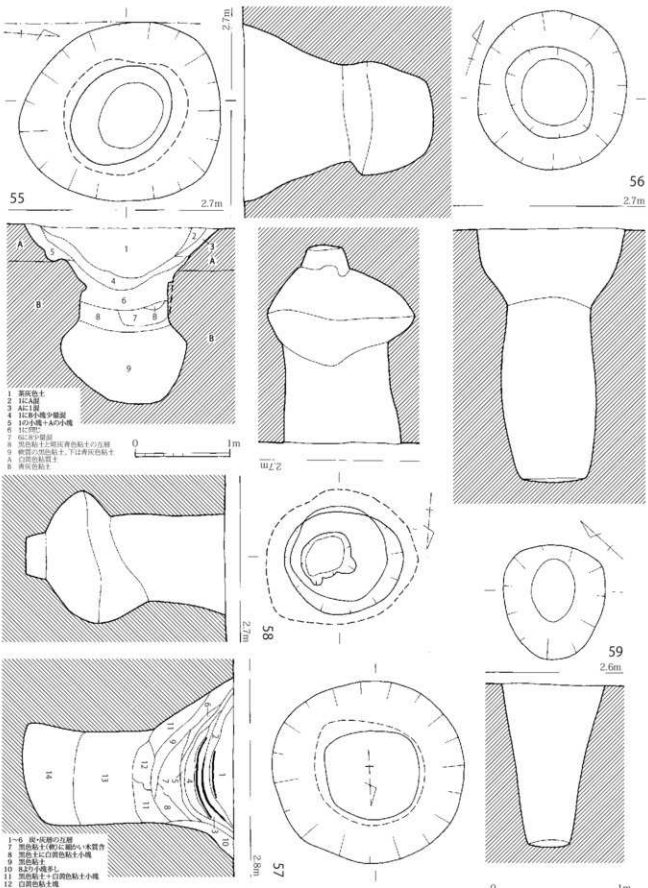
黒色土と黄色土と白黄色土の斑土で、下層は青灰色粘土に黒色土が混入する。中位の稜と同レベルから完形に近い横瓶が正位で出土し、段と同レベルから完形に近い壺が出土した。

出土遺物（図版 61、第 61 図）

1～6 は須恵器。1 は坏蓋で、外面に 2 本の沈線が廻り、口縁端部は段を有する。2 は坏身で、1 とほぼ同じレベルからの出土である。3 は高坏脚部で透かしと 1 条の沈線を有する。4 は壺で口縁端部を折り返す。体部外面は自然釉が厚くかかって真っ白になる。5 は横瓶で、口縁外面に一条の沈線を有し、一部に「川」字状のヘラ記号がある。頸部の屈曲は強く、底部は平坦でヘラケズリ



第 62 図　53 ～ 56 号土坑出土土器実測図 (1/3)



第 63 図　55 ～ 59 号土坑実測図 (55・58 は 1/40、他は 1/30)

を施し、体部は丸みを持ってカキメを施す。6も横瓶の底部か。やや上げ底で体部にカキメが廻り、底部付近は手持ちヘラケズリで整える。歪みが激しく自然釉を被る。

7～12は土師器。7は壺。胴部は球形を呈し、口縁が大きく開く。全体に丹塗りを施して丁寧なミガキを施すが、被熱により一部茶色に変色する。内面は粘土紐の痕跡が顕著で、ケズリによる強い稜をもつ段を有する。下位はその後ナデ調整。8～10は甕。8の頸部内面には先端が尖った平面三角の工具痕が並ぶ。9の外面と10の内面にはススコゲが付着する。11･12は鉢。口縁が短く外湾し、体部は低く丸みを持って平底になる。1・2・8・9は土坑中位から、7は下層の段と同レベルからの出土である。この他に凹み石が出土している。

53号土坑（図版29、第60図）

調査区中央に位置し、43号土坑に切られ、6号土坑を切る。長軸215㎝、短軸120㎝を測り、南東部上位にテラスを有する。下位も段を有して一部が深くなり、51号土坑同様に段掘り状になる。深い部分は直径60㎝前後の楕円形を呈し、底は平坦になる。埋土は軟質の黒色粘土中心で、貝を包含する。下層の段とほぼ同レベルから完形の甕が2点出土している。

出土遺物（第62図1～5）

1・2は須恵器。1は高坏坏部で、屈曲部に2条の沈線を有し、外面に自然釉がかかる。2は長頸壺口縁部で、上位がやや内湾し外面に2条の沈線を有する。

3～5は土師器。3・4は甕で、3は全体に調整が粗く内面には粘土紐の継ぎ目が残る。内面下位は工具ナデ。4は底部の器壁が極めて厚く、全体に野暮ったい印象を受ける。内面は強いタテナデで粗く整える。5は小型の壺胴部で、頸部から上は剥離する。内外面とも黒塗りで、外面は細かいミガキを施し、底部はナデで調整する。上位に2条の太い沈線が廻る。内面は強いナデで調整し、底部付近に段を有する。この他に砥石、石鍋転用品、円盤状土製品、土玉が出土している。

54号土坑（図版30、第60図）

調査区南側西寄りに位置し、33号土坑を切る。一辺約120㎝の隅丸三角形を呈し、中層以下は直径60㎝前後の円形を呈する。深さは最深で150㎝を測り、底面は平坦になる。壁は下層が直に立ち上がり、中位以上は湾曲しながら開く。埋土は最上層が茶灰色土、上層は黒色土と黄色土と白黄色粘土の斑土で、以下は軟質の黒色粘土中心となる。

出土遺物（第62図6・7）

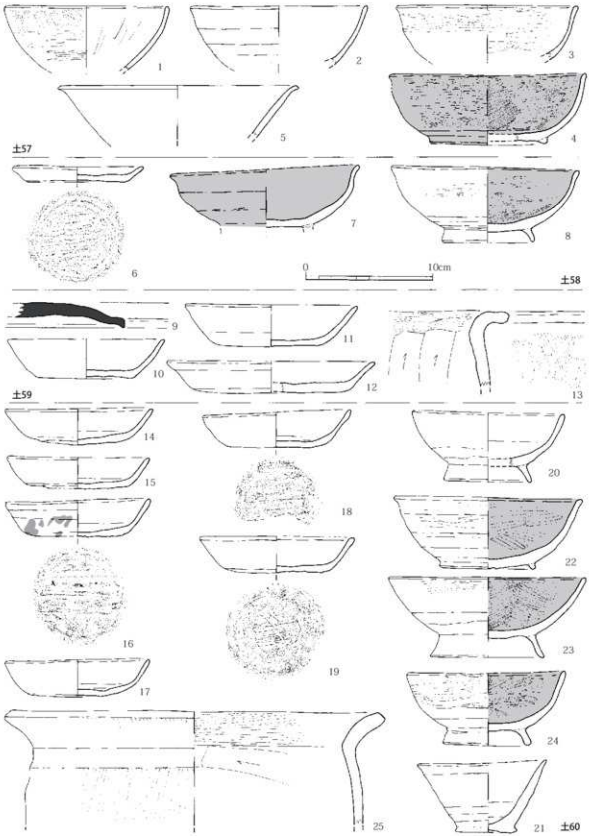
いずれも土師器の甕。内面はケズリで、6は頸部に指圧痕が認められ、7は外面にススが付着する。

55号土坑（図版30、第63図）

調査区南部西寄りに位置し、直径150～160㎝の円形を呈する。深さは最深で約140㎝を測り、底面はレンズ状を呈する。壁は下位がフラスコ状に大きく広がり、中位は垂直に立ち上がり、上位は大きく開く。下位の広がりは使用時の崩落と考えられる。埋土は中層まで茶灰色土が中心となり、最も狭い中層に黒色粘土と暗灰青色粘土の互層が堆積する。下層は軟質の黒色粘土中心になる。

出土遺物（図版61、第62図8～10）

いずれも須恵器。8は高台付きの坏で、高台は低く底部はぎりぎり接地しない。外底部はヘラ切



第 64 図　57 ～ 60 号土坑出土土器実測図 (1/3)

り未調整。9は低い埦で、口縁が屈曲して端部は短く引き上げ、底部付近は丸みを持って膨らむ。10は壷で口縁が屈曲して垂直に立ち上がる。外面には波状文を施し、内面は自然釉がかかる。

56号土坑（図版31、第63図）

調査区中央に位置し、12号土坑と7号溝を切る。直径120㎝前後の円形を呈し、上位にある稜から下は直径60㎝前後の円形となる。深さは最深で約200㎝で、底面は平坦になる。壁は垂直に立ち上がり、上位の稜から上は大きく広がる。埋土は上層が茶灰色土中心で、中層は黒色粘土と青灰色粘土の互層、下層は貝等を含む軟質の黒色粘土中心になる。

出土遺物（図版61、第62図11～15）

11・12は須恵器。11は埦で底部付近は丸みを持つ。12は体部片で、器壁が薄く外面は平行叩き。

13～15は土師器の坏。いずれも底部はヘラ切り未調整。14の外底部には「×」の細いヘラ描きがある。15は端部が外湾し、器壁が薄い。14・15は全体が被熱赤変する。

57号土坑（図版31、第63図）

調査区中央西寄りに位置し、上面は直径約150㎝の円形、中位の稜から下は直径約70㎝の円形を呈する。深さは最深で約170㎝で、底面はほぼ平坦になる。壁は最下位が若干広がるがほぼ垂直に立ち上がり、上位が大きく広がる。埋土は最上層に炭と灰の互層がレンズ状に堆積し、上層は黒色土に木質層が混入する。中層に壁面崩落と思われる白黄色粘土塊があり、下層は軟質の黒色粘土中心になる。浅い土坑に灰や炭の互層が入る例があり、上層は後世の埋土とも考えられる。

出土遺物（図版61、第64図1～5）

1～3は土師器の坏。1は外面はハケメを粗いミガキで消す。内面は工具ナデで、混入の可能性が高い。2は体部が丸みを持って底部が窄まり、高台が付くものか。3は内外面とも粗いミガキを施し、外面下位はナデ調整。高台の痕跡がある。4は両黒の黒色土器で、内外面とも細かく丁寧なミガキを施す。

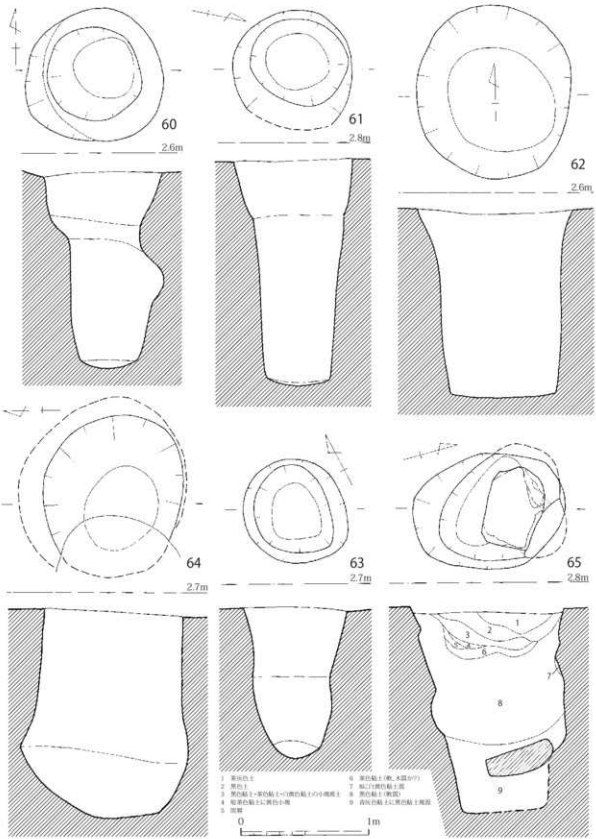
5は越州窯の青磁碗で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部が外湾する。内面には貫入が多い。この他石錘が出土している。

58号土坑（第63図）

調査区南部西寄りに位置し、33号と100号土坑を切り、64号土坑に切られる。直径約75㎝の円形を呈し、深さは最深で約160㎝を測る。壁は上位が垂直に立ち上がるが下位がフラスコ状に大きく広がり、最下位には段を有して直径40㎝前後の円形ピットを有する。広がりは使用時の崩落と見られ、ピットは杭の痕跡の可能性もある。埋土は最上層に茶灰色土が入るが、以下は軟質の黒色粘土中心で、下層に青灰色粘土に黒色土が混入する層が入る。

出土遺物（図版61、第64図6～8）

6は土師器の小皿で、外底部はヘラ切り未調整で板状圧痕が付く。7・8は黒色土器。7は両黒で内外面ともナデ調整で、高台が剥離する。8は内黒で内外面とも細く粗いミガキ、底部付近にヘラ切りが残り、高い高台を有する。



第 65 図　60 ～ 65 号土坑実測図 (1/30)

59 号土坑（図版 31、第 63 図）

調査区中央に位置し、31 号土坑を切る。長軸 100 ㎝前後、短軸約 80 ㎝の楕円形を呈し、下位が窄まり底面は平坦で深さは 130 ㎝弱を測る。埋土は黒色粘土中心である。

出土遺物（第 64 図 9 ～ 13）

9 は土師質であるが、器形から須恵器の生焼けと判断した。坏蓋で摘みを欠損し、口縁部の返りは小さい。

10・11 は坏で、外底部はヘラ切り未調整、10 は全体に被熱して一部赤変し、ススが付着する。12 は皿で、外底部はヘラ切り未調整、内底部が平滑でツルツルしており、再利用の可能性もある。13 は甕の口縁部小片で、内面はススが付着する。

60 号土坑（図版 32、第 65 図）

調査区北部に位置し、3 号掘立柱建物を切る。直径 110 ㎝前後の円形を呈し、深さは最深で約 150 ㎝を測る。壁は下位に一部崩落と見られる広がりがあるがほぼ垂直的に立ち上がり、上位が緩やかに開く。埋土は上層に茶灰色土が入るが黒色粘土が中心で、中に木質や瓜などの種子等が入る。最下層には青灰色粘土に黒色土が混入する層が若干入る。

出土遺物（図版 61、第 64 図 14 ～ 25）

14 ～ 19 は土師器の坏。いずれも底部が手持ちヘラケズリで、スダレ状の板状圧痕が付く。葦等の植物を使用したものか。16 は外面にススが付着し、19 は底部付近が被熱赤変する。20 は脚付きの埦で外面が被熱赤変しススが付着する。21 は土師器の坏になるか。口縁が小さく器高が高く、底部は窄まってヘラ切りによって粘土がはみ出る。内外面とも強いヨコナデで調整する。22 ～ 24 は内黒の黒色土器。22 は外面上位は粗いミガキ、下位をケズリ後ナデ調整。23 は外面口縁部付近から内面を丁寧にミガキ、24 は外面中位より上から内面を丁寧にミガキ調整する。外底部付近はケズリ。25 は甕で口縁が肥厚する。この他に石鍋と木製鉢が出土している。

61 号土坑（図版 32、第 65 図）

調査区南部西寄りに位置し、64 号土坑を切る。直径約 95 ㎝の円形を呈し、深さは最深で約 180 ㎝を測る。壁は垂直に立ち上がり、上位がやや広がる。埋土は上層に茶灰色土が若干入るが黒色粘土が中心で、最下層には青灰色粘土に黒色土が混入する層が若干入る。

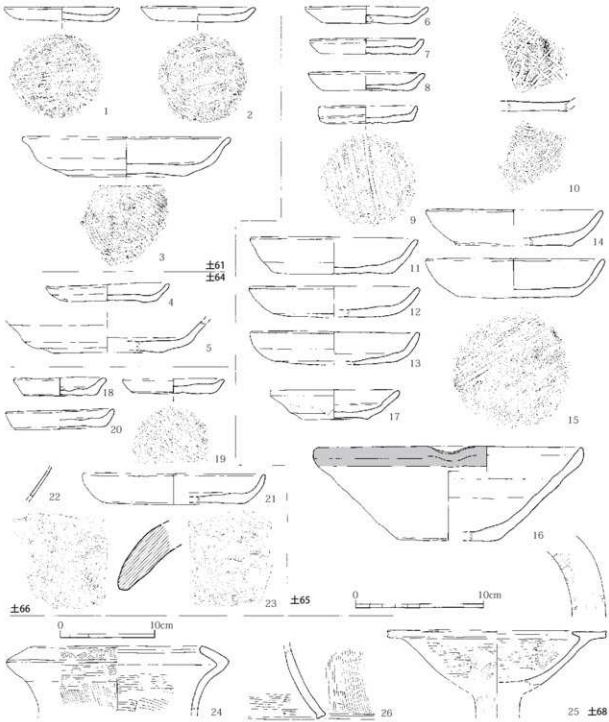
出土遺物（第 66 図 1 ～ 3）

全て糸切りの土師器。1・2 は扁平な小皿で、外底部に板状圧痕が付く。3 はやや丸みを持つ坏で、やや上げ底で板状圧痕が付かない。

62 号土坑（図版 32、第 65 図）

調査区南部中央に位置し、直径 120 ～ 140 ㎝の楕円形を呈する。深さは最深で約 150 ㎝を測り、底面は平坦になる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上位が広がる。埋土は上層は茶灰色土が堆積し、中層以下は黒色土と黄色土と茶色土の斑土が中心となる。糸切り底の土師器小片が出土している。

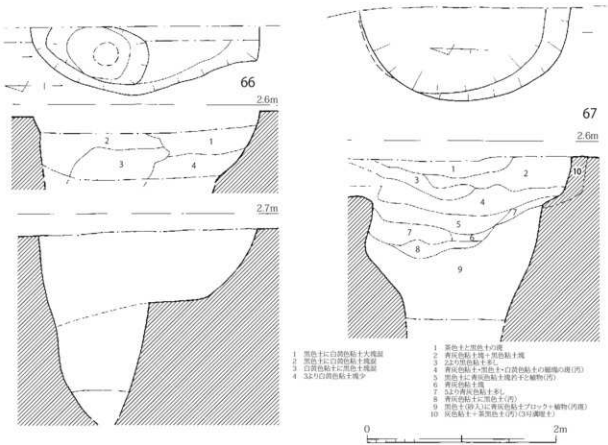
63 号土坑（図版 33、第 65 図）



第 66 図　61・64 ～ 66・68 号土坑出土土器実測図 (24 ～ 26 は 1/4、他は 1/3)

調査区中央に位置し、78 号土坑・7 号溝を切る。直径約 80 cmの円形を呈し、深さは最深で 120 cmとやや浅い。底面は窄まってレンズ状を呈し、壁は緩やかに開きながら立ち上がる。埋土は上層が茶灰色土で、以下は軟質の黒色粘土中心となる。糸切り底の土師器小片が出土している。

64 号土坑（図版 33、第 65 図）



第 67 図　66・67 号土坑実測図 (1/40)

調査区南部西寄りに位置し、58 号土坑を切り、61 号土坑に切られる。長軸約 130 cm、短軸約 110 cm以上の楕円形を呈し、深さは最深で約 165 cmを測り、底面はレンズ状を呈する。底部が窄まって下位はフラスコ状に広がり、上位は垂直に立ち上がる。埋土は上層は黒色土が中心で、黄色土が混入する。中層に葦の様な植物の堆積層があり、以下は軟質の黒色粘土になる。

出土遺物（第 66 図 4・5）

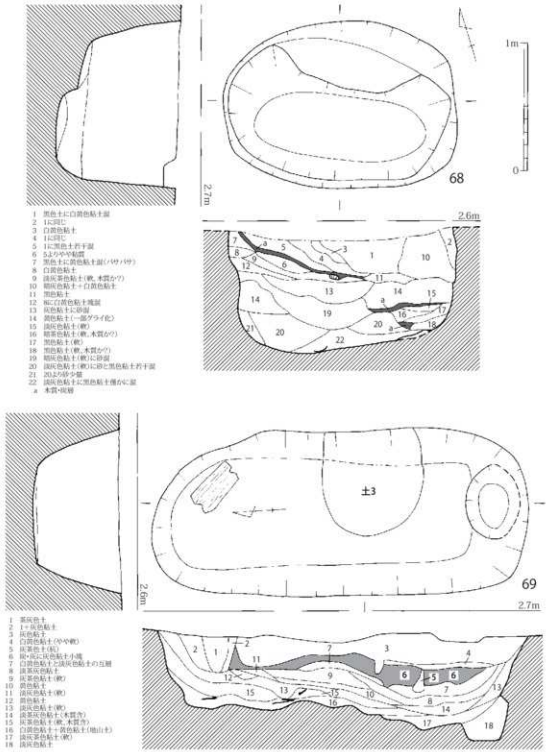
いずれも糸切り底の土師器で、4 の小皿は外底部に板状圧痕があり、内面にススが付着する。5 の坏は外底部にスダレ状の板状圧痕がある。この他に土錘が出土している。

65 号土坑（図版 33・34、第 65 図）

調査区中央西端に位置し、長軸約 120 cm、短軸約 70 cmの楕円形を呈する。底面は最深で約 170 cmを測り、底面は平坦になると思われる。壁はやや開きながら立ち上がり、下層に段を有して底面は直径約 100 cmの不整円形を呈する。中位に壁の崩落と思われる広がりがある。下位の段のレベルに扁平な大石が投棄されており、大重量のため取り上げられず下層は掘削できていない。埋土は最上層に茶灰色土と黒色土が入り、その下には炭層と木質と思われる茶色粘土層が認められる。以上は後世の堆積とも考えられる。中層は軟質の黒色粘土で、下層は青灰色粘土に黒色土が混入する。

出土遺物（図版 61、第 66 図 6 ～ 17）

6 ～ 15 は糸切り底の土師器。6 ～ 9 は小皿で、6 以外は外底部に板状圧痕がある。9 は全体に作



第 68 図　68・69 号土坑実測図 (1/30)

りが粗く被熱赤変する。10 は小片であるが、内底部に焼成後の線刻があり、縦横 3 本線の格子が複数単位認められる。11 ～ 15 の坏は 14 以外は外底部に板状圧痕がある。11・14 は内面に黒色と茶色の付着物があり、液体状の内容物の痕跡と思われる。13 は口縁部内外が被熱する。16 は瓦質の片口で、外底部は糸切り、その他はナデ調整、口縁部外面が燻される。

17は白磁の皿で、口縁は直線的で底部と体部の境は明瞭である。底部はやや上げ底状であるが中央に臍が残り、体部下位から外底部は露胎となる。内面は体部と底部の境に段を有する。緑味を帯びた釉が薄くかかる。

66号土坑（第67図）

調査区北部東端に位置し、大半が調査区外にあるため全掘はできなかった。残存部で長軸約180㎝を測り、中位で段掘りになって北側が長軸約60㎝の楕円形プランの土坑になる。深さは最深で160㎝まで確認した。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、段は広いテラスとなる。埋土は黒色粘土中心である。

出土遺物（第66図18～23）

18～21は糸切り底の土師器。18～20は小皿で、18は小型で板状圧痕はなく、内面が黒変する。19・20は外底部に板状圧痕がつく。21の坏は体部が内湾し、外底部に板状圧痕がつく。

22は白磁碗の小片で、器壁が薄く釉は灰色味を帯びる。23は丸瓦小片で、外面に縄目が残り、被熱する。この他に石製紡錘車が出土している。

67号土坑（図版34、第67図）

調査区北部東端に位置し、大半が調査区外に広がり、52号土坑を切り4号溝に切られる。残存部で径約170㎝を測り、上位が段掘り状になる。壁は凹凸が激しく、崩落によるものと考えられる。埋土は上層に4号溝の埋土が入るが、中層以下は砂が混入する黒色土に青灰色粘土塊が斑に入り、植物が包含される。糸切り底の土師器小片が出土している。

68・69号土坑は深い土坑ではあるが、規模が大きく埋土の状況が特徴的である。

68号土坑（図版34・35、第68図）

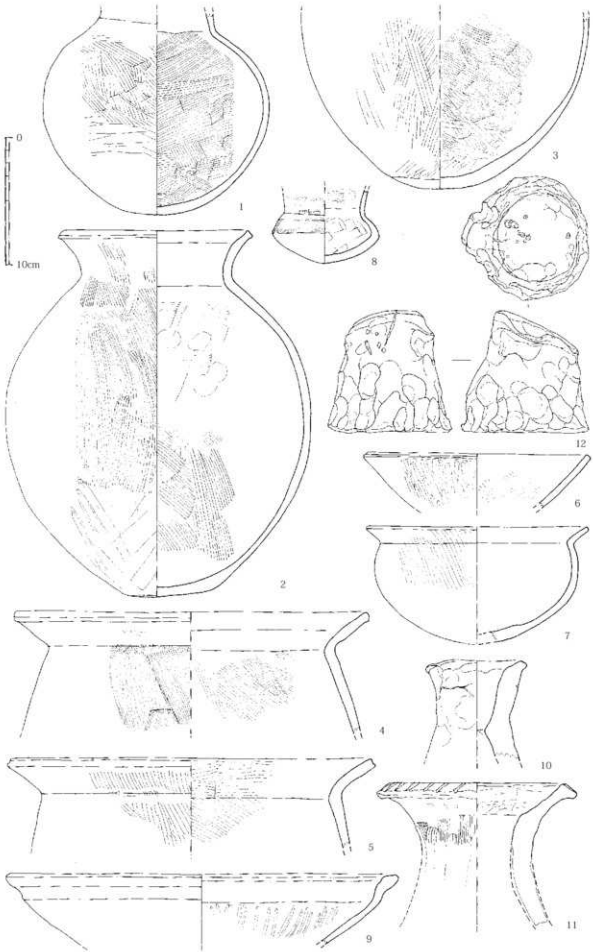
調査区西拡張部に位置し、102号土坑を切る。長軸約185㎝、短軸約130㎝の楕円形を呈する。底面はレンズ状を呈し、深さは最深で約100㎝を測る。埋土は上層は黒色土と基盤土の白黄色粘土が混在して西から東に流れるように土層が堆積し、一番下に木質が腐蝕したような軟質の粘土が堆積する。中層は灰色粘土中心で砂が混入し、東寄りに木質を含む軟質の粘土が堆積する。最下層は淡灰色粘土が堆積し、土器片が含まれる。本遺跡では砂の混入は珍しく、また木質が水平に近く堆積するのが特徴的である。何かの生業に関わるものかもしれない。

出土遺物（図版第66図24～26）

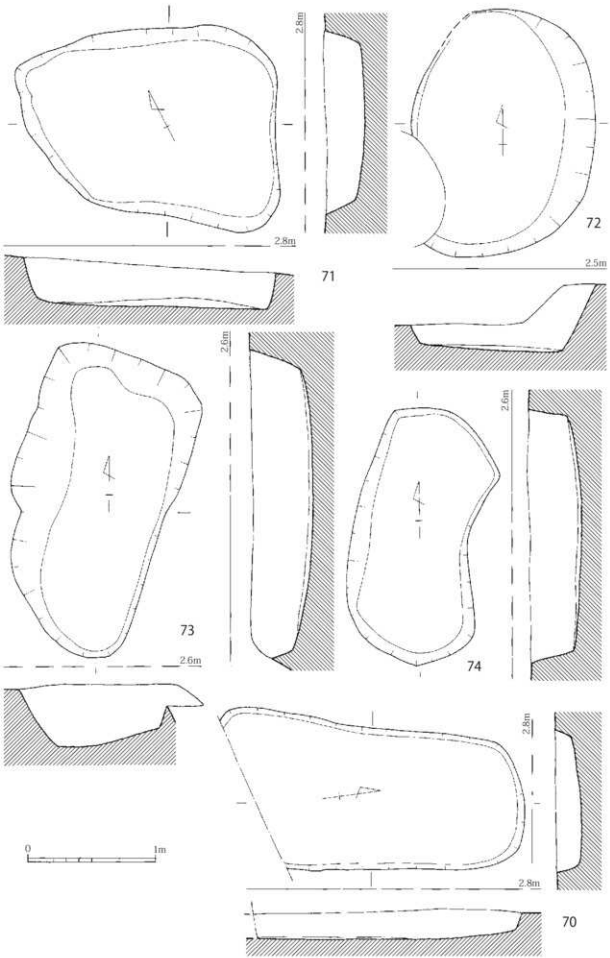
24は袋状口縁壷の口縁部で、屈曲が強く稜が付く。25は高坏で、外面はヨコミガキ、内面は6または8単位のミガキを施し、口縁平坦面は暗文を施す。26は器台の裾部小片で、端部を内面に引き出す。この他に鹿角製の鏃が出土している。

69号土坑（図版35、第68図）

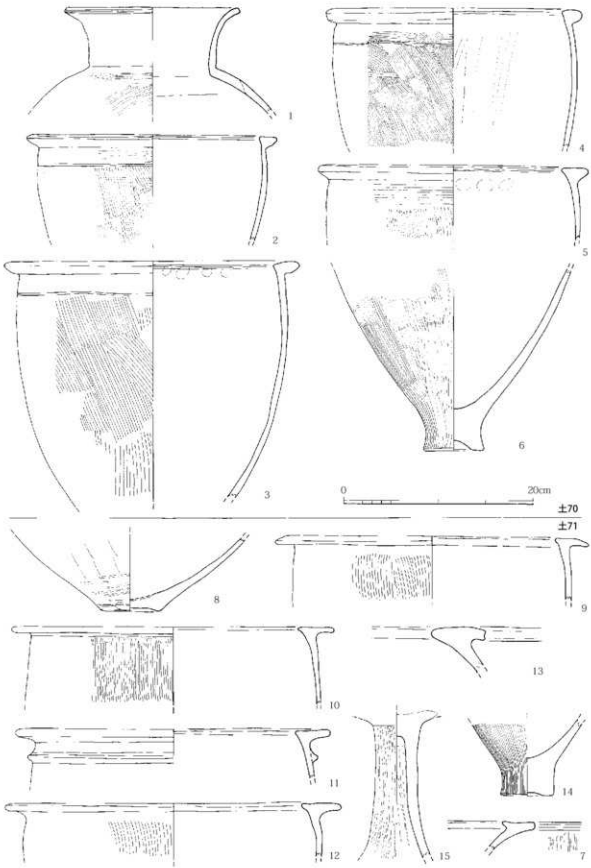
調査区北部南寄りに位置し、3号土坑を切る。長軸約300㎝、短軸約130㎝の楕円形を呈し、底部は凹凸が多く最深で約80㎝を測る。北側底にピットを有するが、用途は不明である。埋土は上層が流れ込みと思われる灰色粘土で、中層には炭と灰層が厚く堆積する。炭層は2層あり、間には



第 69 図　69 号土坑出土土器実測図 (1/3)



第 70 図　70 ～ 74 号土坑実測図 (1/30)



第 71 図　70・71 号土坑出土土器実測図 (1/4)

軟質の粘土が入る。下層は木質を多量に含む極めて軟質の粘土が堆積し、板状の木製品も認められる。Ⅰ地点でも近似する土坑が認められ、用途は不明であるが、68 号同様、何らかの生業に関わるものかもしれない。

出土遺物（図版 62、第 69 図）

1 ～ 3 は壷。1 は外面下位にタタキの痕跡があり、ナデ消している。2 は広口壷で、外面下位にはミガキ状条痕が残り、内面には指圧痕や工具ナデの痕跡が残る。内面は真っ黒である。3 は胴部下位で内面に僅かに指圧痕が認められる。4・5 は口縁が開く甕で、5 は内面にススが付着する。6 ～ 8 は鉢。6 は単純口縁で外面はミガキ。7 は内面と外面下位がナデ調整。8 は小型のもので、外底部はナデ調整、内面は押し出しの指圧痕があり工具の当たりも見られる。9 は高坏で、外面はナデ調整、内面は放射状の暗文を施す。10・11 は器台。10 は手捏ねで粘土の継ぎ目や指圧痕、ナデの痕跡が顕著で凹凸が激しい。一部ハケ状の工具痕がある。11 は端部が肥厚してキザミを施す。外面下位はケズリ、内面は剥離のため調整不明。12 は低い支脚で、受け部は傾斜し、滑らかに整えられて被熱黒変する。全体に指圧痕が顕著で、下位には 2 本の指で摘めるような深い窪みが 2 カ所ある。また、受け部と側面に 1mm 径の小さい穿孔が 5 ～ 6 カ所あり、一部貫通している。

ここからは、大型で浅く、底部が平坦になる土坑である。

70 号土坑（第 70 図）

調査区西拡張部に位置し、調査区外に広がる。長軸 240 cm以上、短軸 110 ～ 130 cmの隅丸楕円形を呈し、深さは最深で 20 cmを測る。埋土は灰色粘土の単一層で、溜まり状遺構とも考えられたが、プランがしっかりしているため土坑とした。

出土遺物（第 71 図 1 ～ 6）

1 は広口壷で外面はミガキを施し、内面は粘土の継ぎ目が顕著である。2 ～ 6 は甕。2 ～ 4 は口縁下に 1 条の沈線を有し、5 は内面に粘土接合の指圧痕が残る。6 は外面にススが付着する。この他に石剣が出土している。

71 号土坑（図版 35、第 70 図）

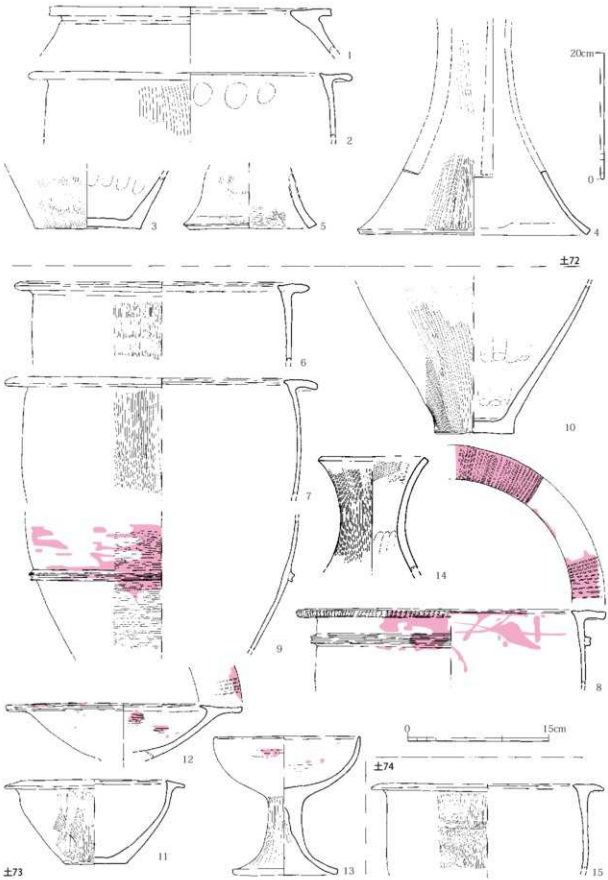
調査区中央西端に位置し、長軸 200 cm前後、短軸 150 cm前後を測る不整隅丸長方形を呈する。深さは最深で 35 cmを測り、底部のレベルは一定である。埋土は 68 号と同様灰色粘土の単一層で、同様の性格を持つと考えられる。

出土遺物（第 71 図 7 ～ 15）

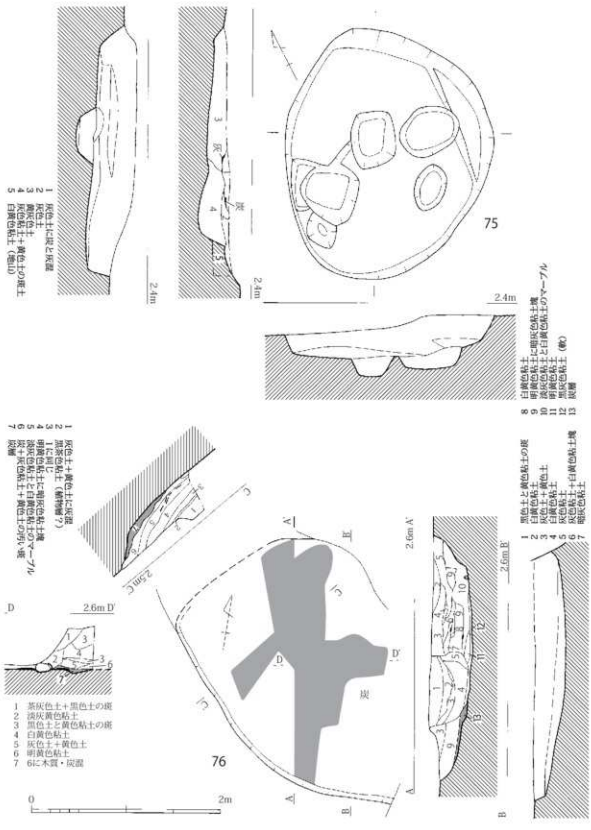
7・8 は壷。7 は口縁部小片で外面はミガキを施す。8 は底部片で外面下位の一部にミガキが認められ、上位は工具ナデを施す。9 ～ 13 は甕。9 ～ 12 はいずれも内面がナデ調整で、11 は断面三角の凸帯を一条廻らせる。13 はやや大型品。14 は高い底部片で、僅かに上げ底になる。15 は高坏脚部で、外面は丁寧なミガキを施す。

72 号土坑（第 70 図）

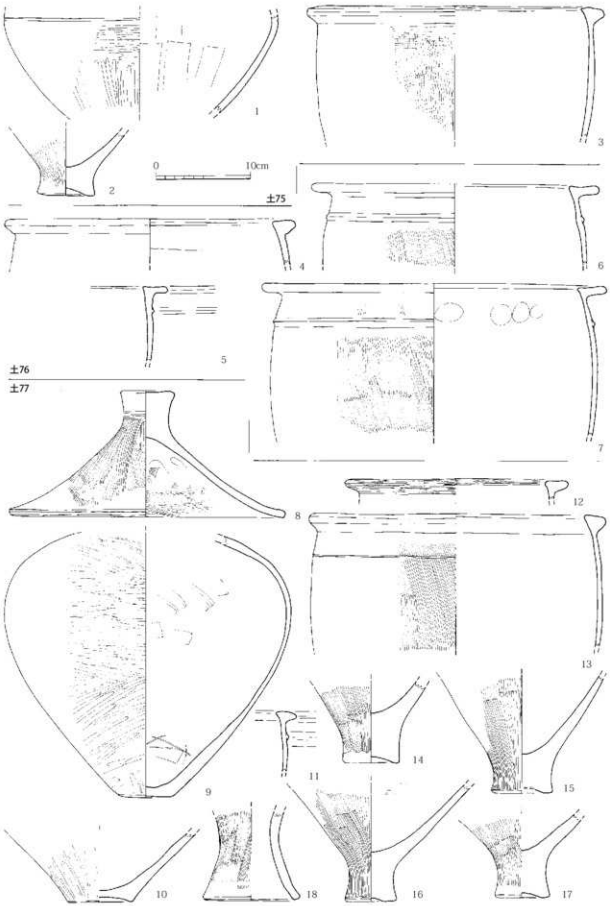
調査区南部中央に位置し、1 号溝・34 号土坑に切られる。長軸約 200 cm、短軸約 150 cmの楕円形を呈し、深さは最深で約 55 cmを測る。埋土は 70・71 号土坑と同様に灰色粘土の単一層である。



第 72 図　72 ～ 74 号土坑出土土器実測図（1・4 は 1/6、他は 1/4）



第 73 図　75・76 号土坑実測図 (1/40)



第 74 図　75 ～ 77 号土坑出土土器実測図 (1/4)

出土遺物（第 72 図 1 ～ 5）

1・2 は甕。1 は大型で内面が剥離している。2 は内面口縁下に指圧痕が並ぶ。3 は底部小片で内面にナデと指圧痕が顕著である。4 は筒型器台脚部で、透かしが一部残るが破片が接合せず、高さは図上での復元である。外面は丁寧なミガキを施して一部ナデ消し、丹塗りは全く認められない。5 は器台裾部で内外面共剥離が激しい。

73 号土坑（図版 36、第 70 図）

調査区中央東寄りに位置し、1 号溝に切られる。長軸約 240 ㎝、短軸約 130 ㎝の不整楕円形を呈し、深さは最深で約 50 ㎝を測る。埋土は上層に茶灰色土があったが、以下は灰色粘土の単一層である。

出土遺物（図版 62、第 72 図 6 ～ 14）

6 ～ 10 は甕。8 は口縁端部にキザミを施し、胴部には断面 M 字の凸帯を廻らせる。外面に丹塗りを施すが、内面口縁部にも丹が垂れた状態で付着している。9 は体部片で中位に断面 M 字の凸帯を廻らせ、外面を丹塗りする。10 は平底の胴部下位で、内面に強いナデの痕跡が顕著である。11 は鉢で口縁がやや外傾斜し、平底を有する。12・13 は高坏。12 は内外面にミガキと丹塗りを施し、口縁部平坦面には放射状の暗文を施す。13 は単純口縁で、マメツが激しいが外面と脚部にミガキが認められ、丹塗りを施す。14 は器台で器壁は薄く、内面にナデの痕跡が顕著である。

74 号土坑（第 70 図）

調査区南部東端に位置し、3 号溝に切られる。長軸約 200 ㎝、短軸約 100 ㎝の不整楕円形を呈し、深さは最深で約 40 ㎝を測る。埋土は他の土坑同様灰色粘土の単一層である。

出土遺物（第 72 図 15）

15 は甕で、外面の一部は工具によって細かいハケメを消す。

75 号土坑（図版 36、第 73 図）

調査区中央東寄りに位置し、1 号溝・27 号土坑に切られる。長軸約 200 ㎝、短軸は約 160 ㎝を確認した。底面は平坦で深さ 40 ㎝前後であるが、複数のピットを有し、さらに 10 ～ 15 ㎝深くなる。埋土は灰色粘土の単一層で、一連の遺構と考えられる。

出土遺物（第 74 図 1 ～ 3）

1 は壺胴部片で、外面はミガキで茶色を呈し、一条の沈線が廻る。内面は工具によるナデ調整で黒色を呈する。2・3 は甕で、2 は内底部にコゲが付着する。この他に石庖丁が出土している。

76 号土坑（図版 36 ・ 37、第 73 図）

調査区北側東端に位置し、4 号溝・67 号土坑に切られる。埋土が基盤土に酷似していたためプランを把握できず、最下層の炭層がわずかに見える部分からプランを追いかけた。炭層は掘削を誤って図化の前に半分以上を除去してしまったが、底部全面に広がっていた。埋土は中層以上は基盤土の白黄色粘土と流れ込みと思われる土と灰色粘土の互層であり、後世の堆積と考えられる。中層以下は場所によって異なり、斑土や基盤土などが混在するが、最下層は木質層と炭層が堆積しており、これが使用時の堆積と考えられる。

出土遺物（第 74 図 4 ～ 7）

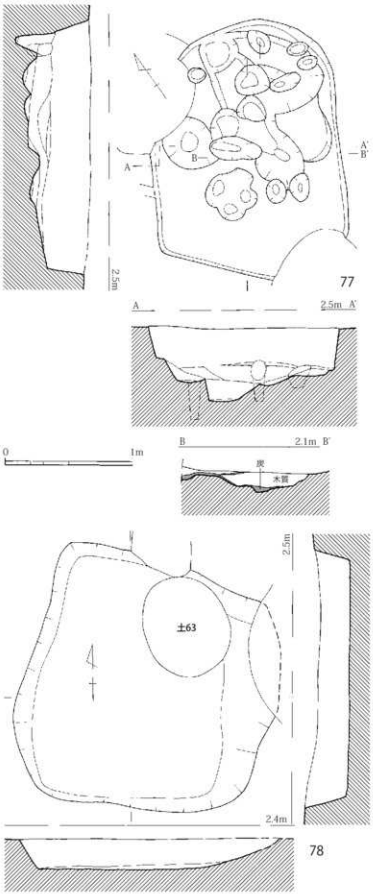
全て甕。4 は内面に粘土の継ぎ目が認められる。5 ～ 7 は口縁部片で断面三角の低い凸帯を廻らせる。6 は凸帯部内面が押圧により盛り上がり、7 は貼り付け時の指圧痕が残る。この他木質層の中から剣形木製品が出土している。

77 号土坑（図版 37、第 75 図）

調査区中央に位置し、99・117 号土坑に切られる。長軸 200 cm、短軸 150 cmの不整隅丸長方形を呈し、深さは段や凹凸、ピットを有するため不定であるが、南側のテラスで 30 ～ 40 cmを測り、北側やピットはより深くなる。埋土は灰色粘土が中心で、底部一面とピット内に炭や木質が堆積していた。壁や底部に被熱による赤変などは認められず、土坑内で火を炊いた痕跡は認められないが、炭が一面にあったこと、特に窪みやピットに木質が厚く堆積していたことから、燻すような形で火が使われたことも考えられる。

出土遺物（第 74 図 8 ～ 18）

8 は甕蓋で、内面上半はナデでハケメを消し、指圧痕が認められる。9・10 は壺。9 は胴部で、外面は丁寧なミガキ、内面は工具によるナデで整形する。外面が茶色・黒色を呈して光沢があるが、彩色か否かは不明。10 は底部小片で、外面はミガキ、全体に被熱する。11 ～ 17 は甕。11 は断面三角の凸帯があり、13 は外面に一条の沈線を廻らせる。14 ～ 17 は底



第 75 図　77・78 号土坑実測図 (1/30)

部片で、全て若干上げ底になる。17は外面が黒変し、内面にススコゲが付着する。18は器台で、外面は原体の当たりが残る強いハケ調整。

78号土坑（第75図）

調査区中央東寄りに位置し、27号・63号土坑に切られ、7号溝を切る。一辺200㎝前後の不整炭丸方形を呈し、深さは最深で25㎝を測り、底面は平坦になる。埋土は上層が基盤土に似た淡黄色粘土で、下層は灰色粘土である。

出土遺物（第76図1～9）

1は甕蓋で頂部を欠き、内面はナデで指圧痕が残る。2は広口壷で、頸部に断面三角の凸帯を廻らせる。胴部外面と口縁部内面は丁寧なミガキ調整で、内面はナデ調整。3～5は甕で、4は胴部に断面三角の凸帯を廻らせ、内面に工具痕が認められる。6は屈曲口縁の鉢で、内面はハケ調整後に工具ナデでハケメを消す。7は高坏で、内面はマメツのため調整不明。8・9は器台。この他に投弾が出土している。

79号土坑（図版38、第77図）

調査区中央西寄りに位置し、84・87号土坑に切られるが、埋土が近似したため半裁した時点で確認した。2つの土坑と重なるようにあるため全体のプランは不明であるが、長軸160㎝以上、短軸130㎝前後の楕円形に復元できる。埋土は黒茶色土と白黄色粘土と灰色土の薄い層が水平堆積し、下層に薄い木質が見られる。礎盤かと考えたが、木質の状況が異なるため土坑とした。77号土坑と同類の可能性もある。

出土遺物（第76図10・11）

10は広口壷胴部で、中位に断面台形の凸帯を一条廻らせる。外面は丁寧なミガキで、内面は工具ナデ、底部付近は指圧痕が顕著である。11は高坏で、外面はマメツが激しい。

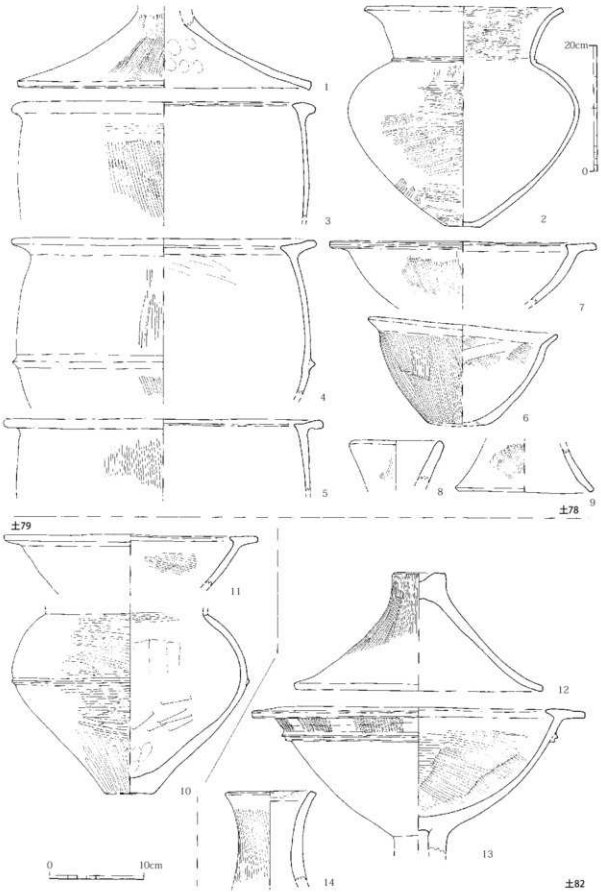
80号土坑（図版38、第77図）

調査区中央東寄りに位置し、27号土坑に切られる。長軸170㎝以上、短軸120㎝の楕円形を呈し、深さは最深で約50㎝を測り、底面は埆状になって中央部近くが深い。埋土は上層の一部に茶灰色土が入っていたが、その下は灰色粘土の単一層である。底部付近から残りのよい高坏や鉢が出土している。

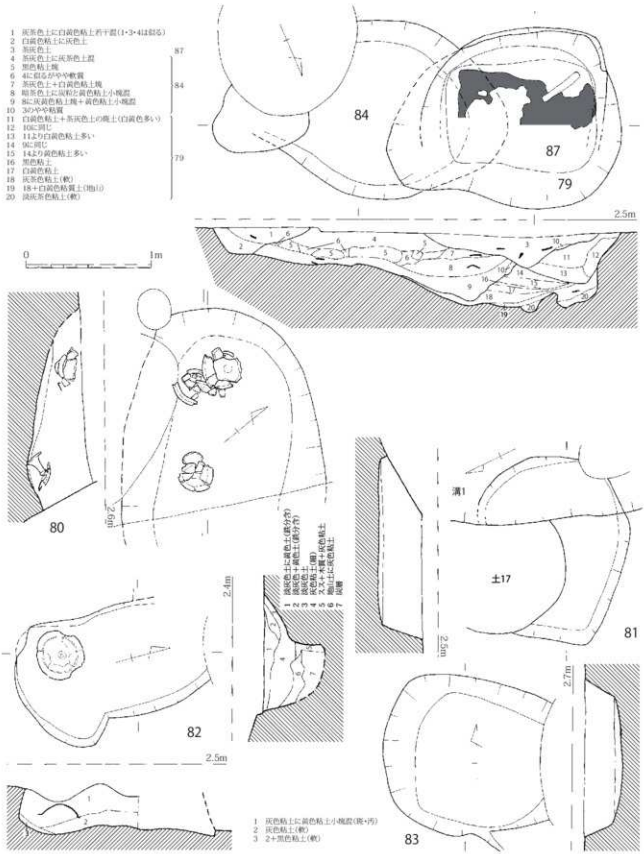
出土遺物（図版60、第78図）

1～6は甕。2は内面に工具痕があり、4は指圧痕が残る。6は最大径部に断面三角の凸帯を2条廻らせ、外面上位はナデ、その他は剥離により調整不明。7～9は鉢。7・8は単純口縁で、7は内面に指圧痕が残り、8は指ナデ痕が残る。9は屈曲口縁で内面下半は剥離のため調整不明。10・11は高坏で、全体にマメツと剥離が激しい。12は裾部片で外面はミガキを施し丹塗りする。13は器台で内面は指ナデ痕が顕著で、外面は部分的にススが付着する。14は筒型器台脚部でマメツが激しいが外面に丹塗りが残り、内面は指圧痕が残る。9・11は底部付近出土。

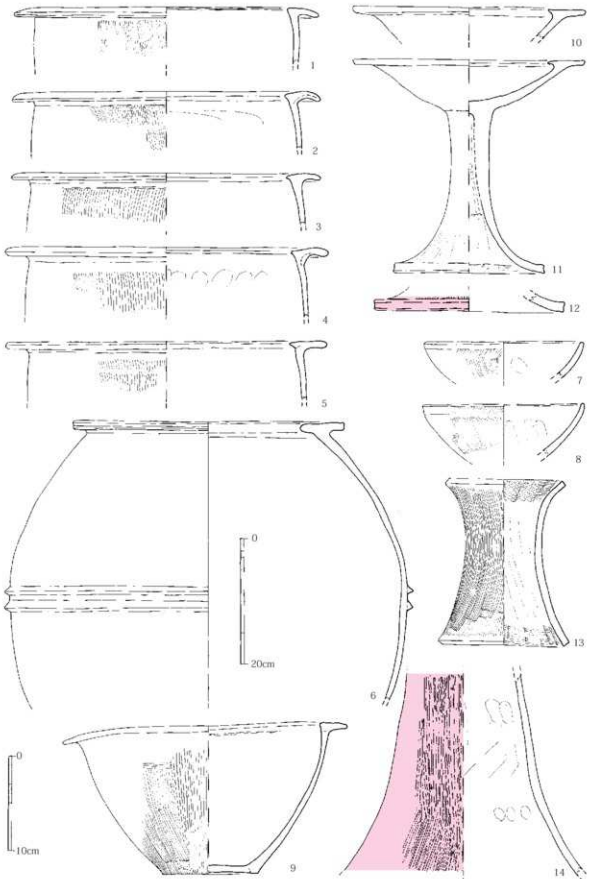
81号土坑（第77図）



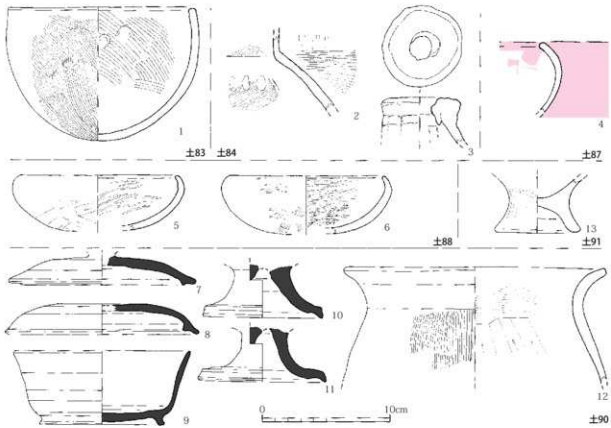
第 76 図　78・79・82 号土坑出土土器実測図（2 は 1/6、他は 1/4）



第 77 図　79 ～ 84・87 号土坑実測図 (1/30)



第 78 図　80 号土坑出土土器実測図（6 は 1/6、他は 1/4）



第 79 図　83・84・87・88・90・91 号土坑出土土器実測図 (1/3)

調査区中央東寄りに位置し、17 号土坑・1 号溝に切られる。長軸約 150 cm、短軸 120 cm前後のかまぼこ形に復元でき、深さは最深で約 35 cmで、底面は平坦になる。埋土は灰色粘土の単一層である。

82 号土坑（図版 38、第 77 図）

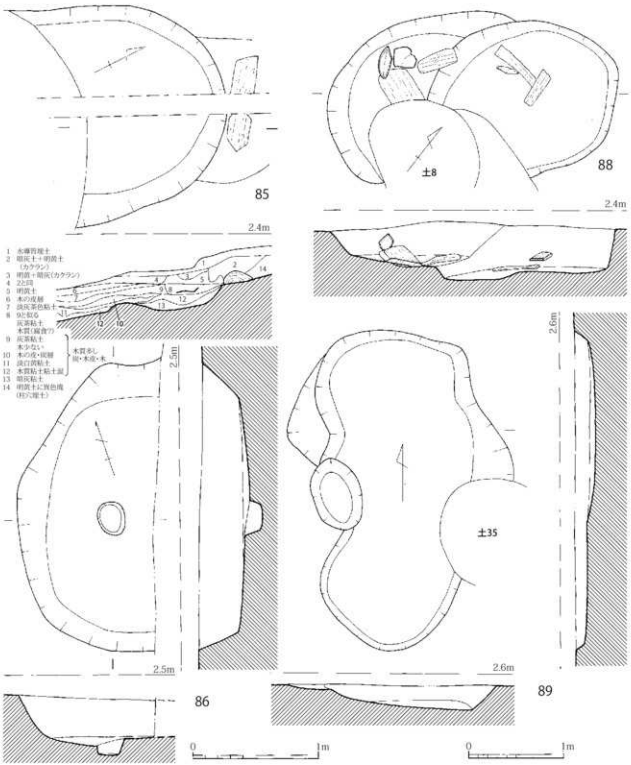
調査区中央北寄りに位置し、91 号土坑に切られる。5・6 号溝と併せて埋土が近似し、3 基の遺構周辺に炭が散乱していたことから 1 遺構と認識したが、プランがまったく不明であったためトレンチを入れて土層を確認した。この段階で 3 遺構あることは確認したものの、3 基ともプランは確認できなかったため、本来の上端レベルではプランが確認できず、不整形なものとなっている。最終確認したプランは長軸約 150 cm、短軸約 60 cmの不整楕円形を呈し、深さは最深で約 45 cmを測る。底面は凹凸が激しく、埋土は灰色粘土が中心で、薄い炭やススの層が入る。

出土遺物（図版 60、第 76 図 12 ～ 14）

12 は甕蓋で頂部内面に指圧痕が残る。13 は高坏坏部で口縁部下に断面 M 字の凸帯を有し、その下はマメツするがナデ調整か。また口縁部の下平坦面から屈曲部にかけて暗文を施し、内面は丁寧なミガキを施す。14 は器台。

83 号土坑（第 77 図）

調査区中央西寄りに位置し、32 号土坑に切られる。長軸 150 cm以上、短軸 120 cm前後の不整楕円形を呈し、深さは最深で約 30 cmを測り、底面はレンズ状になる。埋土は上層に茶灰色土が入り、



第 80 図　85・86・88・89 号土坑実測図（89 は 1/40、他は 1/30）

中層は黒色土と黄色土と茶色土の斑土である。

出土遺物（図版 62、第 79 図 1）

1 は単純口縁の深い鉢で、内外面でハケメの原体が異なる。内面には指圧痕が残り、黒変する。

84 号土坑（図版 38、第 77 図）

調査区中央西寄りに位置し、79 号土坑を切り、87 号土坑に切られる。長軸約 210 ㎝、短軸約 140 ㎝の不整楕円形に復元できる。深さは最深で 50 ㎝前後で、東側が最も深くなる。埋土は茶灰色土と暗茶色土中心の中に黒色粘土の大きな塊がいくつも入る。また、炭粒も若干混入しているが、掘削当時 77 号土坑を切った時に混入したとも考えられる。

出土遺物（第 79 図 2・3）

2 は壺肩部の小片。外面に 6 条・5 条のカキメが 2 段廻り、内面には刺突状の工具の当たりが認められる。3 は支脚頂部で、中央は粘土を折り曲げて孔を作る。内外面とも強い工具ナデ。

85 号土坑（図版 39、第 80 図）

調査区北部南西寄りに位置し、21 号土坑に切られ、30 号土坑の上に位置し、礎盤式柱穴を一つ切る。直径 170 ㎝以上の円形もしくは楕円形を呈し、深さは 40 ㎝前後残る。当初 19 号土坑の最上層の木製品を混同していたが、下層の出土状況から本遺構が上にあると判断した。底面は凹凸が多く、埋土は黒色土が中心で、間に白黄色粘土や木質層が互層になる。最下層は木質と考えられる黒色粘土である。

86 号土坑（図版 39、第 80 図）

調査区最南東部に位置し、3 号溝に切られる。長軸 240 ㎝、短軸 110 ㎝以上の楕円形もしくは円形を呈し、深さは最深で約 35 ㎝を測る。底面は平坦で、中央にピットを有する。埋土は上層が黒茶色土で、下層は黒色土と黄色土と白黄色粘土の斑土である。
図化できる土器の出土はなく、不明木製品が出土している。

87 号土坑（図版 38、第 77 図）

調査区中央西寄りに位置し、79・84 号土坑を切る。長軸約 160 ㎝、短軸は不明であるが、隅丸方形か隅丸長方形を呈すると思われる。断面で見る底部は不整形で、最深は東に偏り、約 40 ㎝を測る。埋土は上層が茶灰色土中心で、下層は茶灰色土塊と白黄色粘土塊の斑土である。

出土遺物（第 79 図 4）

4 は埦形の坏で外面と内面口縁部は丹塗りを施し、内面の下位は丹が垂れる。

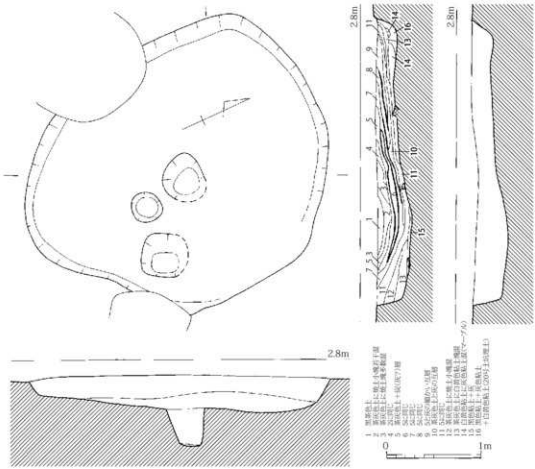
88 号土坑（図版 39、第 80 図）

調査区南部中央に位置し、8 号土坑・1 号溝に切られる。長軸約 230 ㎝、短軸 140 ㎝以上の不整楕円形を呈し、北東側を一段深く掘り込んで、深さは最深で約 45 ㎝を測る。当初 2 基の土坑とも考えたが、板状の木質が数枚双方にまたがって出土したことから、1 遺構とした。埋土は灰色粘土中心で、軟質の黒色粘土が混入する。

出土遺物（第 79 図 5・6）

埦形の坏で、5 の内面と 6 の内外面は細かいミガキで、5 の外底部はケズリ。6 の外底部は僅かにハケとケズリが残り、ススが付着する。

89 号土坑（第 80 図）



第 81 図　90 号土坑実測図 (1/40)

調査区中央東寄りに位置し、36 号土坑を切るが掘り順を誤って欠損する。長軸約 340 cm、短軸 210 cm前後の不整長楕円形を呈し、深さは最深で約 20 cmと浅い。底面は南北方向は平坦であるが、東西方向は東が深くなる。埋土は茶灰色粘土中心である。

90 号土坑（図版 40、第 81 図）

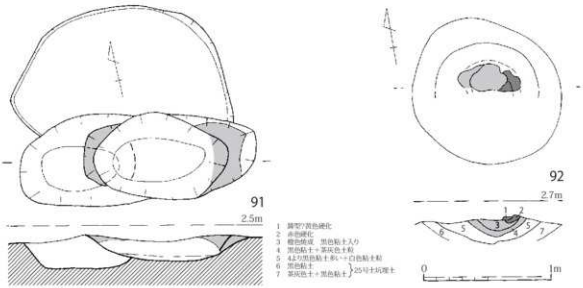
調査区中央西寄りに位置し、20・41・100 号土坑を切る。直径 310 cm前後の不整円形を呈し、今回の調査では最大の規模を持つ。底面はやや凹凸を持ち、深さは最深で 40 cm弱である。埋土は上層が茶灰色土に焼土小塊が多数混入し、下層は茶灰色土と炭層の細かい互層となる。3 基のピットを有するが、炭の混入がなく、別遺構の可能性もある。77 号土坑と同じ性格を持つと考えられる。この他にすり石と鐸型土製品が出土している。

出土遺物（第 79 図 7 ～ 13）

7 ～ 11 は須恵器。7・8 は坏蓋で、7 は摘みを欠損する。9 は高台付きの坏で、外底部はヘラ切り未調整。10・11 は高坏脚部で、全体に自然釉がかかる。12 は甕で頸部の屈曲は緩い。

91 号土坑（図版 40、第 82 図）

調査区中央北寄りに位置し、82 号土坑を切る。本体は長軸約 130 cm、短軸約 70 cmの楕円形を呈



第 82 図　91・92 号土坑実測図 (1/30)

するが、さらに西に 60 ㎝延長する土坑と、北側に広がる約 170 ㎝× 80 ㎝の炭溜まりも同一遺構と考える。本体は埋土は黄色土であったが、東西両脇が被熱のため赤変しており、炭が張り付いていた。何かを焼成したと考えられ、北に広がる炭溜まりは内部の炭を掻き出したものか。

出土遺物（第 79 図 13）

13 は台付き甕の台部で、内面はナデ調整。

92 号土坑（第 82 図）

調査区中央北寄りに位置し、14 号土坑の最上層に掘り込んでいた。直径 80 ㎝前後の円形を呈すると思われる。埋土は最下層に薄い炭層が入る黒色土が有り、その上が茶灰色土、その上は被熱して橙色になった粘土に黒色土粒が入り、その上は赤色硬化面、その上は黄色硬化面となる。何かの焼成を行った痕跡と考えられるが、出土遺物がまったく無いため時期は不明である。

ここからは、その他の土坑を一括で掲載する。

93 号土坑（図版 40、第 83 図）

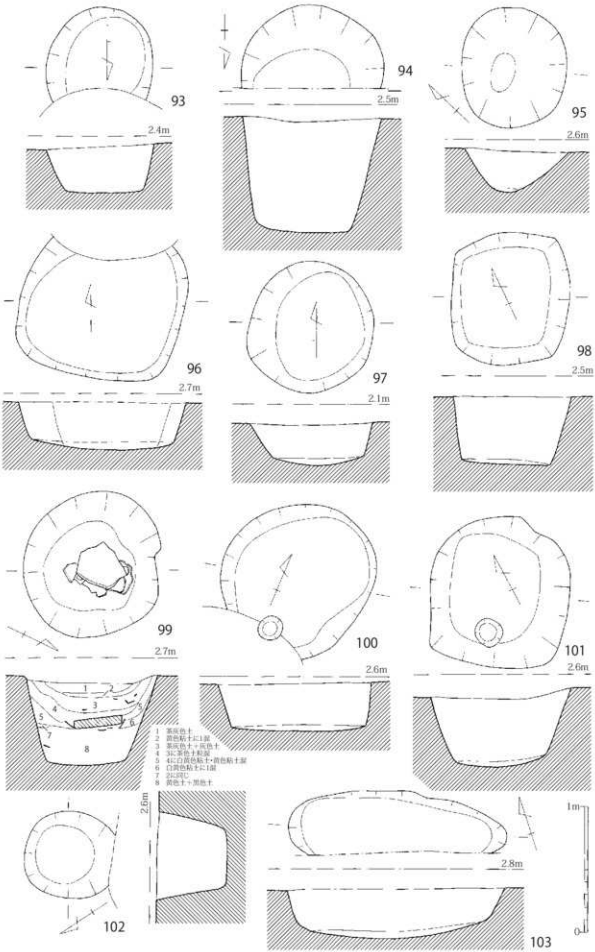
調査区中央西寄りに位置し、11 号土坑に切られる。直径 70 ～ 80 ㎝の円形になると思われ、底面は平坦で深さ約 40 ㎝を測る。埋土は上層に白黄色粘土塊の混入した黒色土が入り、下層は暗茶色土が堆積し、その間に炭層と土器が一括で入っていた。

出土遺物（第 84 図 1 ～ 5）

1・2 は甕。1 は甕棺と思われ、断面三角の凸帯を 2 条廻らせる。2 は内面はナデ調整だが指圧痕が残る。3 は鉢で、断面三角の凸帯を 1 条廻らせる。内外面ともマメツのため調整不明。4・5 は器台で、いずれも内面はナデ調整。

94 号土坑（第 83 図）

調査区中央東端に位置し、約 1/2 が調査区外に広がる。直径 115 ㎝前後の円形になると思われ、



第 83 図　93 ～ 103 号土坑実測図 (1/30)

底面は平坦で深さは約 80 ㎝とやや深い。上層には白黄色粘土塊が混入した黒色土が入り、下層は青灰色粘土に黒色土が混入する。

出土遺物（第 84 図 6）

6 は高坏脚部で、外面に僅かに丹塗りが残る。

95 号土坑（第 83 図）

調査区南端に位置し、直径 90 ㎝前後の円形を呈する。底部は断面猪口状に窄まって平坦となり、深さは約 35 ㎝を測る。埋土は白黄色粘土塊の混入する黒色土単一層である。

出土遺物（第 84 図 7・8）

7 は甕、8 は単純口縁の鉢と思われる。7 の内面と 8 の全面はナデ調整。

96 号土坑（第 83 図）

調査区中央西寄りに位置し、28 号土坑に切られる。一辺 130 ㎝前後の隅丸方形に復元でき、底面はややレンズ状を呈し、最深で約 40 ㎝を測る。埋土は白黄色粘土と黒色土と茶色土の斑土で、白黄色粘土が多い。

出土遺物（第 84 図 9・10）

いずれも甕。9 は口縁部小片、10 は平底の小片で外面にススが付着する。

97 号土坑（第 83 図）

調査区西側拡張部に位置し、直径 100 ㎝前後の円形を呈する。底面はレンズ状になり、深さは最深で約 30 ㎝を測る。埋土は灰色粘土の単一層である。

出土遺物（第 84 図 11 ～ 14）

11 は広口壺口縁部で、外面に暗文を施す。12 は口縁小片で内外面ナデでハケメを消し、内面の一部に工具痕が残る。13 は平底の小片で、内底部にススコゲが付着する。14 は高坏脚部で、外面上位はマメツにより調整不明、下位はハケ調整後ミガキを施す。

98 号土坑（第 83 図）

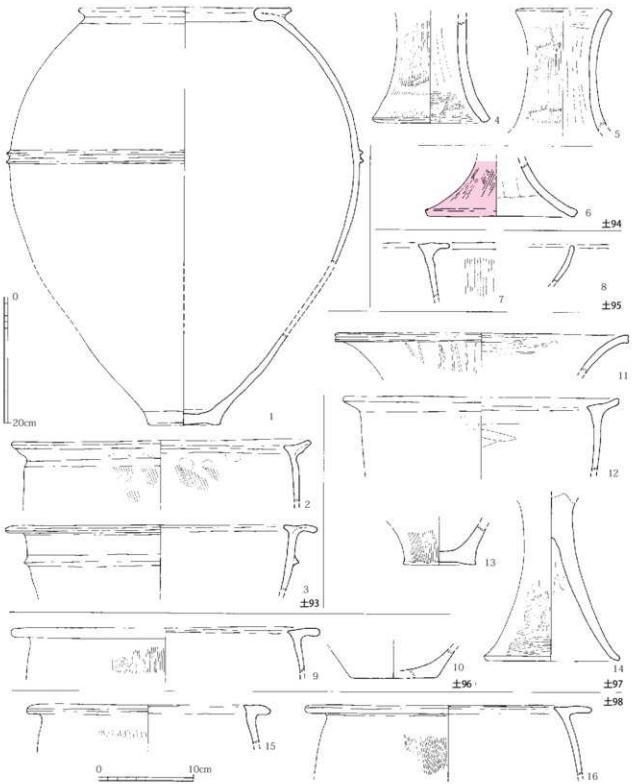
調査区南部西寄りに位置し、一辺 100 ㎝前後の正方形を呈する。1 号掘立柱建物跡と方位を同じくし、方形であることから当初柱穴と考えて掘削したが、痕跡はまったくなかった。埋土は黒色土と黄色土と白黄色粘土の斑土で下層に灰色粘土が見られた。

出土遺物（第 84 図 15・16）

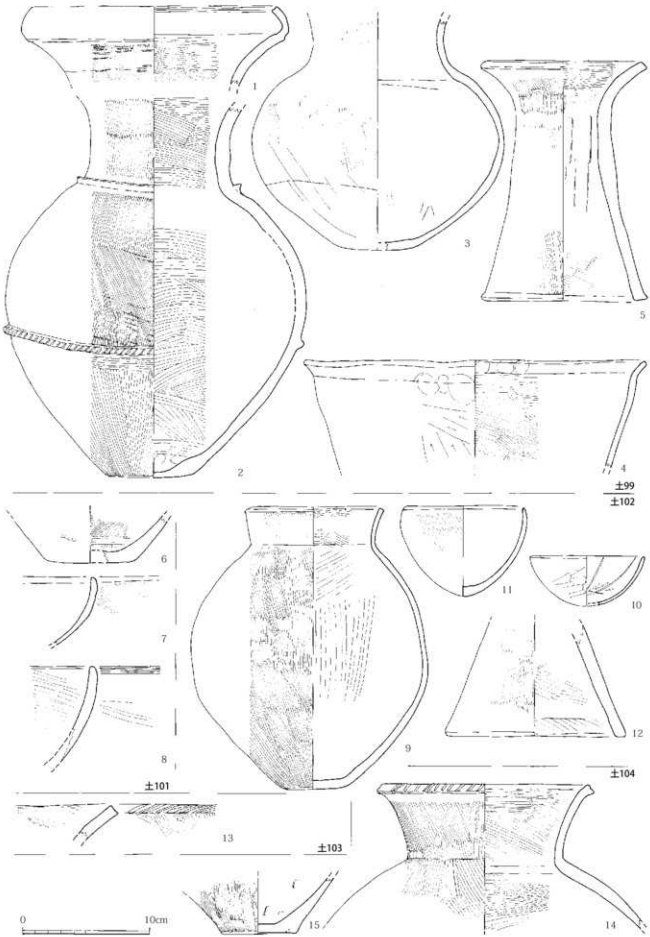
15・16 は甕。外面はハケ調整、内面はナデ調整。

99 号土坑（図版 41、第 83 図）

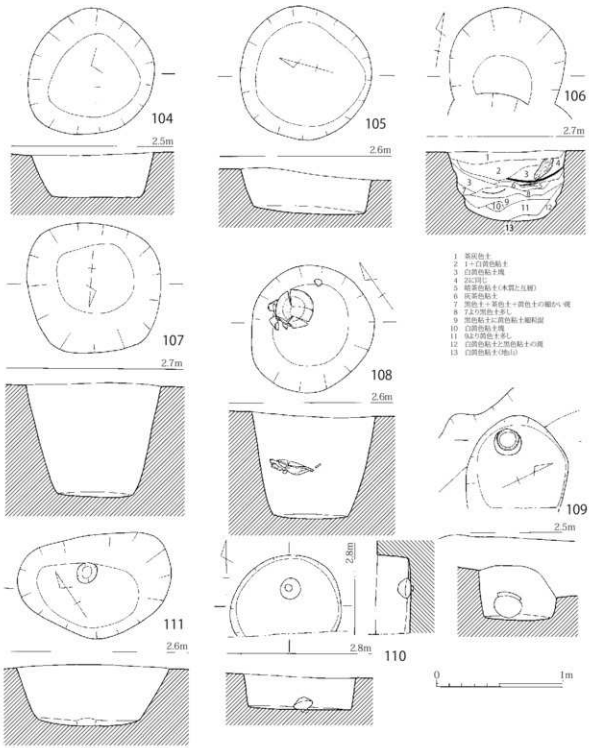
調査区中央に位置し、77 号土坑を切る。直径約 120 ㎝の円形を呈し、底面はほぼ平坦で深さは最深で約 70 ㎝を測る。土層は上層が茶灰色土中心であるが、中層に土器片と扁平な石が置かれており、その下は黄色土と黒色土の斑土になる。礎石になることも考えたが、他に同様の遺構が確認できなかった。



第 84 図　93 ～ 98 号土坑出土土器実測図（1 は 1/6、他は 1/4）



第85図　99・101～104号土坑出土土器実測図（1/3）



第 86 図　104 ～ 111 号土坑実測図 (1/30)

出土遺物（第 85 図 1 ～ 5）

1・2 は袋状口縁壺。1 は口縁部片で、外面口縁部付近は工具ナデ、以下はタタキをハケ調整で消す。2 は口縁部を欠き、頸部と胴部に断面三角の凸帯を廻らせてキザミを施す。外面はタタキを細かいハケメで消し、内面は原体の異なる粗いハケメで調整する。3 は壺の胴部で、外面はミガキ、内面は強いナデで、内外面とも丹塗りを施す。4 は鉢か。外面は工具によるナデ上げで、頸部外面と口

縁部内面に指圧痕が廻る。5は器台で、内面に工具痕が認められる。

100号土坑（第83図）

調査区南部北西寄りに位置し、58・90号土坑に切られるが、90号内でプランを確認した。直径120㎝前後の円形を呈すると思われ、底面はほぼ平坦で深さ約40㎝を測る。埋土は上層中央に茶灰色土があったが、下層は灰色粘土の単一層である。

101号土坑（第83図）

調査区南部南寄りに位置し、1号溝に切られる。一辺110㎝前後の隅丸方形を呈する。底部はレンズ状を呈し、深さは最深で約60㎝を測る。埋土は黒色土と黄色土と白黄色粘土の斑土である。

出土遺物（第85図6～8）

6は壷の底部で器壁が厚い。外面はナデでハケメを消す。7・8は単純口縁の鉢。7は外面下位と内面のハケメをナデによって消す。8は大型品で、外面はナデ、中位は工具によるナデである。外面が被熱赤変する。

102号土坑（第83図）

調査区西側拡張部に位置し、68号土坑に切られる。直径70㎝前後の円形を呈すると思われ、底面は平坦で深さ約55㎝を測る。埋土は上層約30㎝が茶灰色土、下層は軟質の黒色粘土で細かい木質が多数含まれていた。

出土遺物（第85図9～12）

9は口縁の小さい広口壷で、底部は平底を呈する。内面は板状工具によるナデ調整。10・11は単純口縁の鉢。10は外面をケズリ後ナデ調整し、内面は工具ナデで当たりが顕著である。11は外面のハケメをナデで消す。12は器台で、屈曲部は上位にあると思われる。

103号土坑（第83図）

調査区西側拡張部に位置し、調査区外に広がる。長軸約170㎝、短軸50㎝以上を測り、底面はレンズ状を呈して最深で約40㎝を測る。埋土は上層が黒色土で、以下は黒色土と黄色土と白黄色粘土の斑土が入る。

出土遺物（第85図13）

13は広口壷口縁部小片で、端部が肥厚してキザミを施す。

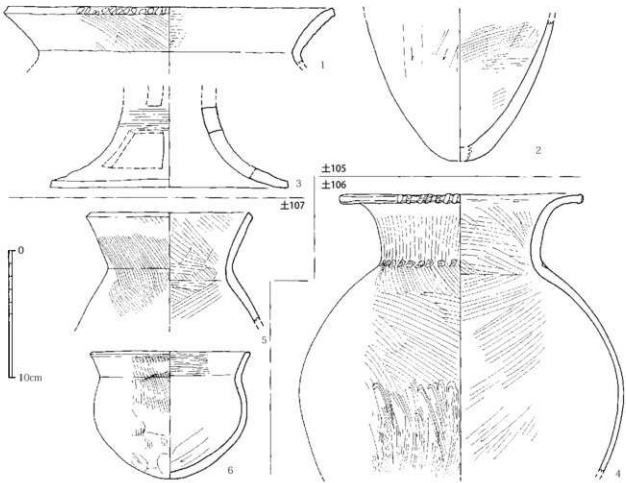
104号土坑（第86図）

調査区中央北寄りに位置し、105号土坑と隣接する。直径100㎝前後の円形を呈し、底面は平坦で深さは約35㎝を測る。埋土は上層が茶灰色土で、以下は黒色土と黄色土と茶色土の斑土である。

出土遺物（図版63、第85図14・15）

14は広口壷で、端部が肥厚してキザミを施す。15は底部片で、内面は工具の当たりが顕著である。

105号土坑（図版42、第86図）



第 87 図　105 ～ 107 号土坑出土土器実測図 (1/3)

調査区中央北寄りに位置し、104 号土坑と隣接する。直径 110 cm前後の円形を呈し、底面はややレンズ状で深さは最深で約 35 cmを測る。埋土は 104 号土坑同様茶灰色土と斑土である。

出土遺物（第 87 図 1 ～ 3）

1・2 は甕。1 は口縁部片で端部にキザミを施す。2 は器壁が厚く、外面を工具ナデで調整し、底部付近に僅かに指圧痕が認められる。内底部付近はナデ。3 は筑後地域に特徴的な器台で、裾が大きく広がり透かしを有する。透かしの間にはカキメが廻る。

106 号土坑（図版 42、第 86 図）

調査区中央西寄りに位置し、7 号土坑を切るが、掘り誤って一部を欠く。直径約 90 cmの円形になると思われ、底面は平坦で深さ約 50 cmを測る。埋土は上層が茶灰色土に白黄色粘土塊が入り、崩落と思われる塊もある。中層との間には暗茶色粘土と木質の薄い互層があり、暗茶色粘土も木質の腐蝕かも知れない。中層は黒色土と黄色土と茶色土の斑土で、下層は軟質の黒色粘土に黄色土粒が混入する。

出土遺物（第 87 図 4）

4 は広口壷で、端部が肥厚して大きなキザミを廻らせる。肩部に丸い刺突文が廻り、外面上位は

粗いハケメ、下位は細かい折り返しのナデで調整する。内面は粗いハケメ調整。

107 号土坑（図版 42、第 86 図）

調査区南側西寄りに位置し、直径 100 cm前後の円形に近い隅丸方形を呈する。深さは 100 cm前後とやや深く、壁は上方に開きながら直線的に立ち上がり、底面は平坦になる。埋土は上層 30 cmが黒茶色土のみで、以下は黒茶色土と基盤土である白黄色粘土の互層の堆積である。

出土遺物（第 87 図 5・6）

5 は細身の広口壷口縁部で、屈曲部内面にナデによる面を有する。6 は小型の甕で、外面下位はタタキ後粗いケズリを行い、それをナデ消す。内面は工具によるナデ調整。

108 号土坑（図版 43、第 86 図）

調査区中央西寄りに位置し、11 号土坑を切る。直径約 100 cmの円形を呈し、底面は平坦で深さは約 80 cmとやや深い。埋土は上層が黒色土と黄色土と茶色土の斑土で、下層は白黄色粘土に黒色土が混入する。上層の最下位から高坏が出土している。

出土遺物（第 88 図 1 ～ 8）

1 ～ 4 は甕。3・4 は口縁端部が肥厚して、3 はキザミを廻らせる。いずれも内外面共にハケ調整で、2 は胴部中位からナデでハケメを消す。5 ～ 7 は高坏。5 は長い屈曲口縁のもので、坏部は内外面ともハケ調整後に放射状の暗文風にミガキを施す。外面上半は器壁に凹凸が有り、ミガキも粗く工具痕が残る。屈曲部は部分的に横位のミガキを施す。内面の段には暗文施文時の工具の当たりが刺突文状に廻る。脚部は上位をミガキ調整し、下位は内外面とも細かいハケ状の工具ナデを施して丁寧に整える。6 も同様の器形で調整も近似する。外面上位の暗文はより丁寧である。7 は脚裾部のみで、外面にミガキを施す。

109 号土坑（図版 43、第 86 図）

調査区北端に位置し、8 号溝に切られる。直径約 80 cmに円形に復元でき、底面は平坦で深さ 40 cmを確認した。埋土は軟質の黒色粘土の単一層で、底面から完形に復元できる甕がメロン・ヒョウタンの種子と共に出土した。

出土遺物（図版 61、第 88 図 8）

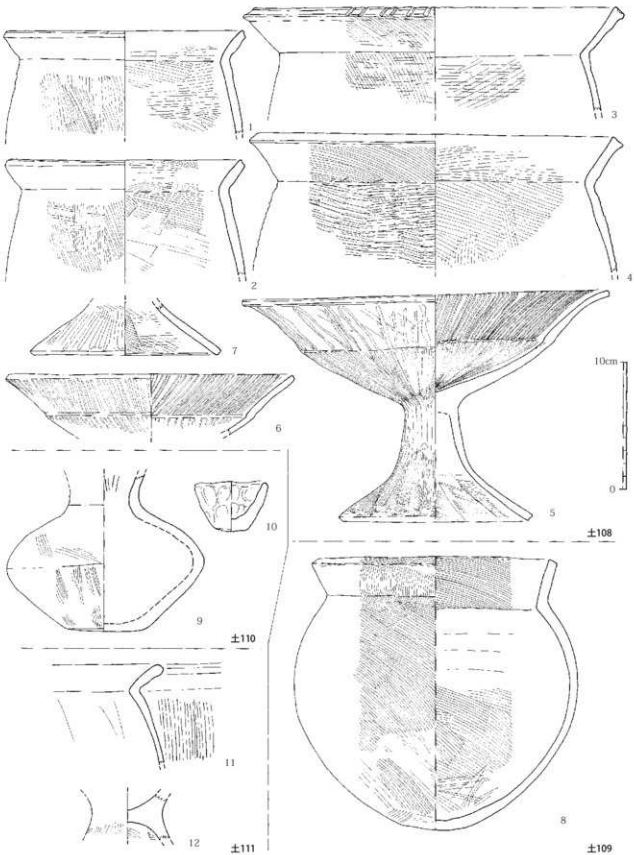
8 は甕で、胴部は球形を呈し、外底部は板ナデによって小さな底部を作る。胎土が精緻で作りが丁寧である。

110 号土坑（図版 44、第 86 図）

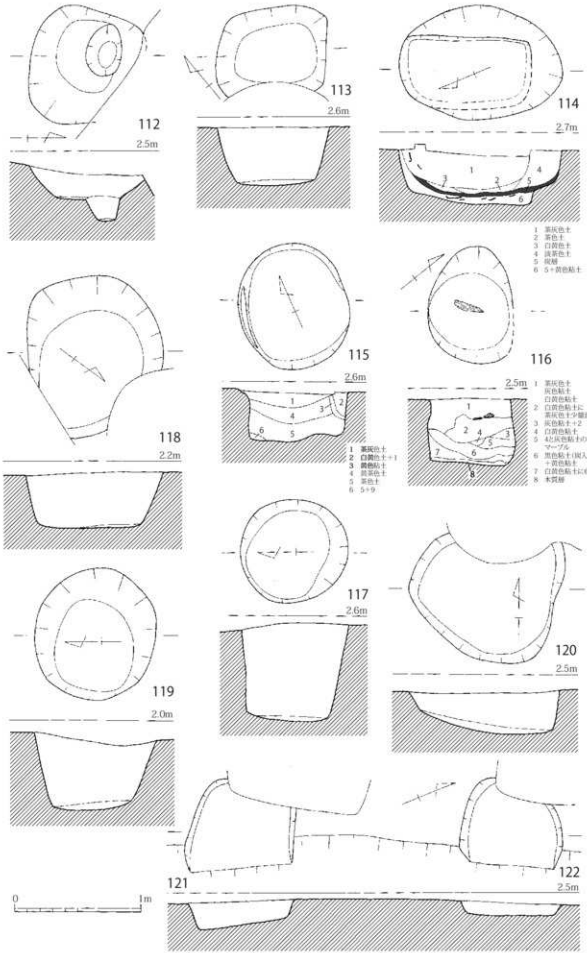
調査区西拡張部に位置し、調査区外に広がる。直径 115 cm前後の円形に復元でき、底面は平坦で深さ約 30 cmを測る。埋土は黒色土と茶色土と黄色土の斑土で、口縁の割れた長頸壷が逆位で底面に刺さった状態で出土した。

出土遺物（図版 63、第 88 図 9・10）

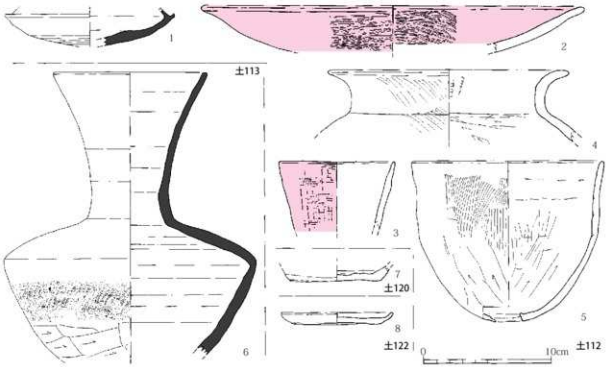
9 は長頸壷の胴部で、頸部内面に工具痕が残り外面にハケメが残るが、マメツが激しくその他は調整不明。10 は手捏ねのミニチュアの鉢で、器壁が厚く指圧痕が顕著である。



第 88 図　108 ～ 111 号土坑出土土器実測図 (1/3)



第 89 図　112 ～ 122 号土坑実測図 (1/30)



第 90 図　112・113・120・122 号土坑出土土器実測図 (1/3)

111 号土坑（第 86 図）

調査区中央北寄りに位置し、4 号掘立柱建物跡を切る。長軸約 120 cm、短軸約 60 cmを測り、底面はレンズ状を呈し、深さは最深で約 50 cmを測る。埋土は黒色土と茶色土と黄色土の斑土である。

出土遺物（第 88 図 11・12）

いずれも甕。11 の口縁部片は内面はケズリ後にナデ調整。12 は台付き甕の台部で、甕部内底にススコゲが付着する。

112 号土坑（第 89 図）

調査区北部北寄りに位置し、4・8 号溝に切られる。一辺 100 cm前後の不整隅丸方形を呈し、北側にピットを有する。深さはテラス部が約 20 cm、ピット部が約 40 cmを測る。埋土は黒色土と茶色土と黄色土の斑土で、ピット部分は青灰色粘土に黒色土が混入する。

出土遺物（第 90 図 1 ～ 5）

1 は低平な須恵器坏身で、口縁端部を欠く。

2 ～ 5 は土師器。2 は高坏口縁部で、内外面とも丹塗りと細かいミガキを施す。3・4 は壺。3 は広口壺口縁部片で、外面はヨコナデ→タテケズリ→ミガキの順で調整して丹塗りを施す。4 は外面はナデでハケメを消す。内面のケズリは強く屈曲部の稜が明瞭である。5 は甑で底部に孔を 1 個有する。器壁が薄く粘土の継ぎ目が顕著で、外面下半と内面をケズリで調整する。

113 号土坑（第 89 図）

調査区南部北寄りに位置し、9号土坑を切るが掘る順を誤っている。長軸約90㎝、短軸60㎝以上の隅丸長方形を呈し、底面はややレンズ状で深さ50㎝弱を測る。埋土は黒色土中心で若干白黄色粘土塊が混じる。

出土遺物（図版63、第90図6）

6は須恵器の長頸壺で、肩部の稜は明瞭である。体部中位外面に平行タタキが残り、底部付近は手持ちヘラケズリを施す。この他に投弾が出土している。

114号土坑（第89図）

調査区南部西寄りに位置し、長軸約130㎝、短軸約90㎝を測る。底面はほぼ平坦であるが段を有し、深さは最深で50㎝弱を測る。埋土は茶灰色土と茶色土が中心で、底面やや上には炭層が堆積する。最下層は炭層に黄色土と土器片が混入する。壁や底面に被熱の痕跡は認められない。

115号土坑（図版44、第89図）

調査区南部東寄りに位置し、調査軸約10㎝、短軸約80㎝の楕円形を呈する。底面はやや凹凸があり、深さは最深で約40㎝を測る。埋土は茶灰色土と黄色粘土と黄茶色土のレンズ状体積である。

116号土坑（図版44、第89図）

調査区南部西寄りに位置し、62号土坑と隣接する。長軸約90㎝、短軸約40㎝の不整楕円形を呈し、底面は平坦で約50㎝を測る。埋土は上層が茶灰色土と灰色土と白黄色粘土の斑土で、中層に炭が混入する黒色粘土が入る。下層は基盤土の白黄色粘土に黒色粘土が混入し、底面には木質が敷かれたように出土した。礎盤式柱穴の構造と近似しているが、木質が厚く、炭が入るなど様相が異なり、また横木の痕跡も認められないことから、77号土坑等と同類と考える。

117号土坑（第89図）

調査区中央に位置し、77号土坑を切る。直径約85㎝の円形を呈し、底面はレンズ状を呈して最深で約80㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

118号土坑（第89図）

調査区南部中央に位置し、8号土坑を切るが掘る順を誤って一部を欠損する。直径120㎝前後の不整円形を呈し、底面は平坦で深さ約45㎝を測る。埋土は上層が茶灰色土で、以下は黒色土と茶色土と黄色土の斑土である。

119号土坑（図版45、第89図）

調査区中央北寄りに位置し、15号土坑を切るが掘る順を誤ってプランの一部を欠く。直径100㎝前後の円形または楕円形に復元でき、埋土は上層が茶灰色土で下層は黒色粘土中心である。

120号土坑（第89図）

調査区中央北寄りに位置し、47号土坑を切るが掘る順を誤って一部を欠損する。直径120㎝前

後の不整円形に復元でき、底面は東が深くなり、最深で約 30 cmを測る。埋土は黒色土と茶色土と黄色土の斑土である。

出土遺物（第 90 図 7）

7 は糸切り底の皿の底部片で、板状圧痕はない。

121 号土坑（第 89 図）

調査区南部南寄りに位置し、1 号溝に切られる。深さは最深で約 20 cm、埋土は茶灰色土の単一層である。形状や深さ、位置から 122 号土坑とセットになると考えるが、性格は不明である。

122 号土坑（第 89 図）

調査区南部南寄りに位置し、1 号溝に切られる。深さは最深で 10 cm強で、埋土は茶灰色土の単一層である。形状や深さ、位置から 121 号土坑とセットになると考えるが、性格は不明である。1 号溝と時期や埋土が同じであることから、溝に伴うものであることも考えられる。

出土遺物（第 90 図 8）

8 は糸切り底の扁平な小皿で、板状圧痕が付く。

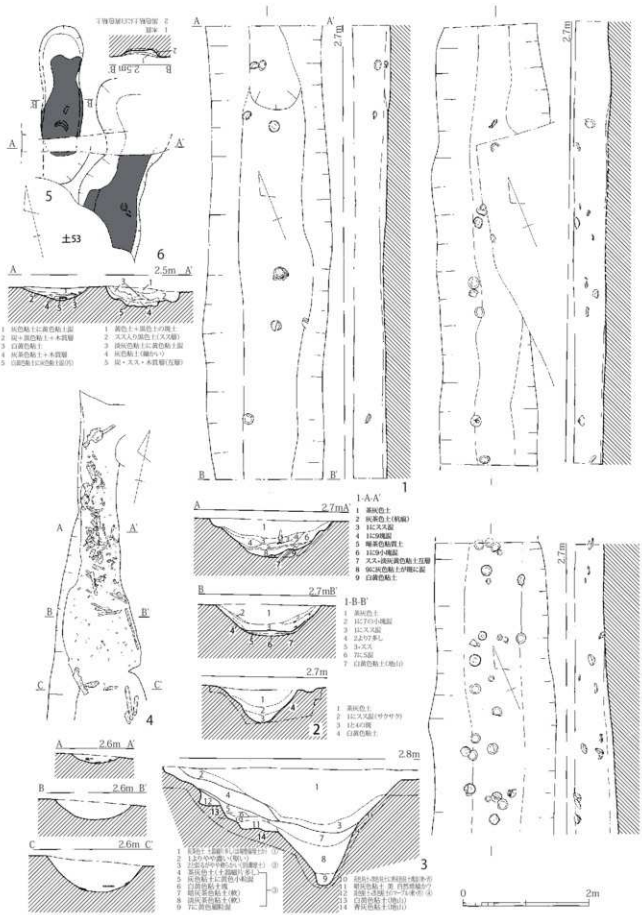
(3) 溝

今回の調査では弥生時代と中世の大小の溝を 8 条検出した。この内 1・2 号溝は直接的でほぼ直角に配置し、1 条は円形周溝である。

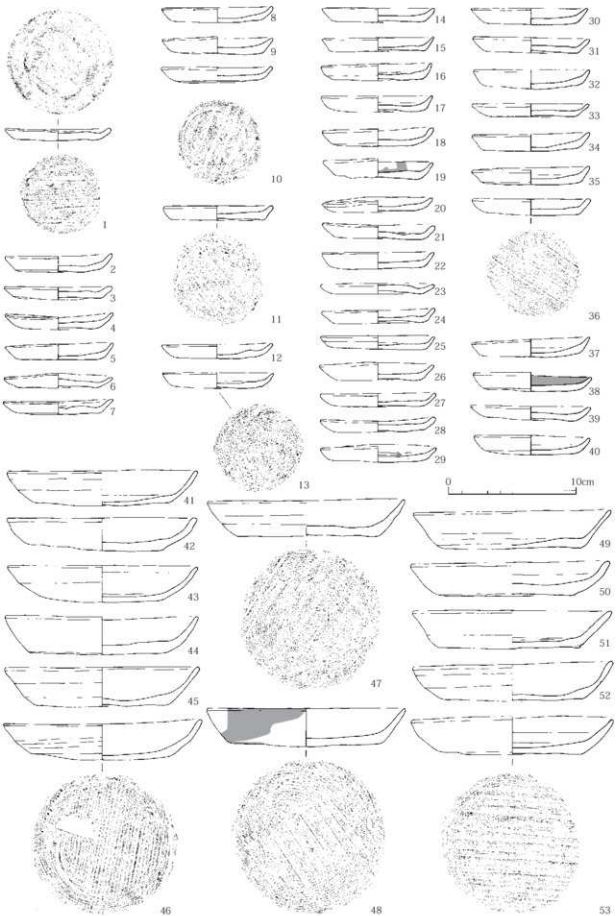
1 号溝（図版 45、第 91 図）

調査区西半部を北東南西に縦断する直線的な溝である。幅は一部壁面の崩落や削平による差異はあるが、約 1.6 ～ 2.0 mで、北側は区外に延びるが南側は調査区内で終了し、延長 27.2m を検出した。断面は半円形で、深さは中央部（土層図 A－A'）が最深で約 60 cmを測るが、浅い部分は 50 cm も残らない。埋土は大きく上層・下層・中層と分けられ、上層は茶灰色土の単一層で、中・下層はこの茶灰色土にススや基盤土が混入する埋土で、大きく時期差があるとは考えられない。この茶灰色土は、関連すると考えられるⅠ地点で検出した 1 号溝（以後Ⅰ -1 号溝と記す）上層でも確認しているが、報告書では「黒茶色土」としていた。今回の調査で検証したところ、「黒茶色土」は「茶灰色土」にさらに上層の「黒色土」の細粒が混入していたものであり、今回改めて「黒茶色土」と「茶灰色土」が同じ層であるを確認した。この茶灰色土はⅠ・Ⅱ地点全域を覆う中世の包含層で、包含層の項で後述するが、中世の整地層であると考えられる。1 号溝の埋土はいずれの層もこの整地土である「茶灰色土」主体であり、整地時にほぼ一括で埋められたものであろう。また、Ⅰ -1 号溝同様、埋土中には土師器や瓦器などが多量に廃棄されていたが、層によって時期差は認められない。但し、最下層の灰色粘土の堆積は使用時のものと思われるが、今回の調査区ではこの層から出土した土器はほとんどなかった。

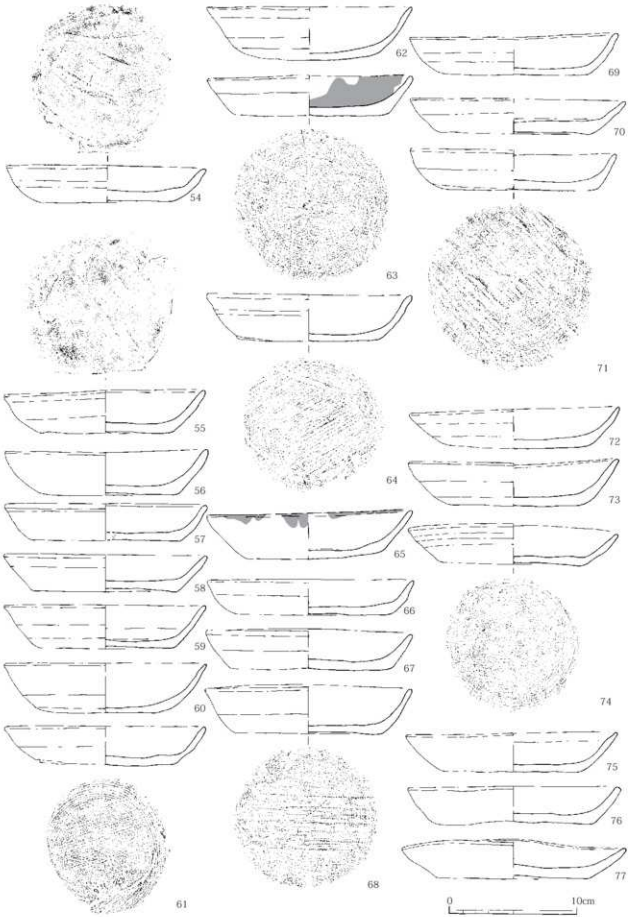
溝の底面は凹凸はあるものの南北で大きく深さは変わらず、南側端部は緩やかな傾斜で立ち上がって終わる。この部分は直交する 2 号溝との交点になり、橋脚状の通路になっていたようである。また調査区内に接点はないが、Ⅰ -1 号溝・Ⅱ -2 号溝と直交する位置関係にあり、これらが一連のものと考えると 1 号溝の長さは約 150m となり、コの字の配置になる。



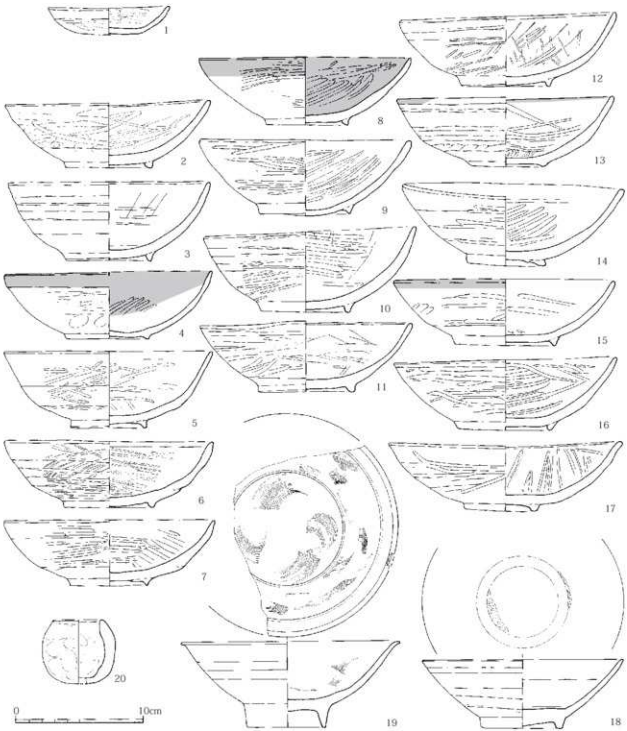
第 91 図　1・3 ～ 6 号溝実測図、2 号溝土層断面図（1/60）



第 92 図　1 号溝出土土器実測図① (1/3)



第 93 図　1 号溝出土出土土器実測図② (1/3)



第 94 図　1 号溝出土瓦器・陶磁器実測図 (1/3)

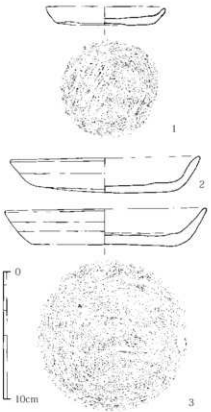
出土遺物（図版 63・64、第 92 ～ 94 図）

第 92・93 図はすべて糸切り底の土師器。ほとんどの外底部に板状圧痕が認められる。圧痕は大きく 2 種類あり、1 種は板と見られる木目状の圧痕で、他種は葦のような茎状のものを綴ったスダレ状の細い圧痕である。拓本での観察は難しいが、後者は 5 ㎜前後間隔と前者に比して規則的である。これらの違いは器形や胎土に連動しないが、今後出土資料の増加により観察が必要と思われる。

1～40は小皿で、口径8.2～9.4㎝、器高0.8～1.5㎝、底径6.6～8.1㎝を測る。13・25以外はすべて板状圧痕を有し、7・38はスダレ状の圧痕を有する。1・3・12・17・23・25・36は外底部が被熱赤変し、19・38は内面に油煙が付着する。また、内外面ともナデ調整がほとんどだが、11・12・16・21・25・26・29・31・34・36・37は水引き状のナデ（1の拓本）の痕跡が認められる。

41～77は坏で、口径15.0～17.7㎝、器高2.6～4.2㎝、底径10.5～12.0㎝を測る。60・62以外は板状圧痕を有し、47・59は外底部が被熱赤変し、48はススが付着する。48・62・65・74は体部内外面に油煙が付着する。また、60・62は他資料と異なり底部が丸みを持ち深さが深い。これらは最下層の出土である。

第94図1～17は瓦器。1は小皿で、口縁部に油煙が付着し、外底部に板状圧痕を有する。2～17は碗。いずれも内外面をミガキ調整するが、2・6・8・9・12・13・14・16・17は内面のミガキを波状文状に施し、3・6・9・12・13・14・15・17は外面の全面にミガキを施さず、ナデによる凸部分のみに施す。3は内面にミガキ以外の工具痕があり、外面は高台より上まで糸切りと板状圧痕がつく。12・16も板状圧痕が認められる。4・8は内面と外面口縁部付近のみ燻しをかける。6・7・8・10・12は体部下位の器壁が厚く、粘土接合痕が顕著である。



第95図　2号溝出土土器実測図（1/3）

18・19は磁器。18は白磁の碗で、高台はやや高く、体部はやや内湾する。内底部を輪状に掻き取って露胎とし、体部下位から外底部も露胎である。体部内面中位には沈線が1条廻り見込みに砂目がつく。Ⅷ類か。19は同安窯系の青磁碗で、高い高台を有し、体部はやや内湾しながら立ち上がり端部が外反する。内面に櫛目文を描き、口縁の一部に窯着による欠損が認められる。釉はやや灰色味を帯びる。20は手捏ねの鉢で指圧痕が顕著である。

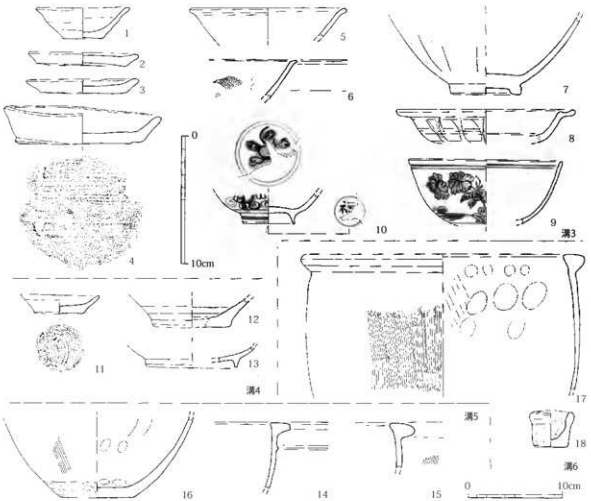
この他に石庖丁、石鍋、石鍋転用品が出土している。

2号溝（図版46、第91図）

調査区南側を縦断する直線的な溝である。幅は1.3mのほぼ均一で、約4.6mを検出した。断面は逆台形で、深さは60㎝前後である。埋土は上層が茶灰色土の単一層、中層以下も茶灰色土にススや基盤土が混入するもので、1号溝と同様である。これらも一括で埋められたと考える。また、1号溝との交点になる東側は緩やかな傾斜で立ち上がって橋脚状になる。出土遺物は少ない。

出土遺物（図版64　第95図）

すべて糸切り底の土師器。1は小皿で、外底部に単位の細い板状圧痕が認められる。2・3は坏で、いずれも外底部に太い単位の板状圧痕が認められる。2は体部が水引き状のナデ調整。



第96図　3～6号溝出土土器実測図（14～18は1/4、他は1/3）

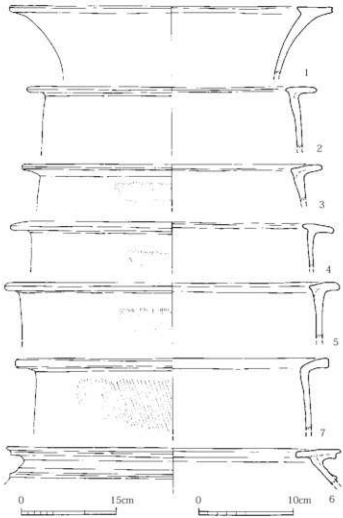
3号溝（図版46、第91図）

調査区東側を北東-南西に縦断する溝で、調査区南側北部で調査区外に出て、東拡張部で再度検出した。残りの良い南側では東肩が調査区外にあり、深さを確認するために掘削したところ、急激に深くなるとともに調査区壁面が崩れ始めたため、一部を除き掘削を断念した。東拡張区でトレンチを設定して土層の確認は行い、掘削できる部分は調査して遺物を採集した。トレンチで確認した埋土は、上層は灰茶色土に鉄分と土器砕片が混入する層で、耕作土に似るため一括埋土と思われる。その下に中世前期の整地層と思われる茶灰色土が入ることから、これ以下が整地以前の溝である。埋土の状況、断面形状はⅠ-2号溝と近似する。また、南側ではある段階で焼土が大量に廃棄されている状況を確認した。溝東肩から落とされたような状況で、火災などの可能性も考えられる。

出土遺物（図版64、第96図1～10）

1～4は糸切り底の土師器で、すべて板状圧痕が認められる。1～3は小皿で、1は小皿bと呼ばれる深いもの。口縁が広く直線的に立ち上がり、水引き状のナデで調整される。2・3は扁平な小皿aで、通常のナデで調整し、2は外底部が被熱赤変する。4は坏で歪みが大きい。内底部が被熱赤変する。5～10は磁器。5・6は白磁碗小片で、5は口禿で乳白色の釉は薄い。6は嘴状の端部を有し、内面に櫛目文を施す。釉は光沢のない乳白色でやや青味を帯びる。Ⅷ類か。7・8は青磁で、

7は龍泉窯系の碗。外面に外片彫り蓮弁を描き、釉は厚く緑黄味を帯びる。8は坏で、口端部を屈曲させて平坦でやや窪ませて作り、端部は厚く肥厚する。体部外面には線刻の蓮弁を描き、内面見込みには1条の界線を廻らせる。釉は淡い緑色でやや青味を帯びる。9は肥前系の染付碗で口縁内外面に2条の界線を廻らせ、外面には鉢に植わった芙蓉の花文を描く。10は明の青花碗で、外面には高台に2条の界線を廻らせ、体部に唐草を描く。内面は見込に2条の界線を廻らせて花文を描く。底部は上方に膨れ、外底部には1条の界線の中に「福」の文字を描く。この他に投弾が出土している。



第97図　7号溝出土土器実測図（6は1/6、他は1/4）

4号溝（図版46、第91図）

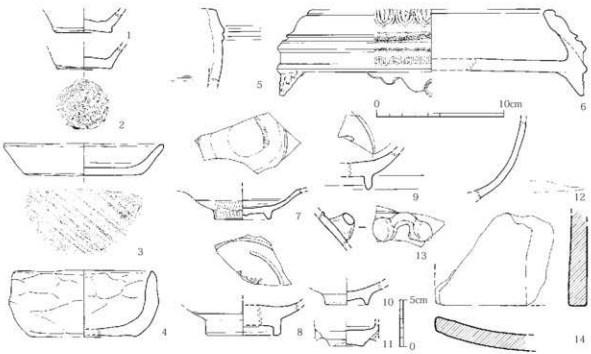
調査区北側を北西-南東に縦断する直線的な溝で、南側は調査区外に延びる。幅は最大で115㎝で、南に向かって深くなる。延長5.2mを確認し、断面は半円形で、北側は削平されて深さ10㎝も残存せず、南側では約60㎝残存していた。溝の底には一面に木の皮のような木質が敷き詰められ、南側の東法面の一部には板が張り付いたように並んでいた。底面にも板が多数散乱していたことから、板による護岸がなされていたと考えられる。また地形的に東に向かって低くなることから、調査区外南東の低地に向けて水が流れていた状況と考えられる。

出土遺物（第96図11～13）

11・12は糸切り底の土師器で、いずれも板状圧痕はなく、体部が被熱赤変する。13は白磁碗底部で、高台は薄く畳付きのみ露胎となる。

5号溝（図版47、第91図）

調査区中央北側に位置し、6号溝と隣接する。5・6号溝及び85号土坑付近は淡灰色粘土が溜まった状態で、平面プランの確認が困難であり、わずかに検出した長楕円形の土坑状の平面プランと、土層の堆積状況から考えて溝と判断した。平面で確認できたのは延長2.5m、幅70㎝前後で、北を削平され、南は53号土坑に切られる。断面は半円形を呈し、深さは深い部分でも20㎝程度である。底面付近には木質層と炭・スス層、腐食土層の薄い互層がある。最下層には一部板片が残り、基盤土に灰色粘土が混じるやや汚れた粘土が僅かに認められた。木質は底に敷かれた可能性が高い。



第 98 図　8 号溝出土土器実測図（14 は 1/4、他は 1/3）

出土遺物（第 96 図 14 ～ 16）

いずれも弥生土器。14・15 は甕口縁部小片で、14 は口縁部下に凸帯を 1 条廻らせ、外面が被熱してススが付着する。16 は底部片で、外底部付近にミガキを施し、内面は工具によるナデ調整、一部指圧痕が認められる。

6 号溝（図版 47、第 91 図）

調査区中央北側に位置し、5 号溝と隣接する。5 号溝で記述したようにプランの検出が困難で、不整形であるが、平面プランと層の堆積状況から溝と判断した。平面で確認できたのは延長 2.9m、幅 70 ～ 100 cmで、北を 120 号土坑に切られ南を 53 号土坑に切られる。断面は上層にススの大量に混入した黒色土層が厚く堆積し、底面には 5 号溝と同様に炭・スス・木質の細かい互層が堆積する。この層は全面に認められることから、木質が底に敷かれた可能性が高い。

出土遺物（図版 64、第 96 図 17・18）

17 は甕上位片で、頸部屈曲部と内面上位に指圧痕が顕著である。18 は手捏ねのミニチュアで、内外面をナデ調整するが、外面の一部に工具痕が認められる。

7 号溝

調査区中央東寄りに位置する円形周溝で、円周の約 3/4 を検出した。38 号他多数の土坑に切られる。深さは約 10 ～ 50 cmと残りが悪く、断面は半円形で埋土は淡灰色粘土の単層である。周溝内部には同時期の遺構は認められず、性格は不明である。

出土遺物（第 97 図）

全て弥生土器。1 は広口壺口縁で、すべてナデ調整。2 ～ 7 は甕。2 ～ 5・7 は外面はハケメ、内

面はナデ調整。6は甕棺と思われ、T字口縁で、頸部下に断面三角の凸帯を有する。

8号溝（図版47）

調査区北部北端に位置し、4号溝を切る遺構で、半円形のプランを確認した。形状は落ち込みであるが、Ⅰ地点の3号溝に継続する遺構であり、Ⅰ地点では「溝」としたため今回も同様に取り扱った。遺構面から約2mを掘削したが底が出ず、調査区壁が崩落し始めたため完掘を断念した。埋土上層は灰茶色土に鉄分を多量に含み、下層は軟質の黒灰色土で湧水が激しかった。溝の延長と考えると、今回調査部分が東へ曲がる南西隅にあたる。

出土遺物（巻頭図版6、図版64、第98図）

1～3は糸切り底の土師器。1・2は器高の高い小皿bで、いずれも板状圧痕はない。3は口径12.4㎝、底径9.5㎝、器高2.5㎝で、板状圧痕を有する。これらは混入の可能性がある。4は手捏ね状の土師器の鉢で器壁が厚く、内外共に粗いナデ調整。5・6は瓦質土器。5は鉢の口縁部小片で、内面は剥離する。外面口縁部には低い凸帯を2条廻らせ、内面にはハケメが残る。6は盤で、雲形の脚が3本と考えられ、口縁は内傾する。体部外面に剣菱文・渦巻き文・雷文のスタンプを廻らせ、内底は円弧を描くハケメ、外底部は横位のハケメで調整する。

7は白磁の皿で、高い高台を有する。外面下位から底部は露胎で、内面は見込の釉を輪状に掻き取る。釉はやや緑味を帯びる。Ⅲ類か。8～11は龍泉窯系の青磁。8・9は碗で高い高台を有し、見込に片彫りの文様が僅かに認められる。8は見込から外底部が露胎になり、9は高台内面側の途中から外底部が露胎になる。いずれもやや青味を帯びた釉が厚くかかる。10は小型の碗で、低い高台を有する。畳付きのみ釉を掻き取り、残存部に施文は認められない。釉は厚く暗灰色味を帯びる。11は香炉でやや上げ底になる。内面と底部が露胎で、突起が1カ所残る。釉はやや青味を帯びる。12は福建省磁竈窯の黄釉鉄彩の壺の胴部片で、内面にのみ施釉され、鉄彩は2条の細い線が認められる。13は褐釉四耳壺の耳部片である。14は平瓦小片で、内外面ともナデで調整される。その他、小片のため図化できないが、三彩が2点出土している（巻頭図版5、図版64）。同一個体と考えられ、鮮やかな濃緑色と茶色、黄色が認められ、花文らしき文様が線刻と黒色釉で描かれている。九州国立博物館の遠藤啓介氏によると、河北省磁州窯産の三彩であるとのことである。この他に石庖丁、すり石が出土している。

(4) 包含層

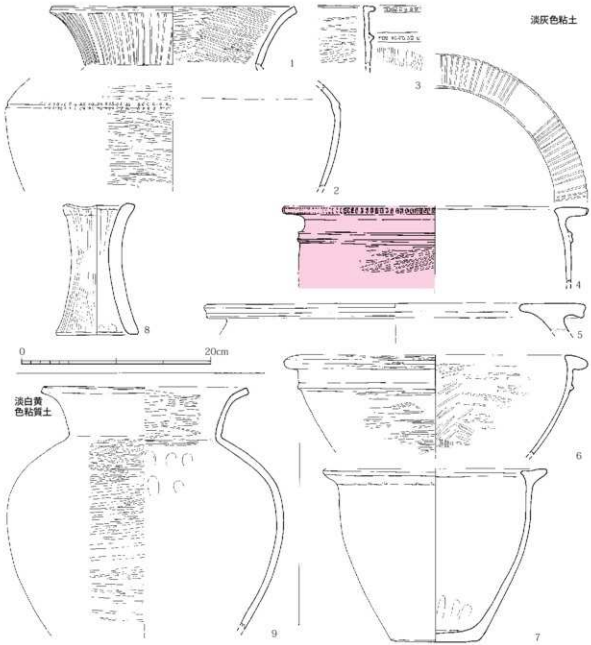
Ⅰ地点・Ⅱ地点で各時代の包含層が確認されている。両調査区に共通するものも多いことから、ここでは両地点の遺物を併せた中で、特徴的な資料を掲載する。

淡灰色粘土包含層

弥生時代中期に堆積または流れ込んだと考えられる包含層で、全ての遺構がこの包含層を切る。中期の遺構はこの包含層を切るものと切られるものがあるが、包含層自体が何度も流入しているようで、若干の分層は可能であるが出土資料の時期的な細分化は困難である。

出土遺物（図版64、第99図1～8）

全て弥生土器。1・2は壺。1は広口壺口縁部小片で、内面はミガキ、外面は縦位の暗文を施す。2は胴部中位で、色調が茶色を呈して他の土器と異なる。最大径部に一条の沈線を廻らせ、それを



第 99 図　包含層出土土器実測図① (1/4)

切るように細かいキザミを廻らせる。3 ～ 5 は甕。3 は口縁部下に断面三角の凸帯を廻らせ、口縁端部と凸帯にはキザミを施す。4 は外面丹塗りで、口縁下に断面 M 字の凸帯を一条廻らせ、口縁端部にはキザミを施し、上面に放射状の暗文を廻らせる。5 は大型甕の小片。6・7 は鉢。6 は口縁下に断面三角の凸帯を廻らせ、体部は内外面ともミガキを施す。7 は樽形鉢で、外面頸部には工具痕が残る。内外面とも丁寧なナデで仕上げ、内底部は指圧痕が残る。8 は器台で、器壁が厚く中位の締まりは弱い。この他に石剣、石庖丁、大型石庖丁、すり石、凹石、砥石が出土している。

淡灰黄色粘土包含層

淡灰色粘土と近似し、相まって堆積する包含層である。出土資料は小片が多く図化できるものが

ないが、淡灰色粘土包含層とほぼ同じ時期の土器片が出土している。その他大型石庖丁、磨製石鏃、すり石、砥石、木製部材などが出土している。

淡白黄色粘質土包含層

Ⅰ地点南部～Ⅱ地点北部の一部、淡灰黄色粘土包含層の上位に堆積する包含層で、基盤土に近似する軟質の粘質土である。厚い部分もあるが出土資料は少ない。

出土遺物（図版 65、第 99 図 9）

9 は広口壷で、口縁部内面と体部外面にミガキを施し、内面には指圧痕が認められる。この他に砥石が出土している。

灰色粘土包含層

調査区のほぼ全域に認められるが、Ⅱ地点では存在しない箇所もあった。低い部分には 10cm 以上厚く堆積しており、出土資料は多い。

出土遺物（図版 64・65、第 100 図 10 ～ 19）

10・11 は甕。10 はやや小型で器壁が厚く、内面に工具によるナデの痕跡が認められる。11 は台付き甕の底部で、台部は小さく体部は広がり気味に立ち上がる。12 は屈曲口縁の高坏で、内外面ともに暗文状の細かいミガキを施し、口縁部外面は波状文状に施す。13 ～ 17 は鉢。13 ～ 15 は単純口縁で、13 の体部下半はケズリ、内面は強いナデ調整。14 は内面に工具痕が認められる。15 は内面に暗文を施す。16・17 は屈曲口縁の鉢。16 は体部外面下位に細かいミガキを施す。17 は器壁が厚く、内面はナデだが工具痕が認められる。18 は器台で、上位に屈曲部がありロ縁は強く外反する。19 は支脚で、中空で内外面とも粗いナデ調整を施す。この他に蛤刃石斧、石庖丁、砥石、すり石、凹石、不明石製品、投弾、土錘、円盤状土製品、鹿角製の鋲が出土している。

淡黄白色粘土包含層

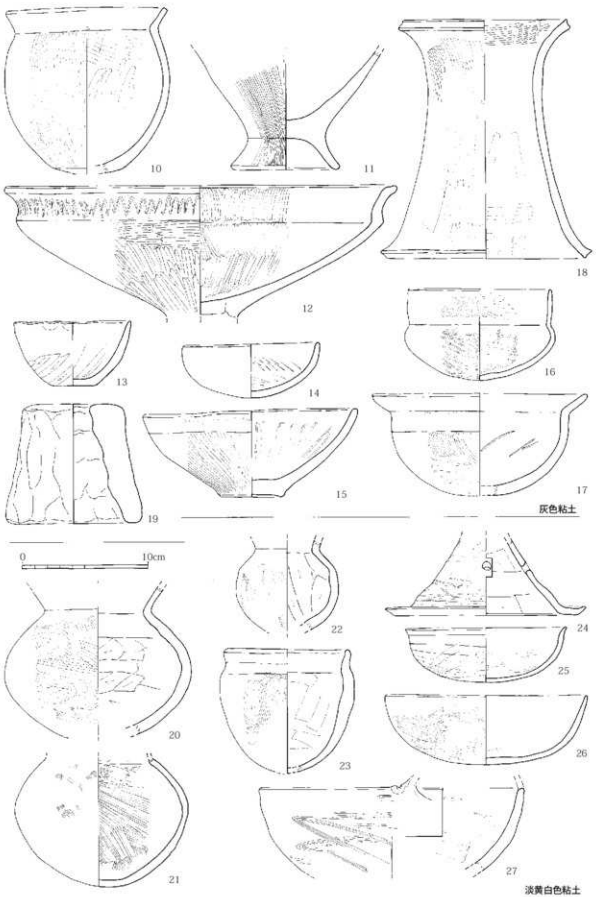
Ⅰ地点中央部の一部とⅠ地点南部からⅡ地点北部の灰色粘土の上位に堆積する。範囲が狭く出土遺物はさほど多くない。

出土遺物（第 100 図 20 ～ 27）

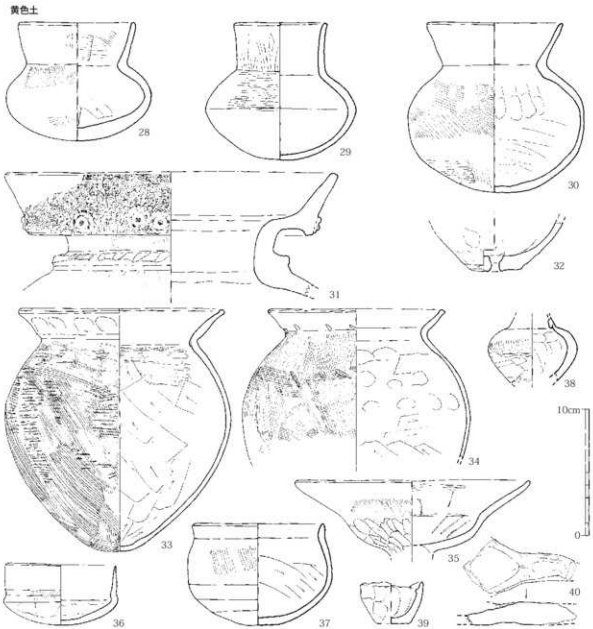
20 ～ 22 は小型の壷。20・21 は器形が似るが、20 は器壁が厚く内面をケズリ調整、21 はハケ調整を施す。22 はさらに小型で、内面を強いナデで調整するため凹凸が多い、23 は小型の甕。上位の器壁が厚く、手捏ね状で全体に器壁に凹凸が多い。24 は高坏脚部で、中位に二カ所の穿孔を有し外面はミガキ、内面はケズリで調整する。25 ～ 27 は単純口縁の鉢。25・26 は器壁が薄く、外面はナデ後にミガキ状条痕、内面は条痕状の工具痕が認められる。高温焼成によりやや須恵質になる。27 は大型の鉢で器壁が厚く、外面にミガキ状条痕が認められる。口縁の一部が突起し、剥離面から何かを貼り付けた様な痕跡が認められる。焼成時の癒着の可能性もある。

黄色土包含層

Ⅰ地点中央に厚く堆積し、礎盤式掘立柱建物跡を覆う。Ⅰ地点の南部でも一部認められた。出土資料は多く、完形品も含まれる。



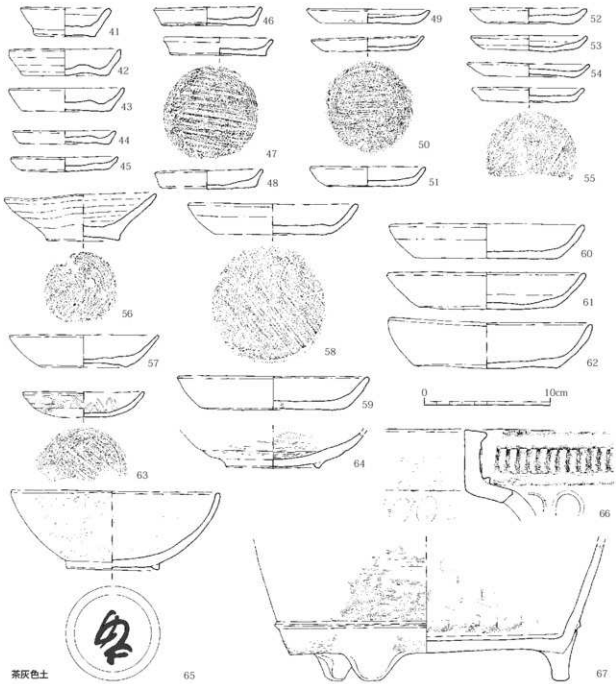
第 100 図　包含層出土土器実測図② (1/3)



第 101 図　包含層出土土器実測図③ (1/3)

出土遺物（図版 65、第 101 図 28 ～ 40）

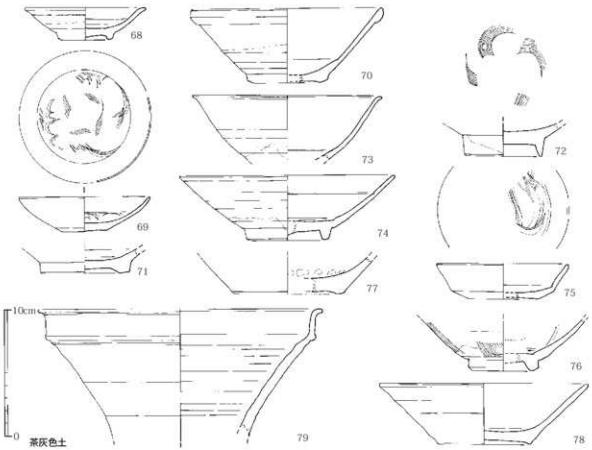
28 ～ 32 は壷。28・29 は長頸壷で、28 は器壁が厚く内底部はケズリを施す。29 は外面中位に稜を有し、口縁部と胴部上位はミガキを施すが、底部はマメツのため不明。30 の胴部内面は、強いナデ付けによって調整するため器壁が極めて薄い部分がある。31 は畿内系の二重口縁壷で、頸部には断面三角の凸帯を、口縁部には 2 個一対の円形浮文と波状文を廻らせる。32 は小型の底部片で、焼成前穿孔を有する。外面には指圧痕が残り、内面には工具痕が認められる。33・34 は甕。33 は器壁が薄く、胴部外面はタタキをハケメで消す。内面はケズリで口縁部外面に指圧痕が廻る。34 も器壁が薄く、外面の肩部と頸部にキザミが散漫に廻る。内面はケズリを施すが、中位にはそれ以前の指圧痕が残る。35 は長い屈曲口縁の高坏。体部外面をハケメ後ミガキで調整し、内面には工具痕が認められ、口縁の一部にはミガキが残る。36・37 は屈曲口縁の鉢。36 は胴部の容量は小さく、



第 102 図　包含層出土土器実測図④ (1/3)

外底部はケズリを施し内面はミガキで調整する。37 は外底部をケズリ後ナデ調整し、内面は強いナデで調整する。38・39 はミニチュア品。38 は壷形で、外面上位はハケ、下位は板状の工具でナデ調整、内面は強いナデ付けで調整する。外面は二次被熱により赤変する。39 は鉢形で手捏ねで作る。40 は柄杓形土製品の柄と思われる。全面工具使用のナデで調整する。この他にスクレイパー、扁平片刃石斧、砥石、すり石、凹石、石剣、化石、投弾、破鏡が出土している。

茶灰色土包含層



第 103 図　包含層出土土器実測図⑤ (1/3)

調査区のほぼ全面に存在し、遺構埋土上層にも入る。弥生中期～中世前期までの遺物を大量に包含し、完形品も含まれる。上面を削平されている可能性はあるが、Ⅰ地点北部の深い落ちにも厚く堆積すること、ほぼ単一層で一気に埋まっていること、この包含層以下の基盤土や遺構埋土は軟弱な粘土質であるのに対し、水分が少なく上面が安定した面となること、1 号溝がこの層で一気に埋められていることなどから、中世の客土による整地層と考えられる。

出土遺物（図版 65・66、第 102・103 図）

41 ～ 62 は糸切り底の土師器。41 ～ 55 は小皿で、口径 6.8 ～ 9.6 cm、器高 1.1 ～ 2.3 cm、底径 4.8 ～ 7.4 cmを測る。41 ～ 43 は深みを持つがその他は扁平である。41・42・46・51 以外は板状圧痕を有する。41 は器高が高く底部が小さい。42・43 もやや器高が高く、内底部はナデによる起伏が激しい。44 ～ 48 は体部と口縁部の屈曲が明瞭でその他は緩やかである。46 は内面が被熱赤変する。56 ～ 62 は坏で、口径 11.5 ～ 15.9 cm、器高 2.5 ～ 3.8 cm、底径 5.6 ～ 11.2 cmを測る。56・57・62 以外は板状圧痕が認められる。56 のみ底部が小さく口縁が広がるもので、混入の可能性もある。58 は内面が一部被熱赤変する。63 ～ 67 は瓦質土器。63 は小皿で内外面に粗いミガキを施し、外底部には板状圧痕が認められる。64・65 は埦で 64 は内外面に細かいミガキを施す。65 は内外面ともナデ調整後に粗いミガキを施し、外底部付近に工具状の痕跡がある。また、外底部に花押の様な墨書がある。66 は風炉の口縁で、外面に木の小口による刺突文を廻らせ、内面にミガキと指圧

痕が残る。67は火舎の底部で、三基の脚は低く、外底部やや上位に凸帯を廻らせる。外面はハケメ後ミガキ状条痕が認められ、内面はハケメをナデ消す。硬質で焼き締まる。

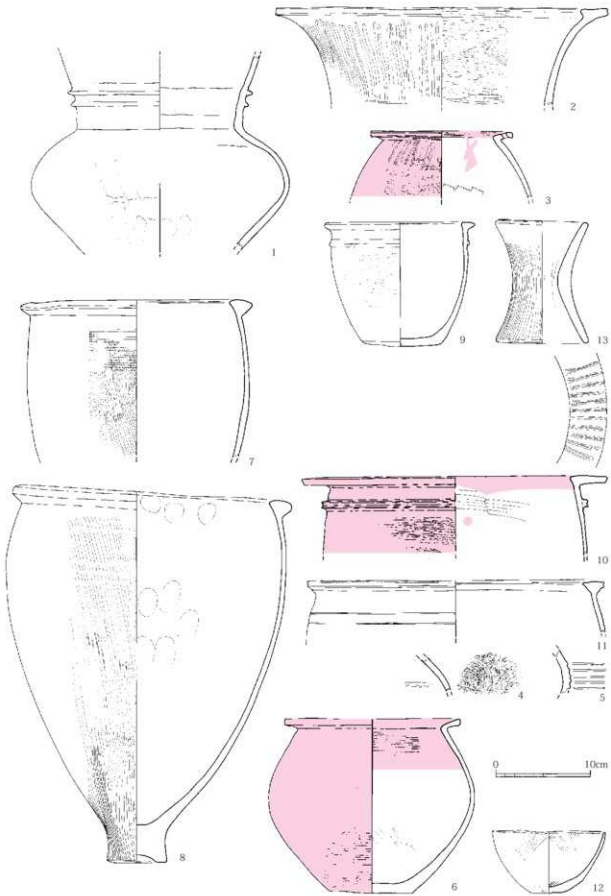
68～81は磁器。68～74は白磁で、68・69は皿。68は高台付きで内面の釉を輪状に掻き取り体部に沈線が廻る。釉はやや灰色味を帯びる。Ⅲ類。69は体部が緩やかに内湾しながら口縁に向かって薄く引き上げられる。外底部はケズリで僅かに薄い高台状につくり、平底になる。内面見込み櫛描文を描き、外底部は露胎で白色の化粧土が認められる。釉はやや灰色味を帯びる。Ⅶ類。70～74は碗。70は口縁を玉縁状に作るⅣ類の碗である。体部外面は下半は露胎で内面に沈線を1条廻らせ、低い高台を有する。71もⅣ類の底部と思われ、見込みに多量の砂目が付着する。72は高い高台を有するもので、高台は部分的に露胎になる。見込みに櫛目文を描き、釉は乳白色を呈する。Ⅴ類。73は器壁が薄く体部が僅かに内湾しながら直線的に立ち上がり、端部を屈曲させる。内面には1条の沈線があり、見込みは輪状に釉を掻き取る。高台付近は露胎で、釉はやや灰色味を帯びる。74は器壁が薄く台形の高台を有し、体部は直線的に大きく開く。体部内面に1条の沈線があり、見込みは輪状に釉を掻き取る。高台付近は露胎となり、釉は灰色味を帯びる。Ⅷ類。75～77は青磁。75は皿で、底部の器壁が薄く屈曲は強い、内面に櫛目文と片彫りの花文を描く。釉はやや灰色味を帯びる。76は同安窯系の碗で、逆台形の高台を有し内面見込みには段を有する。外面に細かい櫛描き文を、内面には片彫りの花文と点描文を描く。体部下位は露胎で、釉は緑色味が強い。Ⅰ類。77は大型の碗で、低い高台を有し、胎土は茶色味を帯びる。畳付き以外を施釉するが釉は極めて薄く、光沢がない。内面見込みには目跡が付く。78は坏で低い高台を有する。ほとんど露胎であるが、内面に僅かに緑色の釉が付着する。胎土は灰色で硬質に焼き締まる。79は陶器の壺口縁部片で、器壁が薄く口縁が強く屈曲し、端部は強く外反する。胎土は須恵質で、外面は口縁部と頸部以下に、内面は全面に鉄釉がかかる。

この他に、石庖丁、砥石、投弾、土錘、円盤状土製品、鉄鎌、不明鉄製品が出土している。

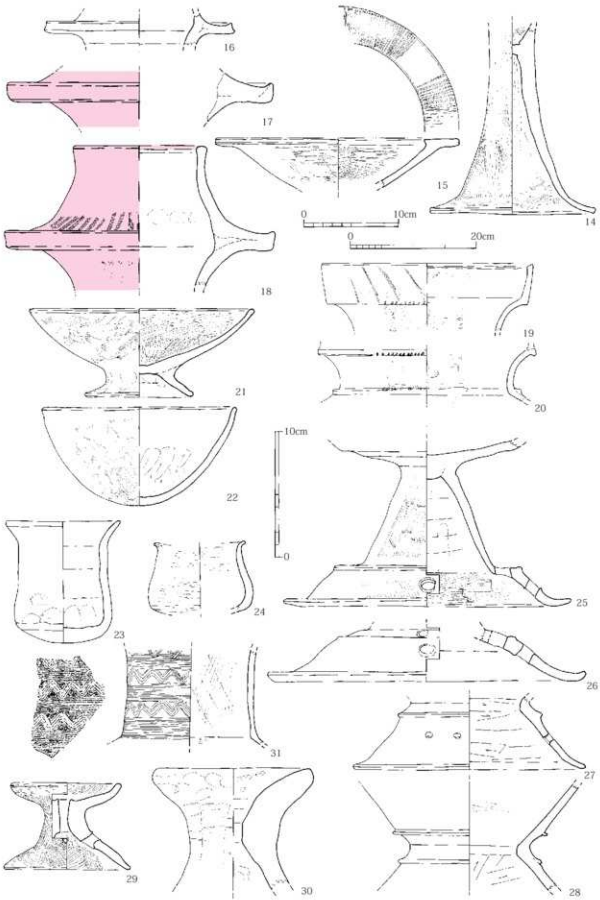
(5) その他の遺構出土遺物（図版66～68、第104～108図）

今回の調査では、整地層と考えられる茶灰色包含層を始め、溝や土坑の埋土に混入と考えられる完形品を含む土器類が大量に含まれていた。明らかに時期が異なるため遺構の時期に伴わない資料の内、調査区内で出土量が少ない器種や優品、特殊な資料について、ここでまとめて掲載する。

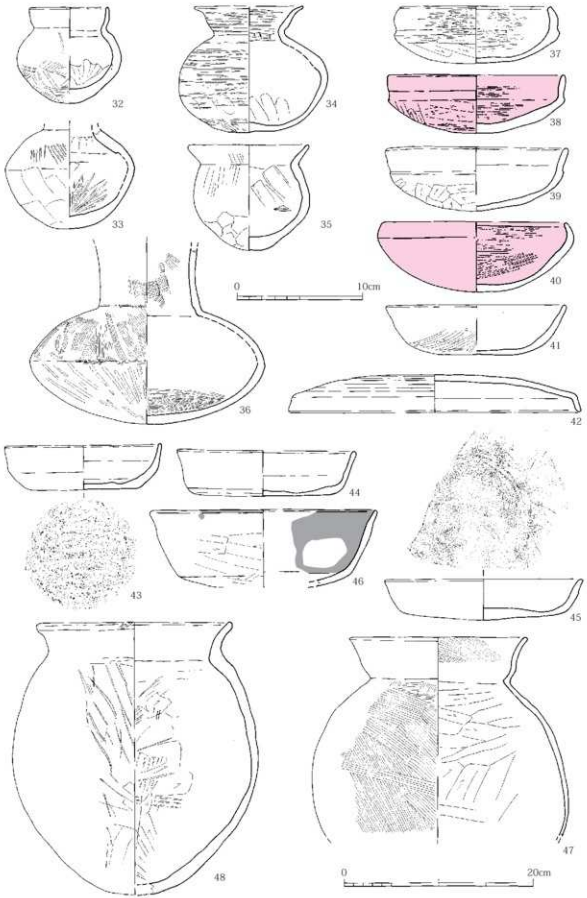
1～18は弥生土器。1～6は壷で、1は頸部に断面三角の凸帯を2条廻らせる。2は外面は暗文状に縦位のミガキを施し内面は横位のミガキを施す。3は蓋付きの壷で、口縁に穿孔がある。外面は頸部付近に暗文状のミガキを施し、胴部は丁寧なミガキで全面に丹塗りを施す。内面は口縁部のみ丹塗りで、胴部内面に丹が垂れた状態で付着する。4は肩部の小片で、貝殻条痕文が認められる。搬入品か。5は小片であるが、凸帯状の凹凸が5条認められ、壷になると思われる。4・5は胎土が他資料と異なり、形状からも搬入品と考えられる。6は屈曲口縁の低い壷で平底を有する。外面はマメツが激しいがミガキが若干残る。外面と内面頸部やや下まで丹塗りを施す。7～11は甕。7～9は断面三角の口縁を有し、7は外面上位に横位のカキメを廻らせる。8は内面に指圧痕が顕著に認められ、9は口縁下に断面三角の凸帯を1条廻らせる。外面は粗いミガキを施す。10はT字口縁の上面に暗文を施し、内外面に化粧土が認められる。11は口縁部小片で、口縁下に2条の沈線を廻らせる。12は小型の単純口縁の鉢で、内外面とも被熱赤変する。13は器台で口縁と裾の径がほ



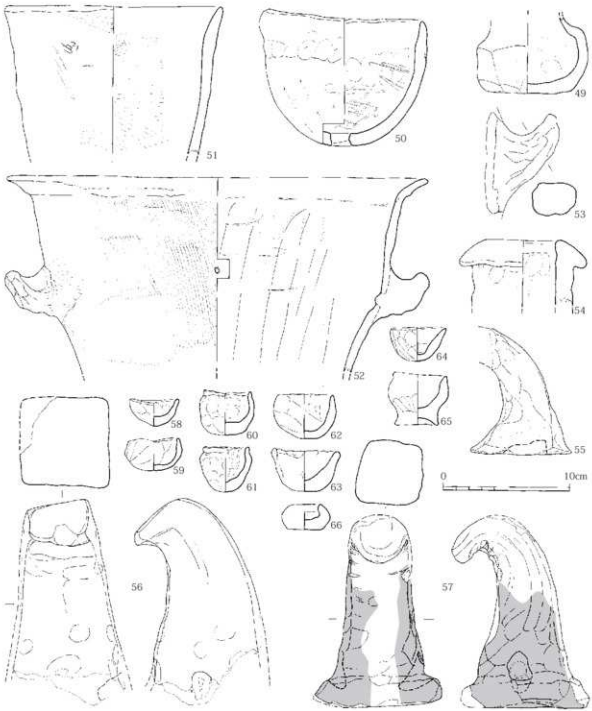
第 104 図　その他の遺構出土土器実測図①（1/4）



第 105 図　その他の遺構出土土器実測図②（16 ～ 18 は 1/4、19・20 は 1/6、他は 1/3）



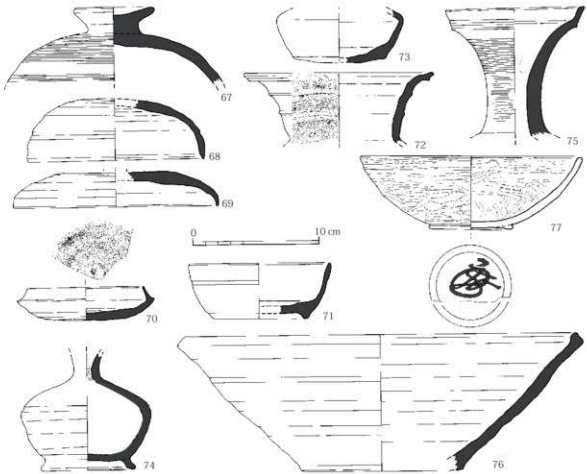
第 106 図　その他の遺構出土土器実測図③（47・48 は 1/4、他は 1/3）



第 107 図　その他の遺構出土土器実測図④（1/3）

ぼ同じである。14・15 は高坏。14 は外面上位はミガキだが下位はハケメのみである。15 は坏部のみで、内外面ミガキ調整、口縁平坦部に放射状に暗文を施す。16 ～ 18 は筒型器台。16 は口縁を欠き、図下位は透かし部分となる。丹塗りは認められないが、マメツのためかもしれない。17・18 は上面に細かい暗文が施され、外面は丹塗りを施す。

19 ～ 57 は土師器とするが、弥生土器の範疇に入るものもあるかもしれない。19・20 は壺。19 は極めて大型で、直立部外面に暗文を施し僅かに指圧痕が認められる。屈曲部にはキザミを施す。

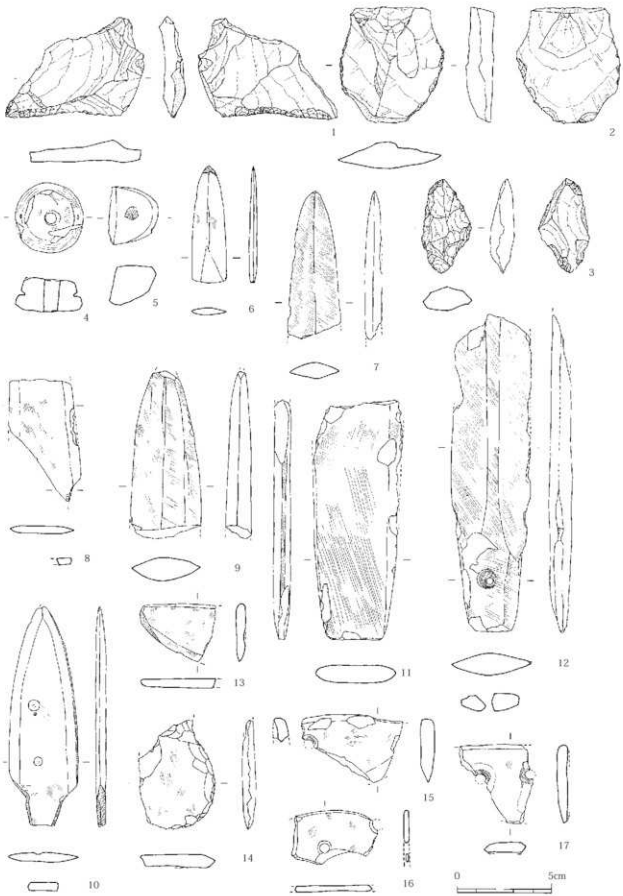


第 108 図　その他の遺構出土土器実測図⑤（1/3）

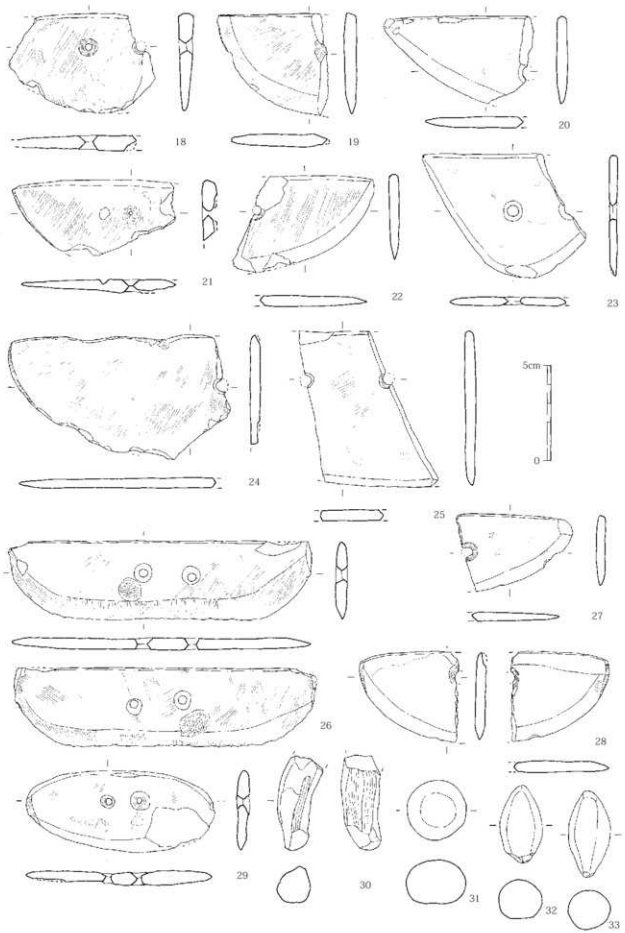
18 は頸部に断面三角の凸帯を 1 条廻らせ、凸帯と屈曲部にキザミを施す。21 は脚付き坏で、坏部外面は板状の工具ナデ、内面は密な暗文状のミガキを施す。脚部は接合時の指圧痕が顕著である。胎土が他資料と異なり赤褐色を呈する。22 ～ 23 は鉢。22 は単純口縁の深いもので、内面はケズリで工具痕が残る。23・24 は屈曲口縁の鉢。23 は小型で長胴のもので、外底部はヘラケズリ、内底部は指圧痕が顕著である。24 は口縁が屈曲しブランデーグラス状の形状を有する。器壁が薄く、外面はミガキで調整する。25・26 は裾部に段を有する高坏で、段上と傾斜部に穿孔する。25 は段上位が平坦になり、脚部は中空になる。25 は 4 カ所に穿孔があり、26 は不明である。27・28 は山陰系の筒型器台で、27 は 2 つの穿孔を有する。胎土は白味を帯び、精製品である。29 は小型精製器台で脚部に穿孔を有し、全面ハケ後にミガキを施す。30 は支脚で、器壁が極めて厚く、受け部と脚部の境が特に厚い。外面は横位のタタキ後にナデで調整し、口縁付近は指圧痕が顕著である。脚部内面は強いナデで仕上げる。31 は長頸壺頸部か。器壁が極めて薄く焼成が堅緻で、胎土は薄肌色と他に例を見ない。外面に横線・波状文の順で沈線を交互に廻らせる。32 ～ 34 は小型品。32 ～ 33 は壺形で、32 は外面の上位はハケメをナデ消すが下位は残し、内面は上位はナデで底部付近はナデ付けと上下で調整が著しく異なる。全面被熱赤変して焼き締まる。33 は胴部のみで中位に稜を持つ。胴部外面上位はハケを残して下位は工具ナデ、内面は上位をナデで下位は鋭い工具の痕跡で粗ケズリしたような痕跡が顕著である。34 は外面を粗く細いミガキで調整し、内面頸部の屈曲をケズリ調整、内底部はナデ付けで調整する。35 は甕形で、外底部はヘラケズリ、内面は工具

による強いケズリで粘土を掻き取る。36は淡肌色の精製品の長頸壺で口縁部を欠く。器壁が薄く外面上位は細かいミガキ、下位は粗いミガキで境に粗い横位のミガキを施し、内面はハケメをナデ消すが底部に残る。37～41は丸底の坏。37・38は模倣坏で、蓋の可能性もある。いずれも体部に段を有し、内外面ともミガキ調整、38は丹塗りを施す。39も僅かに段を有し蓋の可能性もある。外底部はケズリ調整。40は内面はナデ調整、外面はマメツするがミガキか。全面に丹塗りを施す。41はやや平底になるがヘラ切りは見えず、外底部付近はハケメが残る。42は大型の蓋。天井部はヘラケズリで、造作は須恵器様であり、生焼けの可能性もある。43～46はヘラ切り底の坏。43は小型で底部のメリハリは強く、板状圧痕を有する。44は極めて器壁が薄い。45は器高の低い坏で底部の器壁が厚い。内底部に細い線刻で「×」を描く。46は外面は工具ナデ、内面と外面口縁部付近にススが付着する。47・48は甕。47は器壁が薄い。48は器壁が厚く外面は板状工具によるケズリ状のナデ、内面は同工具によるカキメ状のナデで調整する。49は小型の壺状だが、口縁を欠き全容が不明である。外面は手捏ね状のナデで、内面は工具によるナデ後に指圧痕が認められる。器壁が厚く暗茶色を呈する。50～53は甑。50は器壁の厚い鉢形で、底部に1つの焼成前穿孔を有するため甑と判断した。内外面を細かい単位のケズリで形作り、外面下位は工具によるケズリで平滑に仕上げ、内面は工具の当たりが顕著で掻き取るように調整する。全体に凹凸が多く手捏ね状である。51は体部の小片で器壁は凹凸が多い。52は把手を有し、把手と同じレベルに直径3㎜程の焼成前穿孔がある。内縁はヨコハケをケズリで消し、後部分的にナデを施すが粘土の継ぎ目が顕著で、全体的に調整が粗い。53は把手のみの破片である。54～57は支脚。54は頂部を外側に折り返して肥厚させる。内外面に指圧痕が顕著である。55～57は頂部が鉤字のもの。55は小型のもので、先端部を欠くが全面手捏ねで、被熱赤変する。他の同型の大型品が被熱により崩壊するものが多いことに対し、この資料は堅固に焼き締まり、胎土も密である。56・57は通常の大型品。56は裾部を欠くが、全体にナデと指圧で平滑に仕上げられ丁寧な作りである。裾付近に一カ所窪みが認められる。破面は毀損が激しく、胎土にスサが入ると思われる。57も同型であるがやや作りが悪い。鉤部の屈曲部内面には粘土折り曲げ時の皺が顕著で、全体に指ナデと工具ナデで整形する。裾付近両脇の2カ所に裾に向かう深い窪みが認められる。前面と側面が被熱により黒色化する。58～66はミニチュア品。58～64は埦形でいずれも手捏ねで作られる。65は高台を有し、66は底部に糸切りがあり全体をナデで平滑に整える。

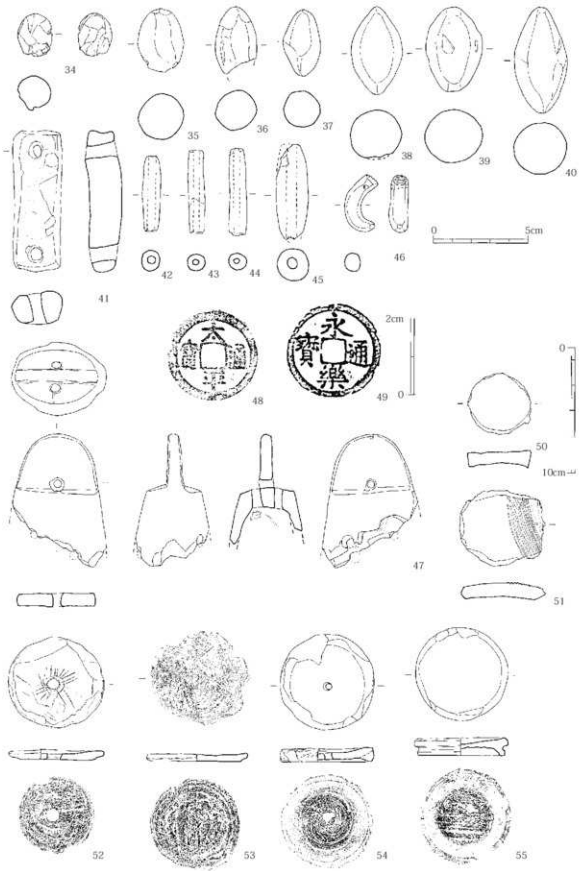
67～76は須恵器。67～69は蓋で、大きな摘みを有する。摘みは上面を窪ませ、外面には十本1単位のカキメを廻らせる。68は器高が高く器壁も薄い。天井部は屈曲部まで回転ヘラケズリを施し、口縁端部は内面に段を有する。69は器高が低く扁平で、天井部の平坦面のみ回転ヘラケズリ、内面は強いナデ調整。70・71は坏。70は低平で受け部を有し、内底部に波状文状のヘラ描きを施す。71は低い高台を有する小型のもの。72～73は壺。72は口縁部片で二条の凸帯を廻らせ、その間に波状文を描く。73は甕か壺と考えたが全容は不明である。底部の器壁が厚く肩部が強く張り、全体をナデ調整する。74は細頸の長頸壺で、高台を有する。肩部以上は自然釉がかかるため調整不明で、下位は回転ヘラケズリ後にナデ調整する。外底部はヘラ切り未調整。75は甕の口縁部で、端部を屈曲させる。外面はカキメが廻り、内外面とも自然釉がかかる。76は鉢で、口縁部が屈曲し、全面ナデ調整。77は瓦器埦。内外面とも丁寧なミガキで調整され、外底部に花押らしき墨書がある。



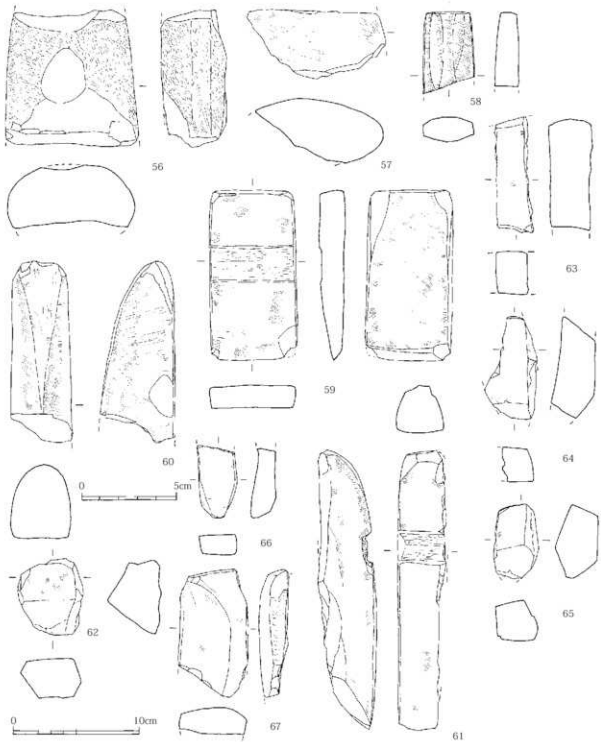
第 109 図　特殊遺物実測図①（1/2）



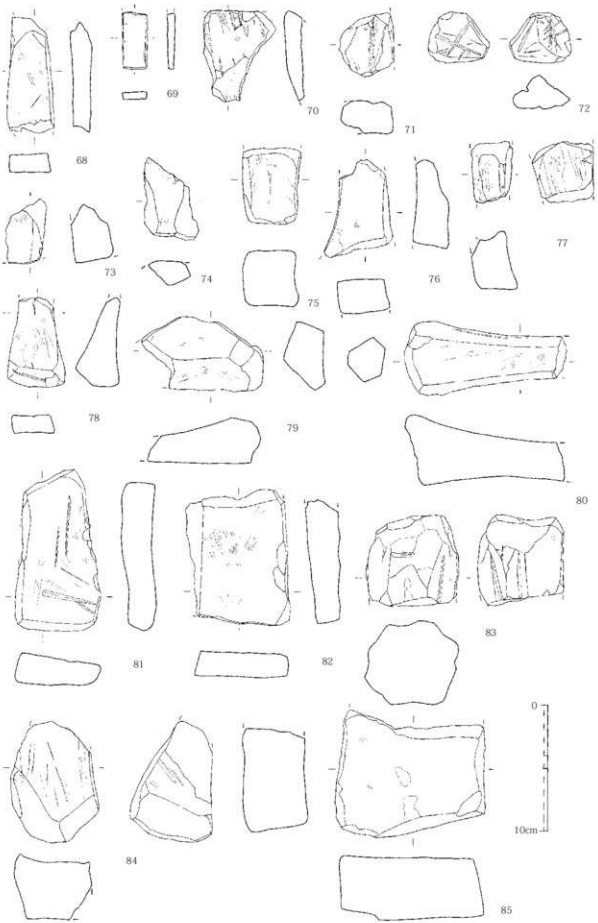
第110図　特殊遺物実測図②（1/2）



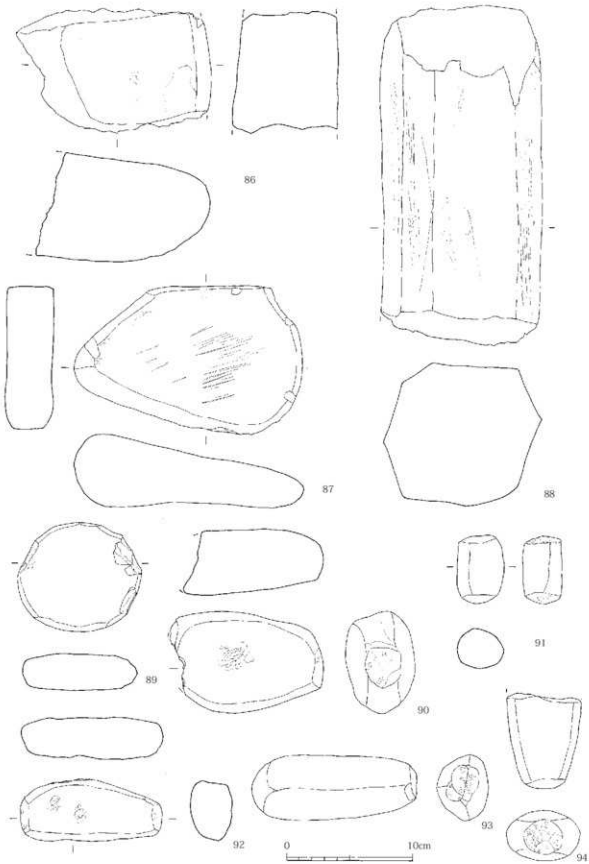
第 111 図　特殊遺物実測図③（34 ～ 47 は 1/2、48・49 は 1/1、50 ～ 55 は 1/3）



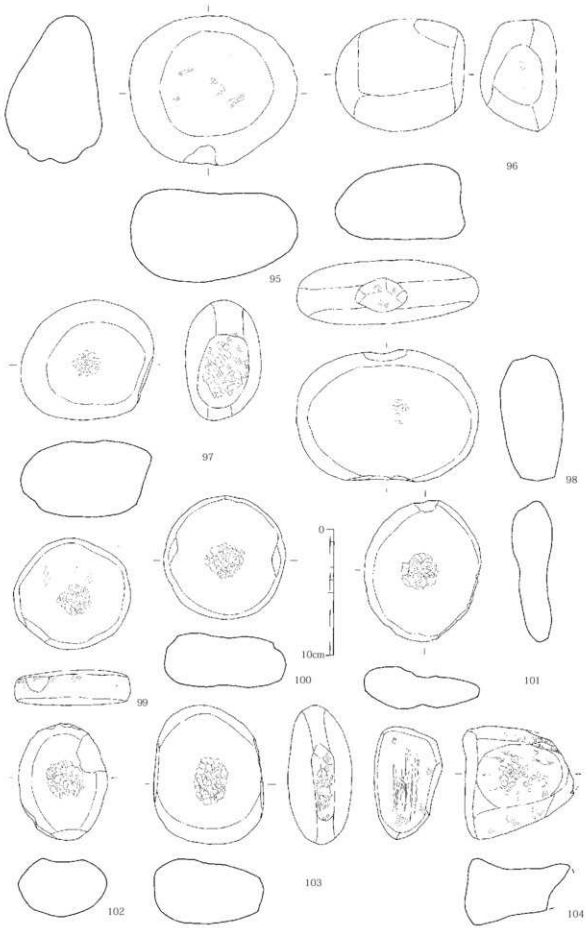
第 112 図　特殊遺物実測図④（56 ～ 61 は 1/2、62 ～ 67 は 1/3）



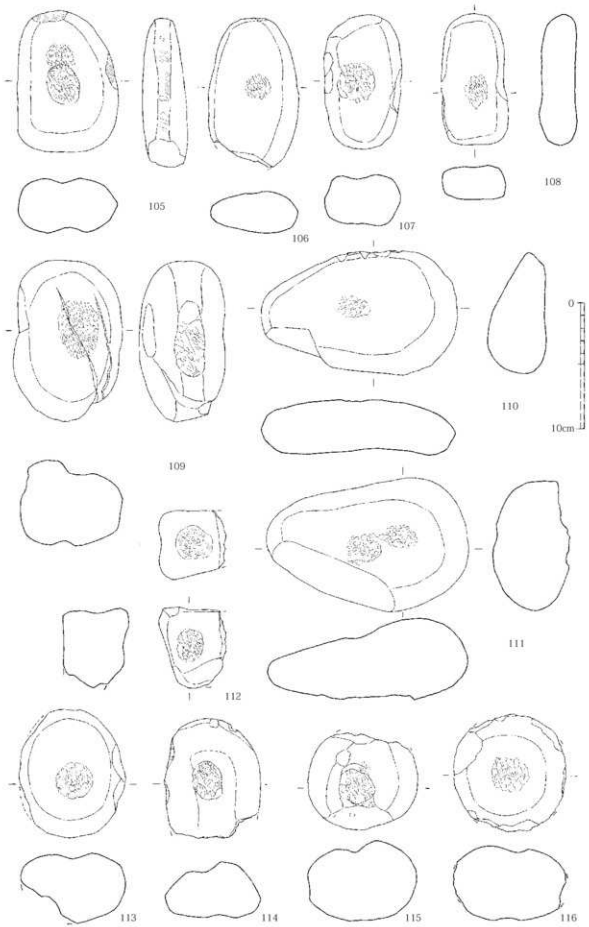
第 113 図　特殊遺物実測図⑤（1/3）



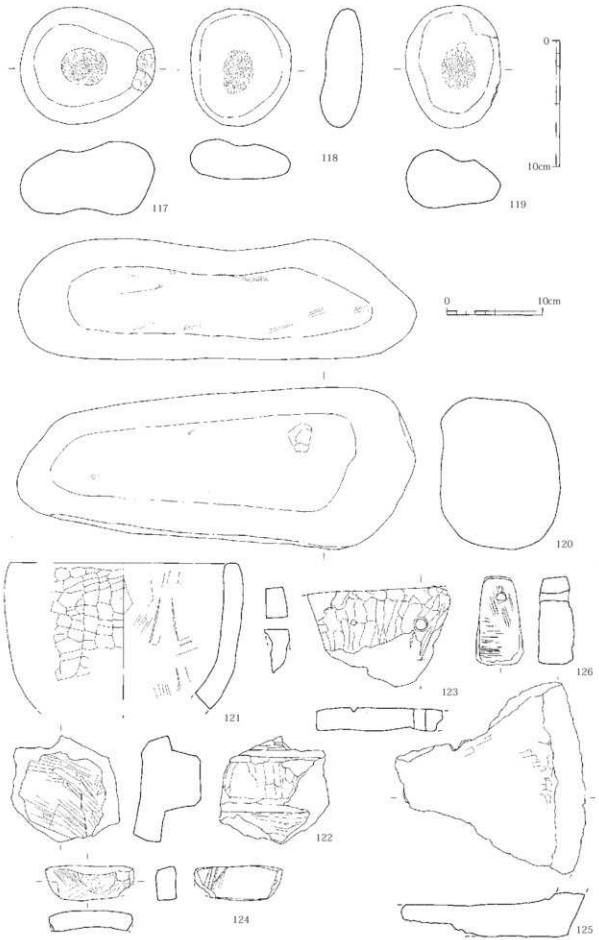
第114図　特殊遺物実測図⑥（1/3）



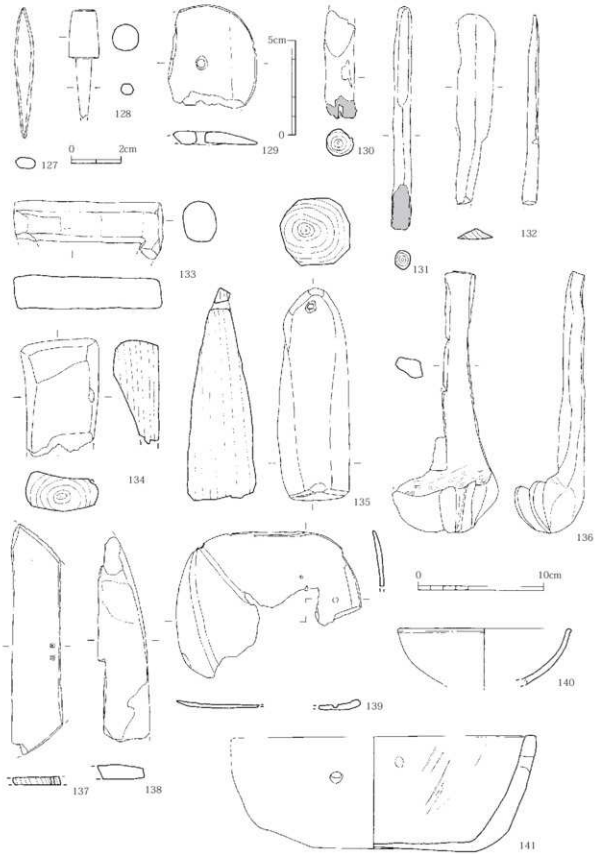
第115図　特殊遺物実測図⑦（1/3）



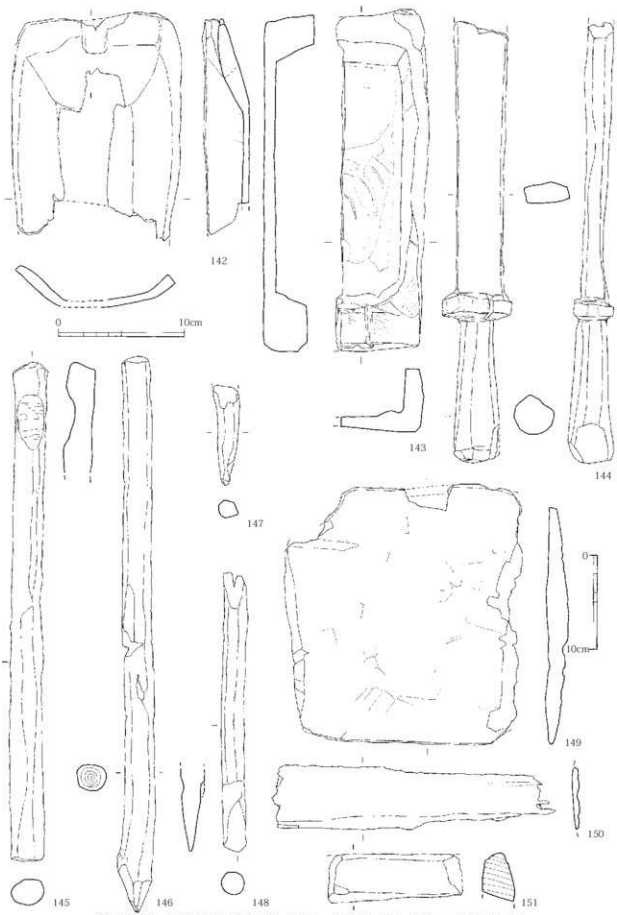
第116図　特殊遺物実測図⑧（1/3）



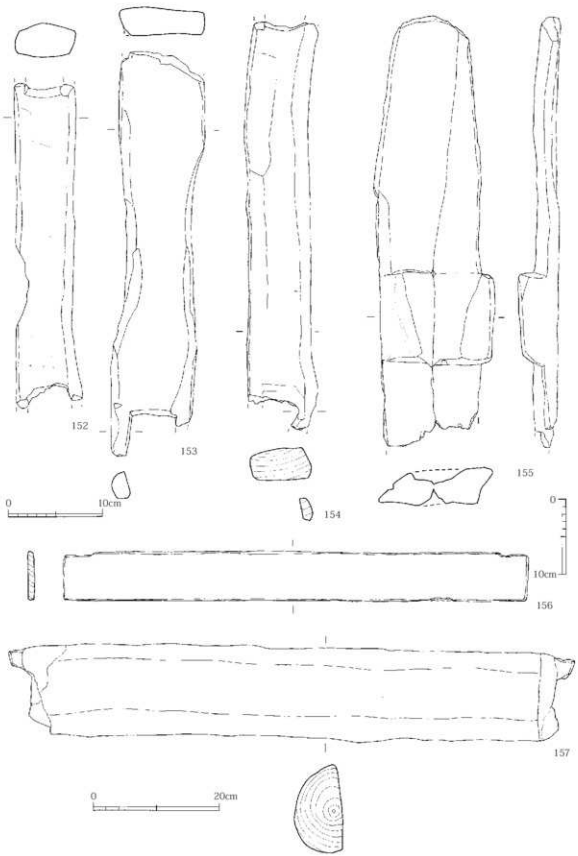
第117図　特殊遺物実測図⑨（120は1/4、他は1/3）



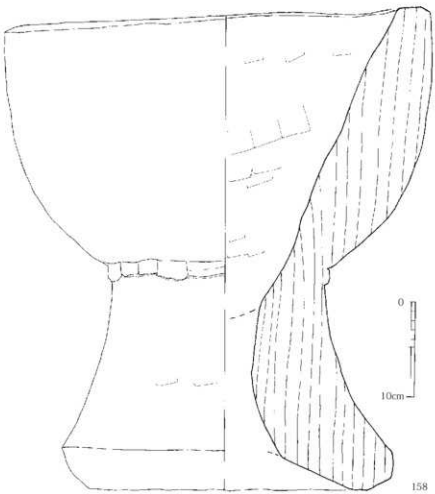
第118図　特殊遺物実測図⑩（127・128は2/3、129は1/2、他は1/3）



第 119 図　特殊遺物実測図⑪（142 ～ 144 は 1/3、145 ～ 151 は 1/4）



第 120 図　特殊遺物実測図⑫（152 ～ 154 は 1/4、155・156 は 1/5、157 は 1/6）



第121図　特殊遺物実測図⑬（1/4）

(6) 遺跡内出土の特殊遺物（巻頭図版5、図版69～74、第109～122図）

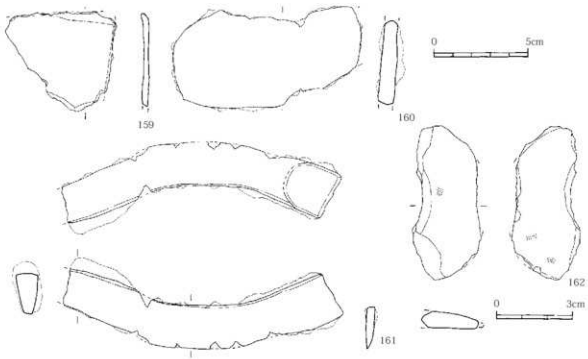
遺跡内で出土した石製品・土製品・骨角器・木製品・金属製品について、以下にまとめて掲載する。

1・2はスクレイパーである。1は刃部に細かい剥離を施す。3は打製石鏃か。凸基式になるか。裏面に主要剥離面を残し、未製品の可能性もある。4は紡錘車で側面に2カ所、深さ0.3cmの孔を穿つ。5は泥岩の割れ面に0.7cm程の貝の痕跡が見られる。化石か。6は平基式の磨製石鏃である。

7～12は石剣である。8は基部がわずかに残り扁平な有茎式であろう。10は完形の有茎式であるが、表面に穿孔の痕跡が3カ所認められ、深さ約0.1cmを測る。石庖丁未製品の再加工品の可能性がある。11は右側面が下部から5.2cm、左側面が10cm以上、研磨によって刃潰しが行われる。形態からいわゆる石矛である可能性があるが、緊縛痕・使用痕等は明確ではない。12は茎部に孔を伴う有茎式で、さらにその直上に研磨による抉りを施す。茎部長4.7cm、幅3.3cm、孔径1cmを測る。

13～29は石庖丁である。15・29は杏仁形、他は外湾刃半月形である。14は側面に剥離を施しており、スクレイパーとして再利用したものか。16は他の石庖丁に比べて薄く、孔の位置が背部とずれることから、再加工品の可能性がある。19は左側面に研磨による面取りが認められ、他の器種の再利用品の可能性がある。穿孔前敲打の痕跡が見られる。21は刃部の欠損部が風化しており、当時の欠損か。穿孔前敲打が見られる。23は平面三角形を呈し、背孔が大きいことからやや古い様相を示す。24・25は大型石庖丁である。粗い研磨を施す。26は完形品で孔とややずれた位置に敲打痕が見られる。幅に比べ長さが短いことから、著しい使用の結果と考えられる。

30は不明土製品である。1面にのみハケ状の調整を施す。31は土玉、32～40は投弾である。32は下端部が剥離しており、衝撃痕の可能性がある。34は表面に棒状の工具痕が見られる。41～45は土錘である。41は両端部に上面から下面に向かって孔を穿つ。短軸に沿って擦痕が見られることから紐をつけていたものと考えられる。46は土製勾玉である。頭部に横方向の沈線が施される。



第 122 図　特殊遺物実測図⑭（162 は 2/3、他は 1/2）

47 は鐸形土製品である。鈕長 3cm、幅 4.4cm で中央に径 0.35cm の孔が穿たれる。側面に文様は見られないものの、型持ち孔が 3 カ所残り、上面にも 2 カ所見られる。孔はいずれも円形である。模倣品として精巧で、銅鐸ないしは小銅鐸を実見した人物が製作したものであろう。

48 は太平通寶（北宋銭）、49 は永楽通寶（明銭）である。

50 ～ 55 は円盤状土製品である。50・51 は弥生土器、52 ～ 55 は土師器である。52 は中央に穿孔、内面に線描きを施す。53 は内外面に線描きを施し、54 は中央に孔を穿つ。いずれも口縁ないしは高台部を打ち欠いた後研磨を施す。

56・57 は玄武岩製の太型蛤刃石斧である。56 は敲打痕が明瞭に認められる。58・59 は扁平片刃石斧である。59 は表面に僅かな段差を作り出しており、横方向の擦痕が認められることから、実際に緊縛していたものと考えられる。60・61 は柱状片刃石斧である。61 は基部が黒色、刃部が灰褐色を呈し、接合する。風化の度合いが異なることから、当時より破損していたものと考えられる。表面に段差を作り出し、両端部がわずかに凹む。擦痕も認められることから、実際に緊縛していたものと考えられる。62 ～ 88 は砥石である。いずれも石質から仕上げ砥と考えられ、大きさから 80 ないしは 84 までが持ち砥となるか。いくつかの砥面で金属製刃器の研磨痕が認められる。77 では弧状の研磨面が見られる。89 は石錘か。すりと剥離により抉り部を作り出すが、抉りが浅く石錘でない可能性もある。90 ～ 98 はすり石である。90 ～ 94 は先端をすり面とする。95 ～ 98 は上面もしくは側面をすり面とする。99 ～ 119 は凹石で、一部すり石として使用した部分が見られる。表面ないしは両面の中央部に敲打を施し、深いものでは 0.5cm ほど窪む。120 は台石である。上面および側面にすりの痕跡が見られる。

121 ～ 125 は滑石製石鍋である。123・124 は側面にも研磨が見られ、転用品と考えられる。123

はススの付着が著しい。126は滑石製の不明品で前面にケズリを施す。石鍋の再加工品か。

127・128は骨角器である。127は鏃である。平面柳葉形、断面楕円形を呈する。128は鈙か。上部径12mm、下部径6mmで下端に向かって細くなる。129は木製紡錘車か。中央に孔を穿ち、断面は蒲鉾形を呈する。130・131は燃えさしである。下端が炭化する。132は不明木製品である。下部に関状の段が作られ柄部となるか。ヘラのようなものである可能性がある。133は鋤柄である。上端のみが遺存する。134は不明木製品である。下部に向かって薄くなっており、砧の可能性もあるが、詳細は不明である。135は槌か。ケズリにより面取りし、断面は八角形に近い。上部に径6mmほどの孔が穿たれる。136は柄杓未成品か。柄が短く、破損しているが掬部が浅い。137・138は曲げ物の底板である。137は綴じ孔が2つ施される。139は皿か。方形の孔が穿たれる。140は漆椀である。赤漆が残る。141は鉢か。側面4カ所に孔が穿たれる。底部に板状圧痕様の工具痕が認められる。142・143は槽である。共にケズリで成形し、143の一部には未調整部分が見られる。短辺側の一方に切れ込みが施される。144は剣形木製品である。刃部は断面四角形で、刃・鎬は表現されない。鍔部は縦方向に切れ込みを入れ、柄部は断面円形を呈する。祖形があるとすれば、木製柄に装着した石剣ないしは鉄剣か。145は不明木製品である。上部に弧状の切れ込みを施す。146～148は杭である。先端のみ加工する。147は樹皮が遺存しており、長い枝をそのまま利用したものである。149はねずみ返しか。上部に台形の孔が穿たれていたものと考えられる。中央部がやや厚い。150・151は板である。152～154は礎板に転用させた木製品である。いずれも端部に2つの突起が見られ、何らかの部材か。155は梯子である。1段分のみが遺存している。段の角度から上下を決めたものの、使用による擦り減り、上端まで30cmと長いことなどを考慮すれば逆位置である可能性もある。156・157は部材か。156は板状に加工し、両端の上部にのみ切り欠きが認められる。157は丸太を3/5に割り、両端に突起を作り出す。158は臼である。中央が抜けており、廃棄後の土壌の影響か。上部から見ると扁平率3：2ほどの楕円形を呈する。

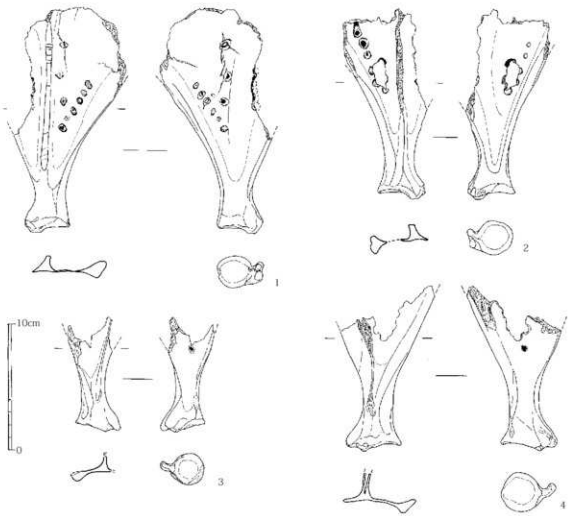
159・160は不明鉄片である。159は端部をやや折り曲げているか。161は鉄鎌か。端部を約2.5cm折り曲げる。ただ、先端が厚くなっており、鎌ではない可能性もある。

162は破鏡か。縁辺部に近い部分と考えられるが、磨滅しており明確ではない。僅かではあるが、表裏面共に平織りの布片が付着している痕跡が見られる。

ト骨（巻頭図版6、図版74、第123図）

今回の調査及びⅠ地点の調査でト骨4点が出土し、県内初出土例となる。いずれも土器や木質などとまとまって出土したり、流れ込んだ状態で出土している。

1はⅡ地点18号土坑出土でイノシシの左側肩甲骨と見られ、棘上窩の大半と棘下窩の一部を欠く。肩甲棘は上方を削るが海綿質は覗かない。焼灼痕は棘下窩に2列9カ所、棘上窩に少なくとも1列3カ所は認められるが、焼灼痕に沿って破損しているため定かではない。肩甲棘には焼灼痕はなく、肩甲頸に1カ所焼灼痕らしきものが認められるが明確ではない。棘下窩の焼灼痕は後縁に沿って6カ所、肩甲棘に沿って3カ所に認められる。前者は8mm前後の間隔を空けて整然と並び、焼灼は肋骨側から行い一部ミガキが認められる。ト面は1カ所が貫通、1カ所は炭化、4カ所は黒色化するのみである。ヒビはない。後者は2～2.5cmの間隔で中央に並び、外側からの焼灼でト面は1カ所貫通、他は炭化する。ト面の一部に大きなヒビが入る。棘上窩の焼灼痕はそのほとんどを欠損す



第 123 図　卜骨実測図（1/3）

るため焼灼面や間隔、ヒビについては不明である。

2は灰色土包含層からの出土で、鹿の右肩甲骨と見られ、棘上窩の大半と棘下窩の一部を欠く。肩甲棘は上方を欠くが、ケズリほど鋭利ではないため破損の可能性もある。焼灼痕は棘下窩に2列9カ所、棘上窩に少なくとも1列5カ所は認められるが、焼灼痕に沿って破損しているため定かではない。肩甲棘には焼灼痕はない。棘下窩の焼灼痕は後縁に沿って5カ所、肩甲棘に沿って2カ所に認められる。いずれも間隔は不規則で、焼灼は肋骨側から行う。卜面は1カ所が貫通、1カ所は炭化、4カ所は黒色化するのみである。ヒビはない。棘下窩の焼灼痕はそのほとんどを欠損するため焼灼面や間隔、ヒビについては不明である。

3はⅠ地点10号土坑最下層からの出土で、イノシシの左側肩甲骨と見られ、棘上窩の大半と棘下窩を欠く。肩胛棘は整治されず、焼灼痕は棘上窩にのみ5カ所認められる。形を保つのは1カ所のみで、焼灼は肋骨側から行う。

4は灰色土包含層からの出土で、鹿の右肩甲骨と見られ、破損が激しく焼灼痕は棘上窩の1カ所しか残らない。破損が激しくヒビは不明である。

Ⅳ　自然科学的分析

1　高杯の表面に付着する白色物質の推定

加藤　和歳（九州歴史資料館）

1．はじめに

福岡県柳川市に所在する西蒲池池溯遺跡は、弥生時代中期から戦国時代にわたる遺構と大量の遺物が出土しているが、そのうち、柱穴から出土した高杯の外面に白色物質が付着するものがある。

本稿では、この白色物質について、保存科学的な手法により、この物質がどのようなものであるか、推定を試みたので、その結果を報告する。

出土遺物に付着する白色物質を推定する上で、古来よりみられる白色物質はさまざまあるが、現状において、科学的調査の成果に基づき、推定することができる物質としては、古墳時代における壁画の下地材や近世城郭における土木、建築資材として使用される漆喰（水酸化カルシウム）、白色顔料として使用される胡粉（炭酸カルシウム）、鉛白（塩基性炭酸鉛）、寺院の土壁の仕上げ材や顔料に使用される白土（珪酸アルミニウム）、小便に由来すると考えられる物質（水酸化アルミニウム）があげられる。

これらを念頭に置き、極めて簡易的ではあるが、白色物質の推定を行うこととした。

2．白色物質の表面状態

内外面の表面にやや灰色を呈した物質があり、厚みは計測しがたいが、1ミリに満たない。

まず、デジタルマイクロスコープ（Nikon ShuttlePix）を用い、２０～１００倍程度の倍率で、白色物質の付着状態を観察した。遺物本体が白色ではなく、土器の胎土に対して何らかの物質が、なかばコーティングされたように存在していること、また埋蔵中に土中の何らかの成分が、二次的に付着したものではないことを確認した。また、×１００の画像を観察すると、光沢がある物質を散見することができる。この白色物質の混和剤であろうか。

3．白色物質の材質分析

付着箇所を、直接、蛍光Ｘ線分析法により、非破壊、非接触で含有される元素を定性的に分析した。分析は九州歴史資料館にて行い、測定機器および条件は以下のとおりである。

・使用機器：九州歴史資料館設置　エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（SPECTRO MIDEX ）
・分析条件：電圧　45 k V/ 電流　0.3mA/ 対陰極　モリブデン（Mo）/ 検出器　シリコンドリフト検出器 / 測定雰囲気　大気 / 測定範囲　0.3 ミリ / 測定時間　300 秒

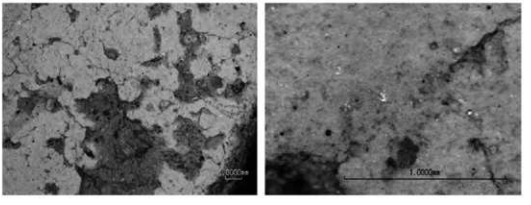
推定にあたっては、主たる元素の存在を、検出されたスペクトルのピークから定性的に判断を行った。以下に、蛍光Ｘ線スペクトルを示す。

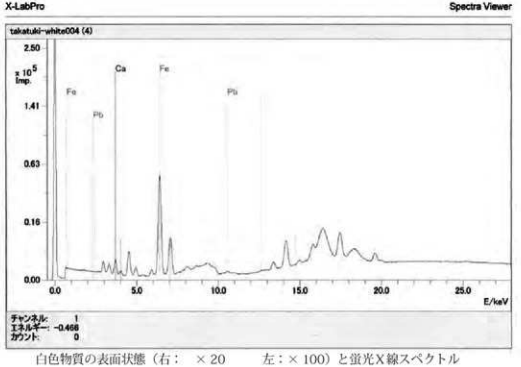
主に、検出されているのは鉄であるが、これは土器の胎土に由来する物質であると考えられる。これを除いてみてみると、測定条件上、ピークは高くないが、カルシウムの存在がみてとれる。

この点から、ひとまず漆喰ないしは胡粉の可能性を推定できるものと考える。今後、さらに結晶構造の分析を行うことで、さらに詳細な検討ができるかと思われる。

弥生時代の土器や甕棺に、表面を顔料で加飾する事例は、赤色や黒色がよく知られるところであり、科学的な分析も行われているところである。現時点で総覧できてはいないが、白色については、あまり調査事例はないものと思われ、さらに詳細な分析の機会を得たい。

【参考文献】 加藤和歳　2010 「土器に付着した白色物質の推定に関する予察」『九州歴史資料館研究論集』35　P 87 ～ 96
加藤和歳　2012 「土器に付着した白色物質の推定に関する予察（その２）」『九州歴史資料館研究論集』37　P 93 ～ 102





白色物質の表面状態（右：　× 20　　左：× 100）と蛍光X線スペクトル

2　掘立柱建物跡出土礎盤（横木）の樹種同定

小林　啓・山崎悠郁子（九州歴史資料館）

1. はじめに

西蒲池池淵遺跡の発掘調査では、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての掘立柱建物跡が複数棟確認されている。それら建物跡の柱穴からは、建物の柱の荷重を受けるために据えたられた礎盤(横木）が出土している。本稿では掘立柱建物跡及び遺跡内の礎盤式柱穴から出土した礎盤（横木）の樹種同定を行い用材傾向について報告する。

2. 資料と方法

樹種同定の対象となる資料は、調査Ⅰ地点及びⅡ地点の掘立柱建物跡から出土した礎盤（横木）86点である。このうち、掘立柱建物跡の柱穴と判別できたものが29点、その他の柱穴や土坑から出土したものが57点である。

樹種同定は、木製品の木取りや形状を観察し、破断面などできるだけ形状を損なわない箇所から、木口・板目・柾目面の切片をカミソリで採取した。出土時の劣化が著しく取り上げが困難な資料は、調査時に採取した木材サンプルから切片を採取した。

採取した切片をプレパラートに載せ、その上からガムクロラールを滴下しカバーガラスを被せて標本プレパラートを作製した。標本プレパラートのガムクロラールが固化した後、光学顕微鏡で観察し、各切片の組織構造を原生標本や参考資料と比較して樹種を同定した。なお、カミソリによる切片採取を山崎が担当し、光学顕微鏡による樹種同定を小林が担当した。

3. 結果

樹種同定の結果、礎盤(横木)86点から針葉樹5分類群(マツ属単維管束亜属、モミ属、ヒノキなど)、広葉樹14分類群（スダジイ、アカガシ亜属、ニレ属、クリ、コナラ属クヌギ節、クスノキ属、ヤマビワ、ムラサキシキブ属など）が確認された。この他、樹皮・竹笹類が数点確認されている（表2)。以下に、掘立柱建物跡出土礎盤（横木）における用材傾向について記す。

礎盤を使用した掘立柱建物跡は18棟確認されている。その内訳はⅠ地点14棟、Ⅱ地点4棟、時期は弥生時代後期～古墳時代初頭に属する。それぞれ建物を構成する柱穴からは横木が出土しており、そのうち29点を対象に樹種同定を行った。(表1)

樹種同定の結果、29点の資料から針葉樹2分類群、広葉樹7分類群が確認された。針葉樹はイヌガヤ1点、ヒノキ1点、広葉樹はツブラジイ1点、スダジイ7点、クリ10点、ニレ属1点、ヤマビワ2点、ムラサキシキブ属1点、バラ属1点である。この他、樹皮が1点と未同定資料が2点ある。未同定資料は、何れも資料が乾燥したことによる木材組織の変形や収縮が著しく、針葉樹・広葉樹の区別のみで詳細な同定には至らなかった。

以下に掘立柱建物跡の礎盤・横木で確認された樹種について、同定根拠となる木材組織の解剖学的特徴・生態・分布・材質などについて記す。

① イヌガヤ　***Cephalotaxus harringtonia*** (Knight ex Forbes) K.Koch　イヌガヤ科

早材から晩材への移行は漸進的で晩材の幅は非常に狭い。樹脂細胞は早材、晩材共、平等に散在

する。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個存在する。放射組織は単列で1～10細胞高。

イヌガヤは本州（岩手県以南）・四国・九州に分布する常緑小高木の針葉樹。やや傾斜のある適湿地で最も旺盛に成長する。材は強靭で耐朽・耐湿性が高く、特有の芳香と光沢がある。

② ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　ヒノキ科

早材から晩材への移行はゆるやかで晩材部の幅はきわめて狭い。年輪の最外部には樹脂細胞が存在し、ときには接線状に散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列で1～15細胞高。

ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州・屋久島に分布する常緑針葉高木。やや傾斜のある適湿地で最も旺盛に成長する。材は強靭で耐朽・耐湿性が高く、特有の芳香と光沢がある。

③ ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* (Thunb. Ex Murray) Schottky　ブナ科

環孔性の放射孔材。年輪のはじめに大型の道管が接線方向に不連続に配列し、放射方向に漸時径を減じて塊をなす。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。軸方向柔細胞は1～3列で年輪内に何層も接線状に並ぶ。道管は単穿孔、放射組織は単列同性でときに集合放射組織が存在する。

ツブラジイは本州（関東以西）・四国・九州に分布する照葉樹林の常緑高木。材質はスダジイに準ずるが、やや劣り耐久性が少ない。

④ スダジイ　*Castanopsis cuspidata* Schottky var. Sieboldii Nakai　ブナ科

環孔性の放射孔材。年輪のはじめに大型の道管が接線方向に不連続に配列する。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。軸方向柔細胞は1～3列で年輪内に何層も接線状に並ぶ。道管は単穿孔、放射組織は単列同性。集合放射組織の有無によりコジイと区別できる。

スダジイは本州（福島以南・新潟県佐渡以南）・四国・九州に分布し、照葉樹林の主要構成要素をなす常緑高木。

⑤ クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科

環孔材。年輪のはじめにきわめて大型の道管が1～3列に配列する。そこから漸次径を減じて、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。道管は単穿孔、内腔にはチロースが存在する。放射組織は単列同性。

クリは北海道（西南部）・本州・四国・九州の丘陵から山地に分布する落葉高木。材は耐朽・保存性がきわめて高く、水湿にもよく耐える優良材。

⑥ ニレ属　*Ulmus* L.　ニレ科

環孔材。孔圏道管はきわめて大きく400μmほどになり、1～3列となる。孔圏外では小道管が多数集合して接線状ないし斜線状に配列する。軸方向柔細胞は周囲状およびターミナル状に配列する。道管は単穿孔、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で1～6列程度、高さは1mm以下。

ニレ属にはハルニレ、オヒョウ、アキニレがある。北海道・本州・四国・九州の山地に分布する落葉高木。耐朽・保存性は中庸。

⑦ バラ属　*Rosa* L.　バラ科

環孔材。孔圏部の道管は1～4列となり、孔圏外では小さくほぼ単独に散在する。道管は単穿孔

で内壁にはらせん肥厚がみられる。道管側壁には交互壁孔がみられる。放射組織は異性で、1～数列のものと広放射組織がみられる。

バラ属にはヤマイバラ・フジイバラ・ノイバラ・ハナマスなどがある。北海道・本州・四国・九州・沖縄の暖帯から温帯に分布する落葉低木。

⑧ ヤマビワ　*Meliosma rigida* Sieb. et Zucc.　アワブキ科

散孔材。やや大型の道管がほぼ単独あるいは放射方向に2～4個複合して散在する。道管は階段穿孔で階段数は10以内。道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。軸方向柔細胞は短接線状および散在状。放射組織は異性で1～3列、背が高くときに3mmを越えることもある。

ヤマビワは本州（伊豆半島以西）・四国・九州・沖縄に分布する。山地に生える常緑の小高木。材は緻密。

⑨ ムラサキシキブ属　*Callicarpa* L.　クマツヅラ科

散孔材。小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。道管は単穿孔。放射組織は異性で1～3列、高さは1mm以下。

ムラサキシキブ属は、北海道・本州・四国・九州・沖縄の暖帯から温帯に分布する落葉低木。材は緻密。

4. まとめ

掘立柱建物跡出土礎盤（横木）の樹種同定の結果、樹種は広葉樹が占める割合が大きく、中でもクリが最も多く確認された。クリは樹種同定の対象とした29点中10点と最も優先する傾向を示し

表1　掘立柱建物跡出土礎盤（横木）の樹種同定結果

樹種	I区				II区														合計
	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	10号	11号	12号	13号	14号	15号	16号	17号	18号	
イヌガヤ																1			1
ヒノキ													1						1
ツブラジイ										1									1
スダジイ	3						2								2				7
クリ		2			2							2		3				1	10
ニレ属					1						1								2
ヤマビワ																	2		2
ムラサキシキブ属						1													1
バラ属						1													1
樹皮					1														1
未同定（針葉樹）													1						1
未同定（広葉樹）											1								1
合計	3	2	0	0	4	2	2	0	0	1	2	2	2	3	2	1	2	1	29

た。クリに次いで多く確認された樹種はスダジイである。スダジイは 29 点中 7 点であり、他の樹種に比べ優先する傾向を示した。スダジイの性質はクリには劣るが、材は重硬で緻密であり、やや耐朽性があることから建築材や農具など様々な用途に用いられている。クリが優先的に利用される背景には、礎盤に求められる耐朽性や保存性といった性質を有した優良材であるためであり、スダジイもこれに準ずる材として遺跡周辺の環境から選定されたと推測することができる。

一方で、アワブキやムラサキシキブ属など、必ずしも礎盤の材として適当とは言い難い樹種も一定量含まれている。同定結果からは優良材を恣意的に選定する一方で周辺環境から採取し易い樹種を利用していた様子も伺える。

この他、建物毎における樹種同定の結果からは、建物単位で樹種が統一される傾向がみられた。1 号建物では 6 点中 3 点がスダジイ（残り 3 点は未同定）、5 号建物では 6 点中 2 点がクリ、1 点がニレ属（残り 3 点は未同定）、14 号建物では 4 点中 3 点がクリ（残り 1 点は未同定）と建物単位で同一樹種に偏る傾向が見られる。掘立柱建物跡の礎盤におけるこの様な用材傾向は、隣接する蒲船津江頭遺跡（柳川市三橋町）でも報告されている（佐々木 2011）。これら建物単位で同一樹種であった礎盤を観察し比較すると、何れも裁断の削りや面取りなどの加工がされており木取りも似ているものもある。しかし、互いに明確な接合面は確認できないため同一材から作られたかは不明であるが、形状や木取りが酷似するものについては同一材の可能性も考えられる。

上記以外の建物では、建物単位における同定数が 1 点のみと少ないため詳細は不明である。しかし、同様の用材傾向を示すと仮定すれば、7 号はスダジイ、10 号はツブラジイ、11 号はニレ属、12 号はクリ、13 号はヒノキ、16 号はイヌガヤ、18 号はクリが礎盤の材として優先的に用いられていた可能性が推測される。

樹種同定の結果からは、掘立柱建物跡の礎盤にはクリなどの優良材が優先されると同時に周辺環境に応じた様々な樹種が用いられた様子が推測される結果となった。また建物単位で樹種が統一される用材傾向も確認された。本稿では建物単位の同定において、同一建物の資料数が少ないため詳細な用材傾向を示すことができなかったことが残念である。今後、同様の調査を行う際には建物単位を意識した調査が望まれると共にそれに伴う詳細な用材傾向と成果が期待される。

【参考文献】

伊藤隆夫 1995 ～ 1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ』京都大学木質科学研究所

佐々木由香 2011「蒲船津江頭遺跡出土木材の樹種同定」『有明海沿岸道路大川バイパス関連埋蔵文化財調査報告書第 10 集　蒲船津江頭遺跡Ⅲ』福岡県教育委員会

島地謙・伊藤隆雄 1982『図説木材組織』株式会社地球社

※本稿では、樹種同定の同定根拠となる各断面の光学顕微鏡写真について紙面の関係上掲載することができなかった。内容の不備について記してお詫びする。

表２　掘立柱建物跡出土礎盤（横木）の樹種同定結果一覧

No.	調査地点	建物	S番号	部種	樹種	時期	備考
1	Ⅱ地点	1号	35	横木	スダジイ	弥生時代～古墳時代	
2			50	横木	－		
3			65	横木	スダジイ		
4			66	横木	－		横木出土
5			125	横木	スダジイ		
6			225	横木	－		横木出土
7		2号	200	横木	クリ	弥生時代後期	
8			285	横木	クリ		
9			1-821	横木	－		横木出土
10			1-823	横木	－		横木出土
11	Ⅰ地点	5号	688	横木	クリ	弥生時代後期	
12			714	横木	－		
13			735	横木	クリ		
14			743	横木	－		
15			766	横木	－		横木出土
16			①	横木	ニレ属		
17			①	礎盤の敷織維	樹皮		
18		6号	704	横木	バラ属	弥生時代後期	
19			741	横木	－		
20			752	横木	ムラサキシキブ属		
21			772	横木	－		横木出土
22			E	横木	－		
23		7号	610	横木	スダジイ	弥生時代後期	
24			637	横木	－		横木出土
25			685	横木	－		横木出土
26			686	横木	－		横木出土
27			757	横木	－		横木出土
28			795	横木	スダジイ		
29		10号	623	横木	－	弥生時代後期	
30			660	横木	ツブラジイ		
31			671	横木	－		
32			781	横木	－		横木出土
33		11号	620	横木	ニレ属	弥生時代後期	
34			667	横木	広葉樹		
35			669	横木	－		
36			789	横木	－		
37		12号	621	横木	－	弥生時代後期	横木出土
38			661	横木	クリ		
39			756	横木	クリ		
40			A	横木	－		横木出土
41		13号	652	横木	針葉樹	弥生時代後期	
42			682	横木	－		横木出土
43			706	横木	ヒノキ		
44			771	横木	－		
45		14号	705	横木	クリ	弥生時代後期	
46			730	横木	クリ		
47			734	横木	クリ		
48			746	横木	－		
49		15号	718	横木	スダジイ	弥生時代後期	
50			738	横木	－		横木出土
51			755	横木	スダジイ		
52		16号	625	横木	イヌガヤ	弥生時代後期	
53			630	横木	－		
54			645	横木	－		横木出土
55		17号	687	横木	ヤマビワ	弥生時代後期	
56			725	横木	－		横木出土
57			729	横木	ヤマビワ		
58		18号	675	横木	－	弥生時代後期	横木出土
59			821	横木	クリ		

※備考欄に「横木出土」の記載がある資料は、取り上げができず資料や同定サンプルが残っていないもの。

表３　土坑・柱穴出土礎盤（横木）の樹種同定結果一覧

No.	調査地点	建物	S番号	器種	樹種	時期	備考
1	Ⅰ地点	－	72	横木	スダジイ	弥生時代中期	
2	Ⅰ地点	－	204	横木	ニレ属	古墳時代中期	
3	Ⅰ地点	－	268	横木	コナラ亜属アカガシ亜属	弥生時代後期	
4	Ⅰ地点	－	268	横木	スダジイ	弥生時代後期	
5	Ⅰ地点	－	604	横木	竹笹類	中世	
6	Ⅰ地点	－	617	横木	クリ	弥生時代後期	
7	Ⅰ地点	－	644	横木	クリ	弥生時代後期	
8	Ⅰ地点	－	648	横木	コナラ亜属コナラ節	弥生時代後期	
9	Ⅰ地点	－	649	横木	ニレ属	弥生時代後期	
10	Ⅰ地点	－	674	横木	広葉樹	弥生時代後期	
11	Ⅰ地点	－	676	横木	ヒノキ科	弥生時代後期	
12	Ⅰ地点	－	676	横木	クスノキ属	弥生時代後期	
13	Ⅰ地点	－	684	横木	クリ	弥生時代後期	
14	Ⅰ地点	－	695	横木	クスノキ属	弥生時代後期	
15	Ⅰ地点	－	711	横木	広葉樹	弥生時代後期	
16	Ⅰ地点	－	716	横木	クリ	弥生時代後期	
17	Ⅰ地点	－	742	横木	クリ	弥生時代後期	
18	Ⅰ地点	－	745	横木	クリ	弥生時代後期	
19	Ⅰ地点	－	749	横木	スダジイ	弥生時代後期	
20	Ⅰ地点	－	753	横木	クリ	弥生時代後期	
21	Ⅰ地点	－	770	横木	クスノキ属	弥生時代後期	
22	Ⅰ地点	－	783	横木	クリ	弥生時代後期	
23	Ⅰ地点	－	783	横木	広葉樹	弥生時代後期	
24	Ⅰ地点	－	792	横木	コナラ亜属クヌギ節	弥生時代中期	
25	Ⅰ地点	－	820	横木	樹皮	弥生時代後期	
26	Ⅰ地点	－	834	横木	クリ	弥生時代後期	
27	Ⅰ地点	－	②	礎盤の敷瓦礫	樹皮	弥生時代後期	
28	Ⅰ地点	－	③	礎盤の敷瓦礫	樹皮	弥生時代後期	
29	Ⅰ地点	－	F	横木	クリ	弥生時代後期	
30	Ⅰ地点	－	I	横木	ケヤキ	弥生時代後期	
31	Ⅱ地点	－	9	横木	樹皮	中世	
32	Ⅱ地点	－	11	横木	広葉樹	古墳時代初頭	
33	Ⅱ地点	－	16	横木	コナラ亜属クヌギ節	弥生時代後期	
34	Ⅱ地点	－	18	横木	コナラ亜属コナラ節	中世	
35	Ⅱ地点	－	26	横木	シイ属	古代	
36	Ⅱ地点	－	28	横木	広葉樹	弥生時代終末期	
37	Ⅱ地点	－	28	横木	コナラ亜属コナラ節	弥生時代～古墳時代	
38	Ⅱ地点	－	43	横木	樹皮	古代	
39	Ⅱ地点	－	43	横木	樹皮	古代	
40	Ⅱ地点	－	123	横木	コナラ亜属コナラ節	古墳時代初頭	
41	Ⅱ地点	－	138	横木	モミ属	弥生時代中期	
42	Ⅱ地点	－	145	横木	マツ属単維管束亜属	中世	
43	Ⅱ地点	－	161	横木	クリ	弥生時代終末期	
44	Ⅱ地点	－	170	横木	モミ属	弥生時代～古墳時代	
45	Ⅱ地点	－	176	横木	コナラ亜属アカガシ亜属	弥生時代～古墳時代	
46	Ⅱ地点	－	255	横木	クリ	弥生時代～古墳時代	
47	Ⅱ地点	－	270	横木	広葉樹	弥生時代～古墳時代	
48	Ⅱ地点	－	275	横木	クリ	古墳時代	
49	Ⅱ地点	－	281	横木	シイ属	弥生時代～古墳時代	
50	Ⅱ地点	－	289	横木	クスノキ属	弥生時代～古墳時代	
51	Ⅱ地点	－	290	横木	広葉樹	弥生時代～古墳時代	
52	Ⅱ地点	－	297	横木	スダジイ	不明	
53	Ⅱ地点	－	336	横木	針葉樹	弥生時代	
54	Ⅱ地点	－	1⑥	横木	広葉樹	中世	
55	Ⅱ地点	－	1西区	横木	コナラ亜属アカガシ亜属	中世	
56	Ⅱ地点	西区淡灰黄色粘土包含層		横木	コナラ亜属コナラ節	弥生時代	
57	Ⅱ地点	－		横木	クスノキ属		

3　花粉分析とプラント・オパール分析

森　将志（パレオ・ラボ）

1. はじめに

福岡県柳川市に所在する西蒲池池潟遺跡Ⅱ地点において、自然科学分析用の土壌試料が採取された。ここでは、分析試料に対して行った花粉分析とプラント・オパール分析の結果を示し、堆積当時の古植生について検討した。

2. 試料と方法

分析試料は、遺構内や地山などから採取された計4点である（表1）。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

表1　分析試料一覧表

試料 No.	遺構等	時期	土相	花粉分析	プラント・オパール分析
①	遺構 3m 下の地山	－	灰色（5Y5/1）粘土	○	○
②	遺構（30 号土坑）直下の地山	弥生時代中期	灰白色（5YR/1）有機質粘土	○	○
③	遺構内堆積物（29 号土坑）	弥生時代終末	灰色（5Y6/1）灰	○	○
－	遺構内堆積物（1 号土坑）	弥生時代終末	黒褐色（2.5Y3/1）有機質粘土	○	

2-1. 花粉分析

試料（湿重量約3～4g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは、樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉化石を選んで単体標本を作製し、写真を撮った。図版1に載せた分類群ごとの単体標本（PLC.1009～1016）は、パレオ・ラボに保管されている。

2-2. プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、図版2に載せた。

3. 結果

3-1. 花粉分析

検鏡した結果、③には十分な量の花粉化石が含まれておらず、①と②、1号土坑の遺構内堆積物の3試料のみ、十分な量の花粉化石が検出された。検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉30、草本花粉16、形態分類のシダ植物胞子2の総計48である。これらの花粉・胞子の一覧表を表2に、分布図を図1に示した。図表においてハイフン（-）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属やコナラ属アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属などの産出が目立つ。各分類群の産出率は、コナラ属コナラ亜属が5～20%、コナラ属アカガシ亜属は40～57%、シイノキ属－マテバシイ属は15～24%である。

表2　産出花粉化石一覧表

学名	和名	1号土坑	③	②	①
樹木					
Podocarpus	マキ属	2	−	2	1
Abies	モミ属	3	1	−	9
Tsuga	ツガ属	3	−	6	2
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	5	2	7	11
Sciadopitys	コウヤマキ属	1	−	−	1
Cryptomeria	スギ属	1	−	1	1
Salix	ヤナギ属	−	−	−	1
Platycarya	ノグルミ属	1	−	−	−
Pterocarya − *Juglans*	サワグルミ属−クルミ属	2	−	2	1
Carpinus − *Ostrya*	クマシデ属−アサダ属	1	2	−	4
Corylus	ハシバミ属	−	−	1	−
Betula	カバノキ属	1	−	1	1
Alnus	ハンノキ属	1	−	−	3
Fagus	ブナ属	4	−	3	1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	30	1	40	11
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	89	4	97	130
Castanea	クリ属	10	−	4	8
Castanopsis − *Pasania*	シイノキ属−マテバシイ属	54	4	31	36
Ulmus − *Zelkova*	ニレ属−ケヤキ属	1	−	3	2
Celtis − *Aphananthe*	エノキ属−ムクノキ属	6	−	−	1
Rhus − *Toxicodendron*	ヌルデ属−ウルシ属	1	−	−	−
Ilex	モチノキ属	1	−	−	1
Celastraceae	ニシキギ科	1	−	−	−
Aesculus	トチノキ属	1	−	−	−
Camellia	ツバキ属	−	−	−	1
Elaeagnus	グミ属	−	−	−	1
Araliaceae	ウコギ科	−	−	−	1
Fraxinus	トネリコ属	2	−	3	1
Callicarpa	ムラサキシキブ属	−	−	2	−
Lonicera	スイカズラ属	−	−	1	−
草本					
Typha	ガマ属	3	−	2	1
Gramineae	イネ科	201	37	273	−
Cyperaceae	カヤツリグサ科	5	−	−	1
Rumex	ギシギシ属	1	−	1	−
Polygonum sect. *Persicaria* − *Echinocaulon*	サナエタデ節−ウナギツカミ節	−	−	2	1
Chenopodiaceae − Amaranthaceae	アカザ科−ヒユ科	4	1	12	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	−	−	3	−
Brassicaceae	アブラナ科	3	−	2	−
Sanguisorba	ワレモコウ属	1	−	−	−
Apiaceae	セリ科	1	−	−	−
Nymphoides	アサザ属	−	−	−	1
Labiatae	シソ科	1	−	−	−
Cucumis	キュウリ属	−	−	1	−
Artemisia	ヨモギ属	5	−	12	−
Tubuliflorae	キク亜科	1	−	3	−
Liguliflorae	タンポポ亜科	−	−	1	−
シダ植物					
monolate type spore	単条溝胞子	6	−	23	3
trilate type spore	三条溝胞子	3	−	13	2
Arboreal pollen	樹木花粉	221	14	204	229
Nonarboreal pollen	草本花粉	226	38	312	5
Spores	シダ植物胞子	9	−	36	5
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	456	52	552	239
Unknown pollen	不明花粉	4	2	3	1

草本花粉ではイネ科が最も多く産出しており、1号土坑の遺構内堆積物で44%、②で49%の産出率を示すが、①では2%と少ない。その他では、栽培植物のキュウリ属（②）がわずかに産出している。

3-2. プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（表3）、分布図に示した（図2）。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の6種類の機動細胞珪酸体が確認できた。イネ機動細胞珪酸体は全ての試料から産出しており、3,000～142,200個である。ネザサ節型機動細胞珪酸体も全ての試料から産出しており、8,500～16,100個である。ササ属型機動細胞珪酸体は①と②で産出が見られ、それぞれ1,700個と1,000個である。ヨシ属機動細胞珪酸体とキビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体は全ての試料で産出しており、それぞれ3,000～6,600個、5,100～33,100個、6,800～19,100個である。その他では、③においてイネ穎破片が711,000個、イネ型短細胞列片が13,200個産出している。

表3　試料1g当りのプラント・オパール個数

試料No.	イネ（個／g）	イネ穎破片（個／g）	ネザサ節型（個／g）	ササ属型（個／g）	ヨシ属（個／g）	キビ族（個／g）	ウシクサ族（個／g）	イネ型短細胞列片（個／g）
①	5,100	0	8,500	1,700	3,400	5,100	6,800	0
②	3,000	0	16,100	1,000	3,000	12,100	19,100	0
③	142,200	711,000	9,900	0	6,600	33,100	9,900	13,200

4. 考察

まず、①の花粉分析結果であるが、樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属の産出が最も多く、次いでシイノキ属－マテバシイ属の産出が目立つ。よって、①の堆積時期には遺跡周辺にカシ類やシイ類などからなる照葉樹林が広がっていたと思われる。また、陽樹のマツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ亜属、クリ属などの産出も見られ、遺跡周辺の一部には開けた場所があり、そこにはこれらの分類群からなる陽樹林が広がっていたと思われる。草本花粉では、ガマ属やアサザ属などの水生植物が産出しており、遺跡周辺の一部に湿地の環境の存在が窺われる。プラント・オパール分析では、イネやネザサ節型、ササ属型、ヨシ属、キビ族、ウシクサ族の機動細胞珪酸体の産出が見られる。イネ機動細胞珪酸体の産出からは、遺跡周辺における稲の存在が指摘できる。ネザサ節型の産出から、陽樹林が生育するような日当たりの良好な場所にケネザサやゴキタケなどのササ類が存在したと推測できる。ササ属型の産出は、遺跡周辺に広がる陽樹林の林床などにおけるミヤコザサなどのササ類の存在を示していると思われる。花粉分析では水生植物の産出が見られたが、プラント・オパール分析においても湿地に生育するヨシ属の産出が見られた。キビ族については、アワやヒエ、キビといった栽培種とエノコログサやタイヌビエなどの野生種の両方が含まれ、機動細胞珪酸体の形態から両者を区別するのは難しいため、ここではキビ族が遺跡周辺に生育していたと指摘するに留める。さらに、ウシクサ族の産出も見られるが、ウシクサ族にはオギなどの湿地的環境に生育する種とススキやチガヤなどの乾燥的環境に生育する種の両方が含まれる。①では、ヨシ属など湿地的環境の存在を示す分類群が産出する一方で、陽樹林が生育できる日の当たる開けた場所の存在も指摘できるため、①から産出するウシクサ族には湿地的環境と乾燥的環境の双方に生育していた種由来の機動細胞珪酸体が含まれていると思われる。ところで、①の花粉分析結果では、②に比べるとイネ科花粉の産出が極端に少ない。イネ科の花粉はほとんど産出しないのに、イネ科植物の植物珪酸体が産出するという状況が生じる原因は不明であるが、堆積様式が異なっていたなど、②とは何らかの違いが生じていたと思われる。

次に、弥生時代中期の地山とされる②であるが、①の花粉分析結果と同様な組成を示している。すなわち、カシ類やシイ類からなる照葉樹林が広く分布しており、一部にはニヨウマツ類やコナラ、クリなどからなる陽樹林や、ガマ属やヨシ属が生育する湿地的環境も存在していたと思われる。さらにこの時期にはキュウリ属の産出が見られ

るため、遺跡周辺でウリ類などが栽培されていた可能性がある。一方で、②では①と比べるとイネ科花粉が圧倒的に多く産出している。プラント・オパール分析において②で増加している分類群は、ネザサ節型やキビ族、ウシクサ族などであり、これらの分布が拡大したと思われる。さらには、②においてもイネ機動細胞珪酸体の産出が確認できた。よって、弥生時代中期には遺跡周辺で稲作を行っていた可能性がある。

最後に、弥生時代終末の遺構内堆積物の③であるが、プラント・オパール分析の結果では、イネ機動細胞珪酸体とイネ穎破片が突出して多く産出している。よって、③は稲藁や籾殻を焼いてできた灰と考えられる。その他には、ネザサ節型やヨシ属、キビ族、ウシクサ族の機動細胞珪酸体が産出しており、特にヨシ属やキビ族は①と②に比べると産出量が多くなっている。弥生時代終末にはこれらの分類群が分布を広げていた可能性もあるが、③は灰であり、自然堆積ではないと考えられるため、解釈には注意が必要であろう。灰を母体とする堆積物には花粉化石はほとんど含まれていないため、③の花粉分析結果から当時の古植生を推定するのは難しい。そこで、1号土坑の遺構内堆積物の花粉分析結果を見ると、①や②と同様な花粉組成を示しているのがわかる。したがって、弥生時代中期に存在していた照葉樹林や陽樹林、湿地的環境は、弥生時代終末になっても存在していたと思われる。

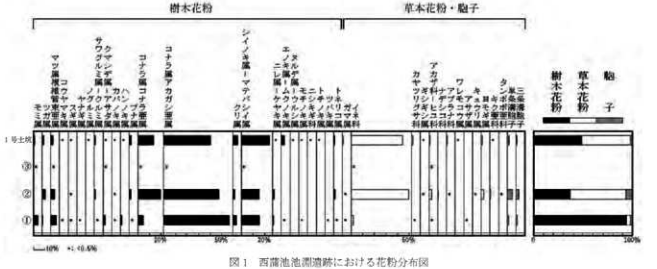


図1　西蒲池池潮遺跡における花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。

＊は樹木花粉200個未満の試料について、検出した分類群を示す。

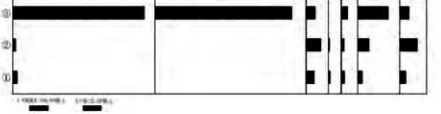
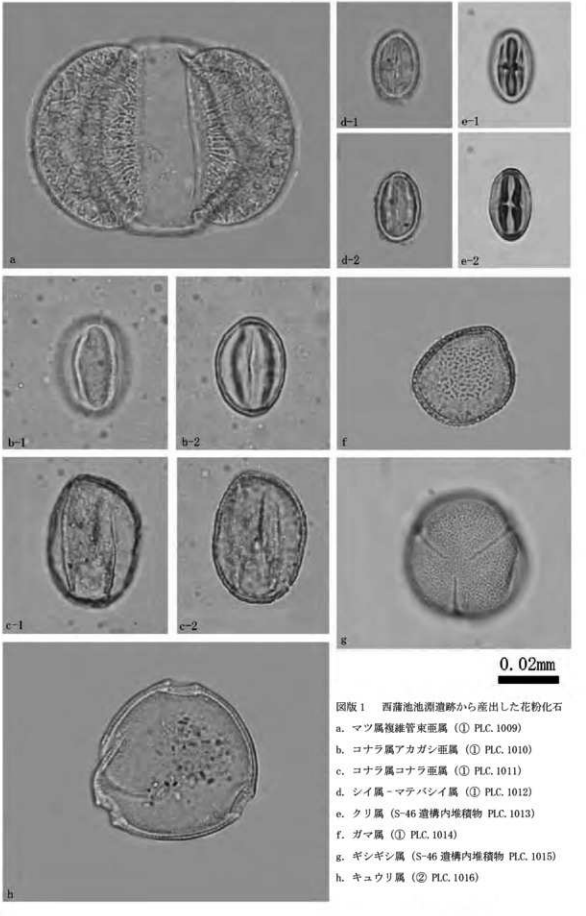


図2　西蒲池池潮遺跡における植物珪酸体分布図



図版 1　西蒲池池潟遺跡から産出した花粉化石

a. マツ属複維管束亜属（① PLC. 1009）

b. コナラ属アカガシ亜属（① PLC. 1010）

c. コナラ属コナラ亜属（① PLC. 1011）

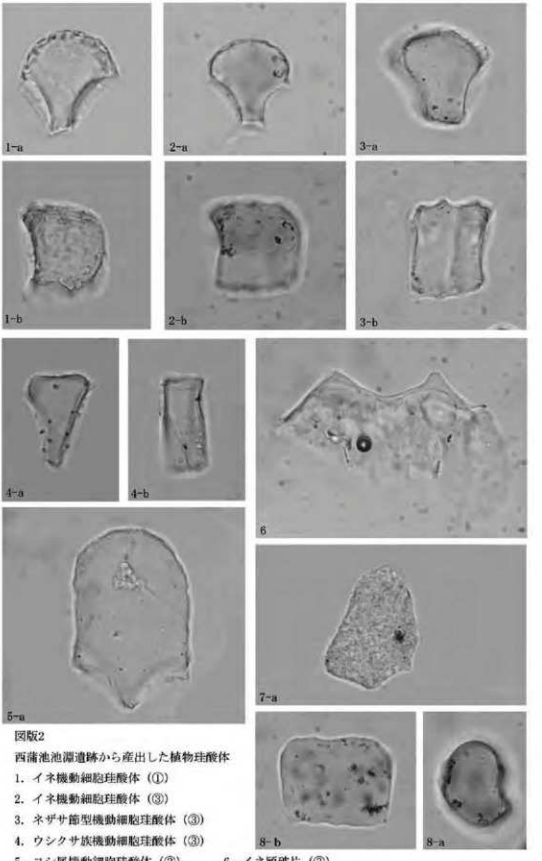
d. シイ属－マテバシイ属（① PLC. 1012）

e. クリ属（S-46 遺構内堆積物 PLC. 1013）

f. ガマ属（① PLC. 1014）

g. ギシギシ属（S-46 遺構内堆積物 PLC. 1015）

h. キュウリ属（② PLC. 1016）



図版2

西蒲池池潟遺跡から産出した植物珪酸体

1. イネ機動細胞珪酸体（①）
2. イネ機動細胞珪酸体（③）
3. ネザサ節型機動細胞珪酸体（③）
4. ウシクサ族機動細胞珪酸体（③）
5. ヨシ属機動細胞珪酸体（③）
6. イネ頴破片（③）
7. ササ属型機動細胞珪酸体（①）
8. キビ族機動細胞珪酸体（③）

a：断面　b：側面

4　堆積物中の珪藻化石群集

藤根　久（パレオ・ラボ）

1. はじめに

珪藻は、10 ～ 500 μ m ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉，1988；安藤，1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、福岡県柳川市に所在する西蒲池池湿遺跡の堆積物の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。なお、同一試料を用いて花粉分析も行なわれている（花粉分析の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、西蒲池池湿遺跡の遺構内や地山から採取された堆積物 4 点である（表 1）。各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

表 1　分析試料とその詳細

分析 No.	遺構等	試料 No.	時期	堆積物の特徴
1	遺構 3m 下の地山	①	－	灰色（5Y5/1）粘土
2	遺構（30 号土坑）直下の地山	②	弥生時代中期	灰白色（5Y8/1）有機質粘土
3	遺構内灰質物（29 号土坑）	③	弥生時代終末	灰色（5Y6/1）灰
4	遺構内堆積物（1 号土坑）	－	弥生時代終末	黒褐色（2.5Y3/1）有機質粘土

(1) 湿潤重量約 1g 程度を取り出し（砂は最大 14g 程度）、秤量した後ビーカーに移して 30% 過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え 1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を 5 回ほど繰り返した。(3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下 600 倍および 1500 倍で観察し、珪藻化石 200 個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物 1g 当たりの殻数を計算した。なお、珪藻化石が 200 個体に満たない試料については、プレパラート 1 枚の全面を観察するにとどめた。

3. 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種（W）として、海水～汽水種は不明種（?）としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（?）として扱った。以下に、小杉（1988）が設定した海水～汽水域における環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

［外洋指標種群（A）］：塩分濃度が 35 ﾊﾟｰﾐﾙ以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

［内湾指標種群（B）］：塩分濃度が 26 ～ 35 ﾊﾟｰﾐﾙの内湾水中を浮遊生活する種群である。

［海水藻場指標種群（C1）］：塩分濃度が 12 ～ 35 ﾊﾟｰﾐﾙの水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

［海水砂質干潟指標種群（D1）］：塩分濃度が 26 ～ 35 ﾊﾟｰﾐﾙの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種

群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

［海水泥質干潟指標種群（E1）］：塩分濃度が 12 ～ 30 パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

［汽水藻場指標種群（C2）］：塩分濃度が 4 ～ 12 パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

［汽水砂質干潟指標種群（D2）］：塩分濃度が 5 ～ 26 パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。

［汽水泥質干潟指標種群（E2）］：塩分濃度が 2 ～ 12 パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

［上流性河川指標種群（J）］：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

［中～下流性河川指標種群（K）］：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

［最下流性河川指標種群（L）］：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

［湖沼浮遊生指標種群（M）］：水深が約 1.5m 以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

［湖沼沼沢湿地指標種群（N）］：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

［沼沢湿地付着生指標種群（O）］：水深 1m 内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

［高層湿原指標種群（P）］：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

［陸域指標種群（Q）］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

表 2　堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、小杉（1988）および安藤（1990）による）

No.	分類群	種群	1	2	3	4
1	*Actinocyclus chrombergii*	A	8	6		2
2	*A.* spp.	?				1
3	*Actinoptychus senarius*	?	2			
4	*Asterolampra* spp.	?	1			
5	*Biddulphia* spp.	?	3	3		1
6	*Coscinodiscus perforatus*	?	3	2		1
7	*C. nodai*	?	2			
8	*C.* spp.	?	8	11	2	7
9	*Cyclotella stylorum*	B	23	17		25
10	*Cymatotheca weissflogii*	?	6	12		10
11	*Diploneis ambiki*	E1	2	3		2
12	*Hyalodiscus subtilis*	?	5	12		12
13	*Navicula elegans*	?				1
14	*N. formosentrae*	?	1	1		1
15	*N. lyra*	?	1			
16	*N. marina*	E1	1			
17	*N. salinarum*	E1	1	2		1
18	*Nitzschia cocconiformis*	E1	1			2
19	*N. granulata*	E1	7	8		2
20	*N. marginulata*	?				1
21	*N. punctata*	E1				1
22	*Palaria sulcata*	B	44	31		51
23	*Pleurosigma angulatum*	?	1			
24	*P.* spp.	?	1			
25	*Rhaphoneis surirella*	D1				1
26	*R.* spp.	?	2			1
27	*Rhizosolenia* spp.	?	2			1
28	*Skeletonema costatum*	R	4			
29	*Surirella fluminensis*	?	3			
30	*Thalassionema nitzschioides*	A	29	17		11
31	*Thalassiosira excentrica*	B	6	5		5
32	*T. fryelliana*	?	10	3		4
33	*T. lineata*	B	2		1	1
34	*T. nordenskioeldii*	A	1			
35	*T.* spp.	?	3	2		3
36	*Trachyneis aspera*	?		1		1
37	*Trieldiaptychus cocconiformis*	?	6	3		8
1	*Actinocyclus normanii*	?				1
2	*Amphora normanii*	?		9		
3	*Diploneis fibula*	?	2			2
4	*Navicula* spp.	?		2		
5	*Nitzschia signa*	?		1		
6	*N.* spp.	?				1
7	*Achnanthes brevipes*	?				7
8	*Diploneis bombus*	E2	1	1		2
9	*Nitzschia levidensis*	?	1			
10	*N. pseudofloriformis*	E2				1
11	*Pseudopodosira kossugii*	E2	5	9		30
12	*Rhopalodia musculus*	?		1		1
13	*Synedra gaillonii*	?		1		
1	*Achnanthes minutissima*	¥		1		
2	*Amphora montana*	Q		7		2
3	*Aulacoseira* spp.	?		2		
4	*Cerataoneis arcus*	K	1			
5	*Cyclotella comta*	M				1
6	*Cymbella tumida*	¥	1			
7	*C.* spp.	?		2		
8	*Eunotia praerupta*	¥		1		
9	*Fragilaria construens*	N		1		
10	*F. pinnata*	N	1			2
11	*F.* spp.	?				2
12	*Gyrosigma* spp.	?	1			2
13	*Hantzschia amphioxys*	Q		12		4
14	*Navicula contenta*	Q				1
15	*N. veneta*	¥		1		4
16	*N.* spp.	?		1		1
17	*Neidium affine*	¥				1
18	*Nitzschia amphibia*	¥		13		
19	*N. palea*	¥		3		2
20	*N. parvula*	¥		8		2
21	*N.* spp.	?		8		5
22	*N. umbonata*	¥		1		
23	*Pinnularia subcapitata*	Q		1		1
24	*P.* spp.	?		3		
25	*Rhopalodia gibba*	¥				1
26	*R. gibberula*	¥				3
27	*R.* spp.	?		1		
28	*Stephanodiscus astraea*	?				1
29	Unknown	?	4			7
1	海 洋	A	26	23		13
2	内 湾	B	79	53	1	82
3	海水砂質干潟	D1				1
4	海水泥質干潟	E1	12	13		8
5	海水不定・不明種	?	60	50	2	52
6	海水～汽水不定・不明種	?	2	12		4
7	汽水泥質干潟	E2	7	10		29
8	汽水不定・不明種	?	1	2		2
9	中～下流性河川	K	1			
10	湖沼浮遊生	M				1
11	湖沼沼沢湿地	N	1	1		2
12	陸 域	Q		20		9
13	広布種	¥	1	27		15
14	淡水不定・不明種	?	1	17		10
15	その他不明種	?	4	1		7
	海水種		169	130	3	156
	海～汽水種		2	12		4
	汽水種		8	12		31
	淡水種		4	65		36
	計		207	220	3	224
	定形殻の出現率（%）		46.4	45.9	6.0	32.8
	堆積物 1g 当たり殻数（個）		8.6E+6	9.2E+6	1.4E+3	4.0E+6

4. 結果および考察

4試料の堆積物から検出された珪藻化石は、海水種が37分類群21属29種、海～汽水種が6分類群5属4種、汽水種が7分類群6属7種、淡水種が28分類群16属20種であった。これらの珪藻化石は、海水域における4環境指標種群（A、B、D1、E1）、汽水域における1環境指標種群（E2）、淡水域における4環境指標種群（K、M、N、Q）に分類された（表2）。

これらの環境指標種群の特徴から、4試料の堆積物はⅠ～Ⅳ帯に分帯された。以下に、各珪藻帯の特徴と堆積環境について述べる。

Ⅰ帯（遺構内堆積物（1号土坑）：分析No.4）

堆積物1g中の珪藻殻数は4.0×10^6個、完形殻の出現率は32.8%である。

全体としては、海水種や汽水種の珪藻化石が多く、淡水種も含まれていた。環境指標種群では、内湾指標種群（B）が特徴的に多く出現し、汽水泥質干潟指標種群（E2）、外洋指標種群（A）、海水泥質干潟指標種群（E1）、海水砂質干潟指標種群（D1）、淡水種の陸域指標種群（Q）、湖沼浮遊生指標種群（M）、湖沼沼沢湿地指標種群（N）を伴う。こうした環境指標種群の特徴から、外洋～内湾～海水干潟～汽水干潟環境の影響を強く受けるジメジメとした陸域環境と推定される。なお、花粉化石ではガマ属などの水生植物が産出しており、遺跡周辺の一部に湿地的環境の存在が推定されている（花粉分析の項を参照）。

Ⅱ帯（遺構内堆積物（29号土坑）：分析No.3）

堆積物1g中の珪藻殻数は1.4×10^5個、完形殻の出現率は0.0%である。

珪藻化石は非常に少なく、海水種のみである。この堆積物は、遺構内に堆積した灰質物であるため、地山堆積物中の珪藻化石が含まれ、短時間に廃棄されたと考えられる。

Ⅲ帯（遺構（30号土坑）直下の地山：分析No.2）

堆積物1g中の珪藻殻数は9.2×10^5個、完形殻の出現率は45.9%である。

全体としては、海水種や汽水種の珪藻化石が多く、淡水種も含まれていた。環境指標種群では、内湾指標種群（B）が特徴的に多く出現し、汽水泥質干潟指標種群（E2）、外洋指標種群（A）、海水泥質干潟指標種群（E1）、淡水種の陸域指標種群（Q）、湖沼沼沢湿地指標種群（N）を伴う。こうした環境指標種群の特徴から、外洋～内湾～海水干潟～汽水干潟環境の影響を強く受けるジメジメとした陸域環境と推定される。なお、花粉化石ではガマ属などの水生植物が産出しており、遺跡周辺の一部に湿地的環境の存在が推定されている（花粉分析の項を参照）。

Ⅳ帯（遺構3m下の地山：分析No.1）

堆積物1g中の珪藻殻数は8.4×10^6個、完形殻の出現率は46.4%である。

全体としては、海水種や汽水種の珪藻化石が多く、淡水種は僅かである。環境指標種群では、内湾指標種群（B）が特徴的に多く出現し、汽水泥質干潟指標種群（E2）、外洋指標種群（A）、海水泥質干潟指標種群（E1）、淡水種の中～下流性河川指標種群（K）、湖沼沼沢湿地指標種群（N）を僅かに伴う。こうした環境指標種群の特徴から、主

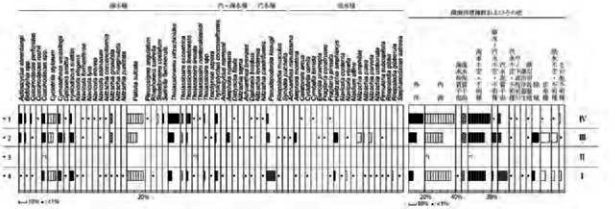


図1　堆積物中の珪藻化石分布図（主な分類群を表示、＊1は全体数50個体以下）

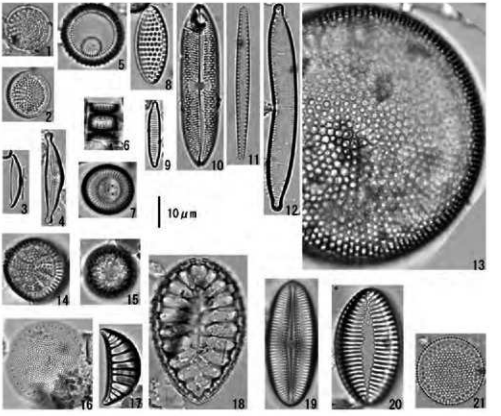
に内湾環境が優勢であり、外洋～海水干潟～汽水干潟環境を伴う環境と推定される。なお、花粉化石ではガマ属やアサザ属などの水生植物が産出しており、遺跡周辺の一部に湿地的環境の存在が推定されている（花粉分析の項を参照）。

5. おわりに

西蒲池池潟遺跡の堆積物４点について珪藻分析を行った。その結果、遺構 3m 下の地山堆積物では主に内湾環境が優勢であり、外洋～海水干潟～汽水干潟環境を伴う堆積環境（Ⅳ帯）である。遺構（30 号土坑）直下の地山堆積物や遺構内堆積物（1 号土坑）では、基本的にジメジメとした陸域環境（Ⅲ帯およびⅠ帯）と推定された。なお、遺構内堆積物（29 号土坑）の灰には、海水種珪藻化石が僅かに含まれ、短時間に廃棄されたと考えられる（Ⅱ帯）。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，1-20.



図版１　堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

1. *Thalassiosira lineata* (No. 1)　2. *Cymatotheca weissflogii* (No. 1)　3. *Amphora montana* (No. 4)
4. *Amphora normanii* (No. 2)　5. *Palaria sulcata* (No. 1)　6. *Palaria sulcata* (No. 2)
7. *Cyclotella stylorum* (No. 1)　8. *Nitzschia granulata* (No. 1)　9. *Nitzschia amphibia* (No. 2)
10. *Trachyneis aspera* (No. 4)　11. *Thalassionema nitzschioides* (No. 1)　12. *Hantzschia amphioxys* (No. 4)
13. *Coscinodiscus perforatus* (No. 1)　14. *Trybliopiychus cocconeiformis* (No. 1)
15. *Pseudopodosira kosugii* (No. 2)　16. *Thalassiosira nordenskioeldii* (No. 1)
17. *Rhopalodia musculus* (No. 2)　18. *Surirella fluminensis* (No. 1)　19. *Diploneis smithii* (No. 1)
20. *Nitzschia cocconeiformis* (No. 1)　21. *Thalassiosira lineata* (No. 4)

5　出土した大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ　スダルシャン（パレオ・ラボ）

1. はじめに

弥生時代から古墳時代を主体とした複合遺跡である福岡県柳川市の西蒲池池潮遺跡で、井戸状土坑などから出土した大型植物遺体を同定し、食用などに利用された植物あるいは遺構周辺での栽培状況や植生について検討する。

2. 試料と方法

試料は、Ⅱ区の 10 遺構とⅢ区の採取地点 1 ヵ所から、発掘調査現場で目視により取り上げられた試料である。1 試料中には、種実 1 点のみを含む試料もあれば、多種の種実が混合した試料もあった。試料の内訳と時期は、井戸状土坑である 1 号土坑（弥生時代中期）と 7 号土坑（弥生時代後期）、18，140 号土坑（弥生時代終末）、34，21，29 号土坑（古墳時代初頭）、46 号土坑（古墳時代後期）、土坑である 109 号土坑（古墳時代初頭）、包含層である東蒲池門前遺跡Ｃ区の淡灰青色粘土層（古墳時代後期）、溝であるⅠ－2 号溝（中世後期）である。

各試料について、肉眼および実体顕微鏡下で大型植物遺体の抽出・同定・計数を行った。モモは完形、半割、破片に分けて計数した。試料は、九州歴史資料館に保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物ではクリ果実と、ツブラジイ果実、モモ核、センダン核、ムクロジ種子の 5 分類群、草本植物ではメロン仲間種子と、ヒョウタン仲間果実・種子、キカラスウリ種子の 3 分類群の、計 8 分類群が見いだされた（表 1）。このほかに、科以下の同定ができなかった不明種実があった。

表 1　西蒲池池潮遺跡から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

	地点	Ⅱ地点										Ⅰ地点	東門前
	遺構・採取位置	1 号土坑	7 号土坑	18 号土坑	19 号土坑	21 号土坑	29 号土坑	34 号土坑	46 号土坑	109 号土坑	Ⅰ－2 号溝	Ⅲ区東包含層
	遺構種別	井戸状土坑						土坑			溝	
	層位	下層		貝層		下層						淡灰青色粘土
分類群	時期	弥生中期	弥生後期	弥生終末		古墳初頭			古墳後期	古墳初頭	中世後期	古墳後期
クリ	果実		(4)									
ツブラジイ	果実					1						
モモ	核（完形／破片）				1 (11)			(1)				
	核（半割）							(3)				
センダン	核			1	1							
ムクロジ	種子	6 (19)										
メロン仲間	種子									33 (9)		
ヒョウタン仲間	果実							(43)				(32)
	種子							91 (20)	37	60 (2)		107 (10)
キカラスウリ	種子										27 (35)	
不明	種実							(1)				

以下に、産出した種実について遺構および採取位置別に記載する（不明種実は除く）。

1 号土坑：ムクロジの完形 6 点と破片 19 点が得られた。

34 号土坑:ヒョウタン仲間（種子）が完形 91 点と破片 20 点で非常に多く、ヒョウタン仲間（果実）の破片 43 点、モモの半割 3 点と破片 1 点が得られた。ヒョウタン仲間果実は、完形個体に換算すると 1 個体分未満であった。

46 号土坑：ヒョウタン仲間（種子）の完形 37 点が得られた。

29 号土坑：ツブラジイの完形 1 点が得られた。

21 号土坑：モモの完形 1 点と破片 11 点が得られた。

18 号土坑：センダンの完形 1 点が得られた。

109 号土坑：メロン仲間の完形 33 点と破片 9 点、ヒョウタン仲間（種子）の完形 60 点と破片 2 点が得られた。

19 号土坑：センダンの完形 1 点が得られた。

7 号土坑：クリの破片 4 点が得られた。

Ⅰ－2号溝：キカラスウリの完形27点と破片35点が得られた。

東蒲池門前遺跡C区包含層の淡灰青色粘土層：ヒョウタン仲間（種子）の完形107点と破片10点、ヒョウタン仲間（果実）の破片32点が得られた。ヒョウタン仲間果実は、完形個体に換算すると1～2個体分であった。

次に、大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) クリ　*Castanea crenata* Siebold et Zucc.　果実　ブナ科

黒褐色で、破片だが、完形ならば側面は広卵形。表面は平滑で、縦に細く浅い筋がみられる。殻斗着痕は残存していない。残存長14.8mm、残存幅27.1mm。

(2) ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky　果実　ブナ科

黒褐色で、球形。上部で幅が急に狭くなる。花被着点の直下でくびれる。堅果の幅は花被着点直下へむかって徐々に狭くなる。果実の高さは15mm以下。高さ12.0mm、幅9.5mm。

(3) モモ　*Amygdalus persica* L.　核　バラ科

黄～茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。完形個体の大きさは、長さ24.6mm、幅18.2mm、厚さ14.2mm、半割の大きさは、長さ20.4mm、残存幅14.9mm。

(4) センダン　*Melia azedarach* L.　核　センダン科

淡褐色。上面観は星形で五分裂し、側面観は菱形で平滑。下端に大きな着点がある。長さ12.5mm、幅7.5mm。

(5) ムクロジ　*Sapindus mukorossi* Gaertn.　種子　ムクロジ科

黒褐色で、表面は平滑。黒色で線状の着点がある。着点がある面以外は球体。長さ12.4mm、幅14.0mm。

(6) メロン仲間　*Cucumis melo* L.　種子　ウリ科

黄白色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。表面は平滑で、基部は突出せず直線状の隆線となる。藤下（1984）は、種子の大きさからおおむね次の3群に分けられるとしている。長さ6.0mm以下の雑草メロン型、長さ6.1～8.0mmのマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1mm以上のモモルディカメロン型である。任意に抽出した種子10点の大きさは、長さ6.4～7.3（平均6.8±0.3）mm、幅2.9～3.3（平均3.1±0.1）mmで、すべてマクワウリ・シロウリ型である。

(7) ヒョウタン仲間　*Lagenaria siceraria* (Molina) Standl.　果実・種子　ウリ科

果実は茶褐色で、形状のわかる個体の形はフラスコ形。表面は平滑で、やや光沢がある。図版に掲載した果実の大きさは、残存長98.0mm、残存幅75.0mm、厚さ5.2mmと、残存長72.0mm、残存幅31.0mm、厚さ6.8mm。任意に抽出した10点の果実破片の厚さは、3.2～6.8（平均4.6±1.1）mm。

種子は、やや淡黄褐色～褐色で、上面観は扁平、側面観は逆三角形。やや湾曲して左右は非対象、本来ならば先端はW字状で、基部から先端まで、浅く広い溝が2本走る。壁はややスポンジ質。任意に抽出した種子10点の大きさは、長さ13.2～15.0（平均14.1±0.6）mm、幅5.6～6.4（平均6.0±0.2）mmである。

(8) キカラスウリ　*Trichosanthes kirilowii* Maxim. var. *japonica* (Miq.) Kitam.　種子　ウリ科

赤褐色で、倒卵形。やや薄く、表面は平滑。基部両側は厚く膨れる。表面に細かい皺がある。長さ13.5mm、幅8.4mm。

(9) 不明　Unknown　種実

茶褐色で、本来は楕円体か。着点部分が突出し、円形の小さい穴があく。壁は薄くて柔らかく、表面の遺存状態は悪い。果皮の一部と推定される。残存長15.3mm、残存幅19.9mm、残存厚15.2mm。

4. 考察

以下、時期別に大型植物遺体の産出傾向について考察する。

［弥生時代中期］

弥生時代中期では、井戸状土坑である1号土坑からムクロジが得られた。ムクロジの果皮には界面活性作用を持ったサポニンが含まれており、近現代では洗剤や洗髪の代用品として用いられる（長澤，2001：長沢，2012）。堆積

環境の影響で柔らかい果皮が残存しなかった可能性もあるが、出土したムクロジは種子のみの状態であり、果皮が人為的に取り去られて、残った種子が堆積した可能性がある。

［弥生時代後期］

井戸状土坑である7号土坑からクリが得られた。食べられない果皮が破片で出土している状況から、食用のために果肉が割られ、その残渣が堆積した可能性がある。

［弥生時代終末］

井戸状土坑である18号土坑と19号土坑からセンダンが得られた。センダンは、温暖な地域の海岸近くに多く自生する落葉高木である。両遺構は近接しており、周囲にセンダンが生育していた可能性がある。センダンは、柳川市三橋町の蒲船津江頭遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構などから一定量得られており（佐々木・バンダリ，2011）、柳川市西蒲池の東蒲池門前遺跡でも弥生時代後期から終末期の貝塚内から1点得られている（佐々木・バンダリ，2013）。したがって、センダンはこの地域に普通に生育していた樹種と考えられる。

［古墳時代初期］

井戸状土坑である29号土坑からは食用になるドングリ類であるツブラジイが得られた。1点のみ出土のため、どのような理由で堆積したかは不明である。

西蒲池池溜遺跡では古墳時代初期の遺構内から栽培植物がまとまって産出する傾向がある。井戸状土坑である34号土坑からはヒョウタン仲間の種子が果実を伴って得られ、モモも得られた。モモは21号土坑からも得られている。土坑である109号土坑からは、マクワウリ・シロウリ型のメロン仲間とヒョウタン仲間がまとまって得られた。モモやヒョウタン仲間は食用などに利用されるほか、井戸などに祭祀に伴って出土する場合もある。他の出土遺物の状況と合わせて解釈する必要があろう。

［古墳時代後期］

井戸状土坑である46号土坑からはヒョウタン仲間の種子、東蒲池門前遺跡C区包含層の包含層からもヒョウタン仲間の種子が果実を伴って得られた。周辺で栽培されていたか、遺跡内あるいは遺構内に持ち込まれたと考えられる。

［中世後期］

溝であるⅠ-2号溝から、まとまった量のキカラスウリが得られた。キカラスウリは藪などに生えるつる性植物である。果実は食用になるほか、果実と根は薬用に用いられる（長澤，2001；長沢，2012）。考古学的な所見によれば、溝の周囲にはつる性植物が絡む森林要素はなかったと考えられているため、果実の利用後に、不要な種子を溝内に廃棄した可能性などが考えられる。

引用文献

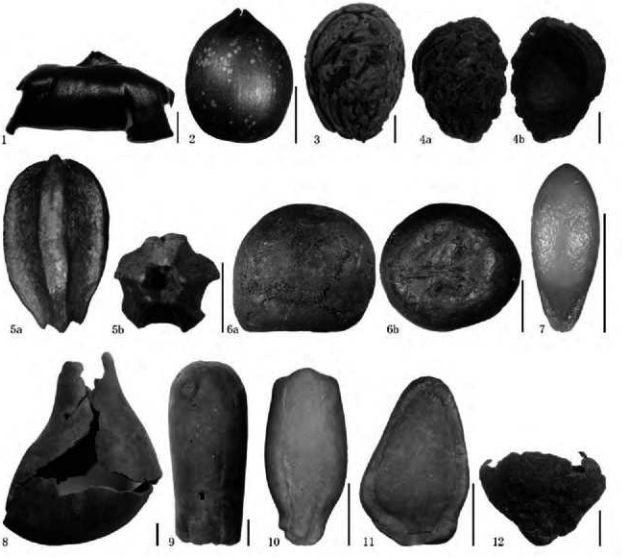
藤下典之（1984）出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法．渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学―総括報告書」：638-654，同朋舎出版．

長澤　武（2001）植物民俗．312p，法政大学出版局．

長沢　武（2012）野外植物民俗事苑．443p，ほおずき書籍．

佐々木由香・バンダリ　スダルシャン（2011）大型植物遺体の同定．福岡県教育委員会編「蒲船津江頭遺跡Ⅲ」：108-110，福岡県教育委員会．

佐々木由香・バンダリスダルシャン（2013）大型植物遺体．九州歴史資料館編「東蒲池門前」：142-144，九州歴史資料館．



スケール 1-7, 10-12:5mm, 8, 9:10mm

図版1　西蒲池池跡遺跡から出土した大型植物遺体

1. クリ果実（7号土坑）,2. ツブラジイ果実（29号土坑）,3. モモ核（21号土坑）,4. モモ核（34号土坑）,5. センダン核（19号土坑）、6. ムクロジ種子（1号土坑）、7. メロン仲間種子（109号土坑）、8・9. ヒョウタン仲間果実（東蒲池門前C区、淡灰青色粘土）、10. ヒョウタン仲間種子（東蒲池門前C区、淡灰青色粘土）、11. キカラスウリ種子（Ⅰ-2号濠）、12. 不明種実（34号土坑）

6　貝類の同定

中村賢太郎（パレオ・ラボ）

1. はじめに

西蒲池池潟遺跡は、筑後川や矢部川水系の堆積作用と有明海の潮汐により形成された低地に立地する。西蒲池池潟遺跡の発掘調査では、弥生時代、古墳時代、古代、中世の遺構（井戸状土坑、土坑、柱穴、溝）や包含層から貝類遺体が出土した。ここでは貝類遺体を主に動物遺体の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、池潟Ⅰ地点とⅡ地点で採取された貝類遺体を主とする動物遺体である。

Ⅰ地点では、弥生時代終末～古墳時代初頭の井戸状土坑Ⅰ-5号土坑、中世の溝Ⅱ-2号溝、および時期不明で採取位置不明の試料が採取された。

Ⅱ地点では、弥生時代後期の井戸状土坑である5号土坑と6号土坑、弥生時代終末の井戸状土坑である12、14、18、19号土坑、弥生時代後期～古墳時代初頭の柱穴であるS-281とS-292、古墳時代初頭の井戸状土坑である39、21、22、23、35、30号土坑、および灰色粘土包含層、古墳時代後期の井戸状土坑である47、52、88号土坑、古代の井戸状土坑である56号土坑、下層が古代、上層が古代～中世の井戸状土坑53号土坑、中世の茶灰色土包含層の試料が採取された。

同定は、肉眼で現生標本との比較により行った。試料は、九州歴史資料館に保管されている。

3. 結果

同定された動物遺体種名一覧を表1に、各遺構の出土点数を表2に示す。

全体で最も多く見られたカキ類は、扁平で放射肋が無いものと厚く放射肋があるものの2型に分類された。前者をスミノエガキ、後者をマガキあるいはシカメガキと同定した。

Ⅰ地点では、弥生時代終末～古墳時代初頭の井戸状土坑Ⅰ－5号土坑においてスミノエガキが多く、マガキ／シカメガキが1点見られた。中世の溝Ⅱ－2号溝においてスミノエガキ1点が見られた。また、時期不明で採取位置不明のハイガイが見られた。

表1　西蒲池池潟遺跡出土動物遺体種名表

軟体動物門	Mollusca
腹足綱	Gastropoda
イボキサゴ	*Umbonium moniliferum*
ウミニナ	*Batillaria multiformis*
ヘナタリ	*Cerithidea cingulata*
ツメタガイ	*Glossaulax didyma*
マルタニシ	*Cipangopaludina chinensis*
アカニシ	*Rapana venosa*
テングニシ	*Hemifusus tuba*
二枚貝綱	*Bivalvia*
サルボウ	*Scapharca subcrenata*
ハイガイ	*Tegillarca granosa*
マガキ／シカメガキ	*Crassostrea gigas* / *Crassostrea sikamea*
スミノエガキ	*Crassostrea ariakesis*
シオフキ	*Mactra veneriformis*
アゲマキ	*Sinonovacula constricta*
ヤマトシジミ	*Corbicula japonica*
オキシジミ	*Cyclina sinensis*
ハマグリ	*Meretrix lusoria*
節足動物門	Arthropoda
顎脚綱	Maxillopoda
フジツボ類	Balanomorpha fam., gen. et sp. Indet.
脊椎動物門	Vertebrata
硬骨魚綱	Osteichthyes
硬骨魚綱の一種	Osteichthyes ord., fam., gen. et sp. Indet.

Ⅱ地点では、弥生時代後期の井戸状土坑5号土坑や6号土坑では、スミノエガキがやや多く、次いでマガキ／シカメガキ、その他ハイガイやハマグリが見られた。

弥生時代終末の井戸状土坑12、14、18、19号土坑では、スミノエガキが最も多く、次いでアゲマキ、マガキ／シカメガキ、ハイガイが多く、他にイボキサゴ、ウミニナ、ヘナタリ、ツメタガイ、アカニシ、テングニシ、サルボウ、シオフキ、ヤマトシジミ、オキシジミ、ハマグリなどが見られた。貝類以外にはフジツボ類の破片が見られた。

弥生時代後期～古墳時代初頭の柱穴であるS-292ではスミノエガキが見られた。その他、S-281ではボラ科の可能性がある硬骨魚綱の左主鰓蓋骨が見られた。

古墳時代初頭の井戸状土坑39、21、22、23、35、

30 号土坑、および灰色粘土包含層では、スミノエガキが最も多く、次いでハイガイ、アゲマキ、ハマグリが多く、他にイボキサゴ、ヘナタリ、マルタニシ、アカニシ、マガキ／シカメガキ、シオフキが見られた。貝類以外には硬骨魚綱の骨が見られた。

古墳時代後期の井戸状土坑 47、52、88 号土坑では、スミノエガキが最も多く、次いでハイガイ、他にマガキ／シカメガキが見られた。

古代の井戸状土坑 56 号土坑ではハイガイが見られた。

下層が古代、上層が古代～中世の井戸状土坑 S-75 では、下層と上層の両方でスミノエガキのみが見られた。

4. 考察

貝類では、弥生時代後期から中世にかけてスミノエガキが主な採集対象だったと言える。スミノエガキの大型の殻に小型の殻が多数付着するものなどが見られ、おそらくスミノエガキは河口や内湾の砂泥地に形成されたカキ礁から採取されたと考えられる。マガキ／シカメガキもおそらく同様である。

弥生時代後期には、主にスミノエガキが採集され、内湾の砂泥地でマガキ／シカメガキ、ハイガイ、ハマグリなどが採集されたと考えられる。

弥生時代終末には、主にスミノエガキが採集され、次いで内湾の砂泥地でアゲマキ、マガキ／シカメガキ、ハイガイが多く採集されたと考えられる。同じく内湾の砂泥地では、イボキサゴ、ウミニナ、ヘナタリ、ツメタガイ、サルボウ、シオフキ、オキシジミ、ハマグリなども採集され、やや内湾の浅海でアカニシ、テングニシ、河口周辺でヤマトシジミが採集されたと考えられる。

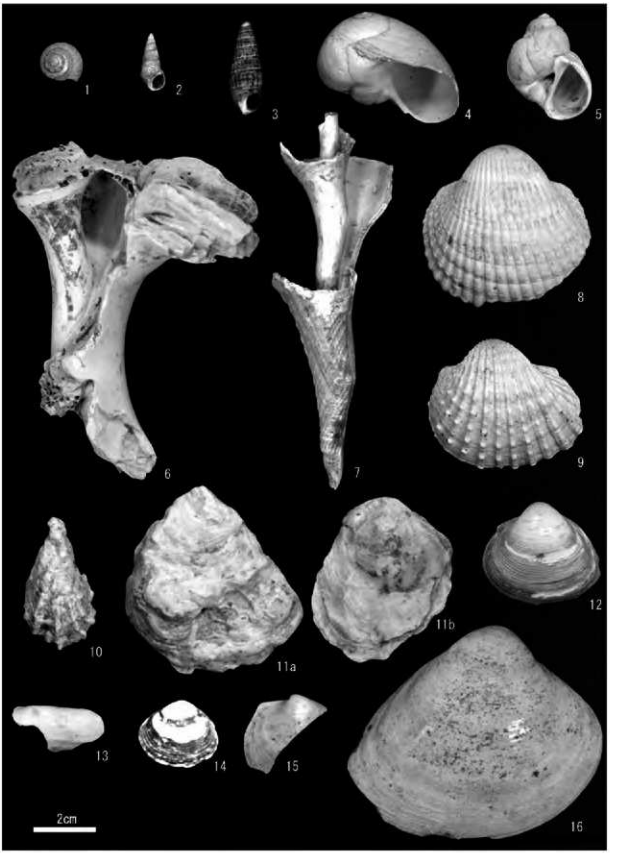
古墳時代初頭には、主にスミノエガキが採集され、次いで内湾の砂泥地でハイガイ、アゲマキ、ハマグリが多く採集され、同じく内湾の砂泥他でイボキサゴ、ヘナタリ、マガキ／シカメガキ、シオフキが、やや内湾の浅海でアカニシ、河川や池沼など淡水域でマルタニシが採集されたと考えられる。

古墳時代後期には、主にスミノエガキが採集され、次いで内湾の砂泥地でハイガイやマガキ／シカメガキが採集されたと考えられる。

古代～中世には、スミノエガキやハイガイが内湾の砂泥地で採集されたと考えられる。

表 2　西蒲池池源遺跡出土の貝類、甲殻類、魚類

地点	遺構	時期	堆貝層										二枚貝層																										甲殻類	硬骨魚綱	
			イボキサゴ	ウミニナ科	ホモロナ	ヘナタリ	ツメタガイ	マルタニシ	アカニシ	レイシ？	テングニシ	石敷豊良	サルボウ		ハイガイ		マガキ／シカメガキ		スミノエガキ		シオフキ		アゲマキ		ヤマトシジミ		オキシジミ		ハマグリ		不明二枚貝		フジツボ類	硬骨魚綱	ボラ科？	硬骨魚綱
													左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	有	有	左上顎歯骨	前顎歯骨？
I	2 号溝	中世																	1																			
I	5 号土坑	弥生終末～古墳初期															1	61	38																			
I	？	?明													1																							
II	39 号土坑	弥生終末～古墳後期											1	1															1									1
II	56 号土坑	古代											1																									
II	12 号土坑	弥生終末～古墳後期																	2	1																		
II	14 号土坑下層	弥生終末～古墳後期											6	3	2				55	91									1									
II	14 号土坑底直上	弥生終末～古墳後期																		1																		
II	53 号土坑上層	古代～中世																	1																			
II	53 号土坑下層	古代																																				
II	47 号土坑	弥生終末～古墳後期											4	4	1				5	11																		
II	21 号土坑	弥生終末～古墳後期	3			2						2		8	4	1			72	58	3	3	13	12														
II	23 号土坑下層	弥生終末～古墳後期	3					1											3	5			1	2														
II	16 号土坑	弥生終末	11	7	1	11	3			4		11		25	44	85	9	6	40	14	15	97	37	3		1			4	2	2		6				
II	19 号土坑下層	弥生終末		4					1		1		1	3	3	9			92	67	1	2	6	16					2	1			1					
II	20 号土坑下層	弥生終末																		5	5																	
II	21 号土坑上層	弥生終末																	13	19			1						1	2								
II	19 号土坑下層	弥生終末																	1	1										1								
II	19 号土坑	弥生終末											1		3				9	3																		
II	5 号土坑下層	弥生後期											1		3				1	5																		
II	22 号土坑	弥生終末～古墳後期												19	21				3	3										2								
II	23 号土坑下層	弥生終末～古墳後期													2				3	2									1	5								
II	13 号土坑	弥生終末～古墳後期												3					8	1																		
II	52 号土坑	古墳後期												3	8	2	1	50	78																			
II	4 号土坑	弥生後期																	5	3									1	1								
II	55 号土坑下層	弥生終末～古墳後期	1						1																													
II	S-281	弥生後期～古墳初期																																	1			
II	30 号土坑	弥生終末～古墳後期																											1									
II	30 号土坑	弥生終末～古墳後期												1						3																		
II	30 号土坑	弥生終末～古墳後期																	3	2																		
II	S-281	弥生後期～古墳初期																		1																		
II	88 号土坑	古墳後期																	1																			
II	灰色粘土	弥生終末～古墳初期												1					2																			
II	茶灰色土	中世																	2																			



図版1　西蒲池池潟遺跡の貝類遺体

1. イボキサゴ、2. ウミニナ、3. ヘナタリ、4. ツメタガイ、
5. マルタニシ、6. アカニシ、7. テングニシ、8. サルボウ、
9. ハイガイ、10. マガキ／シカメガキ、11. スミノエガキ、12. シオフキ、
13. アゲマキ、14. ヤマトシジミ、15. オキシジミ、16. ハマグリ
(1～4・6～9・12・14～16はⅡ-18号土坑、5・10・11・13はⅡ-21号土坑出土)

7　動物遺存体

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、西蒲池池潟遺跡（池潟Ⅰ地点・池潟Ⅱ地点）、東蒲池門前遺跡（門前C区・門前D区）で出土した骨貝類であり、弥生時代の土坑・柱穴・包含層、古墳時代の土坑・包含層、古代の土坑、中世前期の区画溝・包含層・整地層・土坑、中世後期の溝・包含層・土坑・整地層、中世の土坑・包含層、近現代の土坑・溝などから採取された骨貝類総計368 試料である。1試料あたり1～複数点含まれ、総破片数1100片以上である。

試料は、9箱のテンバコ（箱No.1～6・9・10・12）で管理されており、それぞれに複数の試料が保管されている。そこで同定を行うにあたり、テンバコ内で遺構名の若い順番に並べ替え、全ての試料に対して通し番号（以下、No. と表記する）を付して試料を管理する。なお、試料の詳細については結果とともに表示する。

2. 分析方法

試料に砂分や泥分が付着する場合は乾いた筆・竹串、あるいは水に浸した筆で可能な限り静かに除去する。また、同一試料内において接合関係がみられる場合は一般工作用接着剤を用いて復元を試みる。これらの処理を行った後、試料を肉眼および実体顕微鏡で観察し、その形態的特徴から種と部位の同定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。

3. 結果

今回、確認された種類は、腹足綱1種類（アカニシ／シロニシ）、二枚貝綱2種類（イタボガキ科?、二枚貝類）、軟骨魚綱2種類（トビエイ科、エイ・サメ類）、硬骨魚綱4種類（ナマズ、ボラ、スズキ属、クロダイ属）、爬虫綱2種類（ウミガメ科の一種、スッポン）、鳥綱4種類（ニワトリ、ツル科、サギ科、ハクチョウ類）、哺乳綱8種類（ヒト、ノウサギ、ドブネズミ、イヌ、ニホンアシカ、ウマ、イノシシ属（今回は、イノシシとブタの判断がつかなかったためイノシシ属で一括した）、ニホンジカ、ウシ）である（表1）。

同定結果を表2に示す。また、ノウサギ、ドブネズミ、イヌ、ウマ、イノシシ、ニホンジカ、ウシの計測値を表3～7に示す。以下、池潟Ⅰ地点、池潟Ⅱ地点、門前C区、門前D区別に、種類ごとの結果を示す。また、骨貝類以外の土器片、須恵器片、黒曜石、炭化材、植物遺体、モモ核、粘土塊、礫は、以下の記述では省略する。

1) 池潟Ⅰ地点

＜エイ・サメ類＞弥生時代後期の落ち込みS-604から椎骨（No.211）、中世前期の包含層から椎骨（No.328）が検出される。No.211は比較的大型の破片である。No.328は、加工品の可能性がある。

＜ナマズ＞弥生時代終末の35号土坑から胸鰭棘（No.6）が検出される。

＜ボラ＞弥生時代後期の包含層（No. 220）、弥生時代後期の柱穴（S-438）（No.310）、古墳時代初頭のⅢ区落ち込み（No.236）、古墳時代初頭の1号土坑（No.294・295）、中世前期の包含層（No.40）などから検出される。

確認される部位は、左主鰓蓋骨6点（No.40,220,294,295,310）、右主鰓蓋骨2点（No.236,295）である。

＜スズキ属＞弥生時代中期の61号土坑から左主鰓蓋骨（No.299）が検出される。

＜魚類？＞弥生時代中期の包含層から主鰓蓋骨の可能性がある破片（No.46）が検出される。

＜キジ科＞弥生時代終末の35号土坑から右上腕骨（No.6）が検出される。切断され、遠位端のみが残る。なお、No.6では、鳥類の四肢骨片もみられるが、種類不明である。

＜鳥綱＞時代・時期不明のピット（S-243）から鳥類の四肢骨片（No.305）が検出される。焼けている。

＜ノウサギ＞弥生時代中期の包含層から左上腕骨（No.327）が検出される。

＜イヌ科＞中世前期の区画溝1号溝、中世前期の包含層から検出される。左下顎骨（No.38）、右下顎骨（No.278）

である。No. 278 は第 1 ～ 3 後臼歯部、No. 38 は第 1 後臼歯～下顎枝部が残る。

＜ニホンアシカ＞時代不明であるが、2 号溝の最下層から頭蓋骨（No. 358）が検出される。比較的良好な保存状態であるが、部分的に破損しており、口蓋・上顎・前頭骨・鼻骨が欠損する。後頭骨三角幅（ot-ot）158mm、後頭孔最大幅 31.94 mm、後頭孔最大高 32.57mm、後頭骨高 109.67mm を計る。わずかにカットマークがみられる。

＜ウマ＞弥生時代中期の柱穴（S-789）と包含層、中世前期の小溝（S-6）、ピット（S-213）・71 号土坑・区画溝 1 号・2 号溝から検出される。

確認される部位は、左上顎第 1 門歯の可能性がある破片（No. 40）、左上顎第 2 門歯（No. 309）、左上顎第 3 前臼歯（No. 322）、左上顎第 2 後臼歯 2 点（No. 286, 309）、左上顎第 3 後臼歯（No. 321）、右上顎第 2 前臼歯（No. 50）、右上顎第 4 前臼歯（No. 322）、右上顎第 1 後臼歯（No. 317）、右上顎第 3 後臼歯？（No. 50）、左下顎第 2 門歯（No. 320）、右下顎第 2 前臼歯 3 点（No. 31, 32, 320）、左下顎第 3 後臼歯（No. 50）、歯牙片（No. 50）、右下顎骨歯牙片（No. 287）、左橈骨（No. 229）、左尺骨（No. 216）、左中手骨（No318）、右第 3 中手骨（No. 324）、大腿骨（No. 209）、右膝蓋骨（No. 281）、右距骨 2 点（No. 26, 337）、足根骨（No. 209）、左第 3 足根骨（No. 309）、中手骨 / 中足骨 2 点（No. 285, 303）、基節骨 2 点（No. 40, 316）、中節骨（No. 285）、末節骨 2 点（No. 281, 309）である。

なお、大腿骨（No. 209）と左橈骨（No. 229）には、解体に伴うカットマークがみられる。

＜イノシシ属＞弥生時代中期のピット（S-56），70 号，61 号，39 号土坑・3 号溜り状遺構・包含層、弥生時代後期の柱穴（S-209）・2 号，69 号土坑・落ち込み・包含層、弥生時代終末の 2 号，35 号土坑、古墳時代初頭の 1 号，63 号土坑・包含層、中世前期の 23 号土坑・1 号溝・包含層、中世後期 2 号溝、時代時期不明の土坑（Ⅱ-21 号土坑）・ピット（S-166, S-480）から検出される。

確認される部位は、頭蓋骨左側（No. 306）、後頭骨右側（No. 291）、右上顎骨（No. 219, 296, 301）、左右下顎骨 2 点（No. 208, 219）、左下顎骨 4 点（No. 9, 14, 56, 321）、右下顎骨（No. 10, 217, 218）、下顎骨片（No. 219）、左上顎第 1 後臼歯（No. 210）、右上顎第 2 後臼歯？（No. 297）、右上顎第 3 後臼歯（No. 313）、右下顎第 3 後臼歯 2 点（No. 230, 329）、左肩甲骨（No. 227, 298, 308, 325）、右肩甲骨（No. 292）、左上腕骨 3 点（No. 25, 279, 312）、右上腕骨 4 点（No. 8, 13, 218）、左尺骨（No. 224）、右尺骨（No. 213）、右第 3 中手骨（No. 292）、左寛

表 1.　検出動物分類群の一覧

軟体動物門　Phylum　Mollusca
　腹足綱　Class　Gastropoda
　　前鰓亜綱　Subclass　Prosobranchia
　　新腹足目　Order　Neogastropoda
　　レインガイ亜科　Subfamily　Rapaninae
　　アカニシ / シロニシ　*Rapana venosa* / *R. rapiformis*
　二枚貝綱　Class　Bivalvia
　　翼形亜綱　Subclass　Pteriomorphia
　　カキ目 Order Ostreoide
　　カキ亜目　Suborder　Ostreina
　　イタボガキ科？ Family　Ostreidae?
　　イタボガキ科？の一種　Gen. et. sp. indet.
脊椎動物門　Phylum　Vertebrata
　軟骨魚綱　Class　Chondrichthyes
　　板鰓亜綱　Subclass　Elasmobranchii
　　エイ・サメ類　Ord. et. fam. indet.
　　エイ目　Order　Rajiformes
　　エイ亜目　Suborder　Rajoidei
　　トビエイ科　Family　Myliobatididae
　　トビエイの一種　Gen. et. sp. indet.
　硬骨魚綱　Class　Osteichthyse
　　条鰭亜綱　Subclass　Actinopterygii
　　ナマズ目　Order　Siluriformes
　　ナマズ科　Family　Siluridae
　　ナマズ　*Silurus asotus*
　　ボラ目　Order　Mugiliformes
　　ボラ科　Family　Mugilidae
　　ボラ　*Mugil cephalus cephalus*
　　スズキ目　Order　Perciformes
　　スズキ亜目　Suborder　Percoidei
　　スズキ科　Family　Moronidae
　　スズキ属　Genus　*Lateolabrax*
　　タイ科　Family　Sparidae
　　ヘダイ亜科　Subfamily　Sparinae
　　クロダイ属　Genus　*Acanthopagrus*
　爬虫綱　Class　Reptilia
　　カメ目　Order　Testudines
　　ウミガメ科　Family　Cheloniidae
　　ウミガメ科の一種　Gen. et. sp. indet.
　　スッポン科　Family　Trionychidae
　　スッポン　Trionyx sinensis japonicus
　鳥綱　Class　Aves
　　キジ目　Order　Galliformes
　　キジ科　Family　Phasianidae
　　ニワトリ　*Gallus gallus domesticus*
　　ツル目　Order　Gruiformes
　　ツル亜目　Suborder　Grui
　　ツル科　Family　Gruidae
　　ツル科の一種　Gen. et. sp. indet.
　　コウノトリ目　Order　Ciconiiformes
　　サギ科　Family　Ardeidae
　　サギ科の一種　Gen. et. sp. indet.
　　カモ目　Order　Anseriformes
　　カモ科　Family　Anatidae
　　ハクチョウ類　*Cygnus sp.*
　哺乳綱　Class　Mammalia
　　サル目（霊長目）Order　Primates
　　ヒト科　Family　Hominidae
　　ヒト　*Homo sapiens*
　　ウサギ目　Order　Lagomorpha
　　ウサギ科　Family　Leporidae
　　ノウサギ　*Lepus brachyurus*
　　ネズミ目（齧歯目）Order　Rodentia
　　ネズミ科　Family　Muridae
　　ネズミ亜科　Subfamily　Murinae
　　ドブネズミ　*Rattus norvegicus*
　　ネコ目（食肉目）Order　Carnivora
　　ネコ亜目　Suborder　Fissipedia
　　イヌ科　Family　Canidae
　　イヌ　*Canis familiaris*
　　アシカ亜目　Suborder　Pinnipedia
　　アシカ科　Family　Otariidae
　　ニホンアシカ　*Zalophus japonicus*
　　ウマ目（奇蹄目）Order　Perissodactyla
　　ウマ科　Family　Equidae
　　ウマ　*Equus caballus*
　　ウシ目（偶蹄目）Order　Artiodactyla
　　イノシシ科　Family　Suidae
　　イノシシ　*Sus scrofa*
　　シカ科　Family　Cervidae
　　ニホンジカ　*Cervus nippon*
　　ウシ科　Family　Bovidae
　　ウシ　*Bos taurus*

骨 (No. 222)、寛骨 (No. 7)、右脛骨 (No. 30)、左距骨 (No. 16, 228)、右距骨 (No. 224)、左第 4 中足骨 (No. 2) である。また、イノシシ属の可能性がある右下顎骨 (No. 10)、左上腕骨 (No. 279)、大腿骨片 2 点 (No. 223, 231) が検出される。

なお、頭蓋骨 (No. 306)、左肩甲骨 (No. 227, 308, 325)、右肩甲骨 (No. 292)、右上腕骨 (No. 13・218)、右第 3 中手骨 (No. 292)、右脛骨 (No. 30) には、解体に伴うカットマークがみられる。また、右下顎骨 (No. 217)、左上腕骨 (No. 312) には、囓り痕がみられる。

＜ニホンジカ＞弥生時代中期のピット (S-138)・包含層、弥生時代後期の 1 号土坑・落ち込み・包含層、弥生時代終末の 35 号土坑、弥生時代終末～古墳時代初頭の柱穴 S-202、4 号掘立柱建物柱掘形、中世前期の 1 号溝・包含層、中世後期の 2 号溝、時代時期不明から検出される。

確認された部位は、角 6 点 (No. 226, 237, 302, 345, 346)、頭蓋骨左側 (No. 15)、左下顎骨 (No. 319)、下顎骨片 (No. 284)、左上顎第 4 前臼歯 (No. 313)、後臼歯片 (No. 284)、右肩甲骨 (No. 293)、左上腕骨 (No. 58)、右橈骨 (No. 311)、右尺骨 (No. 311)、右中手骨 (No. 326)、中手骨 (No. 232)、左大腿骨 (No. 289, 307)、左脛骨 (No. 307)、左踵骨 (No. 209)、右踵骨 (No. 42) である。また、ニホンジカの角の可能性がある破片 (No. 48)、同じくニホンジカと思われる頭蓋骨 (No. 283) と椎骨 (No. 283) が検出される。

なお、角 (No. 226, 226, 237, 302, 345, 346) および角の可能性がある破片 (No. 48)、左大腿骨とニホンジカの可能性がある椎骨 (No. 283) には、解体に伴うカットマークがみられる。また、右中手骨 (No. 326) は、囓り痕がみられる。

＜ウシ＞中世前期の 71 号土坑、中世後期の 2 号溝から検出される。

確認された部位は、左上顎第 3 前臼歯 (No. 40)、左下顎第 2 後臼歯 (No. 317)、右下顎第 2 後臼歯 (No. 309)、左下顎第 3 後臼歯 (No. 317)、左第 4 手根骨の可能性がある破片 (No. 39)、大腿骨の可能性がある破片 (No. 18)、右膝蓋骨 (No. 18)、左脛骨 (No. 315)、右脛骨 (No. 315)、右脛骨の可能性がある破片 (No. 18)、左踵骨 (No. 29)、右中足骨 (No. 315)、中足骨 (No. 323)、中手骨 / 中足骨 (No. 21)、基節骨 3 点 (No. 19, 31, 315) である。また、ウシの可能性がある大腿骨片 (No. 315)、脛骨片 (No. 20) が検出される。

なお、基節骨 (No. 19)、ウシの可能性がある脛骨片 (No. 20) には、解体に伴うカットマークがみられる。

＜ウマ / ウシ＞弥生中期の包含層から部位不明破片 (No. 47)、中世前期の 1 号溝から右寛骨 (No. 277)、中世前期の包含層から椎骨 (No. 32, 35, 316)・大腿骨の可能性がある破片 (No. 209)・四肢骨 (No. 28, 280)・部位不明破片 (No. 31, 34, 35, 39, 209, 281, 317, 322) が検出される。

＜獣類＞頭蓋骨の可能性がある破片、胸椎 2 点、椎骨、椎骨の可能性がある破片 2 点、肋骨 19 点、肩甲骨、上腕骨の可能性のある破片、右大腿骨、大腿骨、四肢骨 18 試料、部位不明破片 27 試料などがみられる。この内、椎骨 (No. 300)、椎骨の可能性がある破片 (No. 212)、肋骨 (No. 6, 33, 56, 233, 314)、大腿骨 (No. 318)、四肢骨 (No. 235)、部位不明破片 (No. 33, 37, 282) は、大型獣類である。また、肩甲骨片 (No. 23)・肋骨 (No. 33, 233)・四肢骨 (No24, 41,. 215) には解体に伴うカットマークがみられ、四肢骨 (No. 49, 219) には囓り痕がみられる。なお、弥生時代終末の土坑 S-267 から出土した大型獣類の肋骨 (No. 56) は、骨折した後に治癒した痕跡がみられる。

＜脊椎動物門＞弥生時代後期の包含層、弥生時代終末～古墳時代初頭の 4 号掘立柱建物柱掘形、中世後期の 2 号溝上部において種類不明の骨片が検出される。この内、中世後期の 2 号溝上部で検出された骨片 2 点あり、ウミガメ類の腹甲板・部位不明破片の可能性があるものの、断定できなかった。

2) 池淵Ⅱ地点

＜アカニシ / シロニシ＞弥生時代終末の 18 号土坑から殻破片 (No. 362) が検出される。焼けている。

＜エイ・サメ類＞弥生時代終末の 106 号土坑から椎骨 (No. 164) が検出される。加工品の可能性がある。

＜トビエイ科＞古墳時代後期の 47 号土坑から歯板 (No. 123) が検出される。

＜ボラ＞

弥生時代中期の 70 号土坑・包含層、弥生時代終末の 18 号 , 21 号土坑、弥生時代終末～古墳時代初頭の 32 号土坑・28 号 , 39 号井戸状土坑、古墳時代後期の 47 号土坑、古墳時代終末の 53 号井戸状土坑、中世前期の 62 号土坑から検出される。

確認される部位は、左主鰓蓋骨 8 点 (No. 85,87,123,344,361)、右主鰓蓋骨 6 点 (No. 91,96,100,128,193,195)、左下鰓蓋骨 (No.344) である。また、ボラの可能性がある右主鰓蓋骨 (No. 91,117,181) が検出される。

＜スズキ属＞弥生時代中期の土坑 (S-215)、弥生時代終末の 18 号,21 号, 91 号土坑、弥生時代終末～古墳時代初頭の 39 号井戸状土坑、古墳時代初頭の 41 号土坑、古墳時代後期の 47 号土坑から検出される。

確認される部位は、左主鰓蓋骨 2 点 (No. 107,340)、右主鰓蓋骨 3 点 (No.87,142,172)、主鰓蓋骨の可能性がある破片 1 点 (No. 126) である。また、スズキ属の可能性がある右下鰓蓋骨 (No.123) が検出される。この内、No.142 の右主鰓蓋骨は切断される。

＜クロダイ属＞弥生時代終末の 21 号井戸状土坑から左歯骨 (No.124) が検出される。

＜魚類＞弥生時代終末の 107 号土坑および中世前期の 62 号土坑から、魚類とみられる部位不明破片 (No.79,91) が検出される。また、時代不明のピット (S-148) から魚類の前鰓蓋骨の可能性がある破片 (No.152)、時代不明の包含層から魚類の主鰓蓋骨 (No.201) が検出される。

＜ニワトリ＞弥生時代後期の柱穴 (S-161)、弥生時代終末の 86 号井戸状土坑、時代不明の攪乱層から検出される。

確認された部位は、左上腕骨 (No.162)、右橈骨 (No.80)、左足根骨中足骨 (No.206) である。骨体には解体に伴うカットマークが、No.162 の左上腕骨は両端が切断、No.206 の左足根骨中足骨は遠位端が切断される。

＜ツル科＞弥生時代終末の 23 号井戸状土坑から左大腿骨 (No.339) が検出される。ほぼ完存する状態である。全長 140.86mm、近位端幅 31.87mm、遠位端幅 29.44mm を測る。

＜ハクチョウ類＞古墳時代後期の 51 号土坑から右脛足根骨 (No.90) が検出される。遠位端部のみが残存するが、解体に伴うカットマークがみられ、また遠位端が切断される。

＜鳥類＞弥生時代中期のピット (S-230)、弥生時代後期の 45 号土坑、弥生時代終末の井戸状土坑, 21 号,86 号土坑、古墳時代後期の 47 号土坑、古代の 90 号土坑、中世のピット (S-32) から検出される。

確認された部位は、左上腕骨 (No.80)、両端が欠損した尺骨 (No.102)、右手根骨中手骨遠位端部 (No.84)、右大腿骨 (No.363)、四肢骨 (No.123,128,177) である。No.80 の左上腕骨はカットマークがみられる。

＜スッポン＞古墳時代初頭の 38 号井戸状土坑からほぼ完存する背甲板 (No.359) が検出される。全長 123.29mm、最大幅 112.43mm を測る。内面には、微細な切痕が多数みられる。

＜ヒト＞古代の 60 号井戸状土坑から、左寛骨および寛骨片 (No.136)、両端が欠損する左大腿骨 (No.136)、遠位端が欠損する右大腿骨 (No.135) が検出される。

＜ノウサギ＞弥生時代終末～古墳時代初頭の 31 号井戸状土坑、古墳時代初頭の 41 号土坑から検出される。

確認される部位は、右下顎骨・腰椎・肋骨・右肩甲骨・右上腕骨・左橈骨・左右寛骨・左右大腿骨・左右脛腓骨・右踵骨・左第 4 中足骨・右第 5 中足骨 (No.107,334)、および左大腿骨遠位端 (No.94) である。

＜トブネズミ＞弥生時代終末の 30 号井戸状土坑から、頭蓋骨 (一部破損)、左下顎骨、椎骨、尾椎、肋骨、左上腕骨、左橈骨、左尺骨、椎骨・下肢骨などが検出される (No.343)。椎骨、肋骨、椎骨・下肢骨などは、土塊状である。

＜ネズミ亜科＞弥生時代中期のピット (S-250) から右上顎骨・右下顎骨・尾椎・右側の可能性がある上腕骨が検出される (No.342)。

＜イヌ＞弥生時代中期の包含層、弥生時代終末のピット (S-37)、中世の 66 号井戸状土坑から検出される。

確認される部位は、近位端が欠損する左脛骨 (No.105)、遠位端が欠損する右尺骨 (No.130) である。また、イヌの可能性がある頭蓋骨 (No.196)、イヌ科の左右下顎骨 (No.199) が検出される。No.196 のイヌの可能性がある頭蓋骨は、前頭骨の左側破片である。

＜ウマ＞中世の 1 号溝の東西溝面から下顎歯牙片 (No.76) が検出される。

＜イノシシ属＞弥生時代中期の 123 号,70 号, 97 号土坑・ピット (S-220,S-232)・溜まり (S-242)・包含層、弥生時代後期のピット(S-189)・6 号土坑 (井戸)、弥生時代終末の柱穴 S-150・13 号,85 号土坑 ・10 号,14 号,18 号,21 号,23 号,30 号,91 号土坑 (井戸)、弥生時代終末～古墳時代初頭の 35 号,69 号,82 号土坑・39 号,83 号 ,19 号,29 号井戸状土坑、弥生時代終末～中世の土坑 S-13、古墳時代初頭の 19 号, 35 号土坑 (井戸)、古墳時代後期の 20 号

土坑、古墳時代終末の 53 号土坑（井戸）、中世の 118 号土坑・64 号土坑（井戸）・包含層、中近世の 4 号溝、現代の表土あるいは攪乱層、時代不明の土坑（S-96, S-225）・柱穴（S-156）・廃土から検出される。

確認された部位は、右前顎骨（No. 127）、左前顎骨～上顎骨（No. 340）、右前顎骨～上顎骨（No. 110）、左上顎骨 2 点（No. 98, 127）、右上顎骨（No. 86, 114, 117）、右前頭骨 2 点（No. 168, 338）、右頭頂骨（No. 168）、左右下顎骨 4 点（No. 151, 155, 178, 347）、左下顎骨 4 点（No. 116, 180, 182, 347）、右下顎骨 2 点（No. 116, 156）、下顎骨片（No. 347）、右下顎第 1 門歯（No. 87）、右下顎第 2 門歯（No. 178）、右下顎大歯（No. 205）、右下顎第 2 後臼歯（No. 156）、右下顎第 3 後臼歯（No. 156）、右下顎門歯（No. 364）、歯牙片（No. 151）、左肩甲骨（No. 119）、右肩甲骨 3 点（No. 95, 149, 339）、左上腕骨（No. 110）、右上腕骨 2 点（No. 113, 148）、右橈骨（No. 104）、左尺骨 5 点（No. 89, 143, 175, 179, 199）、右尺骨 4 点（No. 104, 138, 170, 200）、左第 3 中手骨 2 点（No. 160, 184）、右第 3 中手骨（No. 176）、右大腿骨（No. 153）、左距骨（No. 202）、右距骨（No. 115）、右踵骨（No. 166）、右第 4 中足骨（No. 166）、中手骨 / 中足骨 2 点（No. 184, 187）、基節骨 / 中節骨（No. 125）、中節骨（No. 120）である。また、イノシシ属の可能性がある左下顎骨（No. 204）、右下顎骨の可能性がある焼けた破片（No. 360）、右肩甲骨（No. 169）が検出される。

この内、No. 113 の右上腕骨、No. 149 の右肩甲骨、No. 170 の右尺骨、No. 175 の左尺骨、No. 179 の左尺骨には、カットマークがみられる。

＜ニホンジカ＞弥生時代中期の溜り（S-216, S-242）、123 号土坑・包含層、弥生時代後期の 68 号土坑・5 号井戸状土坑、弥生時代終末の 13 号，21 号，30 号井戸状土坑、107 号土坑、弥生時代終末～古墳時代初頭の 28 号，9 号，19 号井戸状土坑、弥生時代終末～中世の土坑 S-13、古墳時代初頭の 36 号井戸状土坑、古代の 90 号土坑・57 号井戸状土坑、中世前期の 62 号土坑、中世のピット（S-33）、時代不明の土坑（S-67, S-76）から検出されている。

確認された部位は、角 10 点（No. 83, 87, 88, 97, 103, 145, 173, 174, 336, 360）、左下顎骨（No. 180）、右下顎骨 2 点（No. 150, 337）、左上顎第 1 後臼歯（No. 112）、左上顎第 2 後臼歯（No. 112）、右下顎第 2 後臼歯（No. 196）、歯牙片（No. 337）、椎骨（No. 337）、仙骨（No. 121）、左中手骨（No. 112）、左寛骨（No. 113）、右大腿骨（No. 192）、左脛骨 3 点（No. 79, 132, 199）、右脛骨（No. 146）、左距骨（No. 184）、右踵骨（No. 118）、中手骨 / 中足骨（No. 92）、基節骨（No. 92）である。この内、No. 88, 103, 145, 173, 360 の角は焼けている。また、No. 87, 336, 360 の角・No. 121 の仙骨・No. 113 の左寛骨・No. 184 の左距骨にはカットマークがみられ、No. 199 の左脛骨には囓り痕がみられる。この他、ニホンジカの可能性がある上腕骨（No. 133）が検出される。

＜ウシ＞中世の 64 号井戸状土坑で、左上腕骨近位端（No. 137）が検出される。

＜ウマ / ウシ＞弥生時代後期の 85 号土坑で、右寛骨の破片（No. 161）が検出される。

＜獣類＞頭蓋骨、歯牙 2 試料、頚椎、腰椎 2 点、椎骨 4 点、仙骨、肋骨 13 点、右肩甲骨、肩甲骨 2 点、肩甲骨の可能性がある破片、左上腕骨、上腕骨 2 点、右寛骨、寛骨 2 点、大腿骨、右大腿骨（No. 78）、右脛骨（No. 78）、四肢骨、部位不明破片などが検出される。この内、右寛骨（No. 111）、上腕骨（No. 197）、腰椎（No. 203）、四肢骨（No. 207）は、大型獣類である。なお、肋骨（No. 159）・四肢骨（No. 77）は焼骨である。また、腰椎（No. 203）・肋骨（No. 108, 141, 149, 178）・右寛骨（No. 111）・寛骨（No. 171）・四肢骨（No. 77, 99, 122, 133, 196）・部位不明破片（No. 77）にはカットマークがみられ、四肢骨（No. 93, 106, 207）には囓り痕がみられる。

＜脊椎動物門＞弥生時代終末の 18 号井戸状土坑、弥生時代終末～古墳時代初頭の 34 号井戸状土坑から種類不明の破片が検出される。

3) 東蒲池門前遺跡 C・D 区

＜イタボガキ科？＞弥生時代～中世の整地層からイタボガキ科の可能性がある破片（No. 71）が検出される。

＜二枚貝綱＞弥生時代～中世の整地層から二枚貝綱の破片（No. 71）が検出される。イタボガキ科とは異なり、マルスダレガイ目の可能性があるが、腹縁部のみが残存しており、詳細不明である。

＜軟体動物門＞弥生時代～中世の整地層、中世後期の土坑 S-1・S-3 から貝類の破片が検出される。腹足綱、二枚貝綱とも判断つかない微小な破片である。

＜ボラ＞弥生時代～中世の整地層、中世前期の整地層、中世の包含層、近現代の溝、包含層、表採から検出されている。

確認される部位は、左主鰓蓋骨 9 点 (No. 59, 71, 249, 250, 258, 261, 263, 271)、右主鰓蓋骨 13 点 (No. 249, 253, 257, 260, 265, 266, 267, 271, 275, 276, 331) である。また、ボラの可能性がある左主鰓蓋骨 (No. 244)、ボラ主鰓蓋骨の可能性がある破片 (No. 265) が検出される。

＜スズキ属＞弥生～中世の整地層、古墳時代後期の包含層、中世前期の整地層・包含層、中世の包含層、近世の溝から検出される。

確認される部位は、左主鰓蓋骨 5 点 (No. 59, 64, 242, 270)、右主鰓蓋骨 3 点 (No. 65, 246, 258) である。

＜魚類＞弥生時代～中世の整地層、古墳時代後期の包含層、中世前期の整地層、表採で検出される。

確認される部位は、腹椎 (No. 63)、主鰓蓋骨 (No. 241)、主鰓蓋骨の可能性がある破片 (No. 252)、部位不明破片 (No. 257, 271) である。

＜ウミガメ科＞助骨板の破片 (No. 272) が検出される。時代、採取位置等不明である。

＜サギ科＞中世後期の土坑 S-1 から右足根骨中足骨 (No. 330) が検出される。ほぼ完存する。全長 146. 38mm を測る。

＜コウノトリ目？＞中世後期の土坑 S-5 から切歯骨の破片 (No. 330) が検出される。切断されている。

＜ニワトリ？＞中世後期の整地層から、近位端が欠損した右尺骨 (No. 356) が検出される。

＜イヌ＞弥生時代～中世、中世前期の整地層から検出される。

確認される部位は、左下顎骨 (No. 331)、第 1 頚椎 (No. 70)、右尺骨 (No. 57)、左脛骨 (No. 262) である。

＜ヒト＞中世後期の土坑 S-3 から右尺骨の近位端部が検出される。比較的頑丈である。

＜ウマ＞弥生時代～中世の整地層、中世後期の土坑 S-4, S-5、溝 S-8、表採で検出される。

確認される部位は、右上顎第 4 前臼歯 2 点 (No. 257, 349)、左上顎第 1 後臼歯 2 点 (No. 67, 71)、左上顎第 3 後臼歯 (No. 73)、左下顎第 4 前臼歯 (No. 352)、上顎歯牙 (No. 267)、左下顎第 2 後臼歯 3 点 (No. 240, 268, 354)、右下顎第 3 後臼歯 (No. 239)、左肩甲骨 (No. 539、右肩甲骨 (No. 60)、左尺骨 (No. 274)、基節骨 (No. 349) である。なお、右肩甲骨 (No. 60) には、囓り痕がみられる。また、ウマの左橈骨の可能性がある破片 (No. 274) が検出される。

＜イノシシ属＞弥生時代～中世の整地層、中世前期の整地層、中世後期の土坑 S-7 土坑 S-5・溝 S-10・整地層 S-3、近世～現代の溝、近世の土坑 S-7B から検出される。

確認される部位は、左頬骨 (No. 254)、左下顎骨 (No59)、右下顎骨 (No. 55)、犬歯 (No. 54)、左上顎犬歯 (No. 350)、第 1 頚椎 2 点 (No. 332)、左肩甲骨 2 点 (No. 257, 273)、右肩甲骨 (No. 355)、右尺骨 (No. 245) である。第 3/4 中手骨 / 中足骨 (No. 355) である。なお、第 1 頚椎 (No. 332) 、第 3/4 中手骨 / 中足骨 (No. 355) にはカットマークがみられ、左肩甲骨 (No. 257) には囓り痕がみられる。

＜ニホンジカ＞弥生時代～中世の整地層、中世前期の整地層、中世後期の溝 S-10・包含層、中世の包含層、近世の土坑 S-7B、近世の溝で検出される。

確認される部位は、角 (No. 55)、左上顎骨 (No. 55)、右上顎骨 (No. 65)、左下顎骨 (No. 55)、右下顎骨 2 点 (No. 64, 65)、左中手骨 (No. 74)、右中手骨 (No. 51)、右中心＋第 4 足根骨 (No. 355) である。また、ニホンジカ角の可能性がある破片 (No. 70)、ニホンジカ中手骨 / 中足骨の可能性がある破片 (No. 71) が検出される。

なお、角 (No. 55)、右中手骨 (No. 51)、右下顎骨 (No. 65)、ニホンジカ？の角？(No. 70) と中手骨 / 中足骨 ?(No. 71) にはカットマークがみられる。

＜ウシ＞弥生時代中期～古墳時代後期の包含層、弥生～中世の整地層、中世前期の整地層、中世後期の土坑 S-1, S-3, S-5, S-7・包含層から検出される。

確認される部位は、左上顎第 2 後臼歯、左上腕骨 (No. 75)、右上腕骨 2 点 (No. 61, 330)、右橈骨 (No. 72)、右尺骨 (No. 70)、右第 4 手根骨 (No. 53)、左中手骨 2 点 (No. 74, 248)、右中手骨 (No. 72)、右距骨 (No. 54)、右踵骨 (No. 51)、左中足骨 (No. 330)、中節骨 (No. 251)、右脛骨・右距骨・右踵骨・左中足骨 (No. 348) である。また、ウシの可能性がある肋骨 (No. 72)、右橈骨 (No. 75) が検出される。

なお、左中手骨 2 点 (No. 74)・右踵骨 (No. 51)・ウシの可能性がある肋骨 (No. 72) にはカットマークがみられ、右脛骨 (No. 348) とウシの可能性がある肋骨 (No. 72) には囓り痕もみられる。

＜ウシ / ウマ＞弥生時代～中世の整地層、中世後期の土坑 S-5, S-8 から検出される。確認される部位は、左上腕骨 (No. 71)、上腕骨の可能性がある破片 (No. 62)、右寛骨 (No. 353)、部位不明破片 3 点 (No. 53, 71) である。なお、左上腕骨 (No. 71)、部位不明破片 (No. 71) には、カットマークがみられる。

＜獣類＞弥生時代中期～古墳時代後期の包含層、弥生時代～中世の整地層、中世前期の整地層・包含層、中世後期の土坑 S-1, S-2, S-4・溝 S-9・整地層 S-3・整地層、近世の溝、近現代の溝で検出される。

確認される部位は、左下顎骨 (No. 64)、肋骨 3 点 (No. 66, 68, 257)、肩甲骨 (No. 276)、右上腕骨 2 点 (No. 52, 333)、左寛骨 (No. 59)、寛骨 (No. 74)、四肢骨 4 点 (No. 57, 259, 356, 357)、部位不明破片約 24 点 (No. 69, 70, 243, 247, 255, 257, 261, 264, 265, 269, 271, 273, 274, 275, 276, 330) である。この内、左寛骨 (No. 59)・四肢骨 (No. 356) が中型獣類、肋骨 (No. 257)・寛骨 (No. 74)・肩甲骨 (No. 276)・四肢骨 (No. 357)・部位不明破片 (No. 70, 247, 264, 265, 269) は大型獣類が含まれる。

なお、右上腕骨 (No. 52)・肋骨 (No. 68, 257, 273, 274, 275, 276)・四肢骨 (No. 259) にはカットマークがみられ、四肢骨 (No. 259) には囓り痕もみられる。また、四肢骨 (No. 357) は加工品である。

4. 考察

池濶Ⅰ地点～Ⅳで出土した骨貝類は、貝類、魚類、爬虫類、哺乳類が確認された。アカニシ / シロニシ・イタボガキ科・二枚貝類・種類不明貝類など軟体動物門はいずれも破片で検出数量も少なく、また別項に詳しく述べられているのでここでは省略し、本項では出土骨について述べる。なお、表 8 に時代・時期別の最少個体数を示す。

軟体魚綱では、弥生時代後期・弥生時代終末・中世の時期からエイ・サメ類の椎骨が、古墳時代後期からトビエイ科の歯板がみられる。エイ・サメ類の椎骨は、椎体径約 50mm 程度と推定される破片 1 点 (No. 211)、椎体径約 14 ～ 15mm の 2 点 (No. 164, 328) が検出される。後者の 2 点は、加工品として利用されていた可能性がある。

硬骨魚綱では、ナマズ、ボラ、スズキ属、クロダイ属が確認される。ナマズは胸鰭棘がみられ、比較的大型の個体である。おそらくは河川に生息していたものが漁獲されたとみられる。ボラは、北海道以南に分布し、河口付近、内湾の汽水域などに棲息することが多く、幼魚期に河川を遡上するとされている。今回検出された個体はいずれも成魚であり、比較的大型のサイズと判断できることから、沿岸付近などの海域に棲息していたものとみられる。スズキ属は、おそらくはスズキ (*Lateolabrax japonicus*) と思われる。スズキは、北海道南部～九州までの日本列島沿岸部などに分布し、内湾から河川内で生活する。クロダイ属は、水深 50m 以浅の沿岸部に棲息し、時には河口付近の汽水域や河川の淡水域まで侵入することがある。これらの中では、ボラが最も多く検出され、全体でみると 30 個体であり、中でも中世の時期が 11 個体と多い。ボラに次いでスズキ属が多いが、全体を通じてみるとわずか 9 個体にしかならない。今回の試料が発掘途中に出土した骨であるため微小骨が対象外であるものの、後述する哺乳綱に比べて検出数が極端に少ないと言える。河口付近をはじめとする有明湾沿岸域での漁労や採貝活動が行われていたとみられるが、基本的には後背地などでの狩猟活動が中心となっていた可能性がある。

爬虫綱では、ウミガメ類、スッポンが検出されている。ウミガメ科は肋骨板が検出されているが、時代時期不明である。中世後期の溝からもウミガメ科の可能性のある破片が検出されたが、詳細不明である。ただし、産卵時 (夏季) に砂浜へ上陸した際に捕獲されたことも考えられる。スッポンは、池濶Ⅱ地点の古墳時代初頭の 38 号井戸状土坑から出土した。ほぼ完存する背甲板であるが、他の部位はみられない。大きさは、背甲板が約 12cm 程度の大きさの個体である。内側に多数みられるカットマークは身と背甲板を取り外す際に付いた解体痕とみられ、食材として利用されていたと判断され、食料残滓として井戸内に破棄されたと推測される。鶴岡 (2003) は、遺跡から出土するスッポンの事例をまとめ、スッポンの利用が縄文時代早期にまで遡り、スッポンの分布や食習慣が西日本中心であると述べている。また、同著によると福岡県内でみると、北九州市の楠橋貝塚で縄文時代前期前葉、鞍手町の新延貝塚から縄文時代前～後期に出土するとされ、九州地域でみると縄文時代に多くみられるが、古墳時代には

検出されている報告例がない。しかし、今回の検出事例から古墳時代にスッポンを利用していたことが明らかにされたといえる。

鳥綱では、ニワトリ、ツル科、サギ科、コウノトリ目？、ハクチョウ類が検出される。ツル科・ハクチョウ類が越冬時期に飛来、サギ科・コウノトリ目？が河川・干潟・水田などに棲息、ニワトリが飼育されていたものと思われる。いずれも全身骨格がみられずに検出部位が四肢骨にとどまること、さらには骨体にカットマークが見られることからも食料残滓と考えられる。

哺乳綱では、ヒト、ノウサギ、ドブネズミ、ネズミ亜科、イヌ、ニホンアシカ、ウマ、イノシシ属、ニホンジカ、ウシが確認される。これらの中では、池濃Ⅰ地点の弥生時代終末の土坑S-267で検出された大型獣類の肋骨（No. 56）には、骨折して治癒した痕跡が見られた。

ヒトは、池濃Ⅱ地点の古代の60号井戸状土坑で左寛骨・寛骨片・左右大腿骨が、門前D区の中世後期の土坑S-3で右尺骨が検出される。池濃Ⅱ地点の60号井戸状土坑で検出されるヒトは、大きさからみて成人に達していたと考えられる。また、大座骨切痕が破損しているものの緩やかであり、また大腿骨も華奢であることから女性と考えられる。一方、門前D区の土坑S-3で検出される右尺骨は、大きさからみて成人に達していたと考えられ、また比較的頑丈であることから男性の可能性もある。ドブネズミ、ネズミ亜科は、周辺に棲息していたものが死後混入した、あるいは土坑・井戸状土坑に落ちて死亡したなどのことが考えられる。

イヌ科は、破片のため種類まで特定することはできなかった。弥生時代中期の包含層から出土した左右下顎骨は、同一試料（No. 199）にみられることから、同一個体と判断される。なお、門前C区の中世前期の整地層から出土した骨は幼獣とみられる。また、池濃Ⅱ地点の弥生時代中期包含層から出土した骨は、第1～3後臼歯が植立するものの、第2・3前臼歯の歯槽部が吸収することから、老齢に達していたと考えられる。

ニホンアシカは、太平洋側では九州沿岸から北海道・千島・カムチャツカ半島まで、日本海側では朝鮮半島沿岸から南樺太が生息域とされており、現在では絶滅したとされている。池濃Ⅰ地点の1号溝最下層から頭蓋骨のみが出土しており、時代については詳細不明である。頭蓋以外の部位が検出されないこと、また下顎窩にカットマークが存在することから、下顎骨を外したことが推測される。脳頭蓋のみが溝内に破棄されたとみられる。ニホンアシカは、鹿児島県縄文時代後期の麦之浦貝塚からも出土しており、古くからの出土事例がある（西中川ほか1987）。食用には適さないとされていることから、搾油や革の利用などが考えられる。

イノシシ属はブタも含まれる可能性があるが、今回は判断ができなかった。哺乳綱の中では最も多く検出され、さらに全ての時代から検出される。中でも弥生時代中期と中世に多い。また、No. 114, 127で乳臼歯が植立、No. 55は第2後臼歯が萌出直前、No. 14, 86, 98, 178, 180, 208, 218, 219, 347で第3後臼歯が萌出途中、No. 127, 156, 297, 313が未出歯牙、No. 25, 95, 110, 153, 160, 184, 218, 223, 231, 312で骨端が未化骨状態、No. 176が骨端の化骨化が弱いなど特徴が見られ、この他にも大きさから幼獣とみられる骨（No. 13, 166, 168, 169）も検出されることから、幼獣ないし若獣が狩猟対象となっていたことがわかる。出土部位別にみると、頭蓋骨が54試料、椎骨1試料、前肢38試料、後肢12試料、指骨2試料、四肢骨3試料であり、ほぼ全身の各部位がみられるものの、頭蓋骨が圧倒的に多い。これより、狩猟された場所で解体されたものが流通していたのでなく、遺跡内で解体されていたとみられる。No. 332で検出される第1頸椎にカットマークが残るのも、そのことの示している可能性がある。

ニホンジカは、イノシシ属について多く検出される。角が多く検出されているが、角座部、枝部、先端部などがみられる。多くに切痕が残り、明らかに切断されているもの、焼けた状態のもの（No. 88, 103, 145, 173, 360）などがみられ、大半が加工品として利用されていたものとみられ、流通などによっても持ち込まれていたのであろう。四肢骨でみるとイノシシ属と同様に幼獣あるいは若獣が多い。また部位別にみると、頭蓋骨18試料、椎骨3試料、前肢10試料、後肢14試料、指骨1試料、四肢骨2試料であり、イノシシ属と同様に頭蓋骨が多いことから、やはり遺跡内で解体されたのであろう。

ウマ、ウシは、農耕、運搬、食肉、油・皮の利用などが考えられる。なお、池濃Ⅰ地点の弥生時代中期の柱穴（S-789）でウマ左尺骨（No. 216）が、池濃Ⅰ地点の弥生時代中期の包含層でウマ左橈骨（No. 229）が、池濃Ⅰ地点の弥生時代

中期の包含層でウマ / ウシ部位不明破片（No. 47）、池灘Ⅱ地点の弥生時代後期の 85 号井戸状土坑でウマ / ウシ右寛骨（No. 161）が検出されるが、これらは後代の攪乱や落ち込みによる可能性がある。ウマについて部位別にみた各時代の最小個体数を別にみると、古墳時代後期で 1 頭、弥生時代～中世で 2 頭、中世で 3 頭、時代不明 1 頭となる。ただし、西中川ほか（1991）に基づき臼歯高から年齢を推定すると、若い個体～老齢個体までみられ、実際にはさらに多くの個体が存在すると推定される。古墳時代後期では、池灘Ⅰ地点の小溝 S-6 で右下顎歯牙（No. 287）が検出されるが、年齢は不明である。弥生時代～中世では、10 歳前後（No. 71, 73）と 13 歳前後（No. 67）である。中世では、池灘Ⅰ地点で 3 ～ 4 歳前後（No. 322）・7 歳前後（No. 309, 317）・10 歳前後（No. 320）・14 歳前後（No. 321）、池灘Ⅱ地点で年齢不明（No. 76）、門前 C 区で 4 ～ 5 歳前後（No. 240, 268）・8 歳前後（No. 239）・10 歳前後（No. 257）、門前 D 区で 3 ～ 4 歳前後（No. 354）・7 ～ 8 歳前後（No. 349）である。体高に関してみると、中世前期の包含層から検出された第 3 中手骨（No. 324）でみると、130cm 程度の大きさとなり、木曽馬・御崎馬クラスの中型馬に属する。西中川ほか（1989, 1991）によると、全国の古代、中世、近世の遺跡から出土するウマは小型～中型であるとされており、本遺跡で出土するウマも同様な結果となる。

ウシは、ウマに比べて出土数が少なく、最小個体数でみると、弥生時代中期～古墳時代初頭で 1 頭、弥生時代～中世で 1 頭、中世で 2 頭となる。体高に関しては、弥生時代～中世の整地層から出土した右中手骨（No. 72）が 120 ～ 125cm 程度、中世前期の整地層から出土した左中手骨（No. 74）が 100cm 以下、中世前期の整地層から出土した左上腕骨（No. 75）が 120 ～ 125cm 程度、弥生時代中期～古墳時代後期の包含層から出土した左中手骨（No. 248）が 120cm 程度、2 ～ 13 世紀の包含層から出土した右脛骨（No. 315）が 100cm 以下、2 ～ 13 世紀の包含層から出土した右中足骨（No. 315）が 125cm 程度、中世後期の土坑から出土した左中足骨（No. 330）が 125cm 程度、中世後期の土坑から出土した左中足骨（No. 348）が 125cm 程度となり、120 ～ 125cm 程度の個体が多い。100cm 以下となる No. 74 の左中手骨と No. 315 の右脛骨は、骨端が未化骨で外れることから、幼獣であったために体高が低かったと考えられる。なお、ウシは、ウマと異なり頭蓋の検出個数が少なく、四肢骨が中心となる。特に、池灘Ⅰ地点の中世後期の 1 号溝（No. 18 ～ 21）、池灘Ⅰ地点の中世前期の包含層（No. 315）、門前 C 区の弥生～中世の整地層（No. 72）、門前 D 区の中世後期の土坑 S-3（No. 348）など、部位がまとまって出土する事例がみられる。このことは、ウマと異なる取り扱いであったことを示している可能性もあり、部位として流通することが多かったのかもしれない。

なお、今回出土した骨は、焼けた骨などが少ないが、カットマーク、切断された骨など人為的な痕跡を残すものが多くみられた。また、エイ・サメ類の椎骨、ニホンジカの角、簪状に細工した大型獣類の骨など、加工品も含まれ、ヒトの活動をうかがい知ることができる貴重な資料と言える。一方で出土した骨の中には骨端部や骨体部に囓り痕がみられるものもあり、廃棄した後に地上に曝されていた状態、あるいは埋めたとしても動物が掘り起こせる程度の浅さであった骨も存在していることがわかる。今後、微小な骨も調べることで当時の狩猟活動などの資料がより蓄積されると思われ、また発掘調査所見と併せることでより多くの情報が得られるものと期待される。

引用文献

加藤　嘉太郎・山内　昭二，2003，新編　家畜比較解剖図説　上巻．養賢堂，315p.

西本　豊弘・松井　章編著，1999，考古学と動物学．考古学と自然科学②，同成社，210p.

西中川　駿・臀　博美・松元　光春・大塚　関一・中島　哲郎，1987，古代遺跡出土の動物骨に関する研究 ：VI. 鹿児島県麦之浦貝塚出土骨の概要．．鹿大農学術報告 37, 105-112.

西中川　駿・上村　俊雄・松元　光春，1989，古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究―とくに日本在来種との比較―．昭和 63 年度文部省科学研究費補助金（一般研究 B）研究成果報告書，197p.

西中川　駿・本田　道輝・松元　光春，1991，古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究．平成 2 年度文部省科学研究費補助金（一般研究 B）研究成果報告書，99p.

鵜岡英一，2003，関東地方におけるスッポンの利用－その開始時期と普及の要因をめぐって－．市原市文化財センター研究紀要Ⅳ，財団法人市原市文化財センター，11-25.

表 2. 骨貝類同定結果 (1)

No.	層No.	遺跡名	地点	年月日	種類	部位	左	右	状態	数量	投棄	焼土	牙	穿孔	備考	時代等
1	1	池端 I	1号溝西	9.11.26	貝類	不明			破片	1						12～13 世紀
2	1	池端 I	1号溝西区	9.11.26	イノシシ属	第4中足骨	左		近位端	1						12～13 世紀
3	1	池端 I	1号溝東区	9.11.26	貝類	不明			破片	2						12～13 世紀
4	1	池端 I	2号溝上層	9.11.16	ウミガメ科?	不明			破片	1					脛甲板?	15～16 世紀
5	1	池端 I	2号溝上層	9.11.16	ウミガメ科?	不明			破片	1						15～16 世紀
6	1	池端 I	35 号土坑	9.11.25	貝類	殻骨			破片	1						弥生終末
7	1	池端 I	35 号土坑	9.11.25	ナマズ	胸鰭棘			破片	1						弥生終末
8	1	池端 I	35 号土坑	9.11.25	キジ科	上腕骨		右	遠位端	1		○			切断	弥生終末
9	1	池端 I	35 号土坑	9.11.25	鳥類	四肢骨			破片	2						弥生終末
10	1	池端 I	35 号土坑	9.11.25	大型貝類	殻骨			破片	1						弥生終末
11	1	池端 I	35 号土坑	9.11.25	貝類	殻骨			破片	6						弥生終末
12	1	池端 I	35 号土坑	9.11.25	貝類	不明			破片	19						弥生終末
13	1	池端 I	35 号土坑	9.11.25	土器				破片	2						弥生終末
14	1	池端 I	35 号土坑	9.11.25	貝土器					3						弥生終末
15	1	池端 I	35 号土坑	9.11.25	鹿					2						弥生終末
16	1	池端 I	35 号土坑	9.11.25	鹿					1						弥生終末
17	1	池端 I	35 号土坑	10.1.28	イノシシ属	鬼骨			破片	1						弥生終末
18	1	池端 I	35 号土坑	10.1.28	貝類	不明			破片	40						弥生終末
19	1	池端 I	21 号土坑	9.11.26	イノシシ属	上腕骨		右	遠位端	1						不明
20	1	池端 I	23 号土坑	9.11.26	貝類	不明			破片	3						不明
21	1	池端 I	1号土坑		イノシシ属	下顎骨	左		関節突起	1						古墳初期
22	1	池端 I	49 号土坑	9.12.24	イノシシ属?	下顎骨		右	破片	1						弥生後期
23	1	池端 I	ピット	10.3.16	イノシシ属	下顎骨	左		臼～下顎枝部	1	*					弥生中期
24	1	池端 I	43 号土坑	10.3.5	ニホンジカ	橈骨骨	左		破片	1						弥生中期
25	1	池端 I	1号掘立柱建物跡	10.2.10	イノシシ属	前骨	左		破片	1						弥生後期
26	1	池端 I	1号掘立柱建物跡	10.2.10	土器				破片	1						弥生中期
27	1	池端 I	32 号土坑	10.2.3	貝類	不明			破片	1						不明
28	1	池端 I	2号溝	10.1.12	ウシ	大腿骨?			遠位端片?	1						15～16 世紀
29	1	池端 I	2号溝	10.1.12	ウシ	橈骨骨		右	破片	1						15～16 世紀
30	1	池端 I	2号溝	10.1.12	ウシ	橈骨		右?	近位端片	1						15～16 世紀
31	1	池端 I	2号溝	10.1.12	ウシ	橈骨			近位完存	1		○				15～16 世紀
32	1	池端 I	2号溝	10.3.12	ウシ	橈骨			破片	1	*	○			同一骨の破片	15～16 世紀
33	1	池端 I	2号溝	10.3.12	ウシ?	橈骨			遠位端片	1						15～16 世紀
34	1	池端 I	2号溝	10.1.12	ウシ	m3			遠位端片	1						15～16 世紀
35	1	池端 I	30 号土坑	10.2.26	貝類	四肢骨			破片	1	*					古代
36	1	池端 I	ピット	10.3.3	貝類	尺甲骨			破片	1		○			焼甲板切断	弥生中期
37	1	池端 I	民色粘土台古墳	10.1.26	貝類	四肢骨			破片	1		○				中世
38	1	池端 I	小溝5×680	10.3.12	イノシシ属	上腕骨		左	遠位端	1					骨端外れ	12～13 世紀
39	1	池端 I	畦上	10.1.10	ウマ	前骨		右	破片	1						不明
40	1	池端 I	民青色粘土台古墳	11.2.24	植物遺体				破片	1	*					弥生中期
41	1	池端 I	民区色土台古墳	10.3.12	ウマ/ウシ	四肢骨			破片	1						12～13 世紀
42	1	池端 I	民区色土台古墳		ウシ	橈骨	左		破片	1						12～13 世紀
43	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.26	イノシシ属	橈骨骨		右	遠位端	1	*					12～13 世紀
44	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.26	ウマ/ウシ	不明			破片	1						12～13 世紀
45	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.26	ウマ	P2		右	破片	1					b33 >	12～13 世紀
46	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.26	ウシ	基節骨			破片	1						12～13 世紀
47	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.26	ウマ/ウシ	不明			破片	1						12～13 世紀
48	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.27	ウマ	P2		右	破片	1					b31 >	12～13 世紀
49	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.27	ウマ/ウシ	橈骨			橈体板	1					未化骨	12～13 世紀
50	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.27	貝類	不明			破片	1						12～13 世紀
51	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.26	大型貝類	殻骨			破片	1		○				12～13 世紀
52	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.26	大型貝類	不明			破片	5						12～13 世紀
53	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.26	ウマ/ウシ	不明			破片	3						12～13 世紀
54	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.26	貝類	不明			破片	3						12～13 世紀
55	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.25	ウマ/ウシ	橈骨			橈体片	1						12～13 世紀
56	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.25	ウマ/ウシ	不明			破片	2						12～13 世紀
57	1	池端 I	民区色土台古墳	9.11.25	貝類	不明			破片	2						12～13 世紀
58	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.20	大型貝類	不明			破片	1						12～13 世紀
59	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.19	貝類	下顎骨	左		臼～歯槽	1						12～13 世紀
60	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.19	貝類	四肢骨			破片	1						12～13 世紀
61	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.19	貝類	不明			破片	1						12～13 世紀
62	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.20	ウシ	第4手根骨?	左		破片	1						12～13 世紀
63	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.20	ウマ/ウシ	不明			破片	1						12～13 世紀
64	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.20	ボラ	主鰓蓋骨	左		破片	2						12～13 世紀
65	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.20	ボラ?	主鰓蓋骨?			破片	2						12～13 世紀
66	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.20	ウマ	1T2	左		破片	1						12～13 世紀
67	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.20	ウマ	基節骨			近位端欠	1						12～13 世紀
68	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.20	ウシ	P3	左		近位完存	1						12～13 世紀
69	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.20	貝類	不明			破片	3						12～13 世紀
70	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.19	貝類	殻骨			破片	1						12～13 世紀
71	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.18	貝類	四肢骨			破片	1		○				12～13 世紀
72	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.18	貝類	不明			破片	1						12～13 世紀
73	1	池端 I	民区色土台古墳	10.1.18	ニホンジカ	橈骨		右	破片	1					切断	12～13 世紀
74	1	池端 I	民色粘質土台古墳	10.3.12	貝類	上腕骨?			近位端?	1						弥生中期
75	1	池端 I	民色粘質土台古墳	10.1.27	貝類	大腿骨		右	遠位端片	1					骨端未化骨外れ	弥生中期
76	1	池端 I	民色粘質土台古墳	10.1.27	貝類	四肢骨			破片	1						弥生中期
77	1	池端 I	民色粘質土台古墳	10.1.27	土器				破片	1						弥生中期
78	1	池端 I	民色粘質土台古墳		魚類?	主鰓蓋骨?			破片	4						弥生中期
79	1	池端 I	畦上	10.1.26	ウマ/ウシ	不明			破片	2						弥生中期
80	1	池端 I	畦上	10.1.26	貝類	不明			破片	1						弥生中期
81	1	池端 I	民区色土台古墳	9.11.10	ニホンジカ?	角?			破片	1		○			無三品?	12～13 世紀
82	1	池端 I	民区色土台古墳	9.11.12	貝類	四肢骨			破片	1				○		12～13 世紀
83	1	池端 I	不明		ウマ	P2		右	破片	1					b39 <	不明
84	1	池端 I	不明		ウマ	M3?		右?	破片	1						不明
85	1	池端 I	不明		ウマ	M3	左		破片	1					b24 >	不明
86	1	池端 I	不明		ウマ?	歯槽			破片	1						不明
87	2	門前C	1号土坑	10.8.25	ニホンジカ	中手骨		右	近位完存	1		○				15～16 世紀
88	2	門前C	1号土坑	10.8.25	ウシ	橈骨		右	近位完存	1		○				15～16 世紀
89	2	門前C	土器・土錘層	10.8.18	貝類	上腕骨		右	遠位端欠	1		○			近位端未化骨外れ	15～16 世紀
90	2	門前C	2号土坑	10.8.31	コウノトリ目?	切断骨			破片	1		○			切断	15～16 世紀

53	2	円墳C	2号土坑	10.8.31	ウマ	胴甲骨	左	破片	1					15～16世紀
53	2	円墳C	2号土坑	10.8.31	ウシ	第4手指骨	右	山辺定序	1					15～16世紀
53	2	円墳C	2号土坑	10.8.31	ウマ/ウシ	不明		破片	2					15～16世紀
53	2	円墳C	2号土坑	10.8.31	鳥類/獣類	四肢骨		両端欠	1					15～16世紀
53	2	円墳C	2号土坑	10.8.31	植物遺体			破片	1					15～16世紀
54	2	円墳C	1号溝	10.9.9	イノシシ属	犬歯		破片	1	♂				15～16世紀
54	2	円墳C	1号溝	10.9.9	ウシ	前骨	左	山辺定序	1					15～16世紀
55	2	円墳C	1号溝	10.9.21	イノシシ属	下顎骨	右	P3～下顎臼歯	1				W1 補足/W2 前期	近世
55	2	円墳C	1号溝	10.9.21	ニホンジカ	角		破片	1			○	加工品	近世
55	2	円墳C	1号溝	10.9.21	ニホンジカ	上顎骨	左	W～P	1				W1-3 補足	近世
55	2	円墳C	1号溝	10.9.21	ニホンジカ	下顎骨	左	下顎臼歯	1	♂			P2-W3 補足	近世
55	2	円墳C	1号溝	10.9.21	鹿類			破片	1					近世
56	2	地蔵I	2号土坑	10.1.14	イノシシ属	下顎骨	左	M～下顎臼歯	1					弥生終末
56	2	地蔵I	2号土坑	10.1.14	大型獣類	肋骨		破片	1				骨形成有	弥生終末
57	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.9	イヌ	尺骨	右	山辺定序	1					弥生～中世
57	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.9	鹿類	四肢骨		破片	1					弥生～中世
58	2	地蔵I	6号鉄塔工公園	10.5.27	ニホンジカ	上顎骨	左	山辺編欠	1					弥生中期
59	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.5	ボラ	主鰓蓋骨	左	破片	1					弥生～中世
59	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.5	スズキ属	主鰓蓋骨	左	破片	1					弥生～中世
59	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.5	イノシシ属	下顎骨	左	P3-M3 間	1				W1-3 補足、前期	弥生～中世
59	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.5	中型獣類	椎骨	左	破片	1					弥生～中世
60	2	円墳C	表採	10.9.15	ウマ	胴甲骨		破片	1			○		弥生～中世
61	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	ウシ	上顎骨	右	歯列痕片	1					弥生～中世
62	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.1	ウマ/ウシ	上腕骨下		右区痕片	1					弥生～中世
63	2	円墳C	1-B8・10遺構		鳥類	鳥類		破片	1					弥生～中世
64	2	円墳C	1Tr-東	10.8.27	スズキ属	主鰓蓋骨	左	破片	2	♂				近世
64	2	円墳C	1Tr-東	10.8.27	ニホンジカ	下顎骨	左	臼歯～関節突起	1					近世
65	2	円墳C	1Tr-東	10.8.20	鹿類	下顎骨	左	咬筋	1					近世
65	2	円墳C	1Tr-北側	10.8.20	スズキ属	主鰓蓋骨	左	山辺定序	1					中世
65	2	円墳C	1Tr-北側	10.8.20	ニホンジカ	上腕骨	右	破片	1				P2-W3 補足	中世
65	2	円墳C	1Tr-北側	10.8.20	ニホンジカ	下顎骨	右	下顎臼歯	1			○	P2-W3 補足	中世
66	2	円墳C	1Tr-北	10.8.20	鹿類	肋骨		破片	1					弥生～中世
67	2	円墳C	1Tr-北	10.8.6	ウマ	M1	左	破片	1				M27-42	弥生～中世
68	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	鹿類	肋骨		破片	1			○		弥生～中世
69	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.9.6	鹿類	不明		破片	1					弥生～中世
70	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.17	イヌ	第1指骨		破片	1					弥生～中世
70	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.17	ニホンジカ?	角?		破片	1			○	加工品	弥生～中世
70	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.17	ウシ	尺骨	右	浦区痕欠	1				近世以降破棄	弥生～中世
70	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.17	大型獣類	不明		破片	2					弥生～中世
70	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.17	鹿類	不明		破片	1					弥生～中世
71	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	イタボガキ科?	殻		破片	3	○				弥生～中世
71	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	二枚貝類	殻		破片	1					弥生～中世
71	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	貝類	殻		破片	1					弥生～中世
71	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	ボラ	主鰓蓋骨	左	破片	1					弥生～中世
71	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	ウマ	M3	左	山辺定序	1				M34, 56	弥生～中世
71	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	ニホンジカ?	m1?		破片	1				半截?	弥生～中世
71	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	ウマ/ウシ	上腕骨	左	表編欠	1		○			弥生～中世
71	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	ウマ/ウシ	不明		破片	1		○			弥生～中世
71	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	不明	不明		破片	412	♂				弥生～中世
71	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	土器			破片	3					弥生～中世
72	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	ウシ	橈骨	右	山辺定序	1				No. 70 右尺骨と間接	弥生～中世
72	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	ウシ	中手骨	右	山辺定序	1	♂				弥生～中世
73	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.10	ウシ?	肋骨		破片	1		○	○		弥生～中世
73	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.9	ウマ	尺?	左	山辺定序	1				M39, 70	弥生～中世
74	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.9	ニホンジカ	中手骨	左	浦区編欠	1			○	焼酸	12～13世紀
74	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.9	ウシ	中手骨	左	山辺定序	1			○	浦区編未定骨外れ	12～13世紀
74	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.9	大型獣類	椎骨		破片	2					12～13世紀
74	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.9	鳥類/獣類	四肢骨		破片	1					12～13世紀
74	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.8.9	鳥類/獣類	四肢骨		破片	1		○			12～13世紀
75	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.9.9	ウシ	上腕骨	左	浦区編	1					12～13世紀
75	2	円墳C	1-B8・10遺構	10.9.9	ウシ?	橈骨	右	浦区痕片	1					12～13世紀
76	3	地蔵II	2号溝	11.4.27	ウマ	下顎歯半		破片	1	♂				中世
77	3	地蔵II	3号溝	11.5.31	鹿類	四肢骨		破片	1		○			弥生中期
77	3	地蔵II	3号溝	11.5.31	鹿類	四肢骨		破片	1			○		弥生中期
77	3	地蔵II	3号溝	11.5.31	鹿類	不明		破片	1			○		弥生中期
78	3	地蔵II	8号土坑	11.4.28	鹿類	大腿骨	右	山辺定序	1				骨端未完骨外れ	弥生終末
78	3	地蔵II	8号土坑	11.4.28	鹿類	脛骨	右	浦区編欠	1				骨端未完骨外れ	弥生終末
79	3	地蔵II	107号土坑	11.4.28	魚類?	不明		破片	1					弥生終末
79	3	地蔵II	107号土坑	11.4.28	ニホンジカ	脛骨	左	浦区編	1					弥生終末
80	3	地蔵II	86号土坑	11.4.28	ニワトリ	橈骨	右	浦区編欠	1		○			弥生終末
80	3	地蔵II	86号土坑	11.4.28	魚類	上腕骨	左	破片	1	♂	○		近世以降破棄	弥生終末
80	3	地蔵II	61号土坑第7層	11.4.19	鹿類	不明		破片	1					中世
82	3	地蔵II	90号土坑	11.5.17	鹿類	四肢骨		破片	2					古代
83	3	地蔵II	90号土坑	11.5.17	ニホンジカ	角		角座部	1	♂				古代
84	3	地蔵II	90号土坑	11.5.17	魚類	手指骨/中手骨	右	浦区編	1					古代
84	3	地蔵II	90号土坑	11.5.17	鹿類	上腕骨	左	浦区編	1				骨端未完骨外れ	古代
85	3	地蔵II	39号土坑	11.5.25	ボラ	主鰓蓋骨	左	破損	3	♂				弥生終末～古墳初期
86	3	地蔵II	39号土坑	11.5.25	イノシシ属	上腕骨	右	W～P 間	1				W1 周辺遺骨	弥生終末～古墳初期
87	3	地蔵II	39号土坑	11.5.17	ボラ	主鰓蓋骨	左	破片	2					弥生終末～古墳初期
87	3	地蔵II	39号土坑	11.5.17	スズキ属	主鰓蓋骨	右	破片	1					弥生終末～古墳初期
87	3	地蔵II	39号土坑	11.5.17	イノシシ属	尺	右	山辺定序	1					弥生終末～古墳初期
87	3	地蔵II	39号土坑	11.5.17	ニホンジカ	角		破片	1		○	○	加工品	弥生終末～古墳初期
87	3	地蔵II	39号土坑	11.5.17	鹿類	胴甲骨		破片	1					弥生終末～古墳初期
87	3	地蔵II	39号土坑	11.5.17	鹿類	肋骨		破片	1					弥生終末～古墳初期
87	3	地蔵II	39号土坑	11.5.17	鹿類	四肢骨		破片	1	♂				弥生終末～古墳初期
88	3	地蔵II	79・84・87号土坑	11.6.1	ニホンジカ	角		破片	1		○		加工品	弥生終末～中世
89	3	地蔵II	79・84・87号土坑	11.6.1	イノシシ属	尺骨	左	山辺編	1					弥生終末～中世
89	3	地蔵II	79・84・87号土坑	11.6.1	土器			破片	1					弥生終末～中世
90	3	地蔵II	51号土坑上層	11.5.18	ハクチョウ類	肥厚橈骨	右	浦区編	1			○	浦区編切断	古墳後期
91	3	地蔵II	62号土坑	11.5.25	ボラ	主鰓蓋骨	右	破片	1					12～13世紀
91	3	地蔵II	62号土坑	11.5.25	ボラ?	上鰓蓋骨	右?	破片	1					12～13世紀

91	3	北原H	62 号土坑	11.5.25	魚板	不明		破片	1	+				12～13 世紀
92	3	北原H	62 号土坑	11.5.24	コホシジウ	ne1		破片	1					12～13 世紀
92	3	北原H	62 号土坑	11.5.24	コホシジウ	基部骨		山辺定彦	1					12～13 世紀
92	3	北原H	62 号土坑	11.5.24	魚類	四肢骨		破片	1	+				12～13 世紀
92	3	北原H	62 号土坑	11.5.24	魚類	不明		破片	1					12～13 世紀
92	3	北原H	62 号土坑	11.5.25	魚類	四肢骨		破片	1			○		12～13 世紀
94	3	北原H	33 号土坑	11.5.23	ノウサギ	大腿骨	左	遠位端	1					弥生終末～古墳初頭
95	3	北原H	39 号土坑	11.5.25	イノシシ属	頭甲骨	右	破片	1				開前縁未癒着仔	古墳後期
96	3	北原H	28 号土坑	11.5.30	ボラ	主鰓蓋骨	右	破片	1					弥生終末～古墳初頭
97	3	北原H	28 号土坑	11.5.30	コホシジウ	角		角尾部	1					弥生終末～古墳初頭
98	3	北原H	63 号土坑	11.6.16	イノシシ属	上顎骨	左	第 1 臼	1				M3 萌出途中	弥生終末～古墳初頭
99	3	北原H	32 号土坑	11.5.24	魚類	四肢骨		破片	1		○			弥生終末～古墳初頭
100	3	北原H	32 号土坑	11.5.24	ボラ	主鰓蓋骨	右	鰓膜	1					弥生終末～古墳初頭
101	3	北原H	ピット	11.5.27	魚類	四肢骨		破片	2					中世
102	3	北原H	ピット	11.5.30	魚類	尺骨		両端欠	1					中世
103	3	北原H	ピット	11.6.26	ホシジウ	角		先端付近	1		○		加工品	中世
104	3	北原H	118 号土坑	11.5.27	イノシシ属	橈骨	右	山辺海	1				右橈骨 2 開節	中世
104	3	北原H	118 号土坑	11.5.27	イノシシ属	尺骨	右	山辺海	1				右橈骨 2 開節	中世
104	3	北原H	118 号土坑	11.5.27	黒曜石			破片	1					中世
105	3	北原H	ピット	11.5.30	イヌ	膵骨	左	山辺海欠	1					弥生終末
106	3	北原H	41 号土坑	11.6.18	魚類	四肢骨		破片	1			○		弥生終末～古墳初頭
107	3	北原H	41 号土坑下層	11.6.19	スズキ属	主鰓蓋骨	左	破損	1					古墳初頭
107	3	北原H	41 号土坑下層	11.6.19	ノウサギ	尺骨	右	山辺定彦	1					古墳初頭
107	3	北原H	41 号土坑下層	11.6.19	ノウサギ	橈骨	左	山辺定彦	1					古墳初頭
107	3	北原H	41 号土坑下層	11.6.19	ノウサギ	鼓骨	左	破損	1					古墳初頭
107	3	北原H	41 号土坑下層	11.6.19	ノウサギ	大腿骨	左	山辺定彦	1					古墳初頭
107	3	北原H	41 号土坑下層	11.6.19	ノウサギ	大腿骨	右	山辺定彦	1					古墳初頭
107	3	北原H	41 号土坑下層	11.6.19	ノウサギ	脛腓骨	左	山辺定彦	1					古墳初頭
107	3	北原H	41 号土坑下層	11.6.19	ノウサギ	脛腓骨	右	破損	1					古墳初頭
107	3	北原H	41 号土坑下層	11.6.19	ノウサギ	橈骨	右	山辺定彦	1					古墳初頭
107	3	北原H	41 号土坑下層	11.6.19	ノウサギ	第 4 中足骨	左	山辺定彦	1					古墳初頭
107	3	北原H	41 号土坑下層	11.6.19	ノウサギ	第 5 中足骨	右	山辺定彦	1					古墳初頭
107	3	北原H	41 号土坑下層	11.6.19	ノウサギ?	肋骨		山辺定彦	3					古墳初頭
108	3	北原H	1 号土坑下層	11.6.1	魚類	肋骨		破片	1		○			弥生中期
109	3	北原H	34 号土坑	11.6.1	不明	不明		破片	2					弥生終末～古墳初頭
110	3	北原H	10 号土坑	11.6.3	イノシシ属	前頭骨 - 上顎骨	右	破片	1					弥生終末
110	3	北原H	10 号土坑	11.6.3	イノシシ属	上顎骨	左	浪江海	1				骨端未癒着仔	弥生終末
111	3	北原H	36 号土坑	11.6.3	大型魚類	鼓骨	右	破片	1		○			弥生終末～古墳初頭
112	3	北原H	ピット	11.6.2	コホシジウ	第 1	左	破損	1					不明
113	3	北原H	ピット	11.6.3	コホシジウ	尺	左	破損	1					不明
112	3	北原H	ピット	11.6.3	コホシジウ	中手骨	左	山辺海欠	1					不明
113	3	北原H	ピット	11.6.8	イノシシ属	上顎骨	右	両端欠	1		○			弥生中期
113	3	北原H	ピット	11.6.8	コホシジウ	鼓骨	左	破片	1		○			弥生中期
114	3	北原H	14 号土坑中層	11.6.23	イノシシ属	上顎骨	右	P4-M1 部	1				dm3, M1 補立	弥生終末
114	3	北原H	14 号土坑中層	11.6.23	魚類	不明		破片	1					弥生終末
115	3	北原H	15 号土坑中層	11.05.23	イノシシ属	指骨	右	山辺定彦	1					弥生終末
116	3	北原H	14 号土坑下層	11.6.29	イノシシ属	下顎骨	左	P4-3 部	1				P2-3 補立	弥生終末
116	3	北原H	14 号土坑下層	11.6.29	イノシシ属	下顎骨	右	P4-3 部	1				P3 補立	弥生終末
117	3	北原H	53 号土坑	11.6.9	ボラ?	主鰓蓋骨?	右?	破片	1					古墳終末
117	3	北原H	53 号土坑	11.6.9	イノシシ属	上顎骨	右	C-M1 部	1				P2-3 補立	古墳終末
117	3	北原H	53 号土坑	11.6.9	魚類	不明		破片	1					古墳終末
118	3	北原H	53 号土坑	11.6.9	土器			破片	1					古墳終末
118	3	北原H	ピット	11.6.9	コホシジウ	橈骨	右	破損	1					不明
119	3	北原H	29 号土坑	11.6.13	イノシシ属	頭甲骨	左	破片	1					弥生終末～古墳初頭
120	3	北原H	13 号土坑	11.6.13	イノシシ属	中足骨		山辺定彦	1					弥生終末
121	3	北原H	13 号土坑	11.7.5	ニホンジカ	肋骨		破片	1		○			弥生終末
122	3	北原H	35 号土坑	11.6.5	魚類	四肢骨		破片	1		○		胴板	弥生終末
123	3	北原H	47 号土坑	11.6.21	トビエイ科	歯板		破片	1					古墳後期
123	3	北原H	47 号土坑	11.6.21	ボラ	主鰓蓋骨	左	破損	3					古墳後期
123	3	北原H	47 号土坑	11.6.21	スズキ属?	下鰓蓋骨	右	破片	1					古墳後期
123	3	北原H	47 号土坑	11.6.21	魚類	四肢骨		両端欠	1					古墳後期
124	3	北原H	23 号土坑	11.6.21	魚類	四肢骨		破片	1					古墳後期
124	3	北原H	23 号土坑	11.6.15	クロダイ属	歯骨	左	破損	1					弥生終末
125	3	北原H	21 号土坑	11.6.13	貝化材			破片	1		○			弥生終末
125	3	北原H	21 号土坑	11.7	イノシシ属	基部骨 / 中節骨		浪江海	1					弥生終末
126	3	北原H	21 号土坑	11.7.11	スズキ属	主鰓蓋骨?		破片	1					弥生終末
126	3	北原H	21 号土坑	11.7.11	魚類	椎骨		椎体	1				椎体板未癒着仔	弥生終末
127	3	北原H	21 号土坑	11.6.21	イノシシ属	頭頂骨	右	破片	1				11 未出	弥生終末
127	3	北原H	21 号土坑	11.6.21	イノシシ属	上顎骨	左	P4-M2 部	1				dm3M1-2 補立	弥生終末
128	3	北原H	21 号土坑	11.6.23	ボラ	主鰓蓋骨	右	破片	1					弥生終末
128	3	北原H	21 号土坑	11.6.23	魚類	四肢骨		破片	1				骨端未癒着仔	弥生終末
129	3	北原H	21 号土坑 2 層	11.7.22	魚類	椎骨		椎体板	1				未癒着	弥生終末
130	3	北原H	66 号土坑下層	11.6.10	イヌ	尺骨	右	浪江海欠	1					中世
131	3	北原H	66 号土坑	11.6.17	金属遺物?			破片	1					中世
132	3	北原H	68 号土坑	11.7.12	ニホンジカ	肘骨	左	浪江海	1					弥生後期
133	3	北原H	68 号土坑下層	11.6.23	ニホンジカ?	上腕骨		破片	1					弥生後期
133	3	北原H	68 号土坑下層	11.6.23	魚類	肋骨		破片	1					弥生後期
133	3	北原H	68 号土坑下層	11.6.23	魚類	四肢骨		破片	5	+				弥生後期
133	3	北原H	68 号土坑下層	11.6.23	魚類	四肢骨		破片	1		○			弥生後期
134	3	北原H	60 号土坑	11.6.22	魚類	肋骨		破片	1					古代
135	3	北原H	60 号土坑	11.6.21	ヒト	大腿骨	右	浪江海欠	1					古代
135	3	北原H	60 号土坑	11.6.21	土器			破片	1					古代
136	3	北原H	60 号土坑	11.6.23	ヒト	鼓骨	左	破片	1					古代
136	3	北原H	60 号土坑	11.6.23	ヒト	鼓骨		破片	24	+				古代
136	3	北原H	60 号土坑	11.6.23	ヒト	大腿骨	左	両端欠	1					古代
137	3	北原H	64 号土坑	11.6.10	ウシ	上腕骨	左	山辺海	1				未癒着骨端	中世
138	3	北原H	64 号土坑	11.6.11	イノシシ属	尺骨	右	山辺海	1					中世
139	3	北原H	18 号土坑			魚類		四肢骨	2					弥生終末
140	3	北原H	19 号土坑	11.10.26	魚類	歯冠		破片	1					弥生終末
140	3	北原H	18 号土坑	11.10.26	魚類	腰椎		破損	1					弥生終末
140	3	北原H	18 号土坑	11.10.26	魚類	不明		破片	4					弥生終末

140	3	北原II	18 号土坑	11.10.20	不明			破片	2					弥生終末
140	3	北原II	18 号土坑	11.10.20	土器			破片	1					弥生終末
141	3	北原II	18 号土坑	11.6.21	敷脚	砂骨		破片	2		○			弥生終末
141	3	北原II	18 号土坑	11.6.21	敷脚	四肢骨		破片	1					弥生終末
142	3	北原II	19 号土坑	11.6.23	スズキ属	主鰓蓋骨	右	破片	1				切断	弥生終末
143	3	北原II	18 号土坑下層	11.7.21	イノシシ属	尺骨	左	破片	1					弥生終末
143	3	北原II	18 号土坑下層以層	11.7.13	敷脚	胡甲骨		破片	1					弥生終末
145	3	北原II	57 号土坑	11.6.29	ニホンジカ	角		破片	1		○			古代
146	3	北原II	19 号土坑	11.6.11	ニホンジカ	膕骨	右	遺存編	1					弥生終末～古墳初期
147	3	北原II	19 号土坑	11.9.2	敷脚	砂骨		破片	1					弥生終末～古墳初期
148	3	北原II	19 号土坑	11.8.2	イノシシ属	上腕骨	右	遺存編	1	+				弥生終末～古墳初期
149	3	北原II	19 号土坑以層	11.9.6	イノシシ属	胡甲骨	右	破片	1		○			古墳初期
149	3	北原II	19 号土坑以層	11.9.6	敷脚	砂骨		破片	1		○			古墳初期
149	3	北原II	19 号土坑以層	11.9.6	敷脚	四肢骨		破片	1					古墳初期
150	3	北原II	5 号土坑	11.6.29	ニホンジカ	下顎骨	右	PD-M2 部	1				P2-M1 補完	弥生後期
151	3	北原II	67 号土坑	11.7.13	イノシシ属	下顎骨	左	右下顎咬矢	1	+			左 I1-2, 右 P3-M3 補完	中近世
151	3	北原II	67 号土坑	11.7.13	イノシシ属	歯牙		破片	3					中近世
151	3	北原II	67 号土坑	11.7.13	敷脚	砂骨		破片	1					中近世
152	3	北原II	ピット5-148	11.7.1	魚類?	前鰓蓋骨?		破片	1	+				不明
153	3	北原II	69 号土坑	11.7.12	イノシシ属	大腿骨	右	遺存編	1				骨端未化骨外れ	弥生終末～古墳初期
154	3	北原II	69 号土坑	11.7.19	敷脚	不明		破片	1	+				弥生終末～古墳初期
155	3	北原II	礫墓式柱穴	11.7.15	イノシシ属	下顎骨	左	右	歯冠部	1				弥生終末
156	3	北原II	ピット	11.7.15	イノシシ属	下顎骨	右	P3-4 部	1				P3-4 補完	不明
156	3	北原II	ピット	11.7.15	イノシシ属	下顎骨	右		歯	+				不明
156	3	北原II	ピット	11.7.15	イノシシ属	犬	右	破片	1					不明
156	3	北原II	ピット	11.7.15	イノシシ属	犬	右	法定定骨	1				未出萌牙	不明
157	3	北原II	ピット	11.7.20	敷脚	不明		破片	1					不明
158	3	北原II	23 号土坑	11.7.19	敷脚	不明		破片	1					弥生終末
159	3	北原II	85 号土坑	11.9.26	敷脚	砂骨		破片	1		○			弥生終末
160	3	北原II	85 号土坑	11.8.26	イノシシ属	第 3 中手骨	左	法定定骨	1				遺位端未化骨外れ	弥生終末
161	3	北原II	85 号土坑	11.7	ウマ/ウシ	鬼骨	右	破片	1					弥生後期
162	3	北原II	85 号土坑	11.7	ニワトリ	上腕骨	左	破鏡	1		○		断端切断	弥生後期
163	3	北原II	102 号土坑	11.7.19	敷脚	不明		破片	1					古墳後期
164	3	北原II	106 号土坑	11.7.20	ホイッサイ類	橈骨		橈体	1				加工品?	弥生終末
165	3	北原II	25 号土坑	11.7.22	敷脚	砂骨		破片	1					弥生終末
166	3	北原II	6 号土坑上層	11.7	イノシシ属	橈骨	右	破鏡	1				切断	弥生後期
166	3	北原II	6 号土坑上層	11.7	イノシシ属	第 4 中足骨	右	法定定骨	1				遺位端切断, 成熟	弥生後期
167	3	北原II	小松穴利根内	11.6.4	敷脚	不明		破片	3					中世
168	3	北原II	ピット	11.8.11	イノシシ属	鎖鬼骨	右	前鎖骨片	1				切断	弥生後期
168	3	北原II	ピット	11.8.11	イノシシ属	鎖鬼骨	右	喉骨片	1				切断	弥生後期
169	3	北原II	35 号土坑	11.9.20	イノシシ属?	胡甲骨	右	破片	1				切断	弥生終末～古墳初期
170	3	北原II	35 号土坑	11.9.20	イノシシ属	尺骨	右	遺存端欠	1		○			弥生終末～古墳初期
171	3	北原II	礫墓式柱穴	11.8.11	敷脚	鬼骨		破片	1		○			弥生後期
172	3	北原II	小松穴 5-215	11.8.16	スズキ属	主鰓蓋骨	右	破片	1					弥生中期
173	3	北原II	ピット	11.8.16	ニホンジカ	角		破片	1		○			弥生中期
174	3	北原II	ピット	11.8.16	ニホンジカ	角		生産痕	1					弥生中期
175	3	北原II	ピット	11.8.16	イノシシ属	尺骨	左	近位端	1		○			弥生中期
176	3	北原II	1 号礫点有建物跡	11.8.16	イノシシ属	第 3 中手骨	右	法定定骨	1				遺位端未化骨	弥生中期
177	3	北原II	ピット	11.8.17	鳥類	四肢骨		破片	1					弥生中期
178	3	北原II	灰色粘土包含層	11.8.17	イノシシ属	下顎骨	左	右	下顎咬矢	1			左右 P3-M3 補完, M3 途中	弥生中期
178	3	北原II	灰色粘土包含層	11.8.17	イノシシ属	尺	右	破片	1					弥生中期
178	3	北原II	灰色粘土包含層	11.8.17	敷脚	砂骨		破片	2					弥生中期
178	3	北原II	灰色粘土包含層	11.8.17	敷脚	砂骨		破片	1		○			弥生中期
178	3	北原II	灰色粘土包含層	11.8.17	敷脚	不明		破片	9	+				弥生中期
179	3	北原II	97 号土坑	11.8.18	イノシシ属	尺骨	左	遺存端欠	1		○			弥生中期
180	3	北原II	ピット	11.8.18	イノシシ属	下顎骨	左	臼-3 部	1	+			M3 萌出途中	弥生中期
181	3	北原II	ピット	11.8.18	ニホンジカ	下顎骨	左	破片	1					弥生中期
181	3	北原II	79 号土坑	11.8.18	ボラ	主鰓蓋骨	右	破片	1	+				弥生中期
182	3	北原II	79 号土坑	11.8.18	イノシシ属	下顎骨	左	P4-M2 部	1				P4-M2 補完	弥生中期
183	3	北原II	礫墓式柱穴	11.9.13	敷脚	鬼骨		破片	1					弥生後期
184	3	北原II	80 号土坑	11.9.26	イノシシ属	第 3 中手骨	左	近位端	1					弥生終末
184	3	北原II	81 号土坑	11.9.26	イノシシ属	m3		遺存編	1				骨端未化骨	弥生終末
185	3	北原II	55 号土坑	11.8.26	ニホンジカ	指骨	左	法定定骨	1		○			弥生終末
185	3	北原II	1 号礫点有建物跡	11.8.26	敷脚	鎖鬼骨		破片	1					弥生終末
186	3	北原II	76 号土坑	11.10.6	敷脚	橈骨		破片	1	+			橈体骨未化骨外れ	弥生中期
187	3	北原II	62 号土坑	11.10.11	イノシシ属	m3		遺存編	1	+				弥生終末～古墳初期
188	3	北原II	63 号土坑	11.10.11	敷脚	橈骨		橈体	1					弥生中期
189	3	北原II	90 号土坑	11.10.11	敷脚	不明		破片	9					弥生中期
190	3	北原II	礫墓式柱穴	11.10.11	敷脚	橈骨		橈体	1					弥生後期
191	3	北原II	礫墓式柱穴	11.10.21	敷脚	歯牙		破片	12	+				弥生後期
192	3	北原II	浦沢裏粘土包含層	11.10.19	ニホンジカ	大腿骨	右	近位端	1				骨端未化骨外れ	弥生中期
193	3	北原II	浦沢魚粘土包含層	11.10.11	ボラ	主鰓蓋骨	右	破片	1					弥生中期
194	3	北原II	灰色粘土包含層	11.9	敷脚	不明		破片	2					弥生中期
195	3	北原II	浦沢魚粘土包含層	11.6.2	ボラ	主鰓蓋骨	右	破片	1					弥生中期
196	3	北原II	浦沢魚粘土包含層		イノシシ	鎖鬼骨	左	前鎖骨片	1				切断?	弥生中期
197	3	北原II	浦沢魚粘土包含層		ニホンジカ	尺	右	破片	1					弥生中期
198	3	北原II	浦沢魚粘土包含層		敷脚	四肢骨		破片	1		○			弥生中期
199	3	北原II	浦沢魚粘土包含層		敷脚	不明		破片	12	+				弥生中期
200	3	北原II	系列魚上包含層	11.5.13	大型敷脚	上腕骨		近位端	1					12～13 世紀
201	3	北原II	系列魚上包含層	11.5.13	大型敷脚	上腕骨		遺位端片	1					12～13 世紀
202	3	北原II	系列魚上包含層	11.5.13	敷脚	四肢骨		破片	25	+				12～13 世紀
203	3	北原II	系列魚上包含層	11.5.13	敷脚	胡甲骨?		破片	1	+				12～13 世紀
199	3	北原II	灰色粘土包含層	11.6.18	イヌ科	下顎骨	左	臼-M1 部	1				P3-4 歯槽喪失, M1-3 補完	弥生中期
199	3	北原II	灰色粘土包含層	11.6.18	イヌ科	下顎骨	右	P4-M3 部	1				P3-4 歯槽喪失, M1-3 補完	弥生中期
199	3	北原II	灰色粘土包含層	11.6.18	イノシシ属	尺骨	左	破片	1					弥生中期
199	3	北原II	灰色粘土包含層	11.6.18	ニホンジカ	膕骨	左	破片	1				○	弥生中期
200	3	北原II	灰色粘土包含層	11.10.11	イノシシ属	尺骨	右	破片	1					中世
201	3	北原II	水溜管堀部	11.6.16	魚類	主鰓蓋骨		破片	1	+				不明
202	3	北原II	水溜管堀部	11.6.14	イノシシ属	指骨	左	法定定骨	1					現代
203	3	北原II	水溜管堀部	11.6.14	大型敷脚	橈骨		破片	1	+	○			不明
204	3	北原II	蓋土	11.9	イノシシ属?	下顎骨	左	破片	1					現代
205	3	北原II	蓋土	11.7.15	イノシシ属	下顎C	右	破鏡	1					不明

206	3	北海道	堀上	11.8.8	コワトリ	足指骨中足骨	左	破損		1			○	浦臼湖沼跡	不明
207	3	北海道	不明		大型獣類	四肢骨		破片		1				○	不明
208	4	北海道	新五		オノシン属	下顎骨	左	右	破損	1	+				M3 第出歯甲	不明
209	4	北海道	系図色上谷遺	10.10.21	ウマ	大腿骨			骨端片	1			○			12～13 世紀
209	4	北海道	系図色上谷遺	10.10.21	ウマ	足根骨			破片	1						12～13 世紀
209	4	北海道	系図色上谷遺	10.10.21	ニホンジカ	橈骨	左		近位骨片	1					頭蓋	12～13 世紀
209	4	北海道	系図色上谷遺	10.10.21	ウマ/ウシ	大腿骨?			大転子?	1						12～13 世紀
209	4	北海道	系図色上谷遺	10.10.21	ウマ/ウシ	不明			破片	2						12～13 世紀
210	4	北海道	39 号土坑	10.11.10	イノシシ属	切	左		破片	1						弥生中期
211	4	北海道	上湯川中部	11.1.19	ヌイ・サメ類	椎骨			破片	1						弥生後期
212	4	北海道	上湯川中部	11.1.2	大型獣類	椎骨?			破片	2						弥生後期
213	4	北海道	上湯川中部	11.3.8	イノシシ属	尺骨		右	遠位端欠	1						弥生後期
214	4	北海道	オサツ 1	10.12.15	獣類	四肢骨			破片	1						弥生後期
215	4	北海道	1 号盛土可能遺構	10.12.6	獣類	四肢骨			破片	2			○			弥生中期
216	4	北海道	11 号盛土祖先祭祀跡	11.5.4	ウマ	尺骨	左		近位端	1						弥生中期
217	4	北海道	3 号盛土可能遺構	11.5.8	イノシシ属	下顎骨		右	臼・犬歯	1				○		弥生中期
218	4	北海道	3 号盛土可能遺構	11.5.8	イノシシ属	下顎骨		右	M1～下顎体部	1					M3 第出歯前	弥生中期
218	4	北海道	3 号盛土可能遺構	11.5.8	イノシシ属	上腕骨		右	近位端	1			○		骨端未化骨外れ	弥生中期
218	4	北海道	3 号盛土可能遺構	11.5.8	イノシシ属	上腕骨		右	近位端欠	1			○		浦臼湖未化骨外れ	弥生中期
218	4	北海道	3 号盛土可能遺構	11.5.8	獣類	肋骨			破片	1						弥生中期
218	4	北海道	3 号盛土可能遺構	11.5.8	獣類	不明			破片	9	+					弥生中期
219	4	北海道	浜黄色山立谷遺 7 等	11.5.8	イノシシ属	上腕骨		右	M2-3 間	1					M2-3 補足	弥生後期
219	4	北海道	浜黄色山立谷遺 7 等	11.5.8	イノシシ属	下顎骨	左	右	歯槽部	1						弥生後期
219	4	北海道	浜黄色山立谷遺 7 等	11.5.8	イノシシ属	下顎骨			下顎角	1						弥生後期
219	4	北海道	浜黄色山立谷遺 7 等	11.5.8	獣類	四肢骨			破片	1			○			弥生後期
219	4	北海道	浜黄色山立谷遺 7 等	11.5.8	獣類	不明			破片	5	+					弥生後期
220	4	北海道	浜黄色山立谷	11.1.21	ボラ	主鰓蓋骨	左		破片	1						弥生後期
221	4	北海道	浜黄色山立谷	11.1.21	獣類	四肢骨			破片	3						弥生後期
222	4	北海道	河黄色松葉上谷遺	11.2.25	イノシシ属	鼓骨	左		破片	1						古墳初期
223	4	北海道	浜黄色上谷遺	12.11.24	イノシシ属?	大腿骨		右	遠位端片	1					未化骨骨端	弥生後期
224	4	北海道	浜黄白松葉上谷遺	10.11.11	イノシシ属	尺骨	左		近位端	1						弥生後期
224	4	北海道	浜黄白松葉上谷遺	10.11.11	イノシシ属	鉤骨		右	破損	1						弥生後期
225	4	北海道	浜黄色上谷遺	10.10.20	獣類	四肢骨			破片	1						弥生後期
226	4	北海道	浜黄色上谷遺	10.10.18	ニホンジカ	角			角座部	1			○			弥生後期
226	4	北海道	浜黄色上谷遺	10.10.18	ニホンジカ	角			先端	1			○			弥生後期
227	4	北海道	浜黄色上谷遺	10.10.15	イノシシ属	胡甲骨	左		破片	1			○			弥生後期
228	4	北海道	浜黄白松葉上谷遺	10.10.26	イノシシ属	肩甲	左		関節窩	1						弥生中期
229	4	北海道	浜黄白松葉上谷遺	10.10.25	ウマ	橈骨	左		遠位端片	1			○			弥生中期
230	4	北海道	浜黄白松葉上谷遺	10.10.26	イノシシ属	切		右	破片	1						弥生中期
231	4	北海道	浜黄色上谷遺	10.10.15	イノシシ属?	大腿骨		右	遠位端片	1					未化骨骨端 , No. 223 と同一骨	弥生後期
232	4	北海道	浜黄色上谷遺	10.10.15	獣類	頭蓋骨?			破片	1						弥生後期
233	4	北海道	浜黄色上谷遺	10.10.15	獣類	四肢骨			破片	1						弥生後期
232	4	北海道	浜黄色上谷遺	10.10.19	ニホンジカ	中手骨			破片	1						弥生後期
234	4	北海道	浜黄色上谷遺	10.10.19	獣類	四肢骨			破片	1						弥生後期
235	4	北海道	河白松葉上谷遺	11.5.25	大型獣類	肋骨			破片	1			○			弥生中期
235	4	北海道	浜黄色上谷遺	10.12.2	不明	不明			破片	1						弥生後期
235	4	北海道	浜黄色上谷遺	10.11.29	大型獣類	四肢骨			破片	1						弥生後期
236	4	北海道	浜ちふみ上遺	11.1.14	ボラ	主鰓蓋骨		右	破片	1						古墳初期
237	4	北海道	不明		ニホンジカ	角			破片	1			○			不明
238	5	門前C	17r 東	10.8.20	獣類	四肢骨			破片	1					骨端未化骨外れ	12～13 世紀
239	5	門前C	上島・以前柳	10.8.30	ウマ	切	右	破損		1					M3 右 11	12～13 世紀
240	5	門前C	上島・以前柳	10.9.1	ウマ	切	右	破損		1					M3 ?	12～13 世紀
241	5	門前C	上島・以前柳	10.8.23	魚類	主鰓蓋骨			破片	1						12～13 世紀
242	5	門前C	17r 東	10.8.27	スズキ属	主鰓蓋骨	左		破片	1	+					古墳後期
243	5	門前C	上島・以前柳	10.9.8	獣類	不明			破片	1						12～13 世紀
244	5	門前C	上島・以前柳	10.8.20	ボラ?	主鰓蓋骨	左		破片	1						12～13 世紀
245	5	門前C	17r 北トイ	10.9.9	イノシシ属	尺骨		右	近位端	1						15～16 世紀
246	5	門前C	17r 北		スズキ属	主鰓蓋骨		右	破片	1	+					古墳後期
247	5	門前C	17r 北	10.8.16	大型獣類	不明			破片	1						弥生中期～古墳後期
248	5	門前C	17r 北	10.9.6	ウシ	中手骨	左		遠位端欠	1	+					弥生中期～古墳後期
249	5	門前C	17r 北	10.8.20	ボラ	主鰓蓋骨	左		破片	2						中世
249	5	門前C	17r 北	10.8.20	ボラ	主鰓蓋骨		右	近位骨片	1						中世
250	5	門前C	上島・以前柳	10.9.22	ボラ	主鰓蓋骨	左		破片	1						12～13 世紀
251	5	門前C	上島・以前柳	10.8.22	ウシ	中手骨			近位骨片	1						12～13 世紀
252	5	門前C	浜黄河白松上谷遺	10.8.19	魚類	主鰓蓋骨?			破片	1						古墳後期
253	5	門前C	上島・以前柳	10.9.17	ボラ	主鰓蓋骨		右	破片	1						12～13 世紀
254	5	門前C	上島・以前柳	10.9.17	イノシシ属	鉤骨	左		破片	1						12～13 世紀
255	5	門前C	上島・以前柳	10.8.16	獣類	不明			破片	1						12～13 世紀
256	5	門前C	上島・以前柳	10.8.16	ウシ	切	左		近位骨片	1						12～13 世紀
257	5	門前C	上島・以前柳	10.8.16	ボラ	主鰓蓋骨		右	破片	1						12～13 世紀
257	5	門前C	上島・以前柳	10.8.16	魚類	不明			破片	5						12～13 世紀
257	5	門前C	上島・以前柳	10.8.16	ウマ	P4		右	近位骨片	1					M3L M1	12～13 世紀
257	5	門前C	上島・以前柳	10.8.16	イノシシ属	胡甲骨	左		破片	1				○		12～13 世紀
257	5	門前C	上島・以前柳	10.8.16	大型獣類	肋骨			破片	1			○			12～13 世紀
257	5	門前C	上島・以前柳	10.8.16	獣類	不明			破片	3	+					12～13 世紀
258	5	門前C	上島・以前柳	10.8.16	ボラ	主鰓蓋骨	左		破片	1						12～13 世紀
259	5	門前C	上島・以前柳	10.8.16	スズキ属	主鰓蓋骨		右	破片	1						12～13 世紀
259	5	門前C	上島・以前柳	10.8.17	獣類	四肢骨			破片	1			○	○		12～13 世紀
260	5	門前C	上島・以前柳	10.8.17	ボラ	主鰓蓋骨		右	破片	1						12～13 世紀
261	5	門前C	上島・以前柳	10.8.	ボラ	主鰓蓋骨	左		近位骨片	1						12～13 世紀
261	5	門前C	上島・以前柳	10.8.	不明	不明			破片	2	+					12～13 世紀
262	5	門前C	上島・以前柳	10.9.24	イヌ	肩骨	左		近位端欠	1						12～13 世紀
263	5	門前C	上島・以前柳	10.9.9	ボラ	主鰓蓋骨	左		破片	1						12～13 世紀
264	5	門前C	北側ドリーク内	10.7.26	大型獣類	不明			破片	2	+					近現代
265	5	門前C	北側ドリーク内	10.7.26	ボラ	主鰓蓋骨		右	破片	2						近現代
265	5	門前C	北側ドリーク内	10.7.26	ボラ?	主鰓蓋骨?			破片	2	+					近現代
265	5	門前C	北側ドリーク内	10.7.26	大型獣類	不明			破片	2	+					近現代
266	5	門前C	上島・以前柳	10.8.6	ボラ	主鰓蓋骨		右	破片	1						12～13 世紀
267	5	門前C	上島・以前柳	10.8.6	ボラ	主鰓蓋骨		右	破片	1						12～13 世紀
267	5	門前C	上島・以前柳	10.8.7	ウマ	上腕骨 M	左		破片	1					未出歯 M	12～13 世紀
268	5	門前C	上島・以前柳	10.8.10	ウマ	M2	左		近位骨片	1					M3L 72	12～13 世紀

269	5	門前C	上器・豆焼層	10.6.6	大型甕類	不明		破片	1					12～13世紀
270	5	門前C	上器・豆焼層	10.6.26	火不明鍋	土師器帝	左	破片	1					12～13世紀
271	5	門前C	表採	10.9.15	ボウ	土師器帝	左	破片	1					不明
271	5	門前C	表採	10.9.15	ボウ	土師器帝		破片	2					不明
271	5	門前C	表採	10.9.16	魚類	不明		破片	6					不明
271	5	門前C	表採	10.9.17	貝類	不明		破片	3					不明
271	5	門前C	表採	10.9.18	土器			破片	1					不明
272	5	門前C	上器・豆焼層		ウミガメ科	助骨板		破片	1					不明
272	5	門前C	上器・豆焼層		不明	不明		破片	1					不明
273	5	門前C	上器鍋	10.6.26	イノシシ属	犬歯帝	左	破片	1					15～16世紀
273	5	門前C	上器鍋	10.6.27	大型鍋類	不明		破片	1					15～16世紀
274	5	門前C	カクラン	10.6.29	ウマ	尺骨	右	近位端片	1					15～16世紀
274	5	門前C	カクラン	10.6.29	ウマ?	橈骨?	左	遠位端?	1				骨端未化骨外れ	15～16世紀
274	5	門前C	カクラン	10.6.29	大型鍋類	不明		破片	2	+				15～16世紀
275	5	門前D	上器・豆焼層	10.9.6	ボウ	土師器帝	左	破片	1					12～13世紀
275	5	門前D	上器・豆焼層	10.9.6	大型鍋類	不明		破片	1					12～13世紀
276	5	門前D	上器・豆焼層	10.6.3	ボウ	土師器帝	左	破片	1	+				12～13世紀
276	5	門前D	上器・豆焼層	10.6.3	大型鍋類	胴甲帝		破片	1					12～13世紀
276	5	門前D	上器・豆焼層	10.6.3	大型鍋類	不明		破片	1					12～13世紀
277	5	地蔵1	1号溝東区	9.12.15	ウマ/ウシ	橈骨	右	破片	1					12～13世紀
278	5	地蔵1	1号溝中央	10.1.7	イヌ科	下顎骨	右	M1-2 歯	1					12～13世紀
279	5	地蔵1	2号溝	10.3.5	イノシシ属?	上腕骨	左	遠位端片	1					15～16世紀
280	5	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.25	ウマ/ウシ	四肢骨		破片	1					12～13世紀
281	5	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.20	ウマ	橈骨帝	右	破片	1					12～13世紀
281	5	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.20	ウマ	未胴帝		山辺定序	1					12～13世紀
281	5	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.20	ウマ/ウシ	不明		破片	1					12～13世紀
282	5	地蔵1	不明		大型鍋類	不明		破片	1					不明
283	5	地蔵1	不明		ニホンジカ	大腿骨	左	遠位端	1		○			不明
283	5	地蔵1	不明		ニホンジカ?	橈骨帝		破片	1					不明
283	5	地蔵1	不明		ニホンジカ?	橈骨		破片	1		○		橈体骨未化骨外れ	不明
283	5	地蔵1	不明		鍋類	四肢骨		破片	8	+				不明
284	5	地蔵1	不明		ニホンジカ	下顎骨		破片	3					12～13世紀
284	5	地蔵1	不明		ニホンジカ	橈骨遠		破片	1					12～13世紀
285	6	地蔵1	1号溝中層	9.11.20	ウマ	m3		遠位端	1					12～13世紀
285	6	地蔵1	1号溝中層	9.11.20	ウマ	中節骨		山辺定序	1					12～13世紀
286	6	地蔵1	1号溝中層	9.11.20	鍋類	不明		破片	3					12～13世紀
286	6	地蔵1	2号溝上部	9.11.16	ウマ	M3	左	破片	1				h20 ±	15～16世紀
286	6	地蔵1	2号溝上部	9.11.16	鍋類	不明		破片	1					15～16世紀
287	6	地蔵1	小溝5号	9.11.20	ウマ	下顎歯座	右	破片	1					古墳後期
288	6	地蔵1	35号土坑	9.12.16	鍋類	助骨		破片	1					弥生終末
289	6	地蔵1	35号土坑	10.1.26	ニホンジカ	大腿骨	左	遠位端	1				骨端未化骨外れ	弥生終末
289	6	地蔵1	35号土坑	10.1.26	鍋類	助骨		破片	1					弥生終末
290	6	地蔵1	35号土坑	9.12.4	鍋類	胸椎		破片	1				橈体骨未化骨	弥生終末
291	6	地蔵1	62号土坑	10.1.26	イノシシ属	後頭骨	右	後頭顆	1					古墳初頭
292	6	地蔵1	23号土坑		イノシシ属	胴甲帝	右	破片	1		○			12～13世紀
292	6	地蔵1	23号土坑		イノシシ属	第1中手骨	右	山辺定序	1		○			12～13世紀
292	6	地蔵1	23号土坑		鍋類	助骨		破片	1					12～13世紀
293	6	地蔵1	5-23	9.12.3	ニホンジカ	胴甲帝	右	破片	1					弥生後期
294	6	地蔵1	1号土坑	10.3.16	ボウ	上腕骨帝	左	破片	1					古墳初頭
295	6	地蔵1	2号土坑	10.3.5	ボウ	上腕骨帝	左	破片	1					古墳初頭
295	6	地蔵1	3号土坑	10.3.5	ボウ	上腕骨帝	右	破片	1					古墳初頭
295	6	地蔵1	4号土坑	10.3.5	ボウ	上腕骨帝?		破片	6	+				古墳初頭
296	6	地蔵1	60号土坑	9.12.4	イノシシ属	上腕骨	右	M3-3 歯	1				M3-3 破立	弥生後期
297	6	地蔵1	ピット	9.12.4	イノシシ属	M3 ?	右	破片	1				未出萌芽	弥生中期
298	6	地蔵1	70号土坑	9.12.8	イノシシ属	胴甲帝	左	破片	1					弥生中期
299	6	地蔵1	61号土坑		犬不明鍋	上腕骨帝	左	破片	1					弥生中期
300	6	地蔵1	ピット	9.12.4	大型鍋類	橈骨		破片	1					不明
301	6	地蔵1	小柱穴	9.12.4	イノシシ属	上腕骨	右	P3-M2 歯	1	+			M2 破立, P3-M1 破損	不明
302	6	地蔵1	4号側辺焼壊物群	10.2.10	ニホンジカ	角		破片	1		○			弥生終末
302	6	地蔵1	4号側辺焼壊物群	10.2.10	不明	不明		破片	1					弥生終末
303	6	地蔵1	3号側辺焼壊物群	10.2.17	ウマ	m3		遠位端片	1					弥生終末
303	6	地蔵1	3号側辺焼壊物群	10.2.17	鍋類	四肢骨		破片	2	+				弥生終末
304	6	地蔵1	1号側辺焼壊物群	10.2.15	鍋類	助骨		破片	3				同一骨	弥生後期
305	6	地蔵1	小柱穴	9.12.18	魚類	四肢骨		破片	1		○	○	骨端切断	
306	6	地蔵1	2号溝	10.3.12	イノシシ属	橈骨帝	左	鋼鏃	1			○	鋼鏃骨髄空洞起切断, 石矢根	15～16世紀
307	6	地蔵1	2号溝上層	10.1.8	ニホンジカ	膝骨	左	遠位端	1				未化骨骨端	15～16世紀
308	6	地蔵1	4号土坑	10.1.6	イノシシ属	胴甲帝	左	破片	1		○			弥生後期
309	6	地蔵1	5号土坑	10.1.6	植物遺体			破片	1					弥生後期
309	6	地蔵1	71号土坑	10.3.16	ウマ	I2	左	山辺定序	1					12～13世紀
309	6	地蔵1	71号土坑	10.3.16	ウマ	M3	左	山辺定序	1				h16, 78	12～13世紀
309	6	地蔵1	71号土坑	10.3.16	ウマ	第3足根骨	左	山辺定序	1					12～13世紀
309	6	地蔵1	71号土坑	10.3.16	ウマ	未胴帝		破片	1					12～13世紀
309	6	地蔵1	71号土坑	10.3.16	ウシ	M3		破片	1					12～13世紀
309	6	地蔵1	71号土坑	10.3.16	鍋類	不明		破片	3	+				12～13世紀
310	6	地蔵1	小溝9-430	10.3.5	ボウ	上腕骨帝	左	山辺定序	1					弥生後期
311	6	地蔵1	上器集中部	11.1.18	ニホンジカ	橈骨	右	山辺定序	1					弥生後期
311	6	地蔵1	上器集中部	11.1.18	ニホンジカ	尺骨	右	破片	1					弥生後期
312	6	地蔵1	系区焼土包含層	9.11.12	イノシシ属	上腕骨	左	遠位端	1			○	骨端未化骨外れ	12～13世紀
313	6	地蔵1	系区焼土包含層	9.11.12	イノシシ属	M3	右	山辺定序	1				歯槽未形成	12～13世紀
313	6	地蔵1	系区焼土包含層	9.11.12	ニホンジカ	P4	左	破片	1					12～13世紀
314	6	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.12	大型鍋類	助骨		破片	1					12～13世紀
315	6	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.26	ウシ	膝骨	左	距腿関	1					12～13世紀
315	6	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.26	ウシ	膝骨	右	遠位端欠	1				近位端骨端未化骨外れ	12～13世紀
315	6	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.26	ウシ	中足骨	右	近位端欠	1					12～13世紀
315	6	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.26	ウシ	基節骨		遠位端欠	1					12～13世紀
315	6	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.26	ウシ?	大腿骨		骨幹片	1					12～13世紀
315	6	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.26	ウシ?	大腿骨		近位端	1					12～13世紀
315	6	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.26	ウシ?	大腿骨		破片	2					12～13世紀
315	6	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.26	鍋類	四肢骨		破片	62	+				12～13世紀
316	6	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.26	土器			破片	1					12～13世紀
316	6	地蔵1	系区焼土包含層	10.1.26	粘土塊			破片	1					12～13世紀

316	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.1.26	ウマ	基部骨		山辺定彦	1						12～13 世紀
316	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.1.26	ウマ／クジ	橈骨		鍋片	1						12～13 世紀
317	6	北港Ⅱ	1区西南部	16.1.25	ウマ	第	右	山辺定彦	1					b43, 73	12～13 世紀
317	6	北港Ⅱ	1区西南部	16.1.25	ウマ	前骨	右	鍋片	1						12～13 世紀
317	6	北港Ⅱ	1区西南部	16.1.25	ウシ	尺	左	鍋片	1						12～13 世紀
317	6	北港Ⅱ	1区西南部	16.1.25	ウシ	尺	左	鍋片	1						12～13 世紀
317	6	北港Ⅱ	1区西南部	16.1.25	ウシ／クジ	不明		鍋片	6						12～13 世紀
317	6	北港Ⅱ	1区西南部	16.1.25	鹿類	肋骨		鍋片	1						12～13 世紀
317	6	北港Ⅱ	1区西南部	16.1.25	鹿類	不明		鍋片	6	*					12～13 世紀
318	6	北港Ⅱ	1区東南区	16.1.26	ウマ	中手骨	左	浪江海	1						12～13 世紀
318	6	北港Ⅱ	1区東南区	16.1.26	大型鹿類	大腿骨		骨端	1					未出骨骨端	12～13 世紀
319	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.1.18	ニホンジカ	下腕骨	左	第-2 部	1					b1, 2 破点	12～13 世紀
320	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.1.19	ウマ	尺	左	鍋片	1						12～13 世紀
320	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.1.19	ウマ	P3	右	山辺定彦	1					b26, 97	12～13 世紀
320	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.1.19	鹿類	不明		鍋片	1						12～13 世紀
321	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.1.20	イノシシ属	下腕骨	左	C 対 部	1					b1-2 破点	12～13 世紀
321	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.1.20	ウマ	尺	左	鍋片	1					b26, 93	12～13 世紀
321	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.1.20	鹿類	不明		鍋片	4	*					12～13 世紀
322	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.1.19	ウマ	P3	左	山辺定彦	1					b66, 99	12～13 世紀
322	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.1.19	ウマ	P4	右	鍋片	1					b63, 5	12～13 世紀
322	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.1.19	ウマ／クジ	不明		鍋片	2						12～13 世紀
323	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.2.10	ウシ	中足骨		浪江海片	1	*					12～13 世紀
323	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.2.16	ウマ	第 3 中手骨	右	山辺定彦	1						12～13 世紀
325	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.11.30	イノシシ属	切歯骨	左	鍋片	1		○				12～13 世紀
326	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.3.5	ニホンジカ	中手骨	右	浪江海欠	1				○	焼帽	12～13 世紀
327	6	北港Ⅱ	区色結果上位含層		ノウサギ	上腕骨	左	浪江海	1	*					弥生中期
328	6	北港Ⅱ	系区色上谷含層	16.3.12	エイ・サメ類	椎骨		鍋片	1					加工品？	12～13 世紀
329	6	北港Ⅱ	区色結果上位含層	16.1.29	イノシシ属	尺	右	鍋片	1						弥生中期
330	6	門前C	1 号土坑下層	16.9.19	兎類	橈		鍋片	2						15～16 世紀
330	6	門前C	1 号土坑下層	16.9.19	ウサギ科	足根骨中足骨	右	山辺定彦	1					b3 185, 38	15～16 世紀
330	6	門前C	1 号土坑下層	16.9.19	ウシ	上腕骨	右	両端欠	1						15～16 世紀
330	6	門前C	1 号土坑下層	16.9.19	ウシ	中足骨	左	山辺定彦	1						15～16 世紀
330	6	門前C	1 号土坑下層	16.9.19	ネコ	肩		山辺定彦	1						15～16 世紀
330	6	門前C	1 号土坑下層	16.9.19	ネコ	肩		山辺定彦	1						15～16 世紀
330	6	門前C	1 号土坑下層	16.9.19	植物遺体			鍋片	2						15～16 世紀
331	6	門前C	上段・以鹿柵	16.8.25	ボラ	上鰓蓋骨	右	鍋片	1						15～16 世紀
331	6	門前C	上段・以鹿柵	16.8.25	イヌ	下腕骨	左	鍋片	1					P2-381-2 破点 焼帽	15～16 世紀
331	6	門前C	北側テラース	16.8.14	イノシシ属	第 1 指骨		鍋鍋	2		○				近現代
333	6	門前D	上段・以鹿柵	16.8.25	鹿類	上腕骨	右	鍋片	1						15～16 世紀
334	9	北港Ⅱ	41 号土坑木製柵 F	11.6.19	ノウサギ	下腕骨	右	鍋鍋	1						古墳初頭
334	9	北港Ⅱ	41 号土坑木製柵 F	11.6.19	ノウサギ	橈骨		鍋鍋	2						古墳初頭
334	9	北港Ⅱ	41 号土坑木製柵 F	11.6.19	ノウサギ	上腕骨	右	山辺定彦	1						古墳初頭
334	9	北港Ⅱ	41 号土坑木製柵 F	11.6.19	鹿類	不明		鍋片	1						古墳初頭
335	9	北港Ⅱ	40 号土坑	11.6.1	鹿類	切歯骨	右	鍋片	1						弥生中期
336	9	北港Ⅱ	36 号土坑	11.6.3	ニホンジカ	角		鍋片	1		○			加工品	古墳初頭
337	9	北港Ⅱ	23 号土坑	11.6.15	ニホンジカ	下腕骨	右	鍋片	1	*				ab3-3, b3 破点, b3 第山辺彦 -6	弥生終末
337	9	北港Ⅱ	23 号土坑	11.6.15	ニホンジカ	歯牙		鍋片	3						弥生終末
337	9	北港Ⅱ	23 号土坑	11.6.15	ニホンジカ	橈骨		鍋片	1					獣床角外れ	弥生終末
338	9	北港Ⅱ	ピット	11.6.21	イノシシ属	頭蓋骨	右	鍋片	1						不明
339	9	北港Ⅱ	23 号土坑	11.9.7	鳥類	大腿骨	左	山辺定彦	1					b2.10, 46 b3.11, 87 b4.29, 81	弥生終末
339	9	北港Ⅱ	23 号土坑	11.9.7	イノシシ属	切歯骨	右	山辺鋼切断	1					切歯鋼切断	弥生終末
340	9	北港Ⅱ	91 号土坑	11.9.6	スズメ属	上腕骨	左	山辺定彦	1						弥生終末
340	9	北港Ⅱ	91 号土坑	11.9.6	イノシシ属	前腕・上腕骨	左	11-P1 部	1						弥生終末
341	9	北港Ⅱ	ピット	11.6.11	鹿類	不明		鍋片	2						弥生後期
342	9	北港Ⅱ	78 号土坑	11.6.25	ネズミ亜科	上腕骨	右	鍋片	1						弥生中期
342	9	北港Ⅱ	78 号土坑	11.6.25	ネズミ亜科	下腕骨	右	鍋鍋	1						弥生中期
342	9	北港Ⅱ	78 号土坑	11.6.25	ネズミ亜科	足橈		山辺定彦	1					骨端未化骨外れ	弥生中期
343	9	北港Ⅱ	33 号土坑	11.10.6	アブネズミ	頭蓋骨		鍋鍋	1	*					弥生終末
343	9	北港Ⅱ	34 号土坑	11.10.6	アブネズミ	下腕骨	左	山辺定彦	1						弥生終末
343	9	北港Ⅱ	35 号土坑	11.10.6	アブネズミ	足橈		山辺定彦	3						弥生終末
343	9	北港Ⅱ	36 号土坑	11.10.6	アブネズミ	橈骨		鍋鍋	16	*				上端状	弥生終末
343	9	北港Ⅱ	37 号土坑	11.10.6	アブネズミ	肋骨		鍋片	20						弥生終末
343	9	北港Ⅱ	38 号土坑	11.10.6	アブネズミ	肋骨		鍋片	3	*				上端状	弥生終末
343	9	北港Ⅱ	39 号土坑	11.10.6	アブネズミ	上腕骨	左	山辺定彦	1						弥生終末
343	9	北港Ⅱ	40 号土坑	11.10.6	アブネズミ	橈骨	左	浪江海欠	1						弥生終末
343	9	北港Ⅱ	41 号土坑	11.10.6	アブネズミ	尺骨	左	山辺定彦	1						弥生終末
343	9	北港Ⅱ	42 号土坑	11.10.6	アブネズミ	橈骨・下腕骨		鍋片	1					上端状	弥生終末
343	9	北港Ⅱ	43 号土坑	11.10.6	アブネズミ	不明		鍋片	9	*					弥生終末
344	9	北港Ⅱ	区色結上位含層	11.10.11	ボラ	上鰓蓋骨	左	山辺定彦	1						弥生中期
344	9	北港Ⅱ	区色結上位含層	11.10.11	ボラ	下鰓蓋骨	左	鍋片	1						弥生中期
345	9	北港Ⅱ	1 号溝	16.3.12	ニホンジカ	角		鍋片	1				○	切断・削痕、加工品	15～16 世紀
346	9	北港Ⅱ	区色結果上位含層	16.3.17	ニホンジカ	角		残部	1				○	断端切断、加工品	弥生中期
347	9	北港Ⅱ	調区色結上位含層		イノシシ属	下腕骨	左	橈骨部～左 M3 部	1					左 1-M3 破点 (P3 除), M3 無出歯中	弥生中期
347	9	北港Ⅱ	調区色結上位含層		イノシシ属	下腕骨	右	関節突起	1						弥生中期
347	9	北港Ⅱ	調区色結上位含層		イノシシ属	下腕骨		鍋片	34						弥生中期
348	10	門前C	1 溝跡	16.8.25	兎類	橈		鍋片	1						15～16 世紀
348	10	門前C	1 溝跡	16.8.25	ヒト	尺骨	右	山辺海	1						15～16 世紀
348	10	門前C	1 溝跡	16.8.25	ウシ	橈骨	右	両端欠	1	*			○	両端未化骨外れ	15～16 世紀
348	10	門前C	1 溝跡	16.8.25	ウシ	前骨	右	山辺定彦	1						15～16 世紀
348	10	門前C	1 溝跡	16.8.25	ウシ	橈骨	右	山辺定彦	1						15～16 世紀
348	10	門前C	1 溝跡	16.8.25	ウシ	中足骨	左	山辺定彦	1					遠位端未化骨	15～16 世紀
349	10	門前D	2 号土坑	16.8.27	ウマ	P4	右	山辺定彦	1	*				b47, 94	15～16 世紀
349	10	門前C	2 号土坑	16.8.27	ウマ	基部骨		山辺海破片	1						15～16 世紀
350	10	門前C	2 号土坑下層	16.8.29	イノシシ属	上腕C	左	鍋片	1					焼帽	15～16 世紀
351	10	門前D	2 号溝（西）	16.9.7	不明			鍋片	3						15～16 世紀
352	10	門前D	2 号溝（西）	16.9.8	ウマ	P4	左	鍋鍋	1					b39 7	15～16 世紀
353	10	門前D	2 号溝（西）	16.9.22	ウマ／ウシ	橈骨	左	鍋片	1						15～16 世紀
354	10	門前D	2 号溝（新）	16.9.6	ウマ	尺	左	山辺定彦	1					b71, 30	15～16 世紀

155	10	円墳D	カネラン	10, 9, 9	イノシシ属	冠甲骨		右	破片	1			○				15～16 世紀
155	10	円墳D	カネラン	10, 9, 9	イノシシ属	第 3/fact.			遊投痕	1			○				15～16 世紀
155	10	円墳D	カネラン	10, 9, 9	ニホンジカ	C+1 足根骨		右	山区完存	1							15～16 世紀
156	10	円墳D	土器・以慕墓	10, 8, 20	ガラ?	尺骨		右	山区破片	1							15～16 世紀
156	10	円墳D	土器・以慕墓	10, 8, 20	中型犬類	四肢骨			破片	1							15～16 世紀
157	10	円墳D	土器・以慕墓	10, 8, 20	大型犬類	四肢骨			破片	1					加工品，全長 80, 96, 幅 8, 09		15～16 世紀
158	12	地蔵E	2 号墳		ニホンアシカ	橈骨			破損	1			○				不明
159	12	地蔵E	36 号土坑		スッポン	背甲板			山区完存	1			○		全長 123, 29, 最大幅 112, 43		古墳初頭
360	12	地蔵E	79・84・87 号土坑	11, 5, 27	イノシシ属?	下顎骨?		右?	P2-4 間?	1		○					弥生終末～中世
360	12	地蔵E	79・84・87 号土坑	11, 5, 27	ニホンジカ	角			角尾骨	1	＊	○	○				弥生終末～中世
361	12	地蔵E	18 号土坑墓下層	11, 9, 21	犬	上腕骨骨	左		山区完存	1							弥生終末
362	12	地蔵E	18 号土坑墓下層	11, 9, 2	アカコシ／シロコシ	橈			破片	1	＊	○					弥生終末
363	12	地蔵E	43 号土坑墓上層	11, 8, 4	犬類	大腿骨		右	破片	1					遊投痕側		弥生後期
364	12	地蔵E	35 号土坑	11, 9, 26	イノシシ属	下顎 1		右	破片	1							古墳初頭
365	12	地蔵E	103 号土坑		犬類	不明			破片	1							弥生中期
366	12	地蔵E	ピット	11, 9, 2	犬類	不明			破片	1							弥生中期
367	12	地蔵E	赤区黄色粘土分析墓	11, 10, 19	犬類	大腿骨			骨端	1					赤色骨骨端		弥生中期
368	12	地蔵E	不明		犬類	不明			破片	4							不明

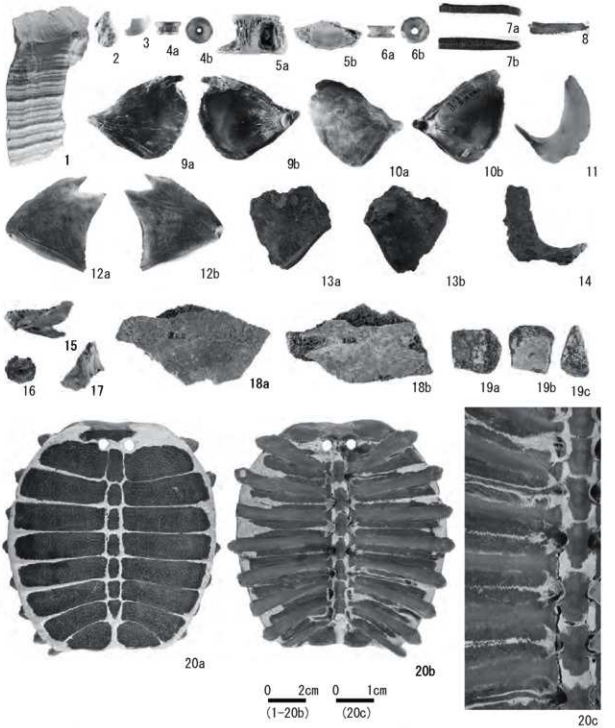
(E) 1:円墳 C:大墳 P:銀行墳 R:墓行墳 da:礼拝(数字の上付・下付は上腕・下顎を示す) act:中手骨/中足骨 C+1足根骨:中心+第4足根骨 GL:全長 fhp:近位端幅 fhd:遊投端幅 h:行動高

表 3.　時代・時期別最少個体数

種類 ＼ 時代・時期	弥生			古墳			弥生中期～古墳初頭	弥生中期～古墳後期	弥生～中世	古代	中世	中近世	近世	近現代	現代	不明	合計
	中期	後期	終末	初頭	後期	終末											
アカコシ／シロコシ			1														1
イタボガキ科?									1								1
二枚貝類									1								1
貝類									1		1						2
トビエイ科					1												1
エイ・サメ類		1	1								1						3
ナマズ			1														1
ボラ・ボラ?	2	2	1	2	3	1	3		2		11			1		2	30
スズキ属	1		1	1	1		1		1		2		1				9
クロダイ属			1														1
ウミガメ科																1	1
ウミガメ科の一種?											1						1
スッポン				1													1
ニワトリ・ニワトリ?		1	1								1					1	4
キジ科			1														1
ツル科			1														1
サギ科											1						1
ロウノトリ目?											1						1
ハクチョウ類					1												1
鳥類	1	1	1		1					1	1						6
ヒト										1	1						2
ノウサギ	1			1			1										3
ドブネズミ			1														1
ネズミ亜科	1																1
イヌ・イヌ?・イヌ科	1		1						1		2						5
ニホンアシカ																1	1
ウマ	1				1				2		3					1	8
イノシシ属・イノシシ属?	5	2	2	1	1	1	1		1		4	1	1	1	1	2	24
ニホンジカ・ニホンジカ?	1	1	1				1		1		2		1			1	9
ウシ								1	1		2						4
ウマ／ウシ	1	1							1		1						4
合計	15	9	15	6	9	2	7	1	13	2	35	1	3	2	1	9	130

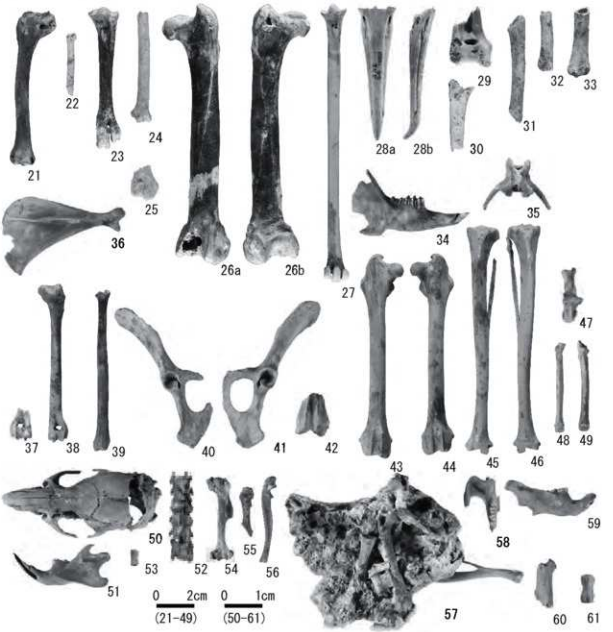
注 1) ニホンジカの角は最少個体数を求める中には含めていない。
注 2) 中世には，12～13 世紀，15～16 世紀を含む

図版１　出土骨(1)



1. アカニシ/シロニシ殻(池淵Ⅱ:No.362)
2. イタボガキ科?殻(門前C:No.71)
3. 二枚貝類殻(門前C:No.71)
4. エイ・サメ類椎骨(池淵Ⅱ:No.164)
5. エイ・サメ類椎骨(池淵Ⅰ:No.211)
6. エイ・サメ類椎骨(池淵Ⅰ:No.328)
7. トビエイ科歯板(池淵Ⅱ:No.123)
8. ナマズ胸鰭刺(池淵Ⅰ:No.6)
9. ボラ左主鰓蓋骨(門前C:No.261)
10. ボラ右主鰓蓋骨(門前C:No.249)
11. ボラ左下鰓蓋骨(池淵Ⅱ:No.344)
12. スズキ属左主鰓蓋骨(池淵Ⅱ:No.340)
13. スズキ属右主鰓蓋骨(門前C:No.258)
14. スズキ属?右下鰓蓋骨(池淵Ⅱ:No.123)
15. クロダイ属左歯骨(池淵Ⅱ:No.124)
16. 魚類腹椎(門前C:No.63)
17. 魚類?前鰓蓋骨?(池淵Ⅱ:No.152)
18. ウミガメ科助骨板(門前C:No.272)
19. 種類・部位不明(ウミガメ類腹甲板?)(池淵Ⅰ:No.4)
20. スッポン背甲板(池淵Ⅱ:No.359)

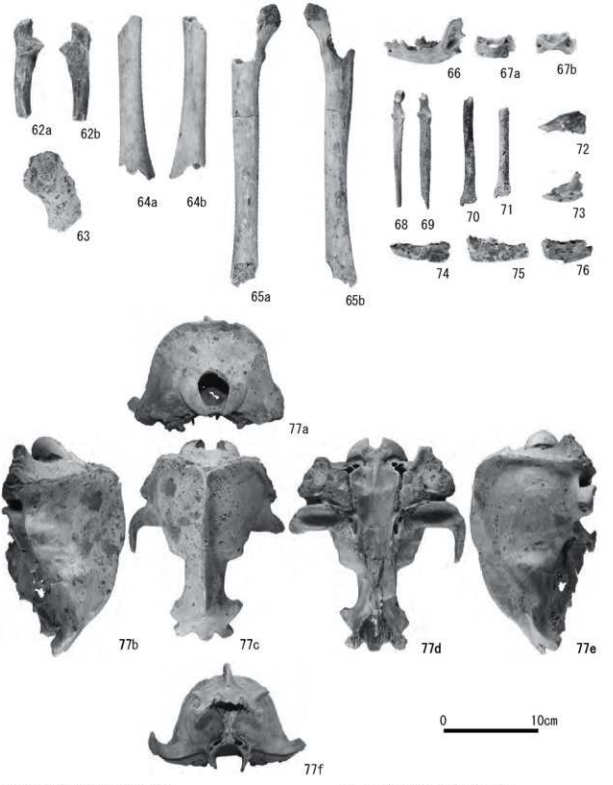
図版２　出土骨(2)



21. ニワトリ左上腕骨(池淵Ⅱ:No. 162)
23. ニワトリ左足根骨中足骨(池淵Ⅱ:No. 206)
25. キジ科右上腕骨(池淵Ⅰ:No. 6)
27. サギ科右足根骨中足骨(池淵Ⅲ:No. 330)
29. ハクチョウ類右鰓足根骨(池淵Ⅱ:No. 90)
31. 鳥類尺骨(池淵Ⅱ:No. 102)
33. 鳥類右大腿骨(池淵Ⅱ:No. 363)
35. ノウサギ腰椎(池淵Ⅱ:No. 334)
37. ノウサギ左上腕骨(池淵Ⅰ:No. 327)
39. ノウサギ左橈骨(池淵Ⅱ:No. 107)
41. ノウサギ左寛骨(池淵Ⅱ:No. 107)
43. ノウサギ右大腿骨(池淵Ⅱ:No. 107)
45. ノウサギ右脛腓骨(池淵Ⅱ:No. 107)
47. ノウサギ右踵骨(池淵Ⅱ:No. 107)
49. ノウサギ右第5中足骨(池淵Ⅱ:No. 107)
51. ドブネズミ左下顎骨(池淵Ⅱ:No. 343)
53. ドブネズミ尾椎(池淵Ⅱ:No. 343)
55. ドブネズミ左橈骨(池淵Ⅱ:No. 343)
57. ドブネズミ椎骨・下肢骨(池淵Ⅱ:No. 343)
59. ネズミ亜科右下顎骨(池淵Ⅱ:No. 342)
61. ネズミ亜科尾椎(池淵Ⅱ:No. 342)

22. ニワトリ右橈骨(池淵Ⅱ:No. 80)
24. ニワトリ?右尺骨(門前D:No. 356)
26. ツル科左大腿骨(池淵Ⅱ:No. 339)
28. コウノトリ目?切歯骨(池淵Ⅲ:No. 53)
30. 鳥類左上腕骨(池淵Ⅱ:No. 80)
32. 鳥類右手根骨中手骨(池淵Ⅱ:No. 84)
34. ノウサギ右下顎骨(池淵Ⅱ:No. 334)
36. ノウサギ右肩甲骨(池淵Ⅱ:No. 107)
38. ノウサギ右上腕骨(池淵Ⅱ:No. 334)
40. ノウサギ右寛骨(池淵Ⅱ:No. 107)
42. ノウサギ左大腿骨(池淵Ⅱ:No. 94)
44. ノウサギ左大腿骨(池淵Ⅱ:No. 107)
46. ノウサギ左脛腓骨(池淵Ⅱ:No. 107)
48. ノウサギ左第4中足骨(池淵Ⅱ:No. 107)
50. ドブネズミ頭蓋骨(池淵Ⅱ:No. 343)
52. ドブネズミ椎骨(池淵Ⅱ:No. 343)
54. ドブネズミ左上腕骨(池淵Ⅱ:No. 343)
56. ドブネズミ左尺骨(池淵Ⅱ:No. 343)
58. ネズミ亜科右上顎骨(池淵Ⅱ:No. 342)
60. ネズミ亜科右?上腕骨(池淵Ⅱ:No. 342)

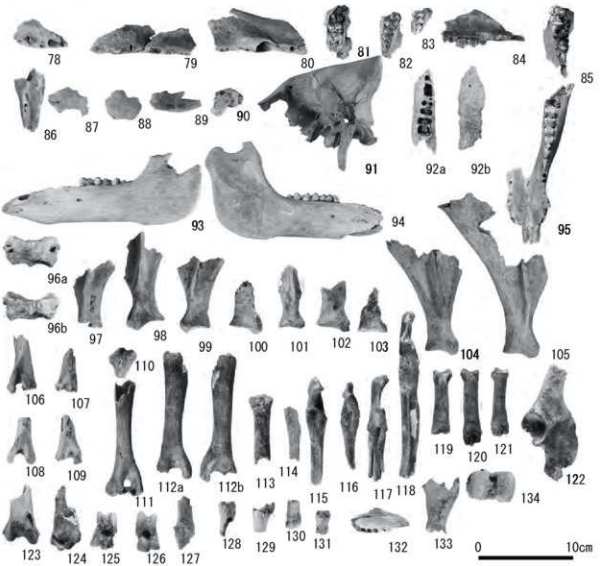
図版３　出土骨(3)



62. ヒト右尺骨(門前Ｄ:No.348)
64. ヒト左大腿骨(池淵Ⅱ:No.136)
66. イヌ左下顎骨(門前Ｃ:No.331)
68. イヌ右尺骨(門前Ｃ:No.57)
70. イヌ左脛骨(池淵Ⅱ:No.105)
72. イヌ?左頭蓋骨(池淵Ⅱ:No.196)
74. イヌ科左下顎骨(池淵Ⅱ:No.199)
76. イヌ科右下顎骨(池淵Ⅰ:No.278)

63. ヒト左寛骨(池淵Ⅱ:No.136)
65. ヒト右大腿骨(池淵Ⅱ:No.135)
67. イヌ第1頸椎(門前Ｃ:No.70)
69. イヌ右尺骨(池淵Ⅱ:No.130)
71. イヌ左脛骨(門前Ｃ:No.262)
73. イヌ科左下顎骨(池淵Ⅰ:No.38)
75. イヌ科右下顎骨(池淵Ⅱ:No.199)
77. ニホンアシカ頭蓋骨(池淵Ⅰ:No.358)

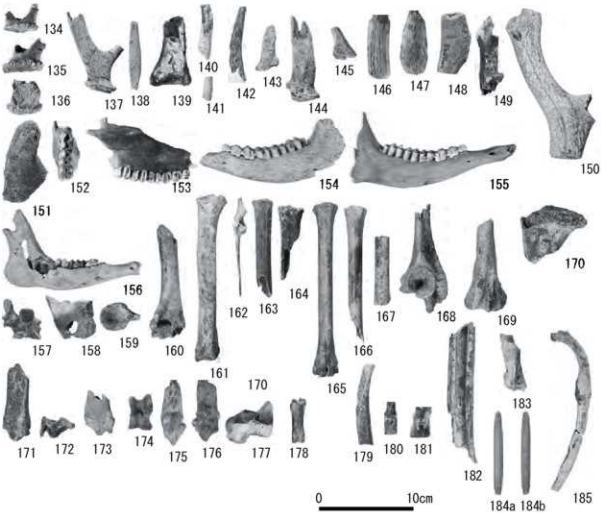
図版４　出土骨(4)



78.イノシシ属右前顎骨(池源Ⅱ:No.127)
80.イノシシ属右前顎-上顎骨(池源Ⅱ:No.110)
82.イノシシ属左上顎骨(池源Ⅱ:No.127)
84.イノシシ属右上顎骨(池源Ⅱ:No.117)
86.イノシシ属右前頭骨(池源Ⅱ:No.338)
88.イノシシ属右頭頂骨(池源Ⅱ:No.168)
90.イノシシ属右後頭骨(池源Ⅰ:No.291)
92.イノシシ属右下顎骨(池源Ⅰ:No.217)
94.イノシシ属左右下顎骨(池源Ⅱ:No.347)
96.イノシシ属左肩甲骨(門前C:No.257)
98.イノシシ属左肩甲骨(池源Ⅰ:No.325)
100.イノシシ属右肩甲骨(池源Ⅱ:No.95)
102.イノシシ属右肩甲骨(池源Ⅰ:No.292)
104.イノシシ属右肩甲骨(池源Ⅱ:No.339)
106.イノシシ属左上腕骨(池源Ⅰ:No.25)
108.イノシシ属右上腕骨(池源Ⅰ:No.13)
110.イノシシ属右上腕骨(池源Ⅰ:No.218)
112.イノシシ属右橈骨(池源Ⅱ:No.104)
114.イノシシ属左尺骨(池源Ⅱ:No.179)
116.イノシシ属右尺骨(池源Ⅱ:No.170)
118.イノシシ属左第3中手骨(池源Ⅱ:No.160)
120.イノシシ属右第3中手骨(池源Ⅰ:No.292)
122.イノシシ属右大腿骨(池源Ⅱ:No.153)
124.イノシシ属左距骨(池源Ⅱ:No.202)
126.イノシシ属右踵骨(池源Ⅱ:No.160)
128.イノシシ属右第4中足骨(池源Ⅱ:No.166)
130.イノシシ属中節骨(池源Ⅱ:No.120)
132.イノシシ属?右肩甲骨(池源Ⅱ:No.169)

79.イノシシ属左前顎骨-上顎骨(池源Ⅱ:No.340)
81.イノシシ属左上顎骨(池源Ⅱ:No.98)
83.イノシシ属右上顎骨(池源Ⅱ:No.114)
85.イノシシ属右上顎骨(池源Ⅰ:No.301)
87.イノシシ属右前頭骨(池源Ⅱ:No.168)
89.イノシシ属左頬骨(門前C:No.254)
91.イノシシ属左頭蓋骨(池源Ⅰ:No.306)
93.イノシシ属左右下顎骨(池源:No.208)
95.イノシシ属第1頸椎(門前C:No.332)
97.イノシシ属左肩甲骨(池源Ⅰ:No.308)
99.イノシシ属左肩甲骨(池源Ⅰ:No.227)
101.イノシシ属右肩甲骨(池源Ⅱ:No.149)
103.イノシシ属右肩甲骨(門前D:No.355)
105.イノシシ属左上腕骨(池源Ⅱ:No.110)
107.イノシシ属左上腕骨(池源Ⅰ:No.312)
109.イノシシ属右上腕骨(池源Ⅰ:No.218)
111.イノシシ属右上腕骨(池源Ⅱ:No.113)
113.イノシシ属左尺骨(池源Ⅱ:No.175)
115.イノシシ属右尺骨(池源Ⅱ:No.104)
117.イノシシ属右尺骨(池源Ⅰ:No.213)
119.イノシシ属右第3中手骨(池源Ⅱ:No.176)
121.イノシシ属左寛骨(池源:No.222)
123.イノシシ属右腓骨(池源Ⅰ:No.30)
125.イノシシ属右距骨(池源Ⅱ:No.115)
127.イノシシ属左第4中足骨(池源:No.2)
129.イノシシ属第3/4中手骨/中足骨(門前D:No.355)
131.イノシシ属?右?下顎骨?(池源Ⅱ:No.360)
133.イノシシ属?右大腿骨(池源Ⅰ:No.223･231)

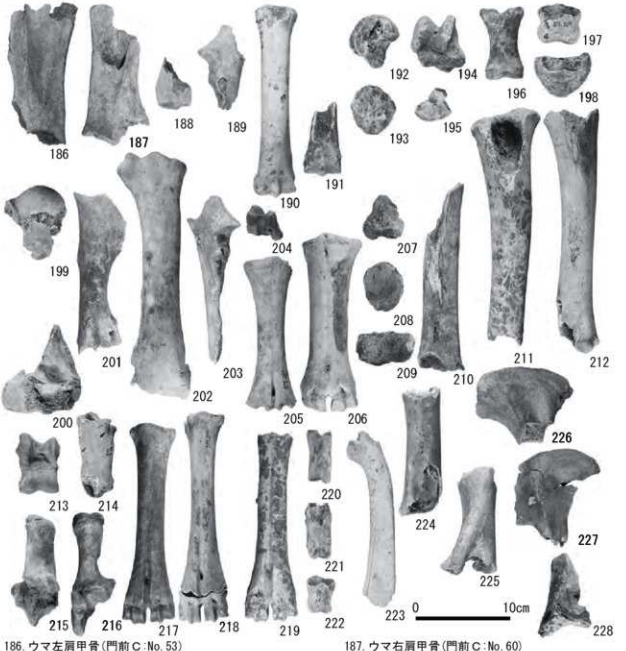
図版５　出土骨(5)



134. ニホンジカ角(池源Ⅱ:No. 83)
136. ニホンジカ角(池源Ⅰ:No. 226)
138. ニホンジカ角(池源Ⅱ:No. 87)
140. ニホンジカ角(池源Ⅱ:No. 103)
142. ニホンジカ角(池源Ⅱ:No. 174)
144. ニホンジカ角(池源Ⅰ:No. 237)
146. ニホンジカ角(池源Ⅱ:No. 336)
148. ニホンジカ角(池源Ⅰ:No. 346)
150. ニホンジカ角(門前C:No. 55)
152. ニホンジカ左上顎骨(門前C:No. 55)
154. ニホンジカ左下顎骨(門前C:No. 55)
156. ニホンジカ右下顎骨(池源Ⅱ:No. 337)
158. ニホンジカ仙骨(池源Ⅱ:No. 121)
160. ニホンジカ左上腕骨(池源Ⅰ:No. 58)
162. ニホンジカ右尺骨(池源Ⅰ:No. 311)
164. ニホンジカ左中手骨(池源Ⅱ:No. 112)
166. ニホンジカ右中手骨(池源Ⅰ:No. 326)
168. ニホンジカ左寛骨(池源Ⅱ:No. 113)
170. ニホンジカ右大腿骨(池源Ⅱ:No. 192)
172. ニホンジカ左脛骨(池源Ⅰ:No. 307)
174. ニホンジカ左距骨(池源Ⅱ:No. 184)
176. ニホンジカ右踵骨(池源Ⅱ:No. 118)
178. ニホンジカ基節骨(池源Ⅱ:No. 92)
180. ニホンジカ?角?(池源Ⅰ:No. 48)
182. ニホンジカ?中手骨/中足骨?(門前C:No. 71)
184. 大型獣類四肢骨(門前D:No. 357)

135. ニホンジカ角(池源Ⅱ:No. 97)
137. ニホンジカ角(池源Ⅱ:No. 145)
139. ニホンジカ角(池源Ⅱ:No. 88)
141. ニホンジカ角(池源Ⅱ:No. 173)
143. ニホンジカ角(池源Ⅰ:No. 226)
145. ニホンジカ角(池源Ⅰ:No. 302)
147. ニホンジカ角(池源Ⅰ:No. 345)
149. ニホンジカ角(池源Ⅱ:No. 360)
151. ニホンジカ左頭蓋骨(池源Ⅰ:No. 15)
153. ニホンジカ右上顎骨(門前C:No. 65)
155. ニホンジカ右下顎骨(門前C:No. 65)
157. ニホンジカ椎骨(池源Ⅱ:No. 337)
159. ニホンジカ右肩甲骨(池源Ⅰ:No. 293)
161. ニホンジカ右橈骨(池源Ⅰ:No. 311)
163. ニホンジカ左中手骨(門前C:No. 74)
165. ニホンジカ右中手骨(門前C:No. 51)
167. ニホンジカ中手骨(池源Ⅰ:No. 232)
169. ニホンジカ左大腿骨(池源Ⅰ:No. 283)
171. ニホンジカ左脛骨(池源Ⅱ:No. 199)
173. ニホンジカ右脛骨(池源Ⅱ:No. 146)
175. ニホンジカ左踵骨(池源Ⅰ:No. 209)
177. ニホンジカ右中心+第4足根骨(門前D:No. 355)
179. ニホンジカ?角?(池源Ⅲ:No. 70)
181. ニホンジカ?椎骨(池源Ⅰ:No. 283)
183. 獣類肩甲骨(池源Ⅰ:No. 23)
185. 大型獣類肋骨(池源Ⅰ:No. 56)

図版6　出土骨(6)



186. ウマ左肩甲骨(門前C:No.53)
188. ウマ左橈骨(池瀬Ⅰ:No.229)
190. ウマ右第3中手骨(池瀬Ⅰ:No.324)
192. ウマ大腿骨(池瀬Ⅰ:No.209)
194. ウマ右距骨(池瀬Ⅰ:No.26)
196. ウマ基節骨(後)(池瀬Ⅰ:No.316)
196. ウマ末節骨(池瀬Ⅰ:No.281)
200. ウシ左上腕骨(池瀬Ⅱ:No.137)
202. ウシ右橈骨(門前C:No.72)
204. ウシ右第4手根骨(門前C:No.53)
206. ウシ右中手骨(門前C:No.72)
208. ウシ右膝蓋骨(池瀬:No.18)
210. ウシ左脛骨(池瀬:No.315)
212. ウシ右脛骨(門前D:No.348)
214. ウシ左踵骨(池瀬Ⅰ:No.29)
216. ウシ右踵骨(門前C:No.51)
218. ウシ左中足骨(門前D:No.348)
220. ウシ基節骨(池瀬Ⅰ:No.19)
222. ウシ中節骨(門前C:No.251)
224. ウシ?大腿骨(池瀬:No.315)
226. ウマ/ウシ左寛骨(門前D:No.353)
228. ウマ/ウシ右寛骨(池瀬:No.277)

187. ウマ右肩甲骨(門前C:No.60)
189. ウマ左尺骨(池瀬Ⅰ:No.216)
191. ウマ左中手骨(池瀬Ⅰ:No.318)
193. ウマ右膝蓋骨(池瀬Ⅰ:No.281)
195. ウマ左第3足根骨(池瀬Ⅰ:No.309)
197. ウマ中節骨(池瀬Ⅰ:No.285)
199. ウシ左上腕骨(門前C:No.75)
201. ウシ右上腕骨(門前C:No.330)
203. ウシ右尺骨(門前C:No.70)
205. ウシ左中手骨(門前C:No.74)
207. ウシ大腿骨?(池瀬Ⅰ:No.18)
209. ウシ右?脛骨(池瀬Ⅰ:No.18)
211. ウシ右脛骨(池瀬Ⅰ:No.315)
213. ウシ右距骨(門前D:No.348)
215. ウシ右踵骨(門前D:No.348)
217. ウシ左中足骨(門前C:No.330)
219. ウシ右中足骨(池瀬Ⅰ:No.315)
221. ウシ基節骨(池瀬Ⅰ:No.31)
223. ウシ?肋骨(門前C:No.72)
225. ウマ/ウシ左上腕骨(門前C:No.71)
227. ウマ/ウシ右寛骨(池瀬Ⅱ:No.161)

Ⅴ　おわりに

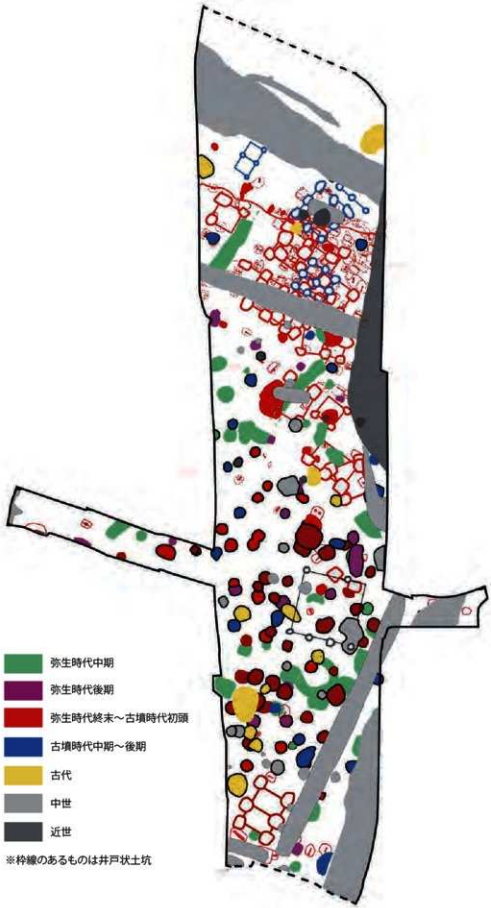
1　西蒲池池淵遺跡における各時代の様相

今回報告した西蒲池池淵遺跡Ⅱ地点の遺構は、掘立柱建物跡５棟、土坑 122 基、溝８条である。遺構の時期は弥生時代中期・弥生時代後期・弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代中期・古墳時代後期・古代・中世前期・中世後期・近世であり、各遺構が複雑に切り合う状態で検出された。これらはⅠ地点出土遺構と一連のものであることから、ここでは西蒲池池淵遺跡Ⅰ・Ⅱ地点の遺構を併せて時期を追い、全体をまとめる。Ⅰ地点については「西蒲池池淵遺跡Ⅰ」で時期区分を行ったが、認識不足や記載ミスによる誤りがあった。ここでⅠ地点の遺構の時期を再掲することで、その修正とさせていただく。またこれらの遺構のほとんどが弥生時代中期の包含層を破壊して掘り込まれることから、各遺構の埋土中には弥生中期の土器が多数混入している。このため時期を確定することが困難な遺構もあり、ここでは出土遺物の一括性や比率的な観点、切り合いから時期を確定できるものについてのみ整理する。

調査区の地形は全体的に西南から北東に向けて緩やかに低くなる。調査区北端部（Ⅰ地点１区）は大きく落ち込み、調査区南端部（Ⅱ地点南南部）は緩やかに落ち込み、古代以前の遺構は認められないことから、古代以前の西蒲池池淵遺跡の南北の範囲は本調査地の範囲で収まると考える。

西蒲池池淵遺跡Ⅰ・Ⅱ地点で検出した遺構は、掘立柱建物跡 23 棟、土坑 197 基、溝 14 条、窪み状遺構５基、土器溜まり、落ち込みである。各遺構の時期については以下の一覧及び第 124 図のとおりである。なお、礎盤式掘立柱建物跡については、後述するように時期決定が困難であるため、想定できる２つの時期に括弧付きで掲載している。

弥生時代中期	Ⅰ地点：土 25・土 31 ～土 33・土 39・土 49・土 50・土 54・土 56・土 58・土 59・土 61・土 62・土 64・土 73、土 75、溝４・溝５、窪み状遺構
	Ⅱ地点：土１～３・土 68・土 70 ～ 82、溝５～７
弥生時代後期	Ⅰ地点：(掘５～掘 18)、土２・土７・土８・土 18・土 52
	Ⅱ地点：(掘１～４)、土４～７・土 93 ～ 104
弥生時代終末～古墳時代初頭	Ⅰ地点：(掘５～掘 18)、土１・土３～土６・土９・土 10・土 14・土 35・土 41・土 43・土 45・土 46・土 55・土 63・・土 66・土 68・土 69・土 74
	Ⅱ地点：(掘１～４)、土８～土 42・土 69・土 105 ～土 111
古墳時代中期・後期	Ⅰ地点：掘１～３、土 13・土 15 ～土 17・土 19・土 20・土 21
	Ⅱ地点：土 43 ～土 52・土 83 ～土 88・土 112
古代	Ⅰ地点：土 22・土 30・土 34・土 40・土 42
	Ⅱ地点：土 53 ～土 60・土 90・土 113
中世前期	Ⅰ地点：土 23・土 24・土 44・土 48・土 60、溝１・溝２(古)・溝６
	Ⅱ地点：掘５、土 61 ～土 67・土 89・土 114 ～土 116・土 118 ～土 122、溝１～溝３(古)
中世後期	Ⅰ地点：土 26・土 27・土 36・土 37・土 38・土 51・土 65、溝２(新)
	Ⅱ地点：溝３(新)・溝４



第 124 図　西蒲池池淵遺跡時期別遺構配置図

近世　　Ⅰ地点：土28・土29・土71、溝3
　　Ⅱ地点：溝8

弥生時代中期

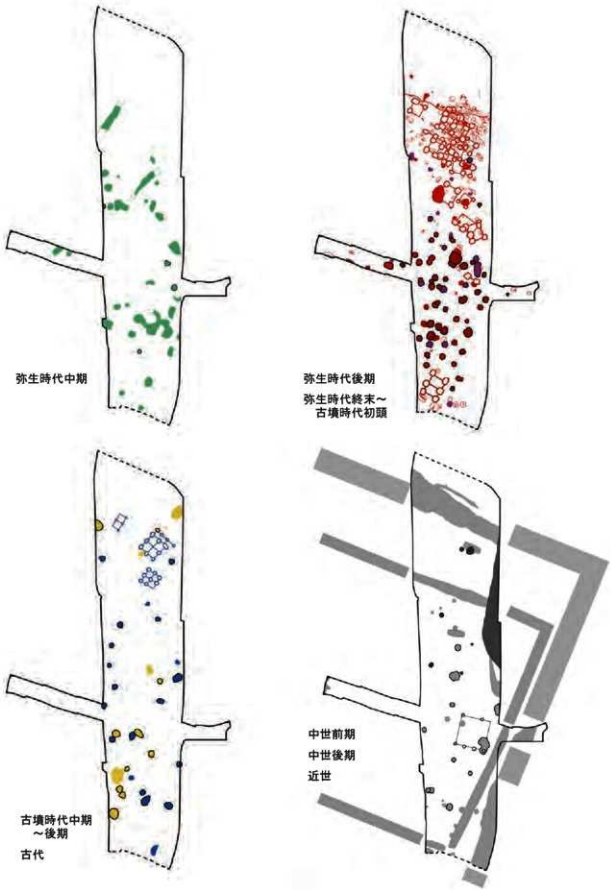
弥生時代中期の遺構としては溝・土坑・窪み状遺構が認められ、厚く堆積する包含層が存在する。土坑は井戸状の深いものと浅いものがあり、深い土坑については弥生中期以外の遺物が出土しなかったことからこの時期としたが、包含層からの混入であることも考えられ、やや不確定である。浅い土坑も同様ではあるが、埋土が淡灰色粘土などの単一層であるものについてはⅠ地点の最下層で検出した弥生中期の遺構と同様であることから、弥生時代中期のものと考える。包含層には多量の遺物が包含され、少量ではあるが中期前葉のものも認められる。この包含層及び基盤土の堆積状況に西から東に向かう層の傾斜が確認でき、遺跡東寄りの低い部分には粘土や遺物が流れ込んで溜まる状況が認められる。本遺跡の西南に遺跡の存在が考えられる高台があり、そこから遺物を含む粘土が数回に及び流入したものであろう。本地域は縄文時代の海進後に陸地が形成され、その後も有明海の干満の差が激しかったと考えられている。今回、遺構面下3mの珪藻分析を行ったが、その結果、「内湾環境が優勢で、外洋～海水干潟～汽水干潟環境を伴う堆積環境」であるとの結果が出ている。また花粉分析ではカシ・シイ・コナラ・クリ・ガマ・ヨシ・イネ・ウリなどの花粉が検出され、1号土坑の灰はイネを燃やしたものであった。これらの結果から、弥生時代中期の本遺跡は内湾または有明海の干満の影響を強く受ける汽水域で居住には適さず、西側の高台に築かれた集落側から何度も流れ込む土砂や粘土が溜まる湿地で、浅い土坑や窪み状遺構とした窪地が点在する状況であったと想定される。陸地寄りにはガマやヨシの群生もあり、高台の集落では稲作が行われ、周囲には照葉樹や陽樹の林があった。また、以前高台から甕棺が発見されているとの話があり、包含層から甕棺の破片が出土していることから、当該時期の墓域も遺跡西部に存在したことが考えられる。

弥生時代後期

弥生時代後期の遺構は多くはないが、調査区中央部を中心に全域の約2/3の範囲に展開する。土坑が中心で、井戸状の深い土坑はこの時期から確実に作られる。土坑中層以下に完形品を含む土器がまとまって入るものがあり、この形態は後の時代に継承される。これと同時に平面が長楕円形を呈し、深さ1mほどの土坑も現れる。これらの土坑の埋土は炭層や灰層、木質層のような軟質粘土が薄い互層を為して水平に近い堆積をしており、火を使う生業に関連する可能性も考えられる。また、横木や木の皮を使用して礎盤とし、建物の荷重による沈下を避ける「礎盤式」柱穴を使用した掘立柱建物跡が出現する。これらの建物の時期については、後述する理由から一部はこの時期に営まれたと考える。建物は調査区北部の標高の最も低い場所を中心に多数建てられ、中央～南のやや高い場所には少なく、土坑の所在場所と棲み分けされている。ただ、遺構の数が少ないことを考えると、この時期はまだ集落の極めて縁辺部であったため、建物もさほど多くは作られなかった可能性が高い。この後に広く展開する集落の始まりと考えるべきであろう。

弥生時代終末～古墳時代初頭

弥生時代終末から遺構数が爆発的に増加し、弥生時代後期に展開を始めた集落が継続して拡大する。遺構は土坑が主体で、小さな土坑も含めて多数掘削される。切り合いが激しいが、新旧土坑の出土遺物に大きな時期差は認められない。また、埋土の状況から使用後に一括で埋め戻された土坑



第 125 図　西蒲池池淵遺跡遺構変遷図

もあり、短期間に掘っては埋めるという繰り返しがあったようである。ここで注目されるのはこれら土坑の中から見つかる完形品を多く含む土器類である。このような土坑については後述するが、前時代より多数見られるようになる。遺跡全体の中央部から南部に集中し、調査区北部の約1/3と南端部、東・西拡張部にはほとんど認められない。その代わりに北部と南部には磯盤式掘立柱建物跡が多数存在する。土坑と建物の分布域は前時代同様に棲み分けされており、前時代よりさらにその傾向が顕著になる。検出した当時の地形や遺構配置から西蒲池池潟遺跡の範囲の南北は本調査地の範囲内で収まることは前述したが、この中で北側の低い部分に何度も建て替えられる建物が密集し、中央の高い部分に井戸状を含めた土坑が繰り返し掘削しては埋められた地区があり、さらに南に少数の建て替えのない建物が建てられるという土地利用がなされる。また、花粉分析やプラントオパールの結果でイネやウリの存在が確認されており、周辺では稲作やウリの栽培が行われていたと考えられる。

古墳時代中期～後期

古墳時代中期には遺構数が激減し、井戸状土坑が僅かに認められる程度である。ただしこれら土坑の内部にも土器が少量ながらまとまって出土する状況は継続する。

古墳時代後期には土坑を主として若干遺構が増加し、調査区北側を黄色土によって整地して掘立柱建物が建設される。黄色土は分層不可能なさまざまな土塊が混じって堅く締まる一括土層で、水分がないことからも湿地を意図的に埋めた整地土と考える。この包含層には弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が多量に包含されるが、須恵器も僅かに混入する。このことから周囲にある前時代の土器を多量に包含する遺構を破壊して客土したものと考え、整地をこの時期とした。建物は2間×2間の総柱建物が2棟で、軸はいずれも東に振れてほぼ同方向となり、柱穴の形状や規模に差異はあるが、同時存在した可能性が高い。建物は形状から倉庫と判断でき、軟質粘土地盤の低地を整地してまで建設するほど必要性のある施設と思われる。これらの建物は弥生時代後期～古墳時代初頭の北側の掘立柱建物群とほぼ同じ位置に建てられ、主軸の方位も近似している。当時の海岸線の位置や集落の範囲などの地勢的な規制や、交通や交易の利便性に関連することが考えられる。また当時の地形は湾が入り組んだ状態であったと想定できることから船による交易や漁労関係なども考えられる。しかし遺構や遺物が少なく、居住施設や居住空間は不明であるため想定の範囲を出ない。

古代

古代は若干土坑が点在するのみである。遺構の分布範囲は前時代とほぼ同じであるが遺構数は減少し、井戸状遺構の平面形状が拡大して直径2ｍ前後のものが現れる。形状からは通常の「井戸」と考えられるが、埋土は前時代までの井戸状土坑と大きくは変わらず、上層に茶灰色土、木質や植物層があるものもあり、下層は軟質の黒色粘質土というものが多い。また、90号土坑のように大型で浅い土坑も作られる。これらの土坑からは前時代のようにまとまった遺物の出土はなく、完形品は坏など小型のものが数点出土するのみである。集落自体は継続するが規模は縮小し、前時代と同様の井戸状土坑は作られる一方、異なった性格の土坑も作られる。

中世前期・後期・近世

中世前期から遺跡の様相は大幅に変化し、区画溝（Ⅰ－1・2（古）号溝、Ⅱ－1・2・3（古）号溝）が掘削される。調査区内では北・東・西にコの字になる溝の一部と、南東の角を確認した。南辺・北辺間の距離は心々で約150ｍを測り、各溝の交わる角度はほぼ直角で、主軸の方位は東に振

れ、弥生時代後期～古墳時代後期の掘立柱建物跡の方位と近似する。溝の幅は 2m 前後で深さは 40～70 ㎝、南東の角は東西溝・南北溝がそれぞれ緩やかに立ち上がって途切れ、陰橋状を呈することから出入り口と考えられる。また、この区画溝の外側にある 2 本の大溝（Ⅰ-2 号溝・Ⅱ-3 号溝）も直角に近い形で交わる配置になり、これらを別の区画溝の一部と考えると、区画をさらに囲む南北 200m 以上の区画溝になる。内側の区画溝の内部には建物跡が 1 棟と、様々な規模の井戸状土坑、長楕円形を呈し炭や焼土を含む土坑などが検出された。掘立柱建物跡は 3 間×3 間に復元でき、柱掘方は直径５０～８０㎝前後円形で、柱痕跡は最下部で 10㎝前後とやや細い。その他にも同規模の柱穴や柱痕跡は点在するものの建物として組み合うものは見いだせず、小規模な建物があった程度であったと思われる。土坑は前時代からある井戸状で深く壁が直に立ち上がるもののほか、上面が大きく開き途中から壁が直に立ち上がるもの、直径が 2 m を超えるような規模が大きいもの、長楕円形で浅いものなどがある。井戸状の深い土坑の埋土は規模に関わらずやはり前時代と同じ埋土で、上層に茶灰色土、木質及び植物の層があるものもあり、下層は軟質の黒色粘土というものが多く、区画溝より外には認められない。また長楕円形の土坑 2 基（Ⅰ-37・38 号）はこの時期に特徴的なもので、深さは 1m 以下、埋土は水平堆積をして炭や灰の薄い互層となり、調査区北側に区画溝を挟んで対称の位置に平行に位置する。北接する西蒲池池田遺跡においても同様の土坑が検出されているが性格や用途は不明である。

この後、同じ中世前期にすべての遺構が整地で埋められる。整地土は「茶灰色土包含層」として取り上げたもので、包含される遺物は中世後期以降のものを含まない。整地層の上面は削平されているため当時の上面形状は不明であるが、先述した調査区北側の急激な落ち込みが 2 m以上茶灰色土で埋められていること、Ⅱ地点南側の落ち込みも同様に埋められていること、さらに整地以前の遺構埋土上層には茶灰色土が転圧されたよう状態で入ることなどから、遺跡全体に茶灰色土を客土して転圧し、湿地を埋めて平地を作る大規模な整地であったと考えられる。なお内側の区画溝は上層または中層より上がこの茶灰色土で埋められており、その最下面に 12～13 世紀の土師器や瓦器、陶磁器、花押が書かれた瓦器椀など、完形品を多数含む遺物が廃棄されていた。これらの遺物は整地直前に一括投棄されたものであり、区画溝の廃棄及び茶灰色土整地の時期を示すものであろう。整地後の遺構はほとんど検出されなかったが、外側の区画溝はほぼ同規模で再掘削され、中世後期まで使用される。

近世では溝一条と 2 期の浅い土坑を確認したが、全容が不明であり溝はクリークの可能性もある。

2　特徴的な遺構

ここでは今回検出した特徴的な遺構を取り上げて、若干の検討を加える。

土器を多量に包含する井戸状土坑

これらの土坑は浅いもので 1m 前後、深いもので 2m 近くの深さをもち、形状からは井戸と捉えられるが、湧水井戸か貯水井戸かの違いもあり、貯蔵用の土坑などの可能性も捨てがたい。土坑からは完形品を含む土器を始め多数の遺物が出土し、中には上層・中層・下層・最下層と間層を挟んで数層に分かれるものもある。

形状は壁が直線的に立ち上がるものが多いが、中位や下位には使用時の壁の崩落と思われる広がりをもつものがあり、埋土中に基盤土の大塊が混入するものもある。壁の崩落の理由としては①壁

面からの湧水による崩落②土坑内部が空間であったための自然崩落、などが考えられる。下位の広がりは①の、中位の広がりは②の理由であると考えると、下位崩落時は湧水しており、中位崩落時は水が無く空間であった可能性が高い。

埋土は上層が茶灰色土などのレンズ状堆積、中層が斑土などの一括埋土、または軟質の黒色粘土で、下層は軟質の黒色粘土中心の埋土、最下層があるものは地山に似た粘質土かグライ化した青灰色粘土に黒色土粒が混入するものが多い。上層の茶灰色土は中世前期の整地土で、その下に炭や灰などが入るものもある。後世、窪みになった場所に堆積及び廃棄されたものであろう。中層の斑土は一部の土坑の黒色粘土上に入る。基盤土などの粘土塊が混じり合ったもので出土遺物は少なく、新たに掘削した土坑の土で一気に埋められたものと考えられる。

中層及び下層の黒色粘土は軟質で水分を含み、木質などの有機質を含む。その上や間に木質・自然木・炭・種子・灰で構成される有機物質層が入ることもあり、木質の一部は顕微鏡観察により木の皮であるとの結果が出ている。なお、弥生時代中期の土坑埋土の灰はプラントオパールの分析からイネであることがわかった。中層以上から出土する一括遺物は完形の土器の他、土器片・自然木・木製品・木製未製品・貝殻・獣骨なども出土することが多く、遺物の構成や出土状況からこれらや有機物質層は廃棄物と考えられ、黒色粘土層はこれら廃棄物が腐敗して堆積したものである可能性もある。この場合、黒色粘土が堆積する時期はゴミ捨て穴として使用されていたと考えられる。

下層以下、特に黒色粘土下層や青灰色粘土から出土する一括遺物は完形品を多く含む。土器の器種は様々であるが、特に短頸の広口壺・直口壺・甕・ミニチュア品の比率が高い。これら一括遺物は同時性が高く、土器のセット関係を考える上で良好な資料である。土坑廃絶時に埋められたものと考えられるが、廃棄・祭祀の双方が想定でき区別は困難である。なお、上層と下層の土器が接合するものがあり、全体の埋土に時間差がないと考えられる。

最下層から出土する土器は完形品が多く、土坑底の地山に接地し、1個体または少数で正位に据えられるものや並べられたものが多い。埋土には木質などの廃棄物が含まれず、廃棄とは考え難い。つるべの役割も考えられるが、自然堆積の層を挟まず底に接地することや出土状況から、使用前に意図的に設置、または沈められたものと考えられる。Ⅱ－38号土坑出土のスッポンの甲羅の例も含めて祭祀の可能性が高く、他の一括遺物出土例とは分けて考える必要がある。

以上をまとめると、上層の茶灰色土は後世の整地土、中層の斑土は一括の埋め戻しであり、中層及び下層の一括遺物および有機物質層はゴミ穴として使用された土坑に廃棄されたもので、黒色粘土は廃棄物の腐敗物層である可能性がある。黒色粘土より下層の一括出土資料は土坑廃絶時の祭祀か廃棄、最下層の土器は土坑使用開始時の祭祀である可能性が高い。最下層の青灰色粘土は使用時に壁面が溶けたものか自然堆積であろう。全ての土坑がこの形態に当てはまらないが、傾向としてはこのように捉えられ、「深い土坑の一括出土資料」がいくつかの意味を持つと言える。また、各層の資料に大きな時期差はなく、土坑掘削から最初の祭祀、廃絶時の祭祀・土器廃棄、ゴミ坑利用、一括埋め戻しまでの期間は短いことは、これら土坑の使用法を解明する一要素であると考える。

炭や灰・木質が堆積する遺構

Ⅱ-68号土坑のように平面が長楕円形を呈して規模が大きく、深さ1mほどの遺構がある。これらの土坑は埋土に炭層や灰層を含み、軟質の黒色・黄色・茶色粘土と薄い互層を為して水平に近い堆積をし、最下層には極めて軟質な黒色や暗茶色の粘土が堆積する。粘土の中には木質が含まれる

ことから軟質粘土は腐敗した木質の可能性もある。また炭や灰は入るが被熱による壁の赤変などは認められないことから、これらは他所で燃やしたものと思われる。中世に見られるⅠ-37・38号土坑も炭やスス、粘土の水平堆積が認められ、中世後期の36号土坑の埋土は炭のみであった。形態や埋土の堆積、炭の量などが異なるため使用法が同じであったかは不明だが、炭が埋土に入るという類似性が認められることから、注目しておきたい。これらは顕著な出土遺物も認められないため性格は不明であるが、火を扱う生業などに伴う不要物を廃棄した可能性もある。また薄い粘土層が植物質の腐敗物とも考えられ、これらの層が薄く水平堆積することは特徴的である。土坑が水で満たされた状況で廃棄された炭や灰が沈殿し、薄く均一化された土層になったことも考えられる。この他、底部に木質が敷かれる弥生時代の浅い土坑や溝（Ⅱ-76・77号土坑、5・6号溝）があり、粘土地盤の底部を養生したと考えたが、上記の炭や灰と関連することも考えられる。

礎盤式柱穴を使用した掘立柱建物跡

礎盤式柱穴の構造については既刊の『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』で詳細に検討されているため、そちらを参照されたい。本遺跡内で建物として復元できるのは計18棟で、1間×1間と1間×2間が認められる。後者は前者に比して掘方が大きく、横木もやや大型である。切り合い関係では後者が前者に切られるものが多く、1間×2間・1間×1間→1間×1間に移行するようである。

掘立柱建物跡や柱穴は主に調査区北部と南部に集中し、特に北部の建物は繰り返し同じ場所に作られるため非常に切り合いが激しい。特に北部の建物は柱穴中の横穴が沈んで折れている状況から、柱が沈んで崩壊しても何度も同じ場所に建てる必要性のある建物と考えられる。柱穴からの出土遺物がほとんど無く、弥生時代中期の遺物も混入するため時期を決定することが困難であり、他遺構との関係や遺構配置から類推するほかない。調査区中央部に少数位置する柱穴のいくつかは弥生時代後期や古墳時代初頭の土坑に切られ、北部の掘立柱建物跡の一部はⅠ－落ち込みに切られ、黄色土包含層に覆われていた。落ち込みと包含層には主に弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が大量に包含されることから、当初は礎盤式掘立柱建物跡を弥生時代後期以前と考えていた。しかし、落ち込みの埋土及び遺物は流れ込みであり、須恵器も僅かに含まれる。また黄色土包含層は客土による整地であり、土取りで周辺の遺跡を破壊したと想定すると、これらに包含される土器は周辺の地下に最も多く含まれる時期の土器であると考えられる。つまり包含される土器＝整地の時期ではなく、土取りされた遺構の時期であると言える。以上の理由から、落ち込み及び黄色土包含層に含まれる弥生時代終末～古墳時代初頭の遺物の時期をもって礎盤式掘立柱建物跡の下限とは判断しがたい。またⅠ地点の報告書では、黄色土包含層の上にあるⅠ－1・2号掘立柱建物跡を弥生時代終末～古墳時代初頭としたが、円形柱穴の総柱建物が弥生時代に通例ではないこと、出土遺物にわずかに古墳時代後期の須恵器が混入していたことから、この2棟の建物を古墳時代後期のものと判断し、黄色土の整地を総柱建物跡に伴うもの、礎盤式掘立柱建物跡をそれ以前のものと考えた。さらに、礎盤式掘立柱建物跡は弥生時代後期～古墳時代初頭の井戸状土坑との切り合いがほとんどなく、分布域が明らかに棲み分けられていることから、礎盤式掘立柱建物跡は弥生時代後期～古墳時代初頭のものであると考える。これらの建物の性格は不明であるが、数多く掘削される土坑に関係する作業に必要な施設であることも考えられる。先述のとおり、建物の分布域は調査区北部と南部に2分され、北部は繰り返し建て替えが行われるが南部はほとんど建て替えがない。このことから、北部の低地にある建物と南部の高地にある建物は性格が異なるのではないかと考える。北部の建物は低

地のおそらく海の近くか海岸線付近に繰り返し建てる必要性のある施設で土坑に関連するものであり、南部の建物はその管理や居住に関連する施設であるという相違である。集落の中心部と考えられる西南部高台の遺構のあり様が重要となるが、南側の大型建物（Ⅱ-1号掘立柱建物跡）などは集落中心部の一部である可能性が高い。

なお、加重を分散させるために柱掘方の底部に敷かれた植物質については、分析の結果「木の皮」であることが確認された。また横木に使用された木材については、Ⅳ－２の横木の樹種鑑定の報告にあるように、建物ごとの樹種がほぼ同じであることが確認されており、クリが多用されていること、ツブラジイなども使用されていることも確認された。この結果はⅣ－３・５の花粉分析・大型植物遺体の分析による樹種と合致するもので、礎盤式柱穴に必要な資材は周囲の森林から調達されていたことがわかる。軟弱な粘土質の基盤土に建物を建てる必要性に加え、豊富な資材を調達できる森林の存在が、礎盤式柱穴という工夫された建物構造成立の背景となったと考えられる。

区画溝

今回検出したのは、中世前期に作られ廃棄される南北約150m、東西85m以上の規模を持つ正方形または長方形を呈する内側区画溝と、それを更に囲繞する一辺200m以上、深さは2m以上の深いV字の外側区画溝である。内側区画溝は中世前期に掘削され、内部には井戸状土坑などの土坑が掘られ、掘立柱建物が設置される。しかし、12～13世紀大規模な整地によって廃棄され、その後溝は掘削されない。外側区画溝も中世前期に掘削され一度整地されるが、再度同じ規模で掘削されて中世後期まで使用される。これらの溝を現在の地形図に重ねると、外側区画溝北溝の延長が現在の東西方向の道路につなが

第126図　周辺の地形および検出溝略配置図
（『東蒲池門前遺跡』より一部転載）

り、東溝も現在の南北方向の道路に隣接する（第 126 図）。これらの道路は中世後期に蒲池氏の菩提寺となった崇久寺を囲む大きな区画の北辺・西辺であり、また周辺の道路や水田にも同じ方向を指向する方形や長方形の区画が認められる。現在の土地利用に中世の地形が残っているとすれば、崇久寺を囲む区画はその寺域であり、その周辺地域にも他にいくつもの区画があったと考えられ、今回検出した区画溝がその土地整備計画の中で配置された可能性が高い。崇久寺は鎌倉末期に開かれ、16 世紀に蒲池氏の菩提寺になったとされる。これは外側区画溝が存続した時期であり、崇久寺の隣接地ということで場所的に特異性が高い。南接する東蒲池門前遺跡では蒲池氏の崇久寺の整備に関連する溝が数条確認されており、それらとも関連することが考えられる。また内側区画溝及び最初の外側区画溝は前時代のものであるが、外側区画溝が再掘削されることから、区画自体は整地前後で大きく変化しなかったことが想定され、崇久寺寺域の区画も中世前期から存在した可能性が高い。

蒲池氏は、12 世紀に三潴郡の地頭職に就いて蒲池地域を本拠地とし、13 世紀には承久の乱に関わって一族滅亡の危機に晒される。その盛衰は内側区画溝や最初の外側区画溝の設置、及びその後の茶灰色土による大規模な整地と時期的に合致する。また、内側区画溝には整地直前に廃棄されたと思われる輸入陶磁器や花押と思われる墨書が書かれた瓦器埦が出土しており、支配者層の氏族の存在が窺えることから蒲池氏の本拠地に近い場所である可能性が高い。その後 14 世紀には「後蒲池」が興り、16 世紀に滅亡するまで蒲池氏の支配は続く。これは再掘削された外側区画溝の使用時期も合致し、同時代に整備された崇久寺の寺域及び周辺の土地整備と区画溝が一体のものと考えられる。本遺跡は蒲池氏による大規模な整備計画の一部に組み込まれた場所であり、菩提寺隣接地という立地から、ある程度重要な場所であったと考えられる。

3. 特徴的な出土遺物

土器

今回の調査では、他地域の影響を受ける土器または搬入された土器が出土している。特に弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての資料が多く、畿内、肥後、山陰などの地域の影響が認められる。畿内系の土器は井戸状土坑内の一括資料として在地系の土器と共伴するが、一部を除いて胎土に違いが認められず、器形やタタキ調整などの影響は受けるものの、胎土やその他の製作技法から在地の人間により製作されたものと考えられる。その他の遺構から出土した長頸壺や台付き甕は肥後の影響であり、特に長頸壺は胎土の精良さや色調、薄さが在地系とはまったく異なることから、搬入品と考えられる。Ⅰ-1 号土坑出土の直口壺やその他の遺構から出土した低脚付杯、包含層出土の鼓型器台は、山陰の影響を受けるものである。鼓型器台は胎土が在地の土器とは若干異なり搬入品の可能性もあるが、それ以外は在地での生産と思われる。

その他の特徴的な土器類では、まずⅡ-43 号土坑出土の黒塗りの研磨された土器がある。胎土は軟質の白色土で外面は黒色塗料を塗布し、細かいミガキによって光沢を持つ優品である。脚部を欠損するが、仏教用具の「花瓶」の様な形状と推測される。熊本県の装飾古墳チブサン古墳から近似した黒塗りの壺が出土しており、福岡県みやま市ナギノ古墳でも近似した器形の壺が出土している。Ⅱ-72 号土坑から出土した筒型器台は丹塗りが認められず、他の調整は明瞭に残ることから丹が剥げたものでなく、丹塗りを施さない筒型器台の顕著な例と思われる。34 号土坑出土の砲弾型土器は、

佐賀県の牟田寄遺跡などでも出土している。器壁が厚く特異な形状から、何らかの特殊な用途のために製作されたと考えられる。また、今回様々な器形の支脚が出土したが、中でも上部が鉤状に曲がる器形が最も多く、スサを含み二次被熱によってそのほとんどが破片になって出土する。異なった器形の支脚は完形品もあり、製作・使用方法に違いがあることも考えられる。

また、土器そのものではないが、土坑からの一括出土の甕や壺の内外面にススやコゲが多量に付着するものが認められる。外面上位に液体が垂れた痕跡があるもの、外面に厚くススコゲが付着するもの、外面下半のススコゲが剥離しているものなどが認められ、これらの資料の一部は、北陸学院大学の小林正史教授が主宰する「ススコゲワークショップ」にて観察が行われ、分析された。その結果、液体状の垂れた痕跡「斜め白吹き痕」や炭化穀粒（立体的）が確認され、炊飯に使用されたことが確認された。また時期によってススコゲの付着箇所や痕跡が異なることから、炊飯方法の違いが認められることも確認された。土器のススコゲの付着状態から使用法や炊飯の手法が顕著に分析できることは興味深く、また土坑から多量に出土する完形品の土器類が「炊飯道具」として使用されていたことは、「完形品・一括資料」＝「祭祀」と断定しがたいことの証明にもなると考える。

特殊遺物

土製品では鐸形土製品・下端を削った投弾が出土している。鐸形土製品については後述するが、下端を削った投弾は特徴的な形状で、佐賀県詫田西分遺跡で同形製品が出土している。

金属製品では銅鏡破片が出土している。弥生時代終末の包含層からの出土で弥生時代中期の遺物も多数含まれることから時期の特定はできない。外縁のみの破片のため種類は不明であるが、平縁であることから方格規矩鏡か内行花文鏡と考えられる。X線CTスキャンの観察では端部に研磨したような痕跡が認められるため破鏡の可能性が高く、また両面に目の細かい布の付着が認められる。

骨角器では卜骨・鹿角製鏃・鹿角製鋲が出土している。卜骨については後述するが、鹿角製品は分析により素材が判明した。鹿角は他に未加工のものも出土しており、現地で加工したと思われる。類例を確認できなかったため形状から「鏃」「鋲」と判断したが、その他の使用法も考えられる。いずれも遺構からの出土であるが、弥生時代中期の遺物も多数包含されることから遺構の時期に確実に伴うとはいえない。また他にも多種の動物骨が多量に出土しており、Ⅳ－7で同定されている。土坑底部から出土したスッポンや包含層出土のニホンアシカが特徴的である。

木製品では剣形木製品が出土している。束頭は大きく膨らみ、鍔部の表現も顕著で、厚さも厚く刃部は表現されていない。切っ先部分に向かって広がることからも、鞘に収めた状態を表現したものと思われる。76号土坑の底部に広がる木質・炭層から出土した。遺構の性格は不明であるが、祭祀に関わる資料である可能性が高い。

石製品では30号土坑及び攪乱出土の柱状片刃石斧が注目される。石器としては特異ではないが、巻頭図版にもあるように表面の色調や質感がまったく異なる石材2片が接合した。光沢のある黒色部分はⅡ-30号土坑から、風化した灰色部分は攪乱からの出土であり、土壌や水分などの外的要因から受ける影響によって意外なほど外観が変容することがわかる資料である。

卜骨

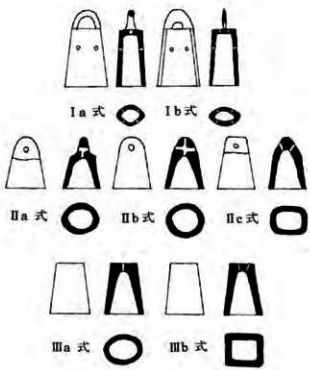
今回の調査では県内で初めて卜骨が出土した。卜骨はシカ・イノシシの肩甲骨を使用した4資料が出土し、特にⅡ—18号土坑からの出土資料は残存状況が良好で、その他は欠損部が大きい。國學院大學伝統文化リサーチセンターの集成によると、これまで国内で出土している弥生時代の卜骨

は、64 遺跡 975 点にのぼっているが（浪形 2009）、佐賀県佐賀市牟田寄遺跡の卜骨 8 点が含まれていないことからまだ若干の追加はあると思われる。九州での出土例は前出の牟田寄遺跡（弥生時代終末、終末から古墳時代前期）、長崎県壱岐市カラカミ遺跡（弥生時代後期中頃）、同原ノ辻遺跡（弥生時代後期前半）である。中でも牟田寄遺跡は本遺跡の近くに所在する遺跡で、同じ有明海沿岸域の北限部に当たり、遺跡の時期や性格、出土遺構の形態も近似している。18 号土坑出土資料以外は整理作業段階で発見したものであり、その他の有機質資料とともに出土していたため出土状況は把握できていないが、18 号土坑資料は中層の土器集中層の最上に土器や貝殻と共に一括廃棄された状態で出土しており、卜骨は使用後他のゴミ類と同じく簡単に廃棄したものとわかる。本遺跡では動物骨を含む有機質の資料の残存状態が良好で、この他にも肩甲骨を含む多種多様な動物骨が大量に出土している（Ⅳ－７参照）。この地域では土壌の性質から有機物が良好な状態で残存するため他地域より出土率が高く、卜骨の使用がこの地域特有のものであるのか、通用の集落で行われたのであるかの判断は難しい。しかし他の出土遺跡が拠点的な集落遺跡であることは注目される。

鐸形土製品について

遺跡内の 90 号土坑より鐸形土製品が出土した（第 111 図 47）。断面楕円形を呈し、扁平な板状の鈕および舞を明確に持ち、6 カ所の型持孔および鈕孔が表現される。文様はなく、神尾氏の Ｉｂ式に相当する（第 127 図、神尾 2012）。九州内では川寄若宮 1 号のみが本形式に分類されており、2 例目である。

九州内で検出される鐸形土製品は、鈕を紐状に表現したり、舞を明確に持たないものが多く、朝鮮式小銅鐸を祖形としたり、形態的な観念が弛緩したと考えられるものが多い。しかしながら、本例は先に述べたように形態が大きく異なっており、祖形がまったく異なる可能性がある。扁平で多きな鈕を持つことから、外縁付鈕～扁平鈕式などが考えられるが、九州内では吉野ヶ里遺跡出土の福田型銅鐸のみしか出土がなく（北島 2002）、しかも吉野ヶ里遺跡例には型持孔が表現されていない。土製品にとって機能を有しない型持孔をわざわざ表現するとは考えられず、吉野ヶ里遺跡出土例が直接的な祖系とは考えられない。本例には鰭や文様などの要素が表現されていないため、これ以上特定はできないが、周辺の鐸形土製品と差異があること、周辺での銅鐸の出土例から、吉野ヶ里遺跡出土銅鐸を含めた折衷形式であるとしておきたい。



第127図　鐸形土製品形態分類模式図（神尾2012より転載）

時期は出土遺構が古代の遺構であるが、上層に弥生時代中期の包含層があるため、当該時期の混入品と考えられ、これは先に想定した祖形の問題とも矛盾しない。

機能としては、舌を吊るせば実際に鐸と

して使用することが可能で、精製品であることから、「銅鐸の代替品」、「威信財」など何らかの特別な意味が付与されていた可能性が想定される。しかし、出土遺構が包含層からの混入品と想定されることから、現段階では「実際に鐸として使用可能な精製品」という事実を報告するに留めておきたい。

【参考文献】

井上洋一 2003「銅鐸」『考古資料大観 6　青銅・ガラス製品』（井上洋一・森田稔編）小学館

神尾恵一 2012「銅鐸形土製品祭祀の研究」『古文化談叢』67　九州古文化研究会

北島大輔 2002「吉野ヶ里銅鐸を巡る諸問題」『吉野ヶ里銅鐸』佐賀県文化財調査報告書第 152 集　佐賀県教育委員会

浪形早季子 2009「弥生時代の卜骨の再検討－シカ・イノシシからみた時代性・地域性について－」
『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要（1）』

福岡県教育委員会 2011『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 10 集

4　まとめ

以上、調査の結果や様々な状況から推定の範囲も含め検討を行った。これらをふまえ、簡潔に本遺跡の状況をまとめる。

本遺跡における人の営みの始まりは弥生時代中期からで、当時は海水の影響を受けやすい汽水域もしくは湿地であり、居住には適さない地域であった。集落は西南部の高台にあり、稲作が行われ、周囲には照葉樹や陽樹の林があった。有明海の干満の影響を受けることから土壌の流れ込みが常にあるが、弥生時代後期には海退によって土地利用できる程度の湿地となり、それに伴って集落の縁辺部も少しずつ範囲を拡大していった。しかし軟弱な粘土土壌から居住域としては適さず、施設として使用される建物や土坑が作られる。弥生時代終末期にはさらに集落が拡大し、建物や土坑も多数作られ、特に井戸状の深い土坑が繰り返し掘削されては埋め戻され、その状況は古墳時代初頭まで続く。その後一時使用されないが、古墳時代後期になると客土して利用可能な状態に整地し、倉庫を建てて前時代と同様の土坑を掘削する。しかしやはり居住には適さず、集落の縁辺部である状況は変わらない。古代になると建物もなくなり、土坑も減少して集落は縮小される。それが中世になると様相は一変し、土地利用計画の元に大規模な整備がなされる。地域は溝によっていくつかの区画に分けられ、その中にさらに南北約 150m ×東西 85m 以上の溝に囲まれた区画が作られる。しかしこれらの区画溝や内部施設は同じ中世前期にすべて廃棄され、大量の茶灰色土の客土により大規模な整地がなされる。整地後、外側の区画溝は新たな土地整備計画に取り込まれて再度同規模に掘削され、中世後期には崇久寺に隣接する特別な場所となり土地利用が続く。

今回の調査では弥生時代中期～近世という幅広い年代の遺構を確認し、本地域の歴史の一端を解きうる資料が多数出土した。この中で中世以降の様相はやはり蒲池氏に関連するものと考えられるが、それ以前、特に弥生後期から古墳時代初頭までに作られる多数の土坑と礎盤式掘立柱建物の性格は不明である。しかし、これら全ての時代の施設が近似する方位を指向することは、当時の地形や環境、土地利用に関係することは確実であり、それが同じく全時代に共通して作られる井戸状土坑に関連する可能性は考えておきたい。

今回の調査では調査者の力不足から不備も多く、報告ではその一部についてしか考察を加えられなかったが、今後の調査及び調査研究の一助になれば幸いである。

第２表　西蒲池池淵遺跡Ⅱ地点遺構番号対照表

遺構番号	S番号
掘立柱建物跡	
1号	35
	50
	65
	66
	125
	225
2号	200
	285
	Ⅰ-821
	Ⅰ-823(675)
3号	199
	203
	267
	335
4号	190
	198
5号	55
	56
	57
	58
土坑	
1号	46
2号	300
3号	265
4号	16
5号	142
6号	175
7号	166
8号	4
9号	24
10号	60
11号	73
12号	64
13号	85
14号	72
15号	86
16号	87
17号	139
18号	123
19号	140
20号	23
21号	90
22号	153
23号	159
24号	167
25号	174
26号	237
27号	11
28号	28
29号	80
30号	284
31号	20
32号	31
33号	117
34号	51
35号	193
36号	63
37号	327
38号	301
39号	12
40号	21
41号	45
42号	81
43号	70
44号	136
45号	182
46号	77
47号	88
48号	147
49号	154
50号	129
51号	17
52号	162
53号	75
54号	15
55号	2
56号	26
57号	138
58号	22
59号	43
60号	114
61号	9
62号	18
63号	34
64号	116
65号	164
66号	94
67号	145-2
68号	149
69号	95
70号	247
71号	40
72号	52
73号	61
74号	82
75号	227・325
76号	234・286
77号	102(257)
78号	229
79号	13—1
80号	48・180
81号	311
82号	287
83号	30
84号	13—2
85号	161
86号	8
87号	13—3
88号	111・338
89号	97
90号	10
91号	160
92号	100
93号	68
94号	183
95号	218
96号	222
97号	240
98号	314
99号	14
100号	54
101号	126
102号	152
103号	244
104号	89
105号	124
106号	165
107号	6
108号	69
109号	137
110号	155
111号	169
112号	204
113号	44
114号	5
115号	7
116号	19
117号	27
118号	36
119号	79
120号	143
121号	187
122号	188
溝	
1号	1南北溝
2号	1東西溝
3号	3
4号	145
5号	333
6号	336
7号	47
8号	92

第 3 表　西蒲池池淵遺跡Ⅱ地点及び包含層等出土特殊遺物一覧表

	番号	地点	遺構	種類	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	残存	備考
109	1	Ⅰ	礎盤	石製品	スクレイパー	5.3	7.3	1.4	35.54	完形	安山岩
109	2	Ⅰ	淡黄色土包含層	石製品	スクレイパー	6.10	5.50	1.50	50.00	完形	安山岩
109	3	Ⅱ	ピット	石製品	打製石鏃	5.00	2.65	1.30	14.24	完形	安山岩
109	4	Ⅱ	66 号土坑	石製品	紡錘車	3.60	—	1.80	35.83	0.9	滑石
109	5	Ⅱ	淡黄色土包含層	石製品	化石?	3.10	2.65	2.65	21.86	完形	粘板岩
109	6	Ⅱ	淡灰黄色粘土包含層	石製品	磨製石鏃	6.20	1.80	0.40	5.61	完形	頁岩質砂岩
109	7	Ⅱ	14 号土坑	石製品	石剣	(7.80)	(2.80)	(0.85)	(18.77)	0.2	粘板岩
109	8	Ⅱ	30 号土坑	石製品	石剣	(6.40)	(3.85)	0.45	(16.45)	0.2	頁岩質砂岩
109	9	Ⅰ	表採	石製品	石剣	(8.85)	(3.75)	1.35	(50.18)	0.2	粘板岩
109	10	Ⅱ	淡黄色土包含層	石製品	石剣	11.70	3.65	0.50	30.11	ほぼ完形	粘板岩
109	11	Ⅱ	淡灰色粘土包含層	石製品	石剣	(12.70)	4.80	0.90	(94.10)	0.5	頁岩質砂岩
109	12	Ⅱ	ピット	石製品	石剣	(16.70)	4.20	1.20	(104.61)	0.6	凝灰岩
109	13	Ⅱ	ピット	石製品	石庖丁	(3.00)	(4.00)	0.50	(9.84)	0.2	頁岩質砂岩
109	14	Ⅱ	ピット	石製品	石庖丁	(5.75)	(4.00)	0.70	(22.38)	0.2	頁岩質砂岩
109	15	Ⅱ	1 号溝	石製品	石庖丁	(3.60)	(5.35)	(0.75)	(19.99)	0.2	頁岩質砂岩
109	16	Ⅱ	8 号溝	石製品	石庖丁	(2.90)	(4.50)	0.35	(7.44)	0.1	片岩
109	17	Ⅱ	18 号土坑最下層	石製品	石庖丁	4.20	(3.90)	(0.55)	(9.48)	0.2	片岩
110	18	Ⅱ	ピット	石製品	石庖丁	5.25	(7.70)	0.80	(37.64)	0.5	凝灰岩
110	19	Ⅱ	淡灰色粘土包含層	石製品	石庖丁	(5.40)	(5.80)	0.70	(32.96)	0.3	頁岩質砂岩
110	20	Ⅰ	灰色粘土包含層	石製品	石庖丁	(4.60)	(7.90)	0.60	(27.96)	0.4	泥岩
110	21	Ⅱ	ピット	石製品	石庖丁	(4.00)	(8.65)	0.80	(30.11)	0.3	輝緑凝灰岩
110	22	Ⅱ	ピット	石製品	石庖丁	(5.05)	(7.50)	0.60	(26.46)	0.4	輝緑凝灰岩
110	23	Ⅱ	6 号土坑上層	石製品	石庖丁	6.50	(8.60)	0.50	(37.62)	0.7	頁岩質砂岩
110	24	Ⅰ	淡灰色粘土包含層	石製品	大型石庖丁	(6.50)	(11.70)	0.55	(69.22)	0.5	頁岩質砂岩
110	25	Ⅱ	淡灰黄色粘土包含層	石製品	大型石庖丁	8.25	(7.30)	0.60	(48.80)	0.25	頁岩質砂岩
110	26	Ⅱ	75 号土坑	石製品	石庖丁	4.10	17.10	0.60	74.81	完形	頁岩質砂岩
110	27	Ⅱ		石製品	石庖丁	(4.10)	(6.10)	0.50	(18.49)	0.3	片岩
110	28	Ⅰ	茶灰色土包含層	石製品	石庖丁	(4.80)	(5.20)	0.60	(21.28)	0.4	片岩
110	29	Ⅰ	茶灰色土包含層	石製品	石庖丁	4.30	9.90	0.75	40.81	ほぼ完形	輝緑凝灰岩
110	30	Ⅱ	86 号土坑	土製品	不明土製品	(5.05)	1.90	2.05	(20.96)	不明	
110	31	Ⅱ	54 号土坑上層	土製品	土玉	3.20	3.10	2.30		完形	
110	32	Ⅱ	113 号土坑	土製品	投弾	(3.60)	2.20	—	(12.95)	0.8	
110	33	Ⅱ	3 号溝	土製品	投弾	4.60	2.20	—	18.51	完形	
111	34	Ⅱ	淡黄色土包含層	土製品	投弾	2.30	1.80	—	4.71	完形	
111	35	Ⅱ	淡黄色土包含層	土製品	投弾	3.35	2.40	—	13.84	完形	
111	36	Ⅱ	淡黄色土包含層	土製品	投弾	(3.55)	2.20	—	(10.98)	0.6	
111	37	Ⅱ	78 号土坑	土製品	投弾	3.50	2.00	—	6.87	完形	
111	38	Ⅰ	茶灰色土包含層	土製品	投弾	4.65	2.70	—	(21.09)	0.9	
111	39	Ⅱ	灰色粘土包含層	土製品	投弾	4.50	2.90	—	27.62	完形	
111	40	Ⅰ	灰色粘土包含層	土製品	投弾	5.60	2.80	—	23.50	完形	
111	41	Ⅰ	灰色粘土包含層	土製品	土錘	7.45	2.60	1.90	42.33	完形	
111	42	Ⅱ	64 号土坑	土製品	土錘	4.00	1.10	—	3.66	完形	
111	43	Ⅰ	茶灰色土包含層	土製品	土錘	4.40	0.90	—	2.90	完形	
111	44	Ⅰ	茶灰色土包含層	土製品	土錘	4.60	0.95	—	3.17	ほぼ完形	
111	45	Ⅱ	ピット	土製品	土錘	3.00	1.70	—	(12.71)	0.8	孔径 0.6cm
111	46	Ⅱ	ピット	土製品	勾玉	3.00	0.90	1.00	2.65	完形	
111	47	Ⅱ	90 号土坑	土製品	鐸形土製品	(7.05)	(4.95)	(3.80)	(49.18)	0.5	精製品
111	48	Ⅱ	ピット	銅製品	銭貨	2.40	—	0.10	2.48	完形	太平通寶
111	49	Ⅱ	廃土	銅製品	銭貨	2.50	—	1.50	2.35	完形	永乗通寶
111	50	Ⅰ	灰色粘土包含層	土製品	円盤状土製品	5.00	—	1.35	33.34	完形	壷 or 甕の底部
111	51	Ⅰ	茶灰色土包含層	土製品	円盤状土製品	6.00	6.80	1.40	64.69	完形	
111	52	Ⅱ	54 号土坑下層	土製品	円盤状土製品	7.60	—	0.80	32.90	完形	土師皿転用
111	53	Ⅱ	54 号土坑下層	土製品	円盤状土製品	8.00	—	0.65	39.74	完形	土師皿転用
111	54	Ⅱ	54 号土坑下層	土製品	円盤状土製品	7.40	—	1.10	46.54	完形	土師椀転用
111	55	Ⅱ	54 号土坑下層	土製品	円盤状土製品	7.40	—	1.40	46.24	完形	土師椀転用
112	56	Ⅰ	表土	石製品	太型蛤刃石斧	(7.20)	(7.05)	(3.40)	(297.00)	0.2	玄武岩
112	57	Ⅰ	灰色粘土包含層	石製品	太型蛤刃石斧	(3.70)	(7.30)	(4.00)	(101.74)	0.1	玄武岩
112	58	Ⅱ	ピット	石製品	扁平片刃石斧	(4.35)	2.70	1.30	(23.89)	0.5	凝灰岩
112	59	Ⅱ	淡黄色土包含層	石製品	扁平片刃石斧	9.00	4.60	1.35	120.24	ほぼ完形	凝灰岩
112	60	Ⅱ	30 号土坑	石製品	柱状片刃石斧	(9.60)	3.30	3.90	(188.23)	0.6	粘板岩
112	61	Ⅰ	撹乱	石製品	柱状片刃石斧	157.00	2.65	3.00	(165.18)	0.9	粘板岩
112	62	Ⅰ	茶灰色土包含層	石製品	砥石	6.05	5.20	4.20	132.57	完形	頁岩
112	63	Ⅰ	茶灰色土包含層	石製品	砥石	(9.15)	(3.05)	(3.50)	(155.18)	0.1	砂岩
112	64	Ⅰ	茶灰色土包含層	石製品	砥石	(8.10)	(4.10)	3.55	(122.42)	0.2	頁岩

	番号	地点	遺構	種類	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	残存	備考
112	65	Ⅰ	茶灰色土包含層	石製品	砥石	5.90	3.60	3.30	92.54	完形	片岩
112	66	Ⅱ	42 号土坑	石製品	砥石	(5.70)	3.20	2.00	(48.33)	0.3	頁岩
112	67	Ⅱ	32 号土坑	石製品	砥石	(10.10)	5.50	2.30	(163.84)	0.5	頁岩
113	68	Ⅱ	17 号土坑下層	石製品	砥石	(9.15)	3.75	1.65	(87.03)	0.5	頁岩
113	69	Ⅰ	灰色粘土包含層	石製品	砥石	(4.50)	1.90	0.60	10.72	0.5	頁岩質砂岩
113	70	Ⅱ	淡灰色粘土包含層	石製品	砥石	(7.20)	(5.70)	(1.60)	(73.56)	0.1	細粒砂岩
113	71	Ⅰ	茶灰色土包含層	石製品	砥石	5.00	4.35	2.60	66.09	0.1	細粒砂岩
113	72	Ⅱ	1 号土坑	石製品	砥石	4.00	4.85	2.65	43.71	完形	細粒砂岩
113	73	Ⅰ	茶灰色土包含層	石製品	砥石	(5.10)	(3.30)	(3.30)	(42.39)	0.1	頁岩
113	74	Ⅱ	16 号土坑	石製品	砥石	(6.60)	(4.30)	(2.70)	(53.90)	0.1	頁岩
113	75	Ⅱ	淡灰黄色粘土包含層	石製品	砥石	(6.00)	4.70	4.50	(218.16)	0.5	細粒砂岩
113	76	Ⅰ	茶灰色土包含層	石製品	砥石	(7.65)	(5.40)	(2.95)	(141.10)	0.2	頁岩
113	77	Ⅰ	灰色粘土包含層	石製品	砥石	(4.80)	3.30	(4.55)	(89.78)	0.2	凝灰岩
113	78	Ⅱ	淡灰色粘土包含層	石製品	砥石	(7.10)	4.60	3.50	(120.83)	0.5	頁岩
113	79	Ⅰ	表土	石製品	砥石	5.95	(9.60)	3.70	199.27	0.7	頁岩
113	80	Ⅱ	茶灰色土包含層	石製品	砥石	(12.80)	5.80	5.55	313.00	0.7	頁岩
113	81	Ⅱ	ピット	石製品	砥石	12.80	6.80	2.75	(289.20)	0.9	頁岩
113	82	Ⅱ	54 号土坑下層	石製品	砥石	(10.70)	(8.20)	(2.75)	(364.30)	0.5	砂岩
113	83	Ⅰ	淡黄色土包含層	石製品	砥石	(7.20)	7.30	6.70	481.00	0.2	細粒砂岩
113	84	Ⅱ	ピット	石製品	砥石	(9.70)	7.00	6.60	(419.90)	0.2	頁岩
113	85	Ⅰ	淡白黄色粘土包含層	石製品	砥石	11.90	(10.10)	5.15	(992.00)	0.3	砂岩
114	86	Ⅰ	淡灰黄色粘土包含層	石製品	砥石	(9.90)	(15.40)	(8.60)	(1958.00)	0.2	安山質凝灰岩
114	87	Ⅰ	灰色粘土包含層	石製品	砥石	18.00	11.70	4.80	1370.00	完形	頁岩
114	88	Ⅰ	表土	石製品	砥石	(27.00)	12.80	11.30	(5.8) K	0.7	頁岩
114	89	Ⅱ	57 号土坑下層	石製品	石錘	8.65	9.75	2.90	389.50	完形	安山質凝灰岩
114	90	Ⅰ	淡黄色土包含層	石製品	すり石	12.00	8.10	5.50	721.00	0.9	安山質凝灰岩
114	91	Ⅰ	8 号溝	石製品	すり石	5.30	3.75	3.10	93.12	完形	安山岩
114	92	Ⅰ	表土	石製品	すり石	11.15	4.90	3.30	289.00	完形	凝灰岩
114	93	Ⅱ	ピット	石製品	すり石	12.95	5.15	4.10	385.20	完形	凝灰岩
114	94	Ⅱ	淡灰黄色粘土包含層	石製品	すり石	(7.50)	(5.85)	(4.00)	(234.21)	0.2	安山質凝灰岩
115	95	Ⅰ	淡灰黄色粘土包含層	石製品	すり石	13.20	11.80	7.60	1579.00	完形	安山質凝灰岩
115	96	Ⅰ	淡灰色粘土包含層	石製品	すり石	10.20	8.80	6.00	803.00	完形	安山質凝灰岩
115	97	Ⅱ	47 号土坑	石製品	すり石	9.45	10.55	6.00	823.80	完形	凝灰岩
115	98	Ⅰ	淡灰黄色粘土包含層	石製品	すり石	14.30	10.40	5.10	110.00	完形	安山質凝灰岩
115	99	Ⅱ	52 号土坑	石製品	回・すり石	8.80	9.20	2.80	355.00	完形	安山質凝灰岩
115	100	Ⅰ	淡灰色粘土包含層	石製品	回・すり石	9.70	9.70	4.25	618.00	完形	安山岩
115	101	Ⅰ	淡黄色土包含層	石製品	回石	11.20	9.20	3.40	405.00	完形	凝灰岩？
115	102	Ⅱ	灰色粘土包含層	石製品	回・すり石	9.30	7.00	4.60	402.80	完形	凝灰岩
115	103	Ⅰ	灰色粘土包含層	石製品	回・すり石	11.00	8.65	5.10	707.00	完形	凝灰岩
115	104	Ⅱ	灰色粘土包含層	石製品	回・すり石	(8.80)	9.00	5.25	(458.50)	0.8	安山岩
116	105	Ⅱ	灰色粘土包含層	石製品	回・すり石	11.20	8.00	4.30	601.20	完形	安山質凝灰岩
116	106	Ⅱ	淡灰色粘土包含層	石製品	回・すり石	(11.80)	7.20	3.60	(420.50)	0.8	安山質凝灰岩
116	107	Ⅱ	43 号土坑	石製品	回石	10.50	6.20	4.15	431.10	完形	安山質凝灰岩
116	108	Ⅱ	32 号土坑	石製品	回・すり石	10.30	5.20	2.90	249.04	完形	安山質凝灰岩
116	109	Ⅱ	32 号土坑（南側）	石製品	回石	12.80	8.70	6.80	1019.30	完形	凝灰岩
116	110	Ⅱ	90 号土坑	石製品	回・すり石	15.50	9.80	4.90	922.40	完形	凝灰岩
116	111	Ⅱ	ピット	石製品	回石	16.00	10.60	6.50	1229.00	完形	凝灰岩
116	112	Ⅱ	32 号土坑	石製品	回石	(5.30)	6.40	5.45	(242.19)	0.3	安山質凝灰岩
116	113	Ⅱ	ピット	石製品	回石	10.10	8.40	5.50	(555.00)	0.7	輝緑岩
116	114	Ⅱ	灰色粘土包含層	石製品	回石	(9.30)	7.70	4.40	(421.00)	0.7	安山質凝灰岩
116	115	Ⅱ	43 号土坑	石製品	回石	(7.60)	8.70	6.30	(581.40)	0.8	安山質凝灰岩
116	116	Ⅱ	淡灰色粘土包含層	石製品	回石	9.30	8.90	5.85	640.10	ほぼ完形	凝灰岩？
117	117	Ⅱ	ピット	石製品	回石	9.30	10.70	5.80	857.80	完形	安山質凝灰岩
117	118	Ⅰ	淡黄色土包含層	石製品	回石	9.30	7.80	3.30	336.00	完形	安山質凝灰岩
117	119	Ⅰ	ピット	石製品	回石	9.60	7.50	4.70	463.80	完形	安山質凝灰岩
117	120	Ⅰ	表土	石製品	台石	42.10	16.60	12.90	14.98	完形	凝灰岩
117	121	Ⅱ	60 号土坑	石製品	石鍋	17.80	(11.50)	—	—	0.4	滑石
117	122	Ⅱ	1 号溝	石製品	石鍋			—	—	0.1	滑石
117	123	Ⅱ	54 号土坑下層	石製品	石鍋転用品	2.70	6.95	1.20	—	0.9	滑石
117	124	Ⅱ	1 号溝	石製品	石鍋転用品	8.00	11.20	1.80	—	完形	滑石
117	125	Ⅱ	1 号溝	石製品	石鍋				—	0.1	滑石
117	126	Ⅱ	灰色粘土包含層	石製品	不明石製品	6.80	3.70	2.90	111.86	完形	滑石
118	127	Ⅱ	68 号土坑	骨製品	鏃	5.20	0.80	0.45	—	完形	
118	128	Ⅱ	灰色粘土包含層	骨製品	針？	(4.30)	1.20	—	—	ほぼ完形	
118	129	Ⅱ	34 号土坑	木製品	結鍾車	(6.20)	—	0.70	—	0.7	
118	130	Ⅱ	ピット	木製品	燃えさし	(8.40)	2.10	—	—	0.1	

	番号	地点	遺構	種類	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	残存	備考
118	131	Ⅱ	40 号土坑	木製品	燃えさし	17.60	1.50	—	—	完形	
118	132	Ⅱ	10 号土坑	木製品	不明	(15.00)	2.90	1.10	—	0.9	
118	133	Ⅱ	14 号土坑	木製品	曲物	(3.20)	11.70	2.70	—	0.1	
118	134	Ⅱ	40 号土坑	木製品	不明	(9.30)	6.20	3.60	—	0.5	
118	135	Ⅱ	49 号土坑下層	木製品	櫂	16.80	5.70	5.40	—	完形	
118	136	Ⅱ	4 号土坑	木製品	柄杓	20.65	8.30	5.60	—	0.8	
118	137	Ⅱ	ピット	木製品	底板	(23.10)	(4.10)	0.60	—	0.1	
118	138	Ⅱ	18 号土坑	木製品	板	(16.20)	(4.10)	1.15	—	0.1	
118	139	Ⅱ	35 号土坑	木製品	皿？	(11.50)	14.70	0.60	—	0.6	
118	140	Ⅱ	9 号土坑	木製品	椀	13.70	—	4.40	—	0.3	
118	141	Ⅱ	60 号土坑	木製品	鉢	24.00	—	9.20	—	0.7	
119	142	Ⅱ	34 号土坑	木製品	樋	(17.60)	13.30	3.70	—	0.6	
119	143	Ⅱ	30 号土坑下層	木製品	樋	27.00	(7.30)	5.00	—	0.5	
119	144	Ⅱ	76 号土坑	木製品	刷形木製品	(34.90)	5.55	3.60	—	0.8	
119	145	Ⅱ	淡灰黄色粘土包含層	木製品	不明	52.90	3.50	—	—	完形	
119	146	Ⅱ	32 号土坑	木製品	杭	58.80	3.20	—	—	完形	
119	147	Ⅱ	39 号土坑	木製品	杭	(10.60)	(2.80)	—	—	0.1	
119	148	Ⅱ	28 号土坑	木製品	杭	(29.60)	2.40	—	—	0.7	
119	149	Ⅱ	18 号土坑下層	木製品	ねずみ返し	(25.20)	27.50	2.40	—	0.8	
119	150	Ⅱ	44 号土坑下層	木製品	板	(30.00)	(6.70)	(0.80)	—	0.1	
120	151	Ⅱ	30 号土坑	木製品	板	(14.50)	(5.10)	3.40	—	0.1	
120	152	Ⅰ	礎盤	木製品	部材	(34.30)	6.50	3.60	—	0.8	礎板転用品
120	153	Ⅰ	礎盤	木製品	部材	(42.90)	9.00	3.10	—	0.8	礎板転用品
120	154	Ⅰ	礎盤	木製品	部材	(43.20)	9.20	3.60	—	0.8	礎板転用品
120	155	Ⅱ	30 号土坑	木製品	柿子	(57.00)	15.20	5.40	—	0.3	
120	156	Ⅱ	表土	木製品	部材	61.40	6.40	0.90	—	完形？	
120	157	Ⅱ	淡灰黄色粘土包含層	木製品	部材	89.40	14.10	8.60	—	完形	
121	158	Ⅱ	49 号土坑	木製品	臼	44.60	—	51.30	—	0.7	
122	159	Ⅰ	ピット	鉄製品	板	(5.80)	(5.30)	0.30		0.1	
122	160	Ⅰ	茶灰色土包含層	鉄製品	不明	(5.20)	(9.90)	0.75		0.2	
122	161	Ⅰ	茶灰色土包含層	鉄製品	鉄鎌？	(14.70)	2.30	1.20		0.8	
122	162	Ⅱ	淡黄色土包含層	銅製品	鏡	(6.10)	(2.20)	0.70		0.1	破鏡か

（　）は残存値

西蒲池池淵遺跡図版

1　調査区上層全景
（航空写真）

2　調査区下層全景
（航空写真）

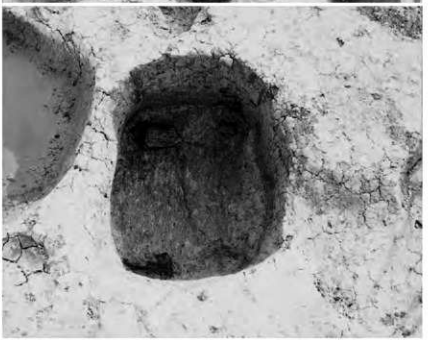
図版 2

1　調査区から南をのぞむ
（航空写真）

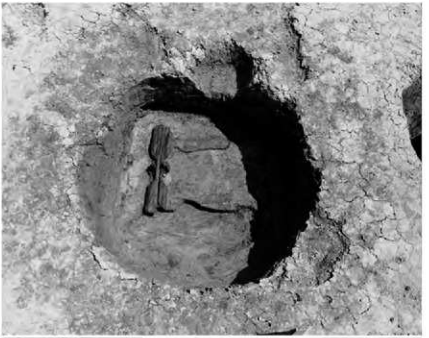
2　調査区中央土坑集中部
（航空写真　下が北）

1　1号掘立柱建物跡
（北から）

2　1号掘立柱建物跡柱穴①
（南から）



3　1号掘立柱建物跡柱穴②
（北から）



1　1号掘立柱建物跡柱穴③
（西から）

2　1号掘立柱建物跡柱穴
土層堆積状況（南から）

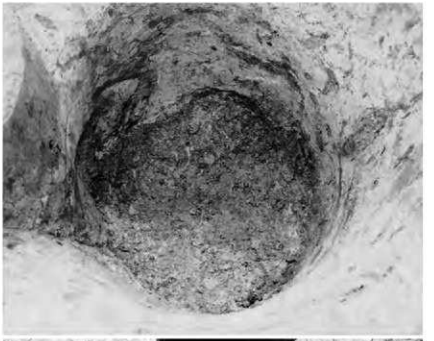
3　その他の礎盤式
柱穴（東から）

1　2 号掘立柱建物跡柱穴
（南から）

2　3 号掘立柱建物跡柱穴①
（南から）

3　3 号掘立柱建物跡柱穴②
（北から）

図版 6

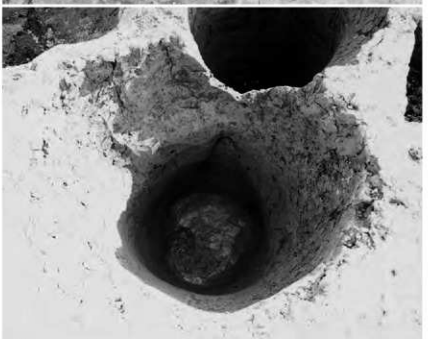


1　1号土坑木質出土状況
（西から）

2　1号土坑完掘状況
（南西から）

3　3号土坑木製品出土状況
（西から）

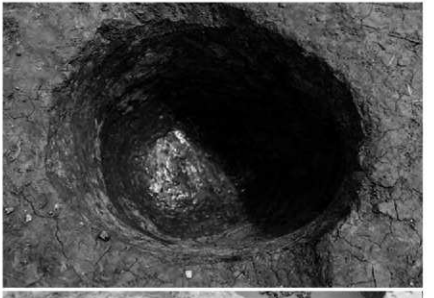
1　4 号土坑土器出土状況
（北西から）



2　5 号土坑完掘状況
（北西から）

3　6 号土坑土層堆積状況
（北西から）

1　7号土坑土器出土状況
（西から）



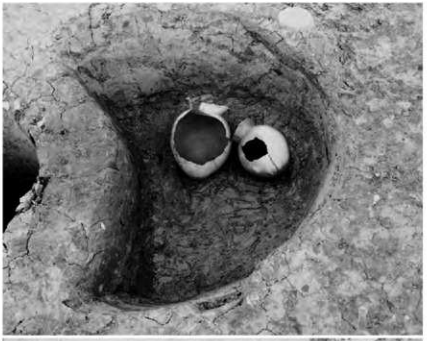
2　8号土坑完掘状況
（南から）

3　9号土坑完掘状況
（北から）

1　10 号土坑木質等出土状況
（北から）

2　11 号土坑完掘状況
（西から）

3　12 号土坑土器出土状況
（南西から）



1　13 号土坑土器出土状況
（西から）

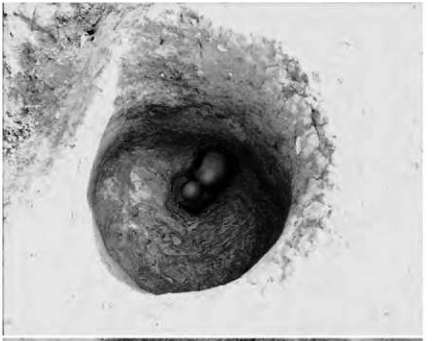
2　14 号土坑上層土器出土状況
（西から）

3　14 号土坑下層土器出土状況
（東から）

1　15 号土坑中層土器出土状況
（北東から）

2　15 号土坑下層土器出土状況
（北東から）

3　16 号土坑土器出土状況
（東から）



1　17 号土坑土器出土状況
（北から）

2　18 号土坑上層木質等出土状況
（北東から）

3　18 号土坑中層土器出土状況
（北西から）

1　18 号土坑下層土器出土状況
（北から）

2　19 号土坑中層土器出土状況
（南東から）

3　19 号土坑下層土器出土状況
（北西から）

1　20 号土坑完掘状況
（南西から）

2　21 号土坑完掘状況
（東から）

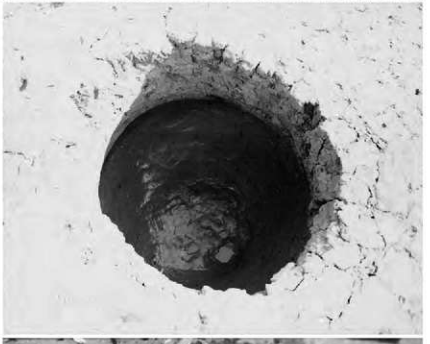
3　22 号土坑土器出土状況
（北から）

1　23 号土坑土器出土状況
（南西から）

2　23 号土坑土器出土状況
（北から）

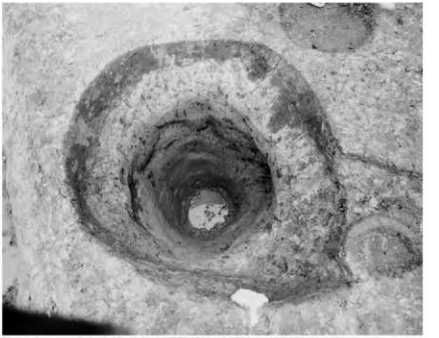
3　25 号土坑土層堆積状況
（南東から）

1　25 号土坑土器出土状況
（南東から）



2　26 号土坑完掘状況
（北西から）

3　27 号土坑土層堆積状況
（南から）

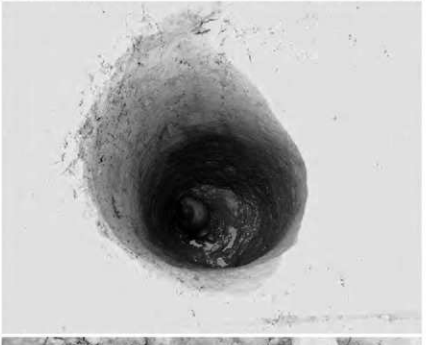


1　27 号土坑完掘状況
（北東から）

2　28 号土坑土器出土状況
（東から）

3　29 号土坑中層土器出土状況
（南から）

1　29 号土坑下層土器出土状況
（南から）



2　29 号土坑最下層土器出土状況
（南から）

3　30 号土坑上層木製品等出土状況
（南から）

1　30 号土坑中層土器出土状況
（南から）

2　30 号土坑最下層土器出土状況
（西から）

3　31 号土坑中層土器出土状況
（北東から）

1　31 号土坑下層土器出土状況
（北東から）

2　32 号土坑土器出土状況
（東から）

3　33 号土坑完掘状況
（東から）

1　34 号土坑中層土器等出土状況
（北西から）

2　35 号土坑中層土器出土状況
（南西から）

3　35 号土坑下層土器出土状況
（北から）

1　35 号土坑最下層土器出土状況
（東から）

2　36 号土坑土器出土状況
（南から）

3　37 号土坑土器出土状況
（西から）

1　38 号土坑亀甲羅出土状況
（東から）

2　39 号土坑土器出土状況
（南西から）

3　39 号土坑土器出土状況
（南東から）

1　40 号土坑土層堆積状況
（北東から）

2　40 号土坑土器出土状況
（北から）

3　41 号土坑完掘状況
（東から）

1　42 号土坑完掘状況
（北から）

2　43 号土坑土器出土状況
（西から）

3　44 号土坑土層堆積状況
（西から）

1　44 号土坑土器出土状況
（東から）

2　45 号土坑完掘状況
（西から）

3　47 号土坑完掘状況
（南から）

1　48 号土坑土器出土状況
（北から）

2　49 号土坑臼出土状況
（南から）

3　50 号土坑土層堆積状況
（北西から）

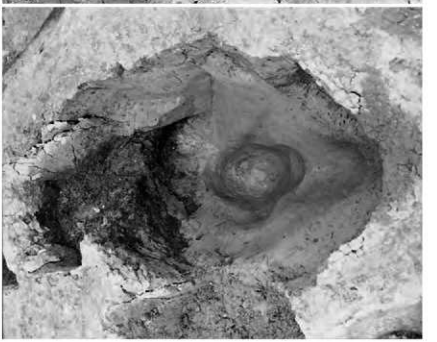
1　50 号土坑完掘状況
（北から）

2　51 号土坑完掘状況
（北から）

3　52 号土坑中層土器出土状況
（西から）

1　52 号土坑下層土器出土状況
（西から）

2　53 号土坑土器出土状況
（北東から）



3　53 号土坑完掘状況
（北東から）

1　54 号土坑完掘状況
（北から）

2　55 号土坑土層堆積状況
（東から）

3　55 号土坑完掘状況
（南東から）

1　56 号土坑完掘状況
（南東から）

2　57 号土坑土層堆積状況
（東から）

3　59 号土坑完掘状況
（西から）

1　60 号土坑完掘状況
（西から）

2　61 号土坑完掘状況
（南から）

3　62 号土坑完掘状況
（南から）

1　63 号土坑完掘状況
（北から）

2　64 号土坑完掘状況
（西から）

3　65 号土坑土層堆積状況
（東から）

1　65 号土坑石出土状況
（南から）

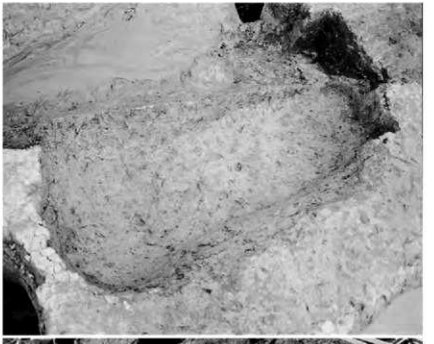
2　67 号土坑土層堆積状況
（南西から）

3　68 号土坑土層堆積状況
（南から）

1　68 号土坑完掘状況
（南から）

2　69 号土坑土層堆積状況
（南西から）

3　71 号土坑完掘状況
（南東から）

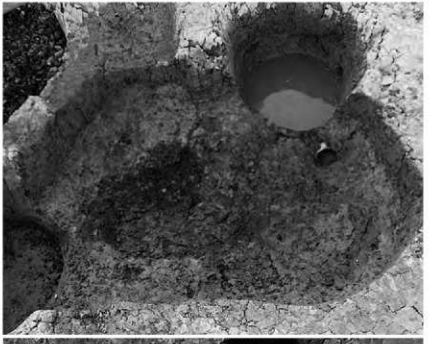


1　73 号土坑完掘状況
（西から）

2　75 号土坑完掘状況
（東から）

3　76 号土坑土層堆積状況
（北西から）

1　76 号土坑剣形木製品
出土状況（西から）



2　77 号土坑木質出土状況
（南東から）

3　77 号土坑完掘状況
（南東から）

1　79・84・87 号土坑土層
堆積状況（北から）

2　80 号土坑土器出土状況
（南から）

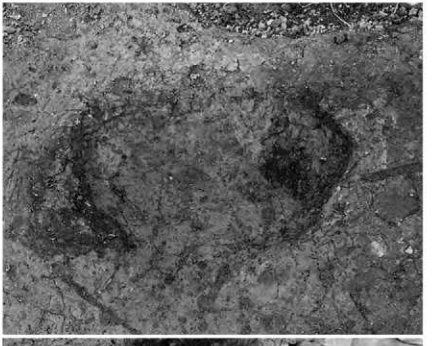
3　82 号土坑土器出土状況
（東から）

1　85 号土坑土層堆積状況
（南東から）

2　86 号土坑完掘状況
（北から）

3　88 号土坑木質出土状況
（南東から）

1　90 号土坑土層堆積状況
（北から）



2　91 号土坑完掘状況
（南から）

3　93 号土坑土層堆積状況
（南から）

1　99 号土坑土層堆積状況
（北東から）

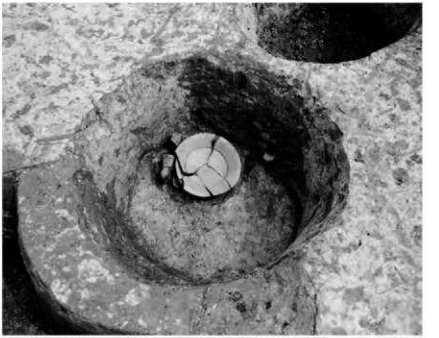
2　99 号土坑石・土器出土状況
（東から）

3　99 号土坑下層土器出土状況
（南東から）

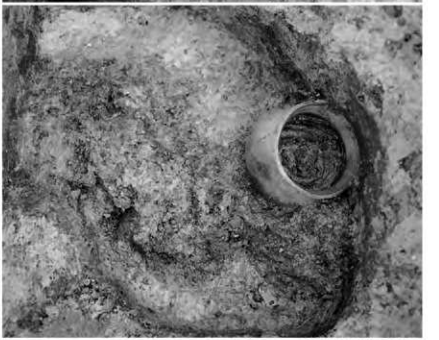
1　105 号土坑土層堆積状況
（西から）

2　106 号土坑土層堆積状況
（南から）

3　107 号土坑完掘状況
（北西から）



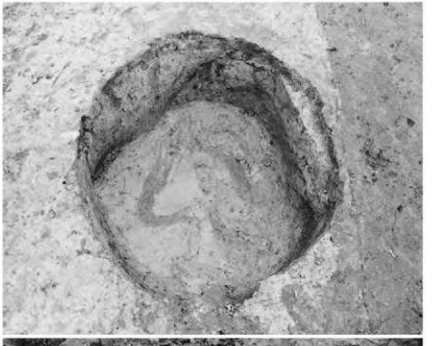
1　108 号土坑土器出土状況
（南から）



2　109 号土坑土器・木質
出土状況（北から）

3　109 号土坑完掘状況
（西から）

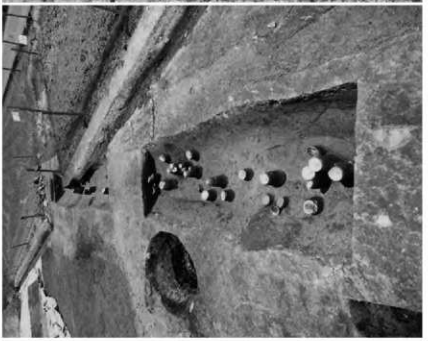
1　110 号土坑土器出土状況
（北から）



2　115 号土坑完掘状況
（北から）

3　116 号土坑土層堆積状況
（南東から）

1　119 号土坑完掘状況
（南東から）



2　1 号溝土器出土状況
（南から）

3　1 号溝土層堆積状況
（南から）

1　2号溝土層堆積状況
（南から）

2　3号溝土層堆積状況
（南西から）

3　4号溝全景（南から）

1　5 号溝全景（東から）

2　6 号溝木質出土状況
（南東から）

3　8 号溝土層堆積状況
（南西から）

13-1

14-2

14-9

13-2

14-5

14-12

13-5

14-6

17-1

13-8

14-8

17-6

4・5・7・11号土坑出土土器

11・13・14号土坑出土土器

21-15

21-16

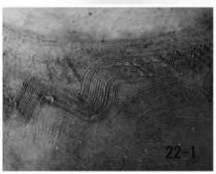
22-1

22-2

22-3

22-4

22-5


22-1

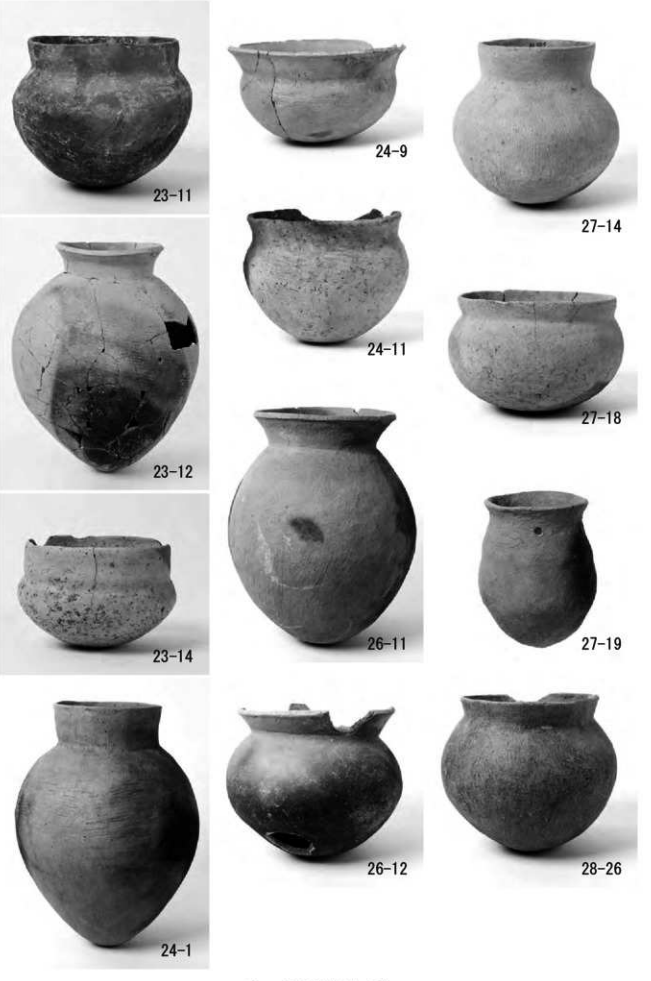
23-8

23-9

23-10

23-13

14 ～ 16 号土坑出土土器



16 ～ 18 号土坑出土土器

28-31

30-8

31-18

30-6

30-9

31-20

31-10

32-1

30-7

31-17

32-2

18 ～ 20 号土坑出土土器

32-3

35-12

36-1

32-4

35-15

36-4

32-5

35-16

37-10

34-3

34-6

35-17

37-13

20 ～ 23 号土坑出土土器

37-14

38-11

41-1

37-15

40-1

41-3

37-17

40-2

41-4

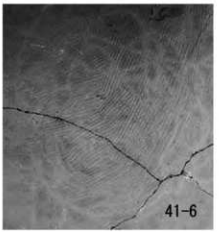
38-6

40-7

41-5

38-7

23・25・26・28・29号土坑出土土器


41-6

42-4

43-9

42-1

43-10

42-5

42-2

43-12

42-3

42-7

43-15

29・30 号土坑出土土器

45-2

45-6

46-3

45-8

45-3

46-1

46-4

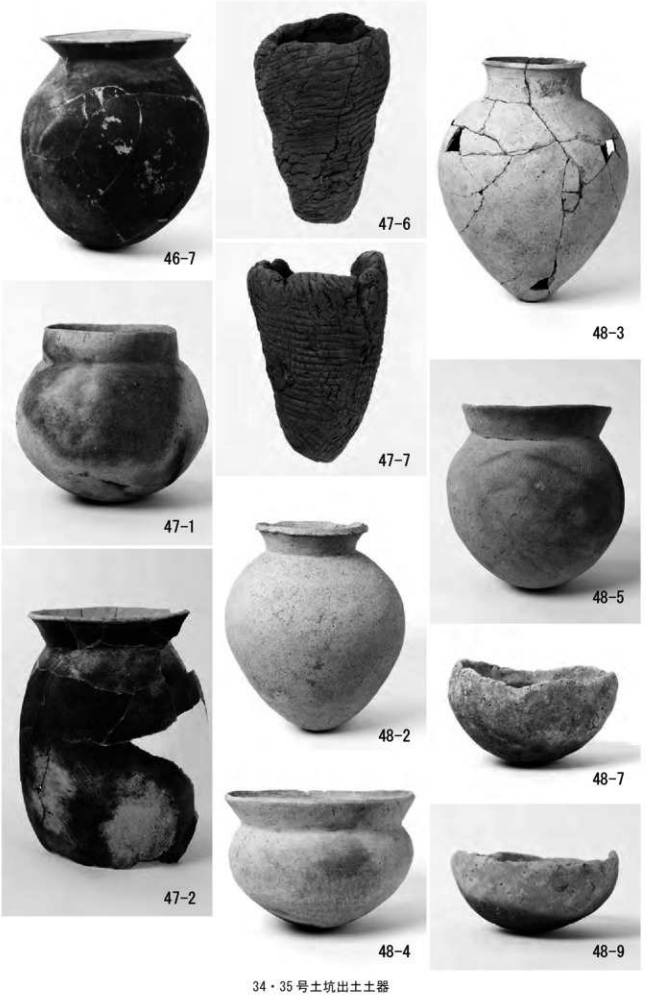
46-5

45-4

46-2

46-6

31 ～ 33 号土坑出土土器



34・35号土坑出土土器

49-10

49-11

49-12

49-15

49-14

49-16

49-17

51-2

51-3

51-4

52-1

53-4

53-8

52-2

53-9

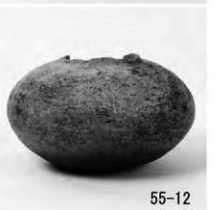
55-6

52-3

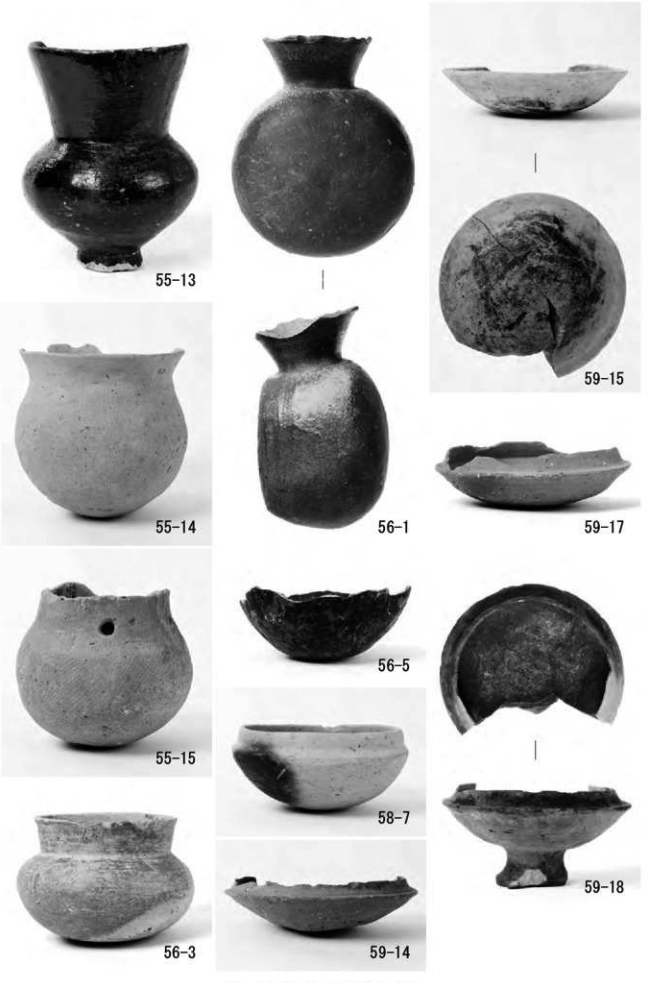
55-2

55-7

53-6


55-12

37・39・40・42・43 号土坑出土土器



43・44・47・50号土坑出土土器

52・55 ～ 58・60・65 号土坑出土土器

69-2

72-11

78-11

72-13

69-8

78-13

76-6

79-1

76-13

69-12

78-9

85-2

69・73・80・81・83・99号土坑出土土器

85-9

88-5

88-8

88-9

88-10

90-6

92-1

92-9

92-35

92-37

93-56

93-65

93-69

93-72

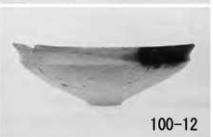
93-73

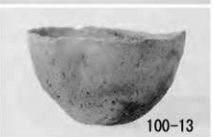
104・109・110・113 号土坑、1 号溝出土土器

1～3・6・8号溝、包含層出土土器

100-10

100-11


100-12


100-13

100-15

101-28

101-29

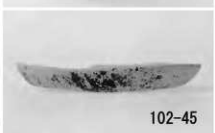
101-30

101-31

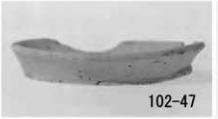
101-33

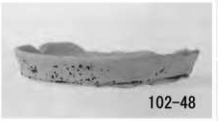
101-36

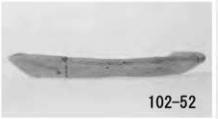
101-37

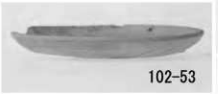

102-45

102-46


102-47

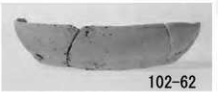

102-48

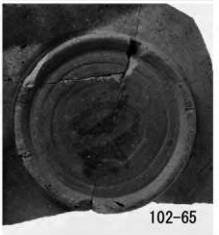

102-52

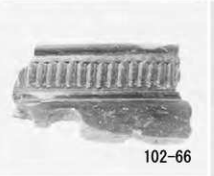

102-53

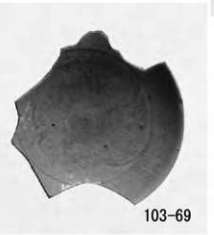
102-54

102-56


102-62

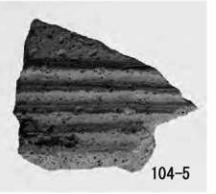

102-65


102-66


103-69

104-1

104-8

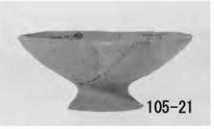

104-5

104-9

104-13

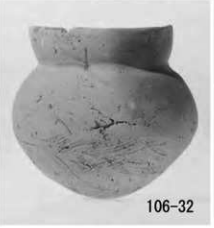
105-18

包含層、その他の出土土器①


105-21

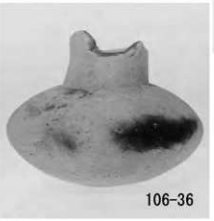
105-23

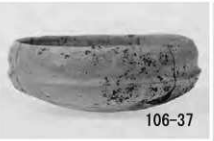
105-25


106-32

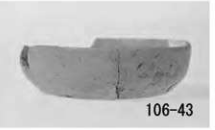
105-31

106-34


106-36


106-37

106-40


106-43

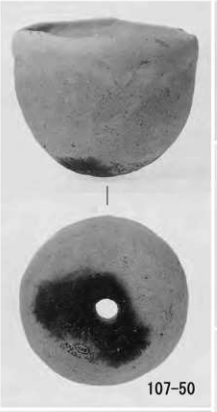
106-44

106-47

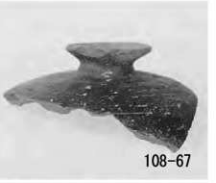
107-49

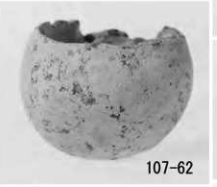
107-52

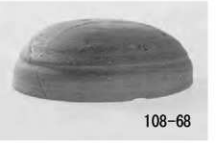
その他の出土土器②


107-50

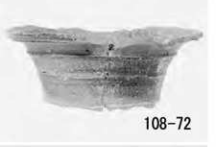
107-60


108-67

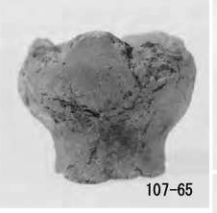

107-62


108-68

107-64


108-72

107-55

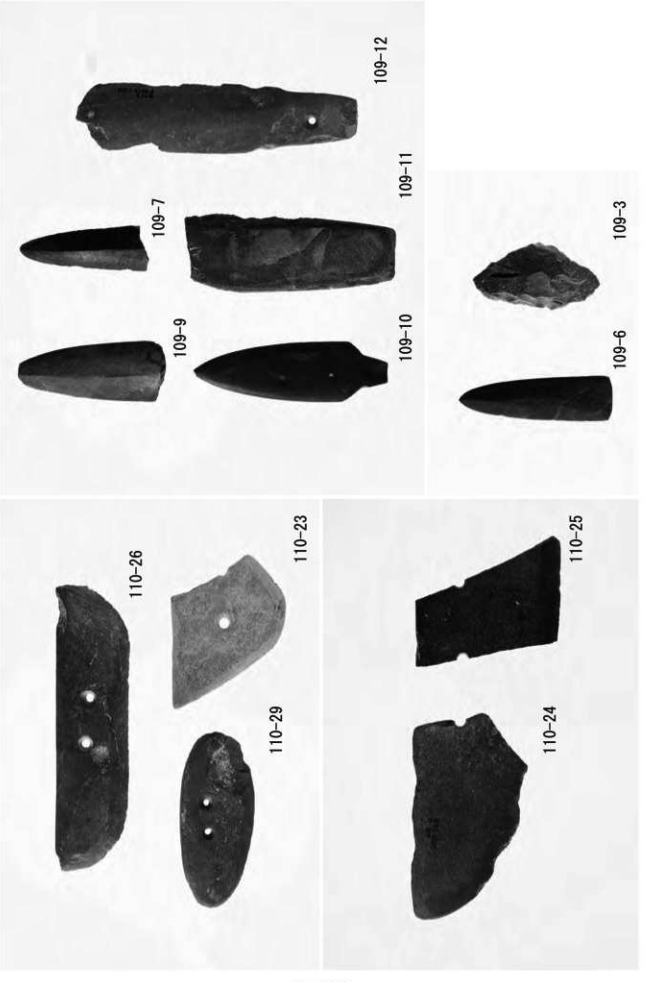

107-65

108-74

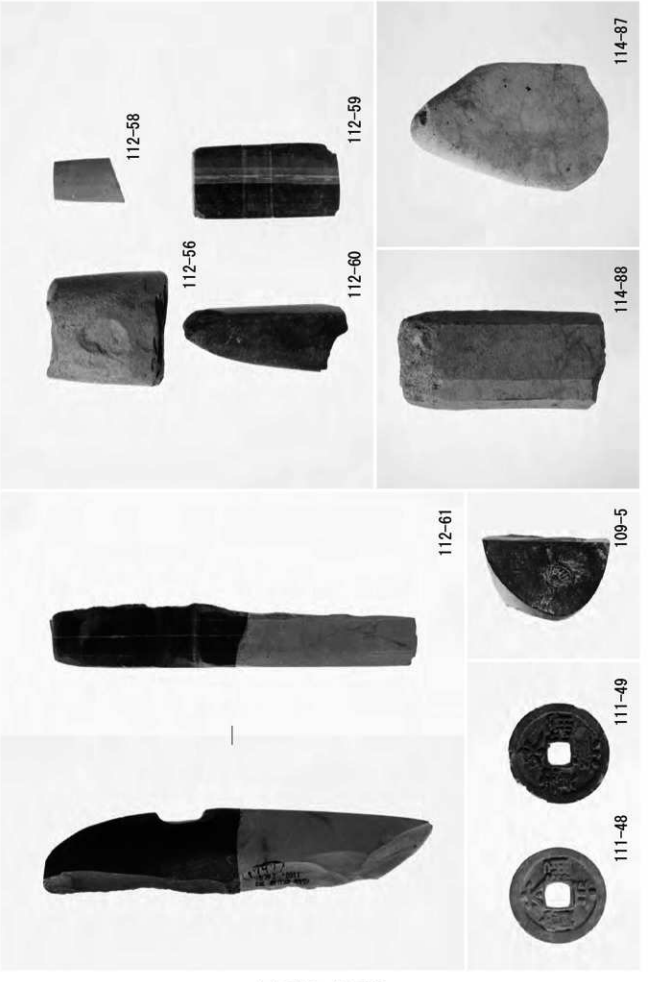
107-59

107-66

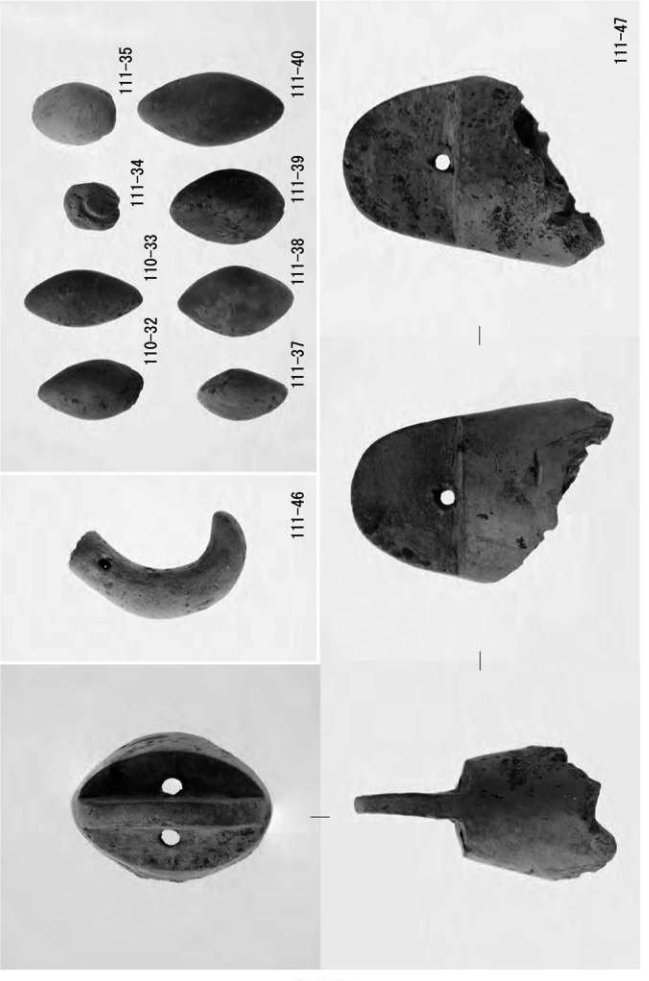
108-77


109-12
109-11
109-7
109-10
109-9
109-3
109-6
110-23
110-26
110-25
110-29
110-24

出土石製品

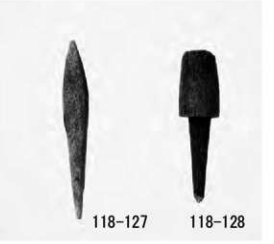


出土石製品・金属製品


111-35
111-40
111-34
111-39
110-33
111-38
110-32
111-37
111-46
111-47

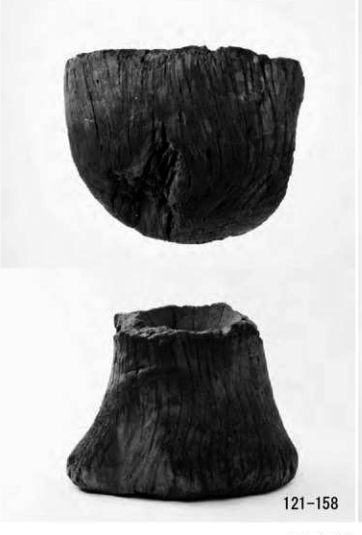
出土土製品

118-141


118-127 118-128

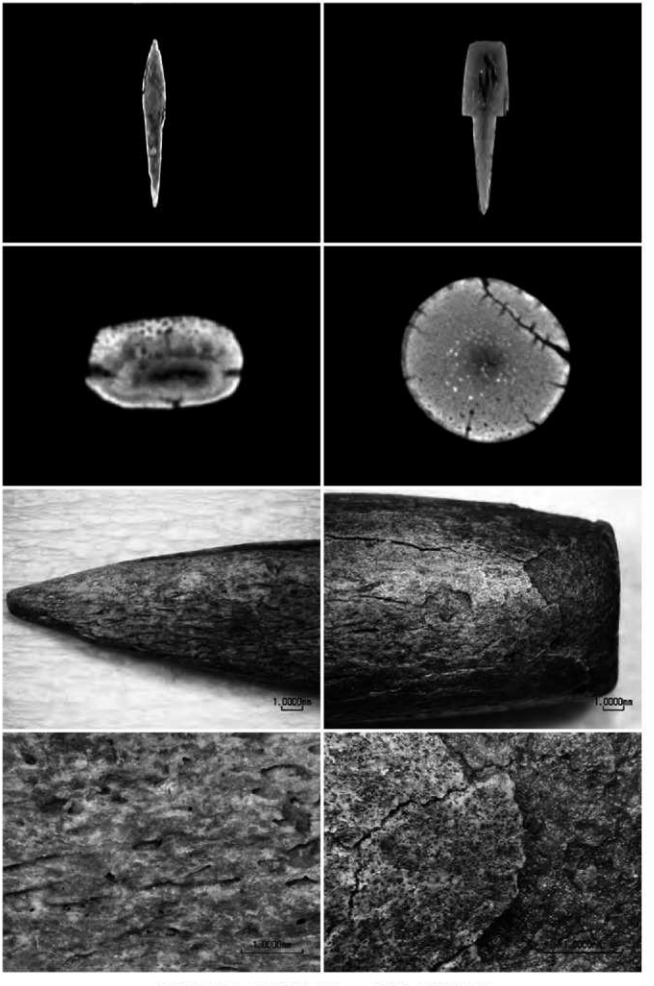
118-129

119-143

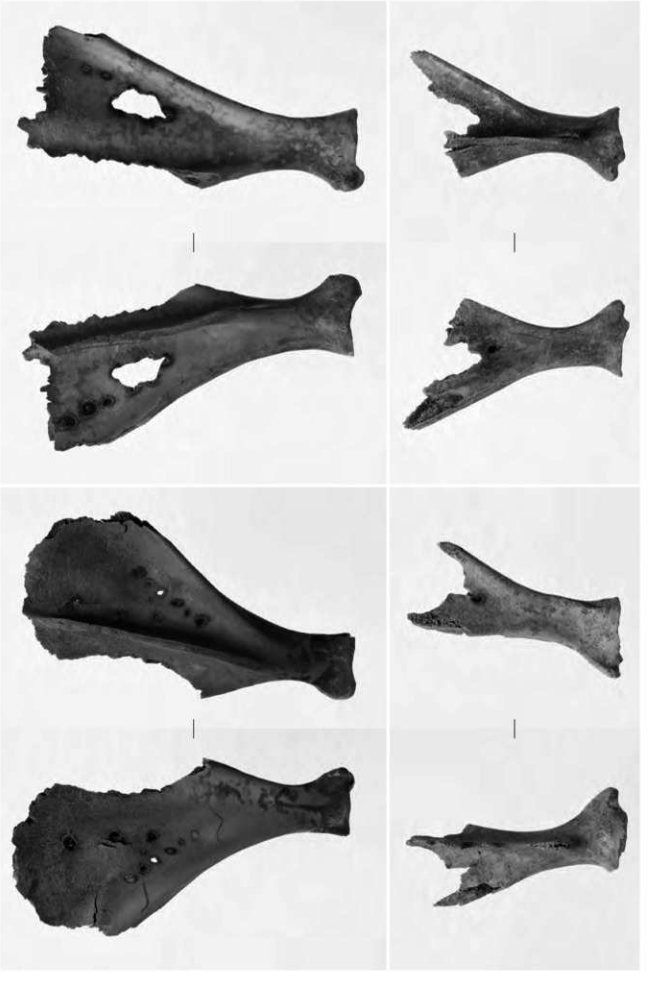

121-158

119-144

出土木製品



鹿角製鏃（左）・鹿角製鋲（右）ＣＴ画像及び顕微鏡写真



出土ト骨

報告書抄録

ふりがな	にしかまちいけぶちいせき　2
書名	西蒲池池潮遺跡　Ⅱ
副書名	国道385号三橋大川バイパス道路改良事業に伴う発掘調査報告書
巻次	第4集
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第243集
編著者名	齋部麻矢（編）　城門義廣　加藤和歳　小林啓　山崎悠郁子　パリノ・サーヴェイ株式会社 株式会社パレオ・ラボ
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838-0106　小郡市三沢5208－3　℡ 0942－75－7555　FAX 0942－75－7834 E-mail　kyureki@pref.fukuoka.lg.jp
発行年月日	2014年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
にしかまちいけぶちいせき 西蒲池池田遺跡Ⅱ地点	福岡県柳川市	402079		33°12′04″ 33°10′57″ 33°11′14″	130°24′13″ 130°24′17″ 130°24′16″	H21.11.4～ H22.3.29 H22.10.12～ H23.3.15	1,200	道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西蒲池池潮遺跡Ⅱ地点	集落跡	弥生時代中期 弥生時代後期 弥生時代終末～古墳時代初頭 古墳時代中期・後期 古代 中世前期・後期 近世	掘立柱建物跡 土坑（井戸状を含む） 溝	土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・石製品・金属製品・土製品・骨角器・動植物遺体	土坑内一括資料 卜骨 鹿角製鏃 鐸型土製品 磁州窯三彩

要約

本遺跡は、有明海沿岸の標高2.5m前後の低平地に位置する遺跡である。今回の調査地は、平成24年度にⅠ地点として調査を行った地区の南に位置し、Ⅰ地点同様、弥生時代中期～近世の複数の時代の遺構を確認した。主には弥生時代後期・終末～古墳時代初頭・古墳時代後期・古代・中世前期の集落の一部と、弥生時代中期の包含層、中世後期・近世の溝を検出した。Ⅰ地点では礎盤式柱穴の掘立柱建物跡を多数検出したが、本地点では掘立柱建物跡は数棟であり、井戸状の深い土坑が主体で各時代において多数検出された。土坑内からは完形品多数を含む資料が大量に出土した。土器は一括で埋められていることからセット関係がよくわかり、また残存状態が良好であることから調整などが詳細に観察できる。他の出土資料の中には県内初出土の卜骨や鹿角製鏃、破鏃、鐸型土製品などもあり、動植物遺体も多数出土した。また Ⅰ地点で検出していた中世前期の区画溝の続きを検出し、一辺約150mの区画の一部であることを確認した。さらに、その外側にも関連すると思われる溝を検出し、これらも区画溝になる可能性が高い。

Ⅰ地点の調査結果とあわせ、本地域の弥生時代～近世の当該地域の生活形態の一部を明らかにすることができた点と共に、一括資料としての大量の土器やその他貴重な資料を得ることができた。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 25	登録番号 10

国道385号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第4集

西蒲池池淵遺跡　Ⅱ

平成26年3月31日

発行　九州歴史資料館
小郡市三沢5208－3

印刷　久野印刷株式会社
福岡市博多区奈良屋町3－1